第55回
日米学生会議
The 55th Japan-America Student Conference

日本側報告書

U.S. and Japan:

Civic Participation in a Globalizing Society

1934～2003

グローバル化社会と日米
～市民参加の視点から考える～

目次

序章……1

日本側実行委員長挨拶　2
アメリカ側実行委員長挨拶　4
内閣総理大臣からのメッセージ　5
日米学生会議の歴史　6
本文中の略語及びお知らせ　8

第1章　第55回日米学生会議概要……9

第55回日米学生会議テーマ　10
第55回日米学生会議活動概要　11
第55回日米学生会議日本側参加者一覧　13
第55回日米学生会議アメリカ側参加者一覧　14
第55回日米学生会議本会議日程　15
メディアの中の第55回日米学生会議　16

第2章　事前活動……18

春合宿　19
講演会　20
勉強会　25
防衛大学校訪問　29
日本側直前合宿　30

第3章　本会議——サイト活動……31

東京サイト　32
沖縄サイト　43
日韓米ジョイントディスカッション　61
福井サイト　69
京都サイト　78
京都フォーラム　86

第4章　本会議——分科会活動……97

移住労働者と外国人コミュニティ　98
科学教育　101
企業活動と倫理　104
健康と安全　108
現代社会とジェンダー　113
市民活動と地域社会活動　122
天然資源　128
民主的政治システム　132

第5章　エッセーで綴る日米学生会議……138

日米学生会議を問う——市民参加と第55回日米学生会議　139
相互理解——Mutual Understanding　141
文化交流とアカデミズム　144
日本再発見　145
日米学生会議と理系学生　147
ノミニケーション　149
夜の分科会報告　151
「日米」「学生」「会議」とは何か　153
学生による運営の限界と可能性　154
未来の日米学生会議へむけて——残された課題と提案　156
第55回日米学生会議が目指したもの　158

第6章　会議をふりかえって……170

会議参加者の感想

第7章　第56回日米学生会議概要……222

テーマ／開催期間及び開催地／会議の過程／会議中のプログラム

第8章　日米学生会議にご協力いただいた方々……227

協力者　228
賛助者・団体・企業　236

序章

日本側実行委員長挨拶

アメリカ側実行委員長挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ

日米学生会議の歴史

本文中の略語及びお知らせ

日本側実行委員長挨拶

第55回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長　乗竹亮治

「世界で最も重要な二国間関係」。故マイク・マンスフィールド元駐日大使は、日米関係をこのように表現した。たとえこれが当時の国際情勢上や、駐日大使という立場上のレトリックであったとしても、このような果敢な表現が発せられたこと自体に、深い意味があると考えられる。もし、米英関係を論ずるのであれば、ここまでの表現は必要でなかっただろう。米英両国は歴史的文化的基盤を共有し、そのパートナーシップは揺るぎないものとなって久しい。一方で、日米関係はどうであろうか。文化的背景を異にし、太平洋という大海を隔てた両国ではあるものの、戦後60年近くが経ち、また日米交流150周年を迎える今日、やはり強固なパートナーシップを構築している。しかし、このパートナーシップは米英関係と異なり、いわば人工的に作り上げられたものである。さらに言えば、文化的背景を全く異にする両国民が、知識人交流にせよ、草の根交流にせよ、日米関係を「重要な二国間関係である」と積極的に考え、意見交換と相互理解に不断の努力を積み重ねてきた成果が、今日の日米関係であると申し上げるに、私はやぶさかではない。無論、アメリカによる戦後統治、そして冷戦構造という日米関係を左右する外圧があったことも事実であるが、同時として、その圧力の内外を問わず、両国民による果敢な交流が行なわれてきたこともまた、事実である。

世界は今、文化的類似性にも歴史的共通性にも寄らない相互交流を希求している。このような局面において、日米交流の歴史と今日の日米関係は、世界の模範とも言える好例であり、太平洋の平和は世界の平和に通ずると言えよう。

1934年に端を発し、幾度かの中断を経ながらも、今日まで綿々と続けられてきた日米学生会議も、この両国民による不断の努力の一端であり、その長期に渡る相互交流の一端であると自負している。日米学生会議の魅力は、その長い歴史性と規模の大きさに加えて、主に二点が挙げられると思われる。第一に、学生主体による学生間交流という点である。国益や特定の利益団体を代表することなく、自由で率直な対話と交流が可能であり、そこで培われた友情が非常に強固で末永く続くであろうことは、想像に難くない。第二に、近年の日米学生会議には、同数の両国学生が会議を構成するという特徴があり、通常の留学とは異なったユニークさを持っている点である。1ヵ月もの間、同数の両国学生が様々な経験を共有する。そこには、日本でもアメリカでもない非日常的で、極めて密度の濃い環境が生まれ得る。いわば、「郷に入れば郷に従え」という論理に陥りがちな留学とは異なり、参加者各人が、それぞれの価値観に従い、そしてそれぞれが主体的に行動することによって、初めて日米学生会議という特殊な環境が成立するのである。また、それは各人にとって価値観を再発見し、再構築する場でもある。今まで無意識のうちに周りに介在した、文

化や環境から脱したとき見えてくる自分自身の弱さや強さ、限界や可能性。日米学生会議とは、日米交流の一端であるのみならず、自己の再構築の場でもあり、この報告書は、ひと夏のとある日米交流の記録であるのみならず、参加者各人が悩み抜き、一筋の光を見出すまでの、苦悩と希望の手記でもある。

このような日米交流の歴史と、日米学生会議が内包する特徴にあって、第55回日米学生会議をどのように形作っていくべきか。その我々なりの答えが、総合テーマとして掲げられた「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」であった。詳しくは第1章を参照されたいが、この総合テーマは、二つの立脚点から構成されている。はじめに、「世界の中の日米」という視座である。これは、日米関係のさらなる発展を目指すのもさることながら、世界全体に対して、日米両国がいかに協力関係を構築できるか、いかに貢献できるのかという問題意識の表われと言える。いわば、国家的枠組みを意識したマクロ的な視点であろう。二つ目は、「市民参加」という視座である。これは一転してミクロ的な視点であり、詳細に及ぶ様々な事象に対して当事者意識を持つことの重要性を訴えている。この二つの視座は、大きくかけ離れ、相反する概念であるかのように見える。しかしながら、「ポスト・ポストモダン」の21世紀を主体的に生きようとする我々に必要なのは、細分化された様々な事象に対する当事者意識を保持しつつも、「大きな物語」を物語ることではないだろうか。

では、果たして第55回日米学生会議は、この総合テーマに相応しい成果を残せたのだろうか。我々は大いに反省し、様々な批判を甘んじて受け入れる必要があるだろう。自らの力不足を思い知らされたひと夏でもあった。そして今、力不足を感じ再構築を迫られた自らに戸惑いつつも、この夏を経て培われた友情の素晴らしさと深さに感謝している段階に我々はいる。今後、我々はあの夏だけでは果たしきれなかった成果を追い求め、不断の努力を続けていかなければならない。蝉の声が鳴り響き、72人で過ごしたあの夏はもう終わってしまったが、本当に我々が試されるのはこれからなのである。各人が常に当事者として社会と向き合い、新たなる可能性を追い求めるなかで、近い将来、いつの日かどこか世界の街角で、また出会うことができたならば、第55回日米学生会議にとって、これほどの成功はないだろう。いつの日かまたどこかで、君と、君と、君と、あの暑かった夏の想い出を語り合いたい。

また、力不足を感じる日々のなかで、我々が強く感じ入ったのは、高円宮妃殿下をはじめ、日米学生会議に有形無形のご支援を寄せて下さっている皆様の存在でした。最後になりましたが、第55回日米学生会議の開催に際し、多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、立命館大学をはじめ各開催地でご支援賜りました皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜りました講師の皆様、日頃から大変お世話になりました財団法人国際教育振興会並びにThe Japan-America Student Conference, Inc.の皆様、日米学生会議アルムナイの皆様、その他様々な形でご支援ご協力下さいましたすべての皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

アメリカ側実行委員長挨拶

The 55th Japan-America Student Conference Executive Committee
American Executive Chair Hana C. Heineken

As if we had been handed a lump of clay, a white canvas, the 55th Japan-America Student Conference(JASC) created yet another irreplaceable window into the thoughts and passions of students in this day in age. 72 students, selected carefully according to academic and linguistic strength, leadership, and ambition devoted their summers to engage in academic discussion, cross-cultural exchange, and self-reflection. Their concerns ranged from world peace in the midst of terrorism, democracy and business ethics in the midst of corruption and globalization, environmental preservation in the midst of degradation, and equality in the midst of continuing sexism, racism, and inadequate education.

Our theme this year, "Civic Participation in a Globalizing Society", embraced our various concerns and drove us to seek solutions that we as students and world citizens could feasibly pursue in our everyday contexts. The excerpts in this bulletin outline each roundtable's fieldtrips, discussions, and conclusions that we achieved by appreciating and overcoming language barriers and cultural differences. In addition to our academic pursuits, our receptions in Tokyo, discussions with Okinawan students and then Korean students, home-stays in Fukui, and finally our exchanges with high school students in Kyoto were all indispensable to our engagement with the world beyond the immediacy of JASC. In a sense, our actions exemplified civic participation, as we made others aware of the value of US-Japan exchange, the value of student exchange, and the necessities of mutual understanding through intimate communication.

We cannot deny the wide-range of frustrations confronted this summer. One reflection session in particular, in Kyoto, highlighted the immense challenge of communicating in a foreign tongue, compounded by our different styles of communication and different cultural expectations. Yet, by the end, we had learned to talk a little slower and clearer, and to respect the silence necessary for organizing one's thoughts and composing an appropriate response. Through roundtable discussions and the Kyoto Forum, but more generally through the sheer quality of the 55th JASC, I watched and admired the patience and determination of this year's participants.

My love for JASC has always been its ability to adapt each year and reflect so accurately the interests of those who participate. It was so with this conference and it has always been the delegates who make the JASC an invaluable experience. Yet, equally, I have admired its ongoing lesson, which is that we, as very different individuals sharing one global community, must learn not only to accept our differences but also live in harmony with those differences. JASC has taught me to realize that through respect we CAN achieve a very fruitful coexistence. I therefore feel fortunate to have served as the Chair of the 55th JASC American Executive Committee, and I wish the next JASC the best of luck. I am indebted to you all for such an amazing experience, and I guarantee our lives will cross again.

日本国内閣総理大臣からのメッセージ

内閣総理大臣　小泉純一郎

第55回日米学生会議の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。

1934年に始まった日米学生会議が、日米交流150周年という記念すべき年である本年、第55回会議を迎えられることを大変喜ばしく思います。日米両国は、その出会いから現在に至るまで、様々な試練を乗り越えて政治、経済、文化などあらゆる分野での交流を深め、アジア太平洋のみならず世界の平和と繁栄の基盤となる強固なパートナーシップを築き上げてきました。日米学生会議の参加者の活躍を見るにつけ、日米学生会議が長年にわたり太平洋の架け橋となられてきたことを強く認識させられます。

グローバル化が進展する今日、国際社会の平和と安定のために、強固なパートナーシップを有する日米両国が、幅広い分野での共通の課題に緊密に協力して取り組むことが、一層強く求められています。5月に行われましたクロフォードでの日米首脳会談でも、まさに「世界の中の日米同盟」を強化していくことでブッシュ大統領と合意致しました。

本年の日米学生会議は、「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society」というテーマを掲げていますが、日米両国の将来を担う学生の立場からこのようなテーマについて議論を深めることは大変有意義であると考えます。

この会議が日米交流150周年にふさわしい実り多いものとなり、皆さんが末永い友情を育まれるよう、お祈り致します。

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。アメリカの対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協議会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名のアメリカ側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘したアメリカ側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議がアメリカ・オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、下記の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回（1936年）早稲田大学。第4回（1937年）スタンフォード大学。第5回（1938年）慶應義塾大学。第6回（1939年）南カリフォルニア大学。第7回（1940年）津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えた。しかし、当時日本は占領下にあり、アメリカからの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵及び軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開となった。そして、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めてアメリカの同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加するに留まった。これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「二国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行なわれるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。時は折しも55年体制の成立を目前に控えた情勢にあり、3月に日米MSA協定が調印された1954年でもあった。また、1955年にはアジア・アフリカ会議が開催されている。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963 年に至り、翌 1964 年が第 1 回会議創立の 30 周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。結果、第 1 回会議当時の参加者が、半数以上の理事を務めていた国際教育振興会が日本側主催者としての責任をとることで会議が再開されることが決定された。

第 1 回会議及び第 2 回会議のアメリカ側参加者の努力もあり、1964 年、日本側参加者 77 名とアメリカ側参加者 62 名による、第 16 回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964 年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973 年第 25 回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。その改善とは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行なうために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を 1 ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した 1973 年でもあった。

1978 年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第 31 回会議が開催された 1979 年には、アメリカにおいても戦前の参加者により The Japan-America Student Conference, Inc（JASC, Inc.）が設立され、アメリカ側実行委員会をサポートする体制が確立された。その後、日米学生会議は財団法人国際教育振興会と JASC, Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。

創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

本文中の略語及びお知らせ

本文中の略語

日米学生会議では参加者が日常的に用いる略語及び慣用語があり、本文でもしばしば登場しています。以下、一覧にしますので、お読みになる際の参考になさって下さい。

JASC：「日米学生会議／Japan-America Student Conference」の略。

JASCer：「日米学生会議参加者」の意。

JASC, Inc.：アメリカ側主催者 “The Japan-America Student Conference, Inc.” の略。

EC：「実行委員会」または「実行委員／Executive Committee」の略。

デリ：「参加者／delegation」の略。

ジャパデリ：「日本側参加者／Japanese Delegation」の略。

アメデリ：「アメリカ側参加者／American Delegation」の略

沖デリ：「日米沖縄学生会議 2003」の「沖縄学生参加者」の意。

アルムナイ：「日米学生会議の OB/OG」の意。

サイト：「本会議開催地」の意。第 55 回会議では東京、沖縄、福井、京都がこれにあたる。

テーブル：「分科会」の意。

CWD：本会議中のプログラムの一つ、「全体討論／Conference-Wide Discussion」の略。

ST：本会議中のプログラムの一つ、「スペシャルトピック／Special Topic」の略。

リフレクションミーティング：本会議中のプログラムの一つ、「反省会」の意。

お知らせ

日米学生会議創設者の一人である田端利夫氏が、2003 年 8 月 29 日にご逝去されました。そのため本文中の表記は「故田端氏」とさせていただいております。御生涯を偲び哀悼の意を表します。

第１章

第 55 回日米学生会議概要

テーマ

活動概要

日本側参加者一覧

アメリカ側参加者一覧

本会議日程

メディアの中の第 55 回日米学生会議

第55回日米学生会議テーマ

The 55th Japan-America Student Conference Theme

グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～
U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society

1934年、日米学生会議は二つの理念を掲げて発足した。それは、日米学生の交流を通して、日本、アメリカの相互理解促進を草の根で支えること。そして、学生という自由な立場で対等に意見交換や議論を行うことによって、様々な社会問題に対する意識を高め、解決の一翼を担うということである。会議創設当初、日米関係は悪化の一途をたどっていた。両国間のつながりのほとんどは国の政治レベルのみであり、市民がもっている情報はわずかであった。そのような背景の中、日米両国の学生は、日米間の相互理解のために、学生による交流を試みたのである。

それから約70年を経た現在、日米関係は極めて友好な関係にあり、強固なパートナーシップを結んでいる。民間から国家レベルに到るまで、あらゆる分野において日米間の交流が展開されている。このような時代の移り変わりを受けて、日米学生会議は、もはや「日米間の相互理解」の追求のみに甘んじてはいけないのではないだろうか。脈々と受け継がれてきた当会議の理念は、今日新しく定義する必要があるのではないだろうか。

今や、日本、アメリカはともに世界に対して多大なる影響力をもつ超大国である。日米両学生は、「日米関係」にとどまらず、「世界の中の日米」の視点を持って語り合うべきである。そこで、第55回日米学生会議は、現代世界を語る上で無視し得ぬ、グローバリゼーションという潮流の中で、日米が世界に対してどのような関係を構築していけるのか――「グローバル化社会と日米」を考えることにした。日米二国間の相互関係を世界中の国との関係性の中で再定義し、世界に対して日米両国の学生が何をなしえるのだろうか、という問いかけを試みたのだ。

では、「グローバル化社会と日米」は、どのような視点から取り組まれるべきであろうか。重要なのは、以前は情報発信の主体とはなり得なかった「市民」が、意見や情報を発信する権利、技術を獲得し、社会的、政治的なプレゼンスと実行力を高めるようになったということである。やがて社会の一員として社会を動かしていく学生にとって、このように市民一人ひとりが社会の問題解決に向かってどのように働きけていくことができるのか――「市民参加の視点から考える」を確認する作業は意義深いことである。無数の問題提起ばかりが先行している現代において、各人が自分の立場で地道に行動していくこと、自分の行動の可能性を信じていくこと、が求められている。そのための行動指針を具体的に提案していくこと、これこそ社会に新しい風を社会に吹き込む存在である学生に託された役割といえよう。

このように第55回日米学生会議のテーマ「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」は、歴代日米学生会議の、現代という時代の、社会の、そして学生自身の要請を受けて打ち立てられたのである。

第 55 回日米学生会議活動概要

Program and Organization

事業概要

主催
財団法人　国際教育振興会

後援
外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会

企画・運営
第 55 回日米学生会議実行委員会

期間
2003 年 7 月 26 日～2003 年 8 月 21 日

開催地
東京、沖縄、福井、京都

参加者
日本側 36 名（実行委員 7 名を含む）
アメリカ側 36 名（実行委員 7 名を含む）

会議運営

第 55 回日米学生会議は、2002 年 8 月、第 54 回日米学生会議においての新実行委員選挙を経て発足した。以来、第 55 回日米学生会議実行委員会が中心となって、2003 年夏の本会議に向けた、企画、運営に伴う多岐にわたる仕事を行ってきた。

8 月	第 55 回日米学生会議実行委員会発足
9 月	役職引き継ぎ、予算案作成、財務活動開始、OB/OG 会、理念合宿
10 月	後援名義申請、ポスターや実施要綱などの作成、広報合宿
11 月	ポスターや実施要綱を各機関へ送付、OB/OG 会、広報合宿
12 月	OB/OG 総会、福井出張、本会議準備合宿
1 月	選考試験問題作成、本会議準備合宿
2 月	参加者応募受付、沖縄出張、OB/OG 会、選考合宿
3 月	第 1 次選考試験、第 2 次選考試験、参加者決定、選考合宿
4 月	財務活動、OB/OG 会、春合宿の準備合宿
5 月	春合宿の準備、春合宿の直前合宿、春合宿
6 月	講演会、勉強会、防衛大学校訪問、本会議準備合宿
7 月	講演会、勉強会、日本側直前合宿、本会議

本会議概要

第55回日米学生会議は「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」というテーマを掲げて開催された。本会議中のすべてのプログラムは、テーマとの整合性を考慮しつつ、実行委員を中心とした学生によって企画、実行された。

サイトイベント

本会議は4つの都府県で開催された。各開催地において、開催地の特色を生かした文化体験型のプログラムや、フィールドトリップ、パネルディスカッションなどが行われた。特に大きなイベントとしては、沖縄サイトで、沖縄在住及び沖縄出身の学生と共に行われた「日米沖縄学生会議2003」、そして京都サイトにて第19回日韓学生フォーラムと共に行われた「日韓米ジョイントディスカッション」が挙げられる。また本会議終盤には会議の成果の社会発信を目指して「京都フォーラム」が開催された。

分科会

日米両国の参加者は全員、各自の興味、関心をもとに8つの分科会のいずれかに所属し、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッション、フィールドトリップなどの活動を通して議論を重ねた。本会議中に計11回の分科会セッションを行った。

分科会テーマ

移住労働者と外国人コミュニティ
科学教育
企業活動と倫理
健康と安全
現代社会とジェンダー
市民活動と地域社会活動
天然資源
民主的政治システム

スペシャルトピック

スペシャルトピックは、参加者の新たな視点の獲得や発想を促すことを目的とし、東京と沖縄でセッションを持った。「消費者文化」、「東アジアの安全保障」、「若者文化」、「創造的表現」などがトピックとなり、参加者にとっては分科会の枠を超えた交流の場ともなった。

全体討論

分科会やスペシャルトピックが少人数グループごとに異なるトピックについて議論をするのに対して、全体討論は、会議全体で一つのテーマについて話し合う機会となった。初回は、第55回日米学生会議のテーマから「市民参加」について、2回目はアメリカ側実行委員の発意によって「イマジネーション」をテーマとして話し合う機会が設けられた。

第55回日米学生会議日本側参加者一覧

The 55th Japan-America Student Conference Japanese Delegation

日本側実行委員

江川　響子	京都大学	農学部	3年
小林　悦子	慶應義塾大学	総合政策学部	4年
鹿谷　幸史	東京大学	法学部	5年
高沢　健史	関西学院大学	総合政策学部	3年
西納　由紀	一橋大学	法学部	4年
乗竹　亮治	慶應義塾大学	総合政策学部	1年
	University of Central Oklahoma, Communication 専攻		
堀抜　功二	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	3年

日本側参加者

阿部　幸音	東京都立大学	法学部政治学科	4年
安藤　彩	お茶の水女子大学	文教育学部言語文化学科	2年
飯田　智紀	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年
池田　杏子	津田塾大学	学芸学部国際関係学科	4年
市川　晶子	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	3年
井手　遊	広島大学	国際協力研究科教育文化専攻	修士課程1年
伊中　英輔	東京大学	法学部第2類	3年
今中　由紀子	慶應義塾大学	総合政策学部	2年
大宮　貴史	慶應義塾大学	総合政策学部	2年
河本　健志	明治大学	政治経済学部政治学科	3年
坂口　紋野	慶應義塾大学	商学部	2年
阪野　葵	東北大学	教育学部	4年
佐藤　智紀	東京大学	教養学部文科Ⅱ類	2年
鈴木　理絵	筑波大学	修士課程教育研究科	修士課程2年
角田　武士	国際基督教大学	行政学研究科国際関係論専攻	修士課程1年
友利　将悟	琉球大学	法文学部総合社会システム学科	3年
豊田　紀子	上智大学	比較文化学部比較文化学科	3年
中村　信之	立命館大学	国際関係学部	5年
	American University, School of International Service		
野口　直子	慶應義塾大学	法学部政治学科	1年
野口　なつ美	東京医科歯科大学	医学部医学科	2年
原　奈央	関西外国語大学	外国語学部英米語学科	2年
福家　雄大	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	2年
藤井　秀之	中央大学	総合政策学部政策科学科	2年
松井　亮	東京大学	法学部公法コース	3年
圓山　由子	京都産業大学	理学部物理学科	3年
宮崎　慎太郎	神戸大学	経営学部経営学科	3年
山口　健介	東京大学	新領域創成科学研究科	修士課程1年
横田　聡	京都大学	医学部医学科	3年
吉野　茉美	法政大学	社会学部社会政策科学科	3年

第55回日米学生会議アメリカ側参加者一覧

The 55th Japan-America Student Conference American Delegation

アメリカ側実行委員

Mr. Michael Baik	University of Texas at Austin	Japanese/Biology	Junior
Ms. Hana Heineken	Princeton University	Politics/East Asian Studies	Senior
Mr. Max Homerding	University of Central Oklahoma	International Trade	Senior
Mr. Benjamin Larson	University of Washington	East Asian Studies	Senior
Ms. Marina Li	Mills College	Art/Social Change	Post Graduate
Ms. Katy Liu	New York University	Marketing	Junior
Ms. Leona Middleton	Washington University in St. Louis	Japanese/Psychology	Senior
Ms. Rebecca Weisinger	Columbia University	Chemistry	Ph.D

アメリカ側参加者

Mr. Christopher Cataldi	State University of NY at Stony Brook	Information Systems Engineering	Junior
Ms. Carmen Cheung	Wesleyan University	East Asian Studies	Sophomore
Mr. MacKenzie Graham	Whitman College	Asian Studies	Senior
Ms. Meghan Green	University of California, Berkeley	Architecture	Senior
Ms. Tiffany Hirata	University of Washington	International Studies	Sophomore
Ms. Hui Jun Huang	Wesleyan University	Government/East Asian Studies	Sophomore
Mr. Jeff Hutchins	North Carolina State University	Computer & Electrical Engineering	Sophomor
Mr. Joshua Katcher	Cornell University	Applied Econ & Management	Frosh
Ms. Edmee Knight	Guilford College	International Relations	Sophomore
Mr. Michael Kraft	Columbia College	Econ/East Asian Studies	Junior
Ms. Jill Kunishima	Mills College	Communications/Psychology	Senior
Ms. Sarah LeBaron von Baeyer	Oberlin College	East Asian Studies/English	Sophomore
Mr. Jie Lin	Cornell University	Computer Science	Sophomore
Mr. Torin Martinez	Univ. of North Carolina at Chapel Hill	Political Science/Psychology	Senior
Ms. Leah Mullen	Mills College	Civic Leadership	Senior
Ms. Maiko Nakarai	Harvard University	Government/East Asian Studies	Frosh
Ms. Onasolape Onakoya	Howard University	International Business	Senior
Ms. Eri Otaka	The City University of New York	Accounting	Junior
Mr. Gabriel Rosen	Portland State University	Japanese	Senior
Ms. Tina Shang	Princeton University	East Asian Studies	Junior
Ms. Naoko Takashi	Smith College	Economics	Sophomore
Ms. Asuka Terasaki	University of Nebraska, Lincoln	International Studies	Frosh
Ms. Kristine Tyson	Cornell University	Human Development	Sophomore
Mr. Nmerichi Umennachi	University of Southern California	Cinema-Television Production	Junior
Ms. Kristen White	University of Kansas	English/Poli Science/Int'l Studies	Sophomore
Mr. Patrick Wyant	West Chester University	Philosophy/Religion/Computer	Senior
Ms. Joannie Yau	New York University	Economics	Sophomore
Ms. Aziza Zakhidova	University of Pennsylvania	International Studies/ Business	Frosh
Ms. Zijing Zhang	New York University	Marketing/International Business	Frosh

第55回日米学生会議本会議日程

2003年7月25日～2003年8月21日

東京：開会関連行事

7月25日（金）　日本側参加者直前合宿
26日（土）　アメリカ側参加者来日
27日（日）　ジョイントオリエンテーション#1、開会式、スキット上演
28日（月）　ジョイントオリエンテーション#2、分科会#1、スペシャルトピック#1
29日（火）　米国大使館主催レセプション、六本木ヒルズ見学、外務省主催レセプション
30日（水）　分科会#2、安倍内閣官房副長官講演会
31日（木）　分科会#3、全体討論#1
8月1日（金）　分科会#4、分科会#5、リフレクションミーティング#1

沖縄：日米沖縄学生会議

8月2日（土）　沖縄到着、文化体験#1
3日（日）　分科会#6、分科会#7、スペシャルトピック#2
4日（月）　分科会#8、基地問題講演会、日米沖縄学生会議開会レセプション
5日（火）　日米沖縄学生会議、フィールドトリップ
6日（水）　日米沖縄学生会議、嘉手納基地訪問
7日（木）　日米沖縄学生会議、リフレクションミーティング#2、タイフーン・ナイト

京都：日韓米ジョイントディスカッション

8月8日（金）　京都到着、日韓米ジョイントレセプション
9日（土）　日韓米ジョイントディスカッション、フェアウェルパーティー

福井：ホームステイと農作業

8月10日（日）　福井到着、レセプション、ホームステイ
11日（月）　農作業体験、ワラジ作り、ホームステイ
12日（火）　関西電力大飯原子力発電所見学、原子力に関する講演会

京都：京都フォーラム

8月13日（水）　分科会#9、分科会#10、高校生交流企画#1、リフレクションミーティング#3
14日（木）　高校生交流企画#2、文化体験#2
15日（金）　分科会#11、全体討論#2
16日（土）　フォーラム準備、五山の送り火
17日（日）　京都フォーラム
18日（月）　リフレクションミーティング#4、新実行委員選挙
19日（火）　自由時間／新実行委員ミーティング
20日（水）　自由時間／新実行委員ミーティング／クロージングセレモニー
21日（木）　アメリカ側参加者帰国、報告書ミーティング、日本側参加者解散

メディアの中の第55回日米学生会議

2002年冬～2003年夏にかけての広報活動及び取材記事

第55回日米学生会議実行委員会は、より多くの方に日米学生会議の存在を知っていただくために、様々なメディアを通した広報活動を行ってきた。また本会議中に取材を受け、記事として取り上げていただいた活動やイベントもあった。以下に掲載するのはその主なものである。なお、記事が掲載されている報告書のページを［ ］で示したので、併せて参照されたい。

- 乗竹亮治「日米学生会議へ参加を」『沖縄タイムス』2003年1月31日［45］
- 「『日米学生会議』参加者募集」『朝日新聞』2003年2月5日
- 高沢健史「日米両国は何をすべきか――世界の諸問題を議論へ」『琉球新報』2003年2月12日［46］
- "Japan-America Student Conference" *International Herald Tribune The Asahi Shinbun,* 15 February 2003
- 「学生会議に参加を」『沖縄タイムス』2003年3月17日
- 「県内から約30人参加者を募集」『琉球新報』2003年4月3日
- 「明日の日本を担う――平成の若き志士たち1<日米学生会議>」『月刊国会ニュース』No.2849、2003年4月号［17］
- 「8月に学生会議」『琉球新報』2003年5月29日
- 「来月から日米沖縄学生会議」『琉球新報』2003年6月3日［43］
- 「戦争報道～イラク戦争テレビは何を伝えたか」『NNNドキュメント'03スペシャル』日本テレビ2003年5月11日放送
- 「沖縄の将来語りたい」『琉球新報』2003年7月22日［46］
- 「学生の質問に安倍氏たじたじ」『朝日新聞』2003年7月31日［37］
- 「日米学生意見交わす――沖縄テーマに討議」『沖縄タイムス』2003年8月5日［48］
- 「日韓米きずな深く――国際問題　学生ら討論」『京都新聞』2003年8月10日［64］
- 「基地撤去で学生討議」『琉球新報』2003年8月12日［49］
- 「日米学生、上中で農業体験――わらじ作りに72人苦ワラい」『福井新聞』2003年8月15日［71］
- NHK各地のニュース「日米学生会議」日本放送協会2003年8月17日放送
- 「文化・基地…幅広く――日米学生ら70人討論」『朝日新聞』2003年8月18日［92］
- 「米国への視線交錯」『朝日新聞』2003年9月11日［85］
- 吉野茉美「『第55回日米学生会議』に参加して」『法政』2003年10月号［84］

他、大学新聞や地域広報誌など

『月刊国会ニュース』No. 2849、2003年4月号

明日の日本をになう

平成の若き志士たち 1

〈日米学生会議〉

取材・文 芳村玲好

長引く低迷のなか、日本の未来を真剣に考え、積極的に取り組んでいる青年諸君がいる。「もう政治家任せではいられない」日本の明日は自分たちの手で創りだそう!!――炸裂する若いエネルギーとパワーを紹介する

もっと日本と世界の明日を考えよう

日米学生会議は、その名の通り、日本とアメリカの学生七十名で組織する、民間の国際交流団体である。

九一四年に日本初の国際的な学生交流団体として創設され、途中、時中断したものの、通算すると七十年近い歴史を誇る。

十五OBとして宮沢喜一氏、元首相、柏原竜氏、三菱商事会長、堀口郁子氏（国際政治学者）、八城政基氏（新生銀行社長）、ハリー・A・キッシンジャー氏などの名前が挙げられる。

同会議は、十日米学生の交流を通じて、その根底にある両国間の相互理解を促進するための場で自由に討議し、意見交換を行う、さまざまな問題に対する意識を高め、自分たちで解決の一翼を担うなどの目的で設立された。

参加者は毎年、日米両国でそれぞれ公募され、書類選考、筆記試験、面接などを経て決定される。高い語学力と政治意識、プレゼンテーション能力が要求されるため、かなり狭き門、になっている。

前年の参加者の中から、当年の実行委員が選ばれ、日本振興一般財団が運営する財団国際教育振興会（米国側はIIE）に協力して、財務・広報・管理など組織運営の上務めを担当する。

広報担当の西納由紀さん

合宿や勉強会を通して、日米の学生が相互理解を深める

実行委員長の秦竹亮治君

グローバル化社会と日米関係

さらに日米関係と今後の展望について、自分なりの見解を語ってもらった。

一九九九年九月十一日の同時多発テロが起きたとき、私はオクラホマ大学のカソ・アリアでニュースを聞きました。あのときは自分が日本人であることにもかかわらず、アメリカに居るというアイデンティティー、そしてプライドを粉々に破壊されてしまう自分に複雑な思いをしました。それが日本人として自分を改めて意識するきっかけになりました。私たちの世代は伝統的な日本文化を異文化にさらされる努力が必要なのではないかなと。長引く不況やリストラなど制度の破綻などで、未来は暗い、というようなことを言う人が多いですが、私は必ずしもそうは思わない。むしろ、日本の未来は明るい、と考えたいですね。

実行委員会からご報告を担当する西納由紀さん。

橋大学、も、国際関係法を専攻する場から、日本政治の外交政策は少し一体性に欠けるように思います。また難民を由伯している一ハーナショナリズム次第で国際情勢に大きな影響をもたらすだろう、今後若い知恵の神でも、学生諸君の努力がかかっていくと化明、とてもかかることを願ってやまない。

野経たため、日本国には安全保障理念など、また難民を由伯している一ハーナショナリズム次第で国際情勢に大きな影響をもたらすだろう、今後若い知恵の神でも、学生諸君の努力がかかっていくと化明、とてもかかることを願ってやまない。

実行委員長の秦竹亮治君

両国がどのように努力できるのか、日米両国は諸問題にどのように取り組んでゆくべきなのか、自分ち含めて学生たちには、いま、なにができるのか、会議参加者との交流や議論を通じて、その答えをみつけられたらいいと考えています。と語る。

グローバル化社会と日米関係

さらに日米関係と今後の展望について、自分なりの見解を語ってもらった。

一九九九年九月十一日の同時多発テロが起きたとき、私はオクラホマ大学のカソ・アリアでニュースを聞きました。あのときは自分が日本人であることにもかかわらず、アメリカに居るというアイデンティティー、そしてプライドを粉々に破壊されてしまう自分に複雑な思

合宿や勉強会を通して、日米の学生が相互理解を深める

【名　称】日米学生会議　Japan-America Student Conference
【沿　革】1934年に4名の学生使節団が創設　1940年までに日米両国で毎年交互に開催　その後太平洋戦争にて中断　1947-1954、戦後の日米学生会議を復活するも、財政援助等なくて10年間中断　1964年再々開、爾来2002年まで毎回開催　2003年は第55回会議を開催予定
【定　員】日本側30名　米国側30名　合計72名　【期間】1年間
【応募資格】大学、大学院、短大、高専、専門学校などの在学生から選抜
【主　催】財団国際教育振興会
【後　援】外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター、財団法人ビジネス・インターナショナル協会、一部東京中
【連絡先】財団法人国際教育振興会内　日米学生会議　事務局　〒160-0001　東京都新宿区四谷3-2　TEL Fax 03-3358-0063
【E-mail】
【日本側H.P】http　【米国側H.P】http

第2章

事前活動

春合宿

講演会

勉強会

防衛大学校訪問

日本側直前合宿

春合宿

2003年5月4日～6日 国立オリンピック記念青少年総合センター

新たな感動と興奮――春合宿開催

2003年5月4日から6日までの3日間、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、第55回日米学生会議参加者の初顔合わせとなる春合宿が行われた。緊張と期待に胸を膨らませた第55回日本側会議参加者29名と日本側実行委員7名の計36名は、自己紹介やアイスブレイクを通し、急速に交友を深めていった。

初日は、OB/OGの方々を招いてのレセプションが開かれた。第1回日米学生会議を立ち上げられた故田端利夫先輩からはスピーチをいただき、当時の学生が直面した数々の試練や思い出など、貴重なお話をうかがうことができた。会議参加者は、日米学生会議の先輩方との交流を通して、これから自分が担っていくことになる日米学生会議への意気込みを新たにし、レセプションは盛況のうちに幕を閉じた。

二日目は「日米学生会議とは何か、なぜ『日米』『学生』『会議』であるべきなのか」という本質的な議題に対し、36名全員でディスカッションを行った。話題は「学歴主義について」などにも飛躍した。何より全員が一堂に会し、個人的意見を交換したことは、参加者がお互いへの関心を高め、理解を深める一助となったはずである。

また春合宿中は、8つの分科会ごとのミーティングも行われた。それぞれの分科会では、今後の事前活動や勉強会の計画が立てられ、参加者一人ひとりにとって、いよいよ本会議に向けて第55回日米学生会議が本格的に始動したことを実感する機会となった。

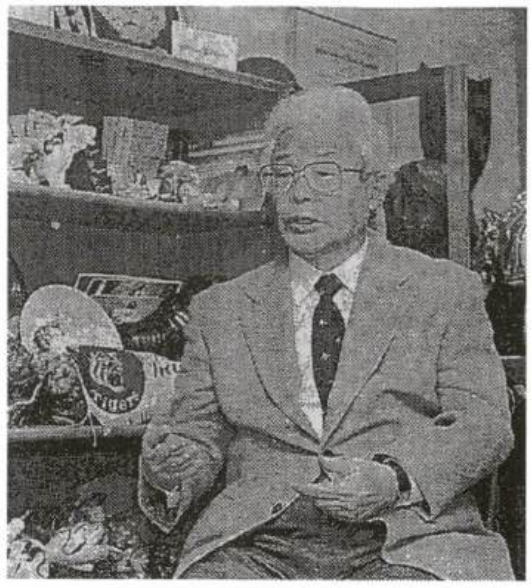
3日前初めて出会ったばかりの参加者たちは、春合宿終了時には随分と打ち解け、これから始まる活動や新しい人間関係に大きな期待と興奮を抱いていた。

春合宿で日本側参加者は初顔合わせをした。

講演会「日米学生会議アルムナイに学ぶ」

2003年6月15日 国立オリピック記念青少年総合センター

講師：降旗健人氏



講師略歴

慶應義塾大学卒業。ノースキャロライナ大学大学院経営学修士。伊藤忠商事に入社し1981年取締役、常務、専務を経て1989年副社長、1992年より国際デジタル通信社長。第11回、第12回日米学生会議参加者。

連載記事「仕事人秘録――いつも挑戦者」
『日本経済新聞』2003年1月21日より

講演内容

日米学生会議のOBでありビジネスの世界でご活躍された降旗氏に、ご自身の経験をふまえてこれから社会に出て行く参加者に講演していただいた。

前半は、降旗氏と英語についてであり、第二次世界大戦終了後に周囲にいるアメリカ兵を見て民主主義と英語の必要性に気付かされたことや、その後の英語学習方法についてのお話しがあった。また、大学時代に活動されていた英語会や日米学生会議にふれられ、参加者が本会議に臨むにあたり、テーマに対して深い知識を持ち、建設的な議論をすべきであること、またそのためには調整力を伴ったリーダーシップ性と人柄が必要になってくると説かれた。この言葉は本会議の準備段階にある参加者の心に突き刺さるものであり、その後の活動に一層力を入れることを決意させた。

講演の後半は、後輩への要望であった。その内容は、世の中を変える若い力への期待、日本にとって日米関係が最も重要であること、ITと外国語の必要性、人生や友達について、愛国心など多岐に渡った。これらのお話には、日米学生会議の活動を含め、今という瞬間を大切にし、真剣に生きて自分自身を向上させてほしい、またそこから友情や国際関係を育み、自分のため、世の中のために頑張ってほしい、という参加者に対する強いメッセージが込められていた。

今回の講演は、参加者がこれから日米学生会議の活動をしていく上で、またさらに今後の学生生活を開拓していく上で、大変大きな刺激と影響を与えるものとなった。

コーチングセミナー「ほめる技術」

2003年6月22日 早稲田大学

講師：鈴木義幸氏

講師略歴

慶應義塾大学文学部卒業。マッキャンエリクソン博報堂に勤務後、渡米しミドルテネシー州立大学大学院臨床心理学専攻修士課程を修了。テネシー州公的機関のセラピストを務め帰国。現在、コーチ・エィ取締役副社長。

講演内容

私たちが会議を行う際に、いかに建設的に話し合いを進めていくか、どのようにして参加者の仲間たちと良い友情関係を築き上げるかという目的で、この講演会が行われた。鈴木氏は、アメリカの女子刑務所での心理カウンセラーとしての経験や、イルカの調教のお話、さらに長嶋監督と王監督の選手への褒め方の違いなど、興味深いお話も含め、コーチングについて、主に３つの点を述べられた。

初めに、どうすれば人は動くかである。名刺の渡し方を例として用い、相手に物事を教える際の上手な教え方を学ぶことができた。人に物事を教える際、つい一方的に説明しがちであるが、まず相手に考えさせることを重視することで、相手に抵抗感を感じさせず、しかも効果的に教えられると説かれた。

次にコミュニケーションの方法についてである。氏はキャッチボールを実演しながら、効果的な会話の進め方、話の聞き方を述べられた。人は話を聞いているはずの時も、自分が次に何を話そうかを考えていて、実際にはあまりきちんと人の話を聞いていないものである。だから、人の話をきちんと聞こうとするスタンスが大切であること、また普段人と話している最中に、自分が無意識に行っている動作、つまり聞く態度、相手との距離、目線などがもたらす影響がいかに大きいものであるかを、参加者は学んだ。

今年の会議は総勢72名である。1ヵ月間寝食を共にする中では、集団の中で個人としての存在を認められたいという気持ちが生まれてきたり、上手く周りに馴染めず孤独感を感じる者が出てきたりして、様々な気持ちが錯綜することもあるだろう。そんな中、自分の存在が他人に認められること、相手の存在を認めること、友達の複雑な気持ちに気づき、そして一言声をかけてあげること、これらは友情関係や信頼関係を築く中で必要不可欠なことである。そしてこれこそが、コーチングのお話の中でのアクノリッジメント、つまり「承認すること」であり、３つ目の点である。アクノリッジメントの一つの例として、「人は他人から、きちんと認められたい」というものがあるが、他人に対する、そして自分に対するアクノリッジメントの重要性は、多くの参加者が本会議中、身をもって体験したのではないだろうか。

コーチングは、人それぞれの無意識レベルにあったものを意識的な段階へと引き出し、他人、そして自分とより良い関係を日常的に築いていく上で、大変実用的な技術であるといえ、本講演会は本会議を控えた参加者にとって、大変有意義なものとなった。

OB/OG 講演会「日米学生会議再定義」

～いま 私たちができること いま 私たちがすべきこと～

2003 年 6 月 29 日 日米会話学院

講師：芹沢ユリア氏、中瀬正一氏、辻喜久子氏、山本東生氏、山田勝氏

芹沢ユリア氏略歴
津田塾大学卒業。獨協大学名誉教授。専門は、ウィーン音楽史とフランス文学。第 7 回日米学生会議参加者。

中瀬正一氏略歴
早稲田大学卒業。日米学生会議 OB 会幹事長。元三菱商事。第 8 回、第 9 回日米学生会議参加者。

辻喜久子氏略歴
日本女子大学卒業。公立高校で校長を歴任し、現在、十文字学園高校にて教鞭をとる。また、都立教育研究所のインストラクター、国連大学の留学生インストラクターを務める。第 14 回日米学生会議参加者。

山本東生氏略歴
慶應義塾大学卒業。元中東三井物産社長。第 16 回、第 17 回日米学生会議参加者。

山田勝氏略歴
明治大学卒業。留学雑誌『留学ジャーナル』の出版、TOEFL 模擬試験、留学派遣事業を行っている ICS の設立者。第 18 回日米学生会議参加者。

講演内容

果たして日米学生会議とは何なのだろうか。日米関係が、かつてのような戦争前夜の緊迫した関係にはない現在において、日米両国の学生が集う意義は何なのだろうか。現代という時代における一日米学生会議参加者として、我々は何ができるのか、何をすべきなのか。

これらの問いに答えるヒントを得る一助として、今回の日米学生会議歴代 OB/OG による講演会は企画された。講演では、日米学生会議と世界動向の比較や、日米学生会議がそれぞれの OB/OG の人生においてどのような影響力を持ち、どのような意味合いを持っているのか、様々な経験を経た現在の立場から、各人に振り返って語っていただいた。この講演会では、各 OB/OG が生き抜いてきた歴史、そしてそれぞれの世代の価値観を直接うかがうことができ、参加者にとっては日米学生会議の歴史と今日的意義について改めて考えさせられる機会となった。

講演会「イラク戦争を振り返る」

～国際政治・中東地域・日米関係の視点から～

2003年7月5日 日米会話学院

講師：高橋和夫氏

講師略歴

大阪外国語大学ペルシア語科卒業。コロンビア大学国際関係論修士。1982～84年、クウェート大学客員研究員。1985年より現職の放送大学助教授。専門は、中東研究、国際政治。第26回日米学生会議参加者。

著書

『国際政治／新しい世界像を求めて』（放送大学教育振興会、2000）、『国際関係論』（共著 放送大学教育振興会、1997）、『社会科学入門』（共著 放送大学教育振興会、1997）、『現代の国際政治／冷戦を越えて』（放送大学教育振興会、1995）、『第三世界の政治／南からの視点』（編著 放送大学教育振興会、1996）、『ハジ・ババの冒険上・下』（共訳 平凡社東洋文庫、1983）、『アラブとイスラエル／パレスチナ問題の構図』（講談社現代新書、1992）、『燃えあがる海／湾岸現代史』（東京大学出版会、1995）など。

講演内容

今回の講演会は、イラク戦争が勃発してアメリカ軍がフセイン政権を打倒した時期に開かれた。高橋氏はこのイラク戦争について主にメディアの視点から話して下さった。メディアの視点から考えると、今回のイラク戦争報道でアメリカ側のメディアは、かつての湾岸戦争のように一方的な情報を流したため、視聴者としては何が事実なのかがわからなくなってしまった人も多いはずであると指摘された。よって我々は、情報を鵜呑みにするだけでなく、しっかりとした情報の取捨選択や正誤判断をするべきだと話された。

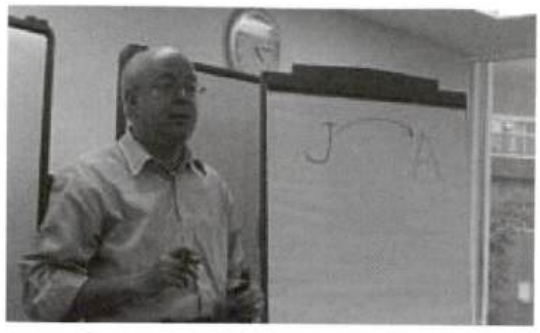
また、第55回日米学生会議のテーマである「市民参加の視点から考える」に関しては、イラク戦争前に様々なデモ行進が全世界各地で行われたのにもかかわらず、なぜ戦争が起こってしまったのだろうか、という鋭い質問を高橋氏は投げかけた。この問いは本会議を控えた参加者にとって、市民参加の意味や、その実践が社会においてどのような影響力、プレゼンスを持ちうるのかについて考える、貴重なきっかけとなった。

JASC Orientation

～Preparing Yourself for the JASC Experience～

2003年5月14、21日　主催：(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会

講師：Larry J. Rosenberg 氏



講師略歴

Dr. Rosenberg is the president of the Visionary Strategies Institute, a consulting, training, and coaching firm based near Washington D.C. and with an office in Tokyo. For Japanese companies, he specializes in global/intercultural management, leadership, marketing, and communication, and visits Japan regularly. He directed University of Maryland's management and business programs in Tokyo from 1990 to 1999, serving Toyota, NEC, Dentsu, Itochu, Sumitomo, IBM, among others.

講演内容

本セミナーは、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の全面的な協力の下、当協会内で、二回にわたって行われた。内容は大きく2部構成になっており、まず第1部では、日本人とアメリカ人の考え方、ディスカッションのやり方の違いなどについての分析や、アメリカ人との接し方についてコミュニケーション論の立場から詳細な説明がなされた。第2部では、第1部で学んだことを実際に適用するという目的のもと、ケーススタディが行われた。日本人とアメリカ人の価値観の違いが大きく出やすい場面がケースとして挙げられ、自分ならばどう解決していくかをグループごとに話し合い、プレゼンテーションによって互いのグループの考え方を共有した。また、価値観の違いを克服するために、日本人の価値観ともアメリカ人の価値観とも一線を画した第3の価値観「JASCゾーン」を作り上げることがその解決策になりうると主張された。「言語だけでは越えられないコミュニケーションの壁を感じると同時に、その壁を本会議の際に乗り越えていこうと感じさせられた」と参加者の一人が述べていたように、本会議に向けて非常に刺激的なセミナーとなった。

勉強会 "English Discussion Study Session"

2003年6月22日 立命館大学

参加者による自主勉強会

内容

日米学生会議では英語を用いて議論が行われるため、英語を第2外国語とする日本側参加者にとって英語を勉強することは大切である。しかし、関西在住者は関東地区で開催された勉強会への参加がやや困難であるため、参加者自身が本勉強会を企画し実行した。

内容は、本会議中の分科会をシュミレーションした実践型のディスカッションである。はじめに、人種差別に関する意識差別をいかに防ぐかという実験が主題となっているドキュメンタリービデオ『青い目　茶色い目』("A CLASS DIVIDED" WGBH Product, the United States) を鑑賞した。ビデオを見終わった後は、2グループに分かれ「差別」について英語によるディスカッションを行った。70分のディスカッションを2回行い、ビデオについての感想から身近に起こっている差別問題まで幅広く議論した。ある学生は身近に存在する差別問題として故郷で「女は家庭で、男は外で働く」といったジェンダーによる偏見が色濃く残っている現状を紹介した。この他にも学歴によって人は差別されるかという教育問題や社会問題の話題も出た。各グループは社会制度や法制度に関する差別問題を議論した後、話し合いの内容をまとめ、英語で議論を行ったことに関する評価 (Evaluation) を実施した。最後に、その日の収穫を全体で共有するために、各グループの代表者がそれぞれグループで話し合った内容の発表を行い、本勉強会は終了した。

本勉強会で英語による議論を実践したことで、参加者は英語を用いることに対して漠然と不安を抱くのではなく、自らの課題を具体的に把握することができ、以後の事前学習に大いに役立てることができた。

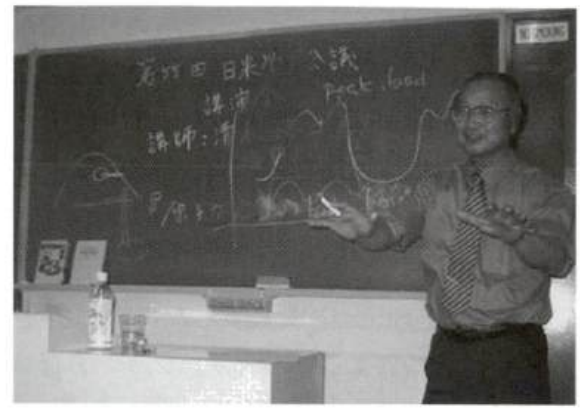
勉強会「原子力発電」

2003年6月28日 日米会話学院

講師：清水修二氏

講師略歴

1948年東京都出身。京都大学経済学研究科卒業。福島大学経済学部教授。研究内容は、原子力開発と財政システムの研究、医療福祉財政論、自治体環境行政の研究、自治体財政運営の研究など。



著書

『臨海被爆の衝撃――いまあらためて問う原子力』（共著リベルタ出版、2000）、『NIMBYシンドローム考――迷惑施設の政治と経済』（東京新聞出版局、1999）、『動燃・核燃・2000年』（リベルタ出版、1998）、『差別としての原子力』（リベルタ出版、1994）など。

講義内容

本会議での福井県の原子力発電所見学を前に、NIMBY（“Not In My Back Yard”の略、「必要性は認めるが、我が家のそばにつくられるのはごめんだ」の意）という言葉をキーワードに原子力発電について講義していただいた。

原子力発電が、お茶の間の会話としてはあがりにくい問題の一つであるとし、この問題の特徴として、議論が重ねられたとしても、解決策の出にくいこと、政治的な色彩をおびやすいこと、お金がからむ問題であることを述べられた。また、発電所と消費地の距離的な分離、原発がもつ危険性の分布の不平等さ、原発に関する法律と補助金と地方行政の関係、高レベル放射能廃棄処分処理場の立地、海外の原発事情、原発を廃止した場合についてなど、あらゆる観点から幅広く説明された。

日常生活とエネルギーは密接な関係にあるが、原発を身近な問題として考えることの少ない参加者に、氏は「消費量が大きい東京の真中になぜ原発を建設しないのか」との問題提起をされ、原発について教授していただいた本勉強会は、非常に示唆に富むものだった。

勉強会「地方自治の制度と可能性」

2003年6月28日 立命館大学

講師：澤井勝氏

講師略歴

1942年東京都出身。都立日比谷高等学校卒業。東京外国語大学ロシア科卒業。東京大学大学院経済学研究科修了（経済学修士）。同大学院博士課程単位取得退学。産業材料調査研究所研究員、地方自治総合研究所研究員、法政大学法学部非常勤講師、北九州大学法学部教授等を経て、現在、奈良女子大学生活環境学部教授（生活福祉論）。

著書

『分権改革と地方財政』（敬文堂、2000）、『変動期の地方財政』（敬文堂、1993）など。また、『イミダス』（集英社）において「地方自治」（1997～2001）、「地方財政」（2002）担当。

講演内容

地方自治体の財源である地方税。しかし、ほとんどの自治体は地方交付税交付金に頼っている。だが、赤字の地方自治体も原子力発電所を建てると、一時的には電源開発交付金や原子力発電所にかかる固定資産税で税収はにぎわう。それにより財政規模は大きくなるが固定資産はやがて償却され税収は落ち、赤字に戻る。

澤井氏はこのように原発依存の財政ができてしまう過程を解説され、原発を持つ地方自治体が原発依存にならないように努めることの重要性を確認された。同時に、1980年代の電力レベルにしない限り、日本では原子力発電なしに生活することはできない現実をふまえ、原発をなくすならば、生活スタイルの変化や燃料電池など他の発電技術の開発が不可欠だと強調された。

また、今年度の日米学生会議のテーマに寄せて、「税」と「市民参加」について言及があった。アメリカで実際に起きた固定資産税制度に対する住民発議運動を例に、住民活動がもたらした正負の影響やその評価を巡る複雑性について、話された。

また、澤井氏は市民参加には情報の公開が必須であることを述べられた。しかし、地方自治体が公表する議事録などは専門的すぎて一般的にわかりにくいため、情報を整理し、かみくだいてまとめるアドボカシー（代理人）が必要だと主張された。地方自治体はそもそも自治組織という面をもつ。澤井氏は、個々の明確な目的をもったアドボカシーたる組織がたくさんでき、それぞれがその目的を実現していくことで自治体も変わっていく可能性があることを示唆された。

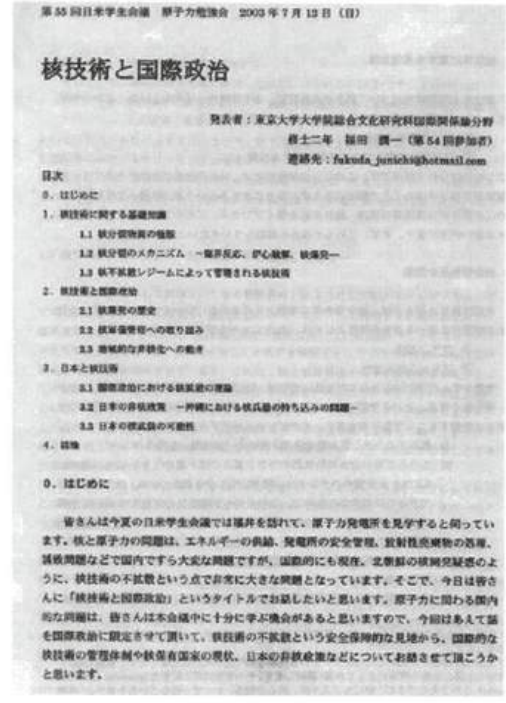
勉強会「核技術と国際政治」

2003年7月13日 国立オリピック記念青少年総合センター

講師：福田潤一氏

講師略歴

千葉県出身。青山学院大学卒業。東京大学大学院総合文化研究科国際関係論分野専攻。第 54 回日米学生会議参加者。



第55回日米学生会議　原子力勉強会　2003年7月13日（日）

核技術と国際政治

発表者：東京大学大学院総合文化研究科国際関係論分野
修士二年　福田　潤一（第54回参加者）
連絡先：fukuda_junichi@hotmail.com

目次

0．はじめに
1．核技術に関する基礎知識
　1.1 核分裂物質の種類
　1.2 核分裂のメカニズム　～臨界反応、炉心設計、核爆発～
　1.3 核不拡散レジームによって管理される核技術
2．核技術と国際政治
　2.1 核開発の歴史
　2.2 核軍備管理への取り組み
　2.3 地域的な非核化への動き
3．日本と核兵器
　3.1 国際政治における核武装の意義
　3.2 日本の非核政策　～沖縄における核兵器の持ち込みの問題～
　3.3 日本の核武装の可能性
4．結論

0．はじめに

皆さんは今夏の日米学生会議では福井を訪れて、原子力発電所を見学すると伺っています。核と原子力の問題は、エネルギーの供給、発電所の安全管理、放射性廃棄物の処理、誘致問題などで国内ですら大変な問題ですが、国際的にも現在、北朝鮮の核開発疑惑のように、核技術の不拡散という点で非常に大きな問題となっています。そこで、今日は皆さんに「核技術と国際政治」というタイトルでお話したいと思います。原子力に関わる国内的な問題は、皆さんは本会議中に十分に学ぶ機会があると思いますので、今回はあえて話を国際政治に限定させて頂いて、核技術の不拡散という安全保障的な見地から、国際的な核技術の管理体制や核保有国家の現状、日本の非核政策などについてお話させて頂こうかと思います。

当日配布された論文資料

講演内容

原子力と核といえば、原子力発電によるエネルギー供給の問題が考えられがちである。しかし、一国内のエネルギー問題も含め、原子力と核は核技術の不拡散という国際社会における安全保障の視点、国際政治の観点からも非常に大きな重要性を持つ。

本勉強会で、福田氏はまず核分裂の種類やメカニズム、核管理などの核技術に関する基礎知識を概説された。次に、国際政治から見た核の歴史と現状について、冷戦構造の下で行われた核開発競争とその背景や、現在地域的に見られる非核化の動向を交えて説明された。

さらには、日本の核武装は政治的な面のみならず技術的な面から考えても不可能であること、国内に核実験を行う場所や核を配備する場所がないことがその理由の一つであること、また原子力潜水艦による核武装も非現実的であると述べられた。福田氏が、話題にのぼることが少ない日本の核武装について言及し、その非現実性を論理的に解説されたことは、参加者にとって刺激的であり、核武装について新たな視点を持つ機会となった。

また、本勉強会のために福田氏が作成して下さった数十ページに及ぶ資料によって、勉強会に参加できなかった学生も核技術の基礎を知ることができた。

防衛大学校訪問

2003年6月13日 防衛大学校

安全保障論への一歩——防衛大学校研修

2003年6月13日、第55回日米学生会議に参加する日本側学生は、神奈川県横須賀市にある防衛大学校を訪問した。

会議参加者のほとんどが、防衛大学校生を目にしたことも、防衛大学校生と話したこともなかった。そのため参加者にとってこの日は、日米安保や自衛隊派遣などについて激しい議論をし、防衛大学校生に直接意見を聞くというアカデミックな場だけでなく、防衛大学校生の日常生活を知り、自衛隊の卵となる人たちと交流できる貴重な機会であった。

防衛大学校到着後、参加者は西原正防衛大学校長から激励の挨拶をいただき、防衛大学校の学校生活や年間行事についての広報ビデオを見た。そして二人一組となってゼミ形式の授業である「防衛学特論研修」に参加し、防衛大学校生のプレゼンテーションなどを見学させていただいた。次に通された食堂では防衛大学校生が普段食べているのと同じメニューの昼食をいただき、防衛大学校生と隣り合わせに座り、お互い緊張しながら、自己紹介をした。昼食後は防衛大学校生による課業行進、そして図書館などの施設を見学した。そして源田一等空佐による「戦略論から見た日米関係」(戦略論や外交哲学、戦後の日本の安全保障政策、日米安全保障体制）について講演をいただいた。

その後は、防衛大学校生と会議参加者が混合した6つのグループに分かれ、各グループに防衛大学校の教官1名に同席していただき、日米安全保障体制の戦略的重要性、イラク復興への自衛隊派遣、集団的自衛権をめぐる問題などについて話し合った。討論中は立場や関心や考えの違いにより意見が衝突することもあり、民衆対自衛隊という姿勢も時には見えた。しかし、その意見の違いの理由が明らかになっていく中で、両学生ともにお互いの立場をよりよく理解することができたのではなかろうか。両側の参加者にとって、今回のディスカッションでの経験は今後、安全保障や自衛隊について議論をする上で絶えず直面することになる挑戦への第一歩であったといえるのではないだろうか。

グループ討論を通して、緊張がほぐれたところで懇談会が行われた。お互いの日常生活や学校活動、趣味や将来への思い、不安、期待などあらゆることを話す中、新しい絆がたくさん生まれたに違いない。

この一日は防衛大学校の全面的な支援とスムーズな計画のおかげで、大成功に終わった。帰りのバスの中、会議参加者からは絶えず「刺激的な一日だった」という声が聞こえた。

日本側直前合宿

2003年7月25日～26日 国立オリピック記念青少年総合センター

高まる期待と緊張――直前合宿開催

7月25日金曜日午後、国立オリンピック記念青少年総合センターに、第55回日米学生会議日本側参加者36名が集合した。日本側参加者が一堂に会するのは、5月に行われた春合宿以来のことである。これから始まる約1ヵ月に及ぶアメリカ側参加者を含めた総勢72名での共同生活を前に、皆が期待や不安といった様々な感情が交錯した表情を浮かべていた。

オリエンテーションに続き、財団法人国際教育振興会賛助会事務局長であり、日米学生会議OBでもある伊部正信氏から激励の言葉をいただいた。日本学生会議の歴史の概観から始まり、これからの日本学生会議への期待を語っていただいた。伊部氏は、ときにはユーモアを織り交ぜ参加者の緊張をほぐしながら、力強いメッセージを送って下さった。またこの時点より、26日夜に合流することになっているアメリカ側参加者から1名が先だって合流した。彼女の登場は、日本側参加者にこの会議が、「日米」の学生による会議であるということを強く意識させた。

夜に行われたリフレクションミーティングでは、個々人の事前活動を振り返り、27日から開催される第55回日米学生会議への期待、抱負、不安要素などについて語り合った。各開催地のスタッフとして行ってきた仕事、日米学生会議主催の事前勉強会に関すること、学業との両立など、組織レベルから個人レベルまで多岐にわたる話題が話し合われた。このディスカッションは、日米学生会議が学生によって運営されているのだということを参加者に再認識させ、また、個々人の課題を見つめる場ともなった。

7月26日土曜日、直前合宿二日目。夜に合流することになっているアメリカ側参加者に先立ち、新たに1名のアメリカ側参加者が加わった。午後は27日の夜行われるスキットの練習のために時間が割かれた。スキットの構成ができてからは、歌の練習、寸劇の練習、踊りの練習、小道具の買い出しなど、それぞれの役割にそって、参加者が積極的に活動した。スキットの練習過程は、日本側会議参加者の絆を深く強固なものにしていった。

第３章

本会議――サイト活動

東京サイト

沖縄サイト

日韓米ジョイントディスカッション

福井サイト

京都サイト

京都フォーラム

東京サイト

サイトコーディネーター：小林悦子、西納由紀、乗竹亮治

東京サイトのスケジュール

7月25日	日本側参加者直前合宿
7月26日	アメリカ側参加者来日
7月27日	ジョイントオリエンテーション#1
	開会式
	スキット上演
7月28日	ジョイントオリエンテーション#2
	分科会#1、
	スペシャルトピック＃1
7月29日	米国大使館主催レセプション
	東京都立日比谷高等学校訪問
	六本木ヒルズ見学
	外務省主催レセプション
7月30日	分科会#2
	安倍内閣官房副長官（現自由民主党幹事長）講演会
7月31日	分科会#3
	全体討論#1
8月1日	分科会#4
	分科会#5
	リフレクションミーティング#1
8月2日	沖縄へ出発

東京サイトのスタッフ

伊中英輔、小林悦子*、坂口紋野、鈴木理絵、西納由紀*、乗竹亮治*

（*はサイトコーディネーターを示す）

東京サイトの概要

東京は、日本の政治、経済、情報、交通など様々な分野の中心地であり、1200万人もの人口を抱える巨大コミュニティである。国会議事堂や省庁、国際機関において日本の国としてあり方を方向付ける重要な決断が日々下されていると同時に、市民レベルでは東京の利点を活かして、ローカルからグローバルな課題解決を目指す試みも日々積極的に展開されている。第55回日米学生会議で、安倍内閣官房副長官（当時）による講演会や米国大使館でのブリーフィングなど日米両国の国レベルのテーマから、分科会単位で行った企業、市民団体へのフィールドトリップという市民レベルのテーマまで扱うことができたのは、まさに東京ならではのメリットを活かしたからだといえる。

東京サイトには、会議のテーマである「市民参加」について各分科会で情報収集や議論を進めること、また日米学生会議を支援して下さっている企業、財団、省庁、そしてOB/OGの方々と参加者が直接意見を交換する場を設けること、またグローバルな問題意識とローカルな視点に基づいた議論のたたき台を提示するという意図があった。

7月26日　アメリカ側参加者来日

大型バスの到着と共に、大きなスーツケースを持ったアメリカ側参加者が続々とバスを降りてきた。去年の参加者でもある双方の実行委員たちは、再開の喜びに涙していた。不安と期待の入り混じった雰囲気の中、私たち72人の熱い夏は幕を開けた。

初めて一堂に会した両国参加者

7月27日　ジョイントオリエンテーション#1、開会式、スキット上演

第55回日米学生会議の開会を対外的に公表する開会式では、高円宮妃殿下をはじめ、各省庁や後援者の方々からお言葉をいただき、日本側実行委員長の乗竹亮治とアメリカ側実行委員長のHana Heinekenがスピーチを行った。また緒方四十郎氏による基調講演「日米交流150周年によせて」が行われた。

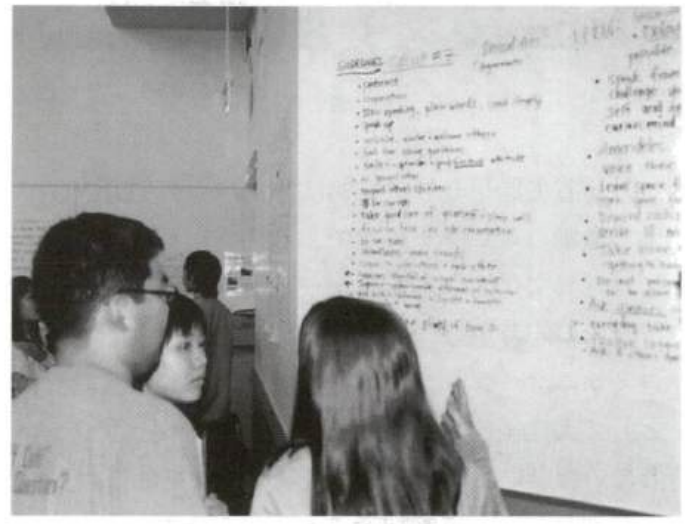
夕食後、アメリカ側参加者にはまだ時差ボケに苦しむ者が目立つ中、参加者のみで行われる最初のレクリエーションイベントが行われた。両国の学生はそれぞれこのイベントのために準備したスキットを演じた。日本側は日本文化を面白おかしく風刺したコメディーショーをテレフォンショッピングのスタイルで披露。そしてアメリカ側は、アメリカのある学校にやってきた日本人留学生にアメリカはどんな国かを伝えるというスキットを演じた。スキットとプレゼント交換を通して、ひと夏を共に過ごす仲間たちの間に、少しずつだが親近感が芽生え始めた。

基調講演をなさる緒方氏

高円宮妃殿下と歓談する参加者

７月28日　ジョイントオリエンテーション#2、分科会#1、ST#1

オリエンテーションでは、各自が会議に対する抱負を交ぜながら自己紹介をした後、コミュニケーションを題材にしたワークショップやジェスチャーゲームが行われた。初めての分科会セッションでは、メンバーが顔合わせをすると共に、分科会の方向性に関する話し合いが行われた。夜のスペシャルトピックでは、「東アジアの安全保障」、「ポップカルチャー」、「言語」といったテーマから参加者が各自が関心のあるものを選び、ディスカッションを行った。



オリエンテーションの一場面。本会議を円滑に進めるためには何に気をつけたらよいか、話し合った結果をポスターにして発表した。

７月29日　米国大使館主催レセプション、外務省主催レセプション

米国大使館主催レセプションは、それぞれ経済や政治を専門とする大使館職員の方々によるブリーフィングで始まった。すべて英語で行われた説明に最初は面食らう日本側参加者もいたものの、質疑応答では、イラク戦争に対する日本世論に関する質問が出されるなど、日米両学生による積極的なやり取りがなされた。

米国大使館にランチョンをホストしていただいた後、参加者は二手に分かれ、一部の参加者は東京都立日比谷高等学校へ、残りの参加者は六本木ヒルズに向かった。前者の企画は、今後共に社会を担っていく高校生と日米両大学生が交流することによって、互いに刺激を与え合うことを目的に企画されたものだ。今何を頑張っているのか、今何の勉強が一番楽しいのか、などの質問が交わされた。英語での会話に少々緊張した生徒も見られたが、将来のことなど、しっかりと意見を言う姿が印象的だった。他方、後者のグループは、六本木ヒルズで開催されていた「世界都市～都市は空へ～」を見学した。日本の都市と世界の様々な大都市の成り立ちや比較が興味深い展示に加え、今一番の話題である六本木ヒルズのスケールや展望台からの眺めを、日米両参加者共に楽しんだ。

在日米国大使館にてパネリストに質問をする参加者

外務省主催レセプションはメルパルク TOKYO で行われた。第 55 回日米学生会議参加者への激励のスピーチの中で、高円宮妃殿下は終始、世界の人間がお互いに理解し合うためには「異文化間コミュニケーション」が非常に大事であるということを強調された。そして日米の若者が 1 ヵ月間寝食を共にし人間関係を構築していく日米学生会議は、異文化間コミュニケーションを学び、将来日米の相互理解において架け橋となる人材を育てる機会として大変価値がある、と語られた。レセプションには日米学生会議にご支援、ご協力をしていただいている財団や企業の方々をはじめ、日米学生会議の OB/OG など多くの関係者が参加され、会議参加者にとって、そのような方々と直接お話できる格好の交流の場となった。

外務省レセプションでの歓談風景

この一日は、会議参加者が多様な学生だけでなく、社会の様々な分野の第一線で働いている社会人の方とも知り合う機会を得られるという日米学生会議の素晴らしい一面を実感できた日であった。

7月30日　分科会#2、安倍内閣官房副長官講演会

安倍元内閣官房副長官（現自由民主党幹事長）による講演は、報道関係者が詰めかけていたこともあり緊張感が漂っていた。安倍氏はまず、日本の経済的脅威の低下により、アメリカとの経済的衝突が少なくなったこと、そして9.11米国同時多発テロ事件以降の、日本の迅速な対応などによって、政治的な日米関係は極めて良好であること述べられた。次に安倍氏は、北朝鮮の脅威について触れ、北朝鮮問題は日米関係の重要性を再確認させたが、友好的な同盟関係の維持には不断の努力が不可欠であると主張された。そして互いの国の違いを十分に知らなければ友好的な関係は達成しえない、として若者による国際交流の重要性を訴えられた。その後参加者は、自衛隊派遣と国益、安倍氏自身の留学時代の話に関する質問などを投げかけた。

講演される安倍内閣官房副長官（当時）

学生の質問に安倍氏たじたじ

自衛隊派遣
北朝鮮の核

日米学生会議の催しで

「イラク国内はまだ危険だ。自衛隊派遣は日本の国益にかなうか」「北朝鮮の核開発を、援助なしにやめさせることは可能か」――。日米の学生約70人が30日、東京都内で安倍官房副長官と対話した。「プレスの質問かと思う」（安倍氏）ほど鋭い学生たちの質問に、御切れのよさが売りの安倍氏も押され気味。「（テレビカメラの前なので）国会答弁のようになって申し訳ない」と釈明する場面もあった。

国際教育振興会が主催する「日米学生会議」のイベントに招待された。

安倍氏はイラクへの自衛隊派遣について、日本人学生が慎重論を唱えると、「東京のように安全ではないから。自分の身は自分で守れる国に完結型の自衛隊が出ることが大切だ」と答えた。

「朝日新聞」2003年7月31日

7月31日　分科会#3、CWD#1

CWD（全体討論）の第一回目は、第55回日米学生会議のテーマである「市民参加」"Civic Participation" について話し合った。CWDは参加者全員で同じテーマについて話し合う時間で、グループごとに、市民参加とは何か、市民参加を実現するためにはどのようにしたらよいかなどを考え、最後にグループごとに皆の前で話し合った結果を発表した。

グループの話し合いの結果を報告する参加者

8月1日　分科会#4、分科会#5、リフレクションミーティング#1

午前と午後の大半は分科会セッションに費やされた。それぞれの分科会が、グループで設定した議題に関する討論や、事前に用意したレポートの発表、情報収集と実地調査を兼ねたフィールドトリップを行った。夜は、この日が東京サイトで過ごす最後の日ということもあり、東京サイトのプログラムや会議の出だしを振り返るリフレクションミーティングが開かれた。初めてのリフレクションミーティングで何を言ってよいのか戸惑っていた参加者もいたようだ。

リフレクションミーティングの様子

参加者ノート　阿部幸音

『体調を万全に保つこと』――元来あまり体力のない私にとって、これが本会議始まって以来の第一テーゼであった。特に出だしは肝心とばかりに、東京サイト中は夜更かしを控え良く眠り、良く食べ、良く動き、ストレスを溜めないこと、できる限りリラックスして「日常生活」を送ろう、そうすれば気持ち良く会議日程をこなせるはずだ、との信念に基づき私は実に規則正しい生活を送っていた。というのも、私は以前春合宿の際に、あまりに興奮しすぎて夜も眠れず、後で心身共に疲労しきってしまったので、その教訓を活かすつもりだったのである。

それにもかかわらず、会議が始まって数日が過ぎた頃から私の中で、何かが違う、何かが足りないとの思いが次第に膨らんでいった。これは、「会議を通して生産的な議論をしたり、現実社会における諸問題に対して具体的解決法を提示したい」などと本会議前に考えていたことが一つも実現していなかったからばかりではない。それよりも、私は少々自分の信念に縛られすぎていたのかも知れない。そもそも、72名ものまだよく知らない日米両国の学生と集団生活を送るという非日常的空間に身を置きながら、「日常生活」を送れるはずがないのである。さらに、これまで「規則正しい生活」を送ってこなかった自分が、朝起きて夜寝ること自体、非日常的であったのだ。そのことに気付いて「非日常における日常」が楽しめるようになったのは、もう少し後になって、沖縄サイト中であった。

また、会議が始まってまだ日の浅い東京サイト中のフリータイムは、アメリカ側と日本側、というように学生同士が別々に行動することが多かったように思う。言葉の壁というものを意識してか、私もなかなか多くのアメリカ人学生と話し合う機会がなく、常に物足りない気持ちと自分へのやるせなさのような気持ちがあったのを覚えている。だからこそ、分科会のように固定メンバーではなく、かつ小人数で集中して議論のできるスペシャルトピック（ST）の時間は貴重であった。会議前半はもう少しSTのような時間を増やすようアイスブレーキングの時間を有効活用できなかっただろうか、とスケジュールに関する不満が残った東京サイトであった。

参加者ノート　角田武士

7月25日、日本側参加者大集合！

事前活動に全く参加できなかった私は、皆と会うのは久しぶり。極度の緊張と興奮と、全然パッキングをしていなかったので、前日24日は一睡もすることができず、そのまま日米学生会議が最初に開催されるオリンピックセンターへ出発。しおりを片手に荷物の最終チェック。「歯磨き入れた、水着も入れた、カメラも持ったしこれで大丈夫！」そんな独り言を言いながら、でかいスーツケースを転がしながら電車に乗車。荷物は重いが、心は軽い。「皆（西武池袋線乗客の皆さん）、俺がどこに行くと思っているのかなぁ？」と自意識過剰になりながらも、「いえいえ、私は海外に行くのではなく、日米学生会議で日本をぐるぐる回るんですよ～」と自問自答。ずいぶんアホである。

このアホさがマヌケを呼んだ。「サラリーマンこんなに暑いのにスーツ着て大変じゃなぁ…」と思った瞬間、私は気付いたのである、スーツを忘れてしまったことを。時間ぎりぎりに家を出た私、当然スーツを取りに帰れば遅刻である。しかし、スーツ無しに日米学生会議の数ある舞台を飾れない。役者・角田武士、スーツを取りに帰った。自業自得とは分かりながらも、気分は最悪だった。再び、オリンピックセンターに向かう最中、忘れ物に細心を払い過ぎるあまり、必要の無いパスポートまでも気になり始めた。そんなこんなで、ようやく到着。やはり遅刻だった。お先真っ暗だった。

しかしながら、このお先真っ暗も久々の皆との再会にぶっ飛んだ。「やっと日米学生会議が始まる！素敵な夏IN 2003よ、俺にやって来～い！」そう心で叫びながら、自分自身大興奮を楽しんでいた。また、この大興奮は冷めやまず、「うわぁ～日米学生会議超楽しい～次は何が起こるだろう？！」と感じたその瞬間、突如お先真っ暗ちゃん・ネガティブ思考ちゃん（共にお先真っ暗とネガティブ思考の擬人化）が私の目の前に現われた。お先真っ暗ちゃんとネガティブ思考ちゃんは大親友、二人はどんどんパワーを増しながら、どんどん私をダウンさせていった。「あぁ～次はどうなるんだろう？あぁ～約1ヵ月もの間24時間皆と一緒、いつか倒れちゃうんじゃないか。」など、ありとあらゆるマイナス面を私は考えた。けれど私は役者、不安でいっぱいながらも顔はかろうじて笑っていた。

7月27日、本会議参加者交流パーティー！

初の日本側参加者共同作業は本会議参加者交流パーティーで披露するスキットの準備。皆燃え上がっていた。彼らは実に才能に富んでいる。日米学生会議という名の芸能プロダクション、周りを見れば俳優ぞろい。何をやらせても素晴らしい。嫉妬の連続である。準備の時間はあっという間に過ぎ、いよいよ本番。私は、ジャスク・メーツに所属。ジャスク・メーツ全員、一生懸命笑顔を作り、そして高らかに飛び跳ねた。想像以上に会場は盛

り上がっている。そんな雰囲気に私は酔いしれ、さらに高らかに飛ぼうとする。見事、着地失敗。右足首が一瞬内側に 90 度曲がった風。私は役者。そんなことはもろともせず、舞台で踊り続けた。

最高に楽しかったパーティーも終了。それと同時に、私の右足が痛みを訴え始める。痛みがどうしても気になり、靴を脱いで見てみると右足は通常の 2 倍くらいの大きさに腫れ上がっている。どおりで痛いわけである。そんな足を見て駆けつけてくれる仲間たち。なんて優しいのだろう。まるで自分のことのように心配してくれ、気遣いの言葉をかけてくれる。日米学生会議は、ナイチンゲールの宝庫である。慣れた手つきで処置をしてくれる友、痛みと心の不安を取り除くべくアドバイスをくれる友、優しい眼差しで見守ってくれる友、私を部屋まで見送ってくれる友、そして誰かから足のケガの話を聞き部屋に駆けつけてくれた友。実に感動的であり、素晴らしい仲間である。また、差し入れにとジュースとお菓子を持ってきてくれた友、私はあなたを忘れない。

このお菓子をほおばっている時私は思った、「あぁ～皆ともっと一緒にいたい！1 ヵ月なんて短すぎる。会議が始まって 1 週間もせずにしてこんなにも皆を好きになったんだから、1 ヵ月後はどうなってるんだろう？あぁ～とにかく皆ともっともっと話がしたい！」と。そんな私の目の前には、もはやお先真っ暗ちゃんやネガティブ思考ちゃんはいなかった。明日から始まる新たな舞台、役者・角田武士は、はやくも最高の千秋楽を迎えることができることを確信していた。

熱演が会場を沸かした日本側スキット

サイトコーディネーター後記　西納由紀

第55回日米学生会議は、4つの都府県を開催地としたが、その中で最も早く開催地に決定したのが東京だった。東京が現に日本の政治的、経済的中心地であるという重要性に言及するまでもなく、初めて来日するアメリカ側参加者のことを考慮しても、開催地に東京を含めることに異議を唱える実行委員はいなかった。

東京が本会議最初の開催地になったのには大きく二つの理由があった。一つ目は、第55回日米学生会議のテーマにある「市民参加」について考える足がかりをつかみやすい地であるということだ。市民団体や各種NGO/NPOが多く存在し、それぞれの分科会の目的に沿ったフィールドトリップが企画しやすい、ということは今回の東京の開催地としての重要性を高めることとなった。東京サイトで最も多くの分科会セッションが設けられていたのも、東京滞在中に見聞を広げて、後の議論を軌道に乗せやすくするように、との意図があった。

二つ目の理由は、東京が日米学生会議のOB/OGが最も多く在住し、また日米学生会議にご支援、ご協力いただいている個人、企業、団体が集中している地であるということだ。第55回日米学生会議は、東京において開会されたため、他のサイトと比較しても、日米学生会議の対外的交流を目的とした行事が多かったと言える。高円宮妃殿下をお迎えしての開会式、在日米国大使館主催レセプション、外務省主催レセプションなどがこれにあたる。これらは必ずしも会議のテーマとの関連性はなかったものの、第55回日米学生会議が実現される上で外部の様々な組織や団体からご協力とご支援、そして多大なる学生への期待をいただいていることの証でもあり、重要な意味合いを持つものであった。また、開会式やレセプションには数多くのOB/OGの皆様や関係者の方々がいらっしゃったので、現役参加者にとっても多いに刺激を得る交流の場となったものと考えている。

このような意義そして重要性をもった東京サイトであったが、私個人にとって最も印象的だった一日は、アメリカ側参加者到着の日だった。アメリカ側参加者が到着する前日の直前合宿で、春合宿以来改めて日本側参加者36名が一堂に会して本会議を迎えようとする緊張と期待の高まりに感動を覚えていた。だがその感動は翌日にアメリカ側参加者が到着した時に、10倍にも20倍にもなった。私はバスから降りてくるアメリカ側実行委員の一人ひとりとしっかり抱き合った。1年ぶりの再会の喜びと、参加者が全員無事そろったという安堵感と、いよいよ本会議が始まったという感慨とで涙を抑えることができなかったあの瞬間は、いつまでもそのまま私の記憶の中にとどまっている。

なお、この東京サイトは小林さんと乗竹君との3人4脚でコーディネートした。東京サイトの企画の一つひとつは、乗竹君のフットワークによって形成された豊かな人脈と、毎回のミーティングにおける小林さんのテキパキとした議事進行及び細かな仕事の穴埋めに大きく負っている。二人の強力な助けなしにはこのサイトはありえなかった。改めて深く感謝したい。

沖縄サイト

サイトコーディネーター：高沢健史

沖縄サイトのスケジュール

８月２日	東京より沖縄到着
	沖縄サイトオリエンテーション
	文化体験#1
８月３日	分科会#6
	分科会#7
	スペシャルトピック#2
８月４日	分科会#8
	日米沖縄学生会議 2003 オリエンテーション
	沖縄国際大学にてパネルディスカッション
	レセプション
８月５日	フィールドトリップ（環境コース、平和コース）
	グループディスカッション#1
８月６日	嘉手納基地訪問
	グループディスカッション#2
	グループディスカッション#3
８月７日	リフレクションミーティング#2
	タイフーン・ナイト
８月８日	京都へ移動

来月から日米
沖縄学生会議
県内での参加者募集

今年夏に東京や沖縄などで開催される第55回日米沖縄学生会議（主催・国際教育振興会）の実行委員会は、沖縄での会議参加者を募集している。

会議では、７月26日から８月21日までの約１カ月間、参加者が東京、沖縄、福井、京都と日本を縦断しながら議論を重ねる。

県内では８月４日から７日まで糸満市のスポーツロッジ糸満で開催される。同日程に参加できる県内の学生を募集している。

実行委メンバーで沖縄担当の高沢健史さん（二〇）、県内参加者で琉大法文学部３年の友利将悟さん（二〇）が５月28日、琉球新報社を訪れ「日米関係の間におかれた沖縄を考えるいい機会。ぜひ参加して将来の沖縄について語り合ってほしい」と呼び掛けている。

問い合わせは、同会議事務局☎０３（３３５９）０５６３か、沖縄窓口の国際親善・交流サポートセンター☎０９８（８７９）９７１７。

日米沖縄学生会議の県内学生の参加を呼び掛ける（左から）高沢さん、友利さん＝琉球新報社

『琉球新報』2003 年 6 月 3 日、会議に先立って沖縄側参加者を募った。

沖縄サイトのスタッフ

池田杏子、佐藤智紀、高沢健史*、友利将悟、原奈央、吉野茉美
(*はサイトコーディネーターを示す)

沖縄サイトの概要

日本の最南西に位置する沖縄は、かつて琉球王国としてアジアの国々との交流を盛んに行い、平和の国として豊かな文化を育んできた歴史を持つ一方で、第二次世界大戦では日本で唯一の、そして最も悲惨とされる地上戦の場となり、多くの一般市民が犠牲を強いられた戦争の記憶を持つ。そして、現在もこの歴史の作用が、いわゆる米軍基地問題や経済問題のジレンマとして存在している。

このように沖縄が抱える多くの問題は、日本という国のあり方や日米関係の歴史と深く結びついている。しかし、両国間だけでなく日本国内でも問題意識の温度差が存在している。アジア、さらには世界における日米の役割を考えた時、将来を担う日米両国の学生がこれらの問題意識の隔たりを共に埋める作業を行うことは必須である。ペリーの琉球来航、そして浦賀来航からちょうど 150 周年を迎える 2003 年、この歴史を振り返り、日本の国内問題や日米関係の縮図と言える沖縄の過去、現在、未来を再考する機会として沖縄サイトを設けた。

沖縄サイトの中心イベントは、8月4日から7日までの4日間にわたって開催された、「日米沖縄学生会議 2003」である。日米沖縄学生会議では、当事者である沖縄の視点がなければ沖縄について語ることはできないとの考えから、日米学生会議参加者に加え、34 名の沖縄在住あるいは沖縄出身の学生が参加した。第 55 回日米学生会議の全体テーマである「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」に加え、日米沖縄学生会議のテーマとして「沖縄のすがたを考える」を設定し、米軍基地をはじめとした諸問題を抱える沖縄が今後どのような道を進むべきか、市民参加という視点から話し合いを行った。本土、沖縄、アメリカという異なるバックグラウンドを持った学生が、ディスカッションを通して、問題意識を共有することに重点を置いた。

『沖縄タイムス』2003年1月31日

2003・1・31 沖縄タイムス

寄稿

日米学生会議へ参加を

乗竹　亮治

「食べ物はおいしいし、年中暖かい。ここは僕のお気に入りの場所なんだよ」

あるアメリカ人が言った。数年前、沖縄を初めて訪れたときのことだ。

彼はホテルのプールサイド、バーや、ちょっとしたイベントなどの楽器奏者として、世界各地を回りながら食いぶちを稼いでいるという。沖縄がたいそうお気に入りのようだ。

沖縄と聞いて、人は何を連想するのだろう。沖縄をめぐるイメージはさまざまに、それぞれにあるだろう。しかし最も真実に近いのは「食べ物はおいしく、海はきれい、人々は親切で、気候も温暖」という一言に尽きる気がする。

では、その一言に尽きてしまっていいのだろうか。そこには、知らなくてはいけない過去がある。見つめなければならない現実がある。そして、語り合いたい未来がある。

二〇〇三年夏、第五十五回日米学生会議には、日本側参加学生三十六人、アメリカ側参加学生三十六人、計七十二人が集い、東京・福井・京都、そして沖縄を約一カ月かけて回る。

テーマは「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～CIVIC PARTICIPATION IN A GLOBALIZING SOCIETY」。グローバル化が進む社会において、日本は、アメリカは、日米両国は、諸問題にどう取り組んでいくべきなのか。そして、未来を形作る学生たちには何ができるのか。会議参加者は、交流と議論を通して、これらの問いに答えていく。

一九三四年、第一回日米学生会議が開催されて以来六十九年。戦争などの中断を経ながらも、未来を真剣に語り合い、未来をつむぎだそうとする学生たちの手によって、日米学生会議は脈々とその歴史を歩んできた。

同時にそれは参加学生の友情の歴史でもある。寝食を共に過ごすひと夏。学生だからこその自由な発想と対話。日米を問わず、さまざまな地域から集まる参加者たち。

「郷に入れば郷に従え」の留学とは違い、同数の両国学生が対等に織り成すゆえの、ほかにないユニークな環境。

そんな日米学生会議の第五十五回の募集が二月一日から始まる。沖縄からも、一人でも多くの応募者、そして参加者が生まれることを祈っている。そして、会議参加者は沖縄をはじめ各地で何を感じるのだろうか。きっと、一言では尽きぬ熱き思いと友情を得られることと思う。

日本側募集人数は二十八人。一次選考（書類選考）、二次選考（面接、筆記＝教養、英語）を通して参加者が決定される。

申込期間は二月一日から二十八日。申し込み、問い合わせは、郵便番号160－0004、新宿区四谷一ノ二一、（財）国際教育振興会内　日米学生会議事務局、電話03(3359)0563、電子メール jasc55contact@yahoo.co.jp ホームページは http://www.u-netsurf.jp/jasc/

なお、沖縄の地元学生を対象に、沖縄での交流会に参加する学生も募集している。問い合わせは、NPO法人　国際親善・交流サポートセンター事務局長　園鉄彦、電話098（879）9717。

（日米学生会議委員長）

『琉球新報』2003年2月12日

日米学生会議

高沢 健史

日米両国は何をすべきか

世界の諸問題を議論へ

一九三四年、四人の日本人学生が、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある」という信念のもとアメリカに渡った。第一回日米学生会議の始まりである。それから時を経ること約七十年。その間、戦争などによる中断を経ながらも、未来を真剣に語り合い、未来をつむぎだそうとする学生たちの手によって、日米学生会議は脈々とその歴史を紡いできた。現在、日米関係は、グローバル化という潮流の中で、「日米二国間関係」だけにとどまらず、「世界の中での日米関係」という新たな意義付けを帯びてきている。

このような現在の日米関係を考察する際に必要不可欠な存在、それが沖縄である。第二次世界大戦中、日本で唯一の地上戦の場となった沖縄。東西冷戦下で重要な戦略拠点となった沖縄。現在も基地問題を抱える沖縄。美しい自然が広がる沖縄の背景に隠れるこれらの問い。沖縄には、知らなくてはいけない過去がある。見つめなければならない現実がある。そして、語り合いたい未来がある。私たちは、戦争の世紀であった二十世紀を後にし、どのような二十一世紀を築くことができるのか。

今年、その沖縄を一つの舞台として、日米学生会議は五十五回目の夏を迎える。第五十五回日米学生会議は、テーマを「グローバル化社会と日米・市民参加の視点から考える～」"U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society" と定め、日本側参加学生三十六人、アメリカ側参加学生三十六人、計七十二人によって行われる。期間は七月二十六日から八月二十一日までの約一カ月で、東京、沖縄、福井、京都と日本を縦断しながら議論を重ねる。

世界が抱える諸問題に対して、日本は、アメリカは、日米両国は何をすべきなのか。そして、これからの将来を担う学生には何ができるのか。会議参加者は、この約一カ月間生活を共にし、交流と議論を通してこれらの問いに答えていく。

日本側募集人数は二十八人。第一次選考（書類選考）、第二次選考（面接、筆記＝教養、英語）を通して参加者が決定される。申し込み期間は二月一日から二十八日。

申し込み・問い合わせは、〒160-0004 東京都新宿区四谷1の21、（財）国際教育振興会内 日米学生会議事務局、☎03（3359）[illegible]、電子メール jasc55contact@yahoo.co.jp ホームページ http://www.u-netsurf.ne.jp/jasc/

なお、沖縄の地元学生を対象に、沖縄での交流会に参加する学生も募集している。問い合わせは、NPO法人国際観察・交流サポートセンター・国際部事務局長、☎098（8[illegible]）8777

（第55回日米学生会議実行委員）

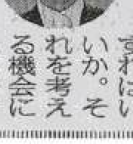
『琉球新報』2003年7月22日

教育ひろば

沖縄の将来語りたい

○…今年夏に東京や沖縄などで開催される第55回日米沖縄学生会議（主催・国際教育振興会）。県内からの参加者の一人、琉大3年の友利将悟さん（二〇）＝写真＝は「同世代の仲間と、沖縄の将来について熱く語りたい」と意欲を燃やす。

○…会議は、26日から8月21日までの約1カ月間、参加者が東京、沖縄、京都など日本を縦断しながら、日米関係における沖縄などについて議論する。県内では8月4日から7日まで、糸満市内で開催される。「自分の生まれた島について、真剣に考える機会はないかと考えていた」という。「大学に掲示されたポスターを見て、この会議に飛びついた」。現在は、県内学生の参加呼び掛けに走り回る。



○…「20年生きてきた中で、この会議は自分にとって最大のイベント」と位置付ける。「アジア、世界に開かれた沖縄であるために、若い自分たちはなにをすればいいか。それを考える機会にしたい」と目を輝かせ「どれだけのことを全国の仲間に発信できるか未知数だが、真剣に考え、議論したい」と語った。

８月２日　沖縄サイトオリエンテーション、文化体験#1

那覇空港から宿泊先に到着した参加者は、この１週間ディスカッション会場を提供して下さる近所の糸満市立光洋小学校に向かった。そこで行われた沖縄サイトオリエンテーションでは、「日米沖縄学生会議 2003」の沖縄側参加者代表３名が華やかなカリユシウェアを着て、沖縄に関する基礎知識を英語で発表してくれた。夜は、文化体験として「空手コース」、「エイサーコース」、「沖縄三線コース」が用意され、各自が興味あるものに挑戦した。

オリエンテーションの様子。沖縄側実行委員から沖縄についての説明があった。

三線に挑戦する参加者

８月３日　分科会#6、#7、ST#2

この日は午前と午後にわたって分科会セッションがあった。その後のスペシャルトピックの時間では、参加者の発案によるトピックの設定が積極的に行われた。「沖縄の夜を楽しむドライブ」、「ジャーナリズム」、「日米恋愛事情」、「マッサージ教室」など参加者の得意技や興味分野を反映したトピックが設けられ、それぞれがリラックスした夜の交流を楽しんだ。

8月4日　分科会#8、パネルディスカッション、レセプション

この日をもって、「日米沖縄学生会議 2003」が開幕した。糸満市立光洋小学校の体育館で沖縄側参加者と日米学生会議参加者が初対面し、簡単なオリエンテーションがあった。午後は、沖縄県基地対策室より石川實氏、沖縄国際大学より佐藤学教授、そして沖縄タイムス記者の屋良朝博氏の３名を迎え、「日米間におけるこれからの沖縄」をテーマにしたパネルディスカッションが沖縄国際大学にて行われた。

夕方には、日米沖縄学生会議のレセプションが開催され、参加者は沖縄料理を味わいつつ、ステージで催された伝統舞踊や三線の演奏、沖縄伝統文化の素晴らしさに酔った。レセプションの最後に披露されたエイサーでは、日米沖縄学生会議参加者も共に踊りに参加し、会場全体が一つになったようであった。共に踊ったエイサーは、確実に日米学生会議参加者と沖縄側参加者の距離を縮め、日米沖縄学生会議の成功を示唆しながら、長い一日を締めくくった。

日米学生 意見交わす

沖縄テーマに討議

グローバル化社会と日米を市民参加の視点から考えようと第五十五回目米沖縄学生会議パネルディスカッションが四日、沖縄国際大学で開かれ、日米の学生約百人が意見を交わした。

「日米間におけるこれからの沖縄」をテーマに討議。パネリストの石川實県基地対策室職員、佐藤学沖国大教授、屋良朝博沖縄タイムス記者らが基地問題の現状について発表した。

石川さんは「稲嶺恵一知事は日米安保容認の立場だが、基地が集中する現状に対し、整理・縮小を絶えず日米両政府に求めている」と、県の基本方針を説明。米国政治に詳しい佐藤教授は「二〇〇一年の9・11以降、沖縄の基地は、抑止力から攻撃拠点へと変容している」と指摘した。

フロアからは日米の学生が「米軍は日本を守るか」「中国は在日米軍を容認しているのか」などの質問があった。

同会議は沖縄のほか、東京、福井、京都で開催。両国学生の相互理解を図ることが目的。県内では米軍基地視察、平和・環境問題について学ぶ。

基地問題について真剣な表情で聞き入る日米の学生ら
―沖国大

「沖縄タイムス」
2003年8月5日

音楽と衣装の華やかな琉球舞踊

『琉球新報』2003年8月12日

沖縄の米軍基地の問題や日本の安全保障について意見を発表する日米学生会議の参加者たち＝糸満市

米軍は県民守らず 政府に働きかけを

沖縄 米国

基地撤去で学生討議

日米の大学生が日本国内を回りながら両国が関係するさまざまな問題について話し合う日米学生会議（国際教育振興会主催）の参加者が四日から、四日間の日程で沖縄に滞在し、沖縄の大学生と意見交換した。参加者たちは、米空軍嘉手納基地をはじめ、南部戦跡などを見学、沖縄が求める在沖米軍の移転や日本の安全保障などについて議論した。

日米学生会議には、日米両国から各三十六人の大学生が参加した。東京を出発し、沖縄、福井、京都を順に回り、各地でその地域の大学生と意見を交わす。沖縄滞在中は、沖縄から大学生ら三十七人が会議に加わった。

学生たちは、米軍基地内を見学したほか、在沖米軍などを議題にパネル討論も開催。沖縄での一連の学習を終え、七日夜、宿泊先の糸満市内でグループ討論を行った。十人ほどのグループに分かれ、「国際社会の中での日本の安全保障や沖縄の米軍基地の問題について意見を交わした。

沖縄側の参加者から「沖縄に米軍基地はいらない。有事の際に、米軍が沖縄県民を助けてくれるとは思わない。なぜ沖縄にいるのか、その必然性が分からない」などという訴えが挙がった。一方で、「沖縄の基地を撤去しろというのは、日本の安全保障を考える上で、あまりにも無責任に感じる」などという意見が本土参加者から出た。また「米軍は提供されている基地を自らいらないとは言わない。沖縄はもっと日本政府に働きかけるべきだ」という意見も米国の学生から出た。

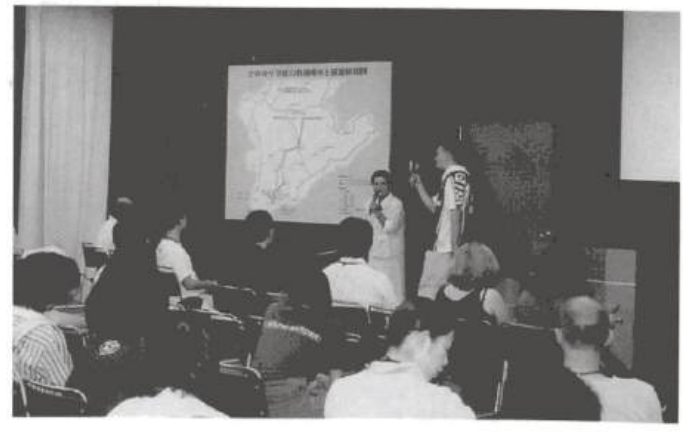
8月5日　フィールドトリップ、グループディスカッション#1

午前中は参加者全員で沖縄平和祈念資料館へ向かい、日本軍とアメリカ軍だけでなく、沖縄住民すべてを巻き込んだ1945年の沖縄戦について学んだ。平和の礎に刻まれた犠牲者の名前を、静かに眺めて歩く参加者も少なくなかった。

午後からは、参加者は平和コースと環境コースの二手に別れた。平和コースでは、ひめゆりの塔、魂魄の塔、そして轟の壕などを訪れた。ひめゆりの塔においては、当事の沖縄ひめゆり学徒隊に所属されていた方から沖縄戦での体験談を聞き、その内容の悲惨さに、参加者たちは言葉を詰まらせていた。そして、現在の教育機関で行われている平和教育のあり方や、平和維持のための基地や軍の存在とその機能など、様々な切り口から平和について考えた。

環境コースでは、NGO「沖縄環境ネットワーク」の方と普天間基地や基地建設予定地となっている海岸、ブート岳などを視察し、沖縄における最大の環境問題としての基地問題についてお話をうかがった。基地建設予定地となっている海岸の美しさや、公園の展望塔から見下ろした普天間基地の巨大さ、そしてブート岳を実際に目の前にして、参加者は改めて米軍基地をめぐって沖縄が抱える悩みと葛藤の深さを、生々しい現実として実感していた。

平和祈念公園では地元の方のガイドに従って公園内を見学した後、各自が思い思いに散策した。



平和コース参加者は、元ひめゆり部隊の語り部の方から戦時中の実体験を聞いた。

８月６日　嘉手納基地訪問、グループディスカッション#2、#3

極東最大の空軍基地だと言われている嘉手納基地。その広大な敷地内には、滑走路だけではなく、住宅、病院、学校、スーパーマーケットなどもあり、一つの町が広がっていた。嘉手納基地広報官から、“Keystone of the Pacific”という題で、沖縄における米軍基地についてのプレゼンテーションがあった後、質疑応答が行われた。

当日は台風が沖縄を直撃する寸前で、戦闘機が飛んでいなかったため、実際の飛行訓練の様子を窺い知ることはできなかった。しかし、実際に基地の中に入り様子を観察できたこと、また基地が伝える嘉手納基地と、沖縄現地のメディアが伝える嘉手納基地との差に話が及んだ広報官の話など、興味深い側面があった。特に沖縄外からの参加者にとっては、この日の経験を通して米軍基地というものがよりイメージしやすいものとなった。

嘉手納基地でのオリエンテーションの様子。嘉手納基地の規模や基地が担う役割について説明があった。

都市としての機能を備えた広大な嘉手納基地。整えられた緑の芝生と近代的な建造物がコントラストをなす。

８月６日は広島に原爆が投下された日。日中の見学をふまえて、基地問題や安全保障について議論するセッションは、黙祷を捧げることから始まった。

8月7日　リフレクションミーティング#2、タイフーン・ナイト

3 日間にわたる日米沖縄学生会議で行われたディスカッションについての反省会が開かれた。限られた時間の中で深く話し合えたことは多いとは言えなかったが、それでも各人がこの3日間を振り返っての思いを述べた。

あいにくの台風上陸で、糸満市が暴風雨と大規模な停電に見舞われたため、参加者はせっかくの自由時間も遠出をすることができず、沖縄学生が何度も車で往復して連れて行ってくれた近所の沖縄ソバの店での昼食が唯一の外出となった。

夕方より、有志の参加によるタレントショーが開催された。アカペラ、空手バレエ、ボディーショット、剣道、独唱、マジック、折り紙、沖縄三線、ハワイアンダンス、ウズベキスタンダンスなど、趣向を凝らした芸が続いた。停電の中で刻々とステージは暗くなるものの、会場は笑いと熱気に包まれていた。最後は学生審査員による表彰式が行われた。

停電で真っ暗になった建物の中、ロウソクと懐中電灯、携帯電話のわずかな灯りを頼りに、学生同士の歓談は続いた。沖縄の学生はこの日をもって解散となるため、参加者は別れを惜しむように夜遅くまで語り合い、本土も沖縄もアメリカも関係なく今後も交流を続けていくことを確認し合った。また、コミュニケーションや過密スケジュールに対するフラストレーションを、夜な夜な語り合う参加者も少なくなかった。

民族衣装や伝統衣装を身につけてタレントショーに参加した参加者

参加者ノート　福家雄大

８月２日昼過ぎ、私たち日米学生会議の一団は那覇空港に降り立った。例年になく涼しい夏を感じていた東京とはうってかわって、全身を刺すような強い日差しと蒸し暑さが私たちを出迎えた。１週間あまり生活することになる糸満の通りにはあまり人影も無く、ソテツ並木が延々と続くなか、時折車が、ゆるやかな時間の流れを打ち砕くかのようにものすごいスピードで走り去る。自分にとっての沖縄はこんな第一印象で始まった。

沖縄戦跡国定公園にある平和の礎の背には、とてつもなく青く、広い海と入道雲がその場所を包み込むように広がり、絵に描いたような美しい風景が印象的であった。このとき、こののどかな一風景を私たちに見せつけるこの地で、私は目をつぶり、あの白黒の映像でしか見たことのない58年前の沖縄を思い出してみた。しかし、安寧とした姿のみを見せるその場所ではやはり、当時の沖縄の姿をありのまま感じることはできなかった。

この島では美しい自然と独自の文化の営みが織り成されている一方、東アジア有数の軍事施設が広く展開している。訪れた嘉手納基地は、軍事基地としての機能に加え、軍人のみならず、その家族が生活する完全な都市としての機能を兼ね備えており、沖縄にあるアメリカという様相を呈していた。

会議中は沖縄国際大学でのパネルディスカッションやフィールドトリップなどを通じて、沖縄の歴史や沖縄に関連する諸問題の側面に触れた。そしてそれらについて数日間、共に過ごした沖縄の学生と語り合う機会を得た。戦闘機の騒音などによる公害をはじめ、米軍が起こす様々な犯罪や問題視されている行動など、基地があることによって沖縄の市民が被っている弊害や基地に対する経済的依存、また、アジア太平洋の、そして日米関係の試金石という意味での沖縄の位置付け、さらには沖縄と日本本土という構図。様々な事実とそれによって引き起こされる議論の中、沖縄という場所はまだまだ私たちのなかでも未整理の混沌の渦中にある気がした。

参加者ノート　友利将悟

私は沖縄が好きだ。沖縄で生まれ育った20年間、私が人生の悲喜劇を演じ、私が愛する人々が住むこの故郷が好きだ。沖縄は、ごくありきたりの社会を持つ場所だ。それ以上でも、それ以下でもない。独特といわれる文化や歴史があるがゆえ、日本本土と比較され、沖縄は消費される。それは、内外の市民を問わず行われている。私は、いささかの反感を持っていた。沖縄は常に被害者で、常に素晴らしい楽園なのか、と。

私の中にある釈然としない思いに進展を求めて、二番目の開催地、沖縄を訪れた。そこで行われる、日米沖縄学生会議の議論から垣間見えるであろう「沖縄」に期待していた。本会議開催前、沖縄で、沖縄側参加者たちと勉強会をしたこと。鋭い洞察力を持った日米の参加者たち。私の期待感は大きかった。

一部ではあるが、沖縄の現状を知らず、今まで沖縄を訪れたこともない参加者が沖縄の学生と交流を持つことは、素晴らしいことだったと思う。「議論の時間が少なすぎる」「観光旅行のようだ」など、批判は尽きない。しかし、ただ議論に時間を費やすのではなく、肌で感じたものが何だったのか。それが何よりも価値あるものだと思う。ただの観光目的として沖縄に訪れたのではなく、その土地の問題を、土地の人間と考えることで、相互に新たな視野が紹介されたのではないだろうか。それをもとに、個々人が日米沖縄学生会議を、そして沖縄を再定義し、再び沖縄を訪れるなら、あるいは、沖縄で生活していくのなら、より深く沖縄を見ることになるだろう。何を感じていくのか。経験をどう活かしていくのか。次のステップにあるものは何か。

今後、沖縄がどのような方向に行くかはわからない。しかし私は、これから自分が見るであろうもの、そして、共に夏を共有した仲間たちが感じるであろうことをとても楽しみにしている。

参加者ノート　　中村信之

「せいやっ！」

沖縄の夜空一杯に、エイサーを踊る小学生の声が響いた。掛け声の一つひとつが、心の中まで響いてきている。JASC 中に抱え込んでいた様々なもやもやを一つの清々しいものに変えてくれるような、そこにはとてもシンプルなものがあった。今この瞬間、「沖縄」という土地を心で感じているということにひどく喜びを感じた。

文化体験は、主に日本文化を知ろうというコンセプトの下に企画されている時間である。JASC 参加者はこの時間に自分が選択したコースに基づき、何らかの日本文化、日本芸能を体験して学習する。8 月 3 日は沖縄サイトということで、従来の日本文化である「空手」コースに、「エイサー」という沖縄伝統舞踊、そして「沖縄三線」という二つの沖縄文化を加えた、合計 3 コースが用意された。私はこの中から何気なく「エイサー」を選び、体験することとなった。

エイサーは沖縄特有の伝統舞踊で、先祖を送るための踊りである。旧暦の 7 月 13 日から 15 日までの 3 日間、沖縄は 1 年で最も賑やかな旧盆の季節。ウンケーと呼ばれる 13 日にご先祖様の霊を迎え入れ、15 日のウークイには家族や親戚で用意したご馳走やお酒をお供えして、ご先祖様をお送りする。その別れの夜に、三線の音色に合わせて唄を歌い、太鼓を叩き、踊って「ご先祖の皆さん、また来年来てね」と明るくお見送りをする重要な役目を担うのが「エイサー」というわけだ。エイサーと一言でいっても旗持ち、手踊り、三線と歌を担当する地謡、あるいは道化師のチョンダラーなど多種多様のパートがある。私たちが見学した小学生のエイサー団体の練習では、パーランクーと呼ばれる小さい太鼓を持って踊るパートと、大太鼓を持って踊るパートの 2 パートがあった。

小学生といってもそのエイサーを踊るその姿には非常に迫力があり、踊り開始から一瞬にして惹きつけられてしまった。踊りの中には「動」と「静」が混合して存在する。基本的に動きの激しいエイサーでは「動」が中心で、踊り手が素早い回転をしながらパーランクーを打つ姿が魅力的だ。その一方でパーランクーのばちを天に向かって垂直にしてかざし動きを止める、いわば「静」の部分も観客のスピリチャルな部分に訴えてくる。エイサーを踊る小学生の眼差しは真剣である。とある一人の小学 5 年生の男の子が踊りの最中にばちを落としてしまったのだが、ばちを拾うことなくパーランクーだけで真剣に踊り続け、動きを止めようとしない。練習とはいえ「より完成された」エイサーを追い求めるその小学生の姿に、とても心を打たれた。

踊りは動作のみならず、魂から踊るものであるというメッセージがストレートに伝わってくるようであった。エイサーという踊りは基本的に笑顔で、明るい音楽に合わせて踊るのであるが、この軽快な踊りの中にもどこか譲れない「真剣さ」が感じられる。「真剣」であるからこそ、エイサーの楽しさ、躍動感、ユーモア性という様々な魅力が、我々エイサーを観る者に伝わってくるのだと思う。

エイサーに感動したのは私だけではなかった。気が付けばそこにいたすべての JASC 参加者が感動を覚え、たたずんでいた。目にうっすら涙を浮かべる者もいた。エイサーの体験学習が終わってからも、JASC 参加者は、興奮の冷めやらぬうちに、エイサーに対する感動をお互いに語り合った。すると、エイサーの講師の方が言った。

「エイサーには、原点に帰るというメッセージが込められています。」

JASC を通してもう一度自分探しに出た私であるが、連日連夜個性的で才能溢れるメンバーの中で知らぬうちに疲れ、困惑していた。沖縄サイトでのエイサーは、そんな JASC 中の心の中のもやもやをすべて吹き飛ばすかのように、私に原点へ戻ることの大切さを教えてくれたような気がする。

参加者ノート　池田杏子

最初の討論から、ほとんどの学生が持っていた関心の共通点は「基地問題」であったように思われた。それは沖縄の社会、経済、文化など様々な面で米軍基地という存在が影響しているからであろう。そして、正直な話、多くの沖縄出身・沖縄在住以外の参加者にとって沖縄は初めての経験であり、私も含めて基地問題はどこか実感がないものであったと言えるだろう。

「基地との『共存』か、それとも『撤廃』か。」「いずれにしても完全撤廃はありえないのではないのか。」「国益とは何か。市民を苦しめている現状が国益といえるのか。」「民主主義の下では誰かが犠牲になるのは仕方がないことではないのか。」「基地が沖縄からなくなれば問題は解決するのか。」「それとも安保や地位協定を改正していくべきなのか。」「米軍基地の存在による利点をもっと認めていくべきではないのか。」「基地がなくなったら沖縄の経済はどうなるのか。」「米軍人の意見をもっと聞くべきではないのか。」「米軍基地は沖縄だけの問題なのか。」「東アジアの安定には必要ではないのか。」「米軍基地がなくなったらどのようにして日本を守るのか。」「『軍隊』が問題なのか、それとも『米軍』が問題なのか。」

議論は深夜まで続き、時としてそれは朝まで続いた。だが、話せば話すほど、私には本土の学生とアメリカの学生、そして沖縄の学生の間に何か壁のようなものが感じられた。そしてその壁は「日本人」と「アメリカ人」という壁ではなく、「本土の人間」と「沖縄の人間」という壁のほうが大きかったように思われた。それはきっと同じ「日本人」として考えていかなくてはならない問題に対しての対応の違いが浮き彫りとなったからであろう。「日本人」という国民を単位としたナショナルデモクラシー、またはその単位を特権的なものとして扱っている現在の状況では沖縄の問題は解決できないのかもしれない。だがしかし、沖縄問題は同時に、地域的な住民問題として割り切ってよい問題ではなく、いわゆる「防衛問題」の一つであり国家主権にかかわってくる問題である。私たちは一体どこでこの「折り合い」をつけていけばよいのであろうか。また、そのような政治的問題のみならず、どこかに感じとられる「本土の人間」と「沖縄の人間」との間にある壁は一体どのようにすれば取り去ることができるのであろうか。そして、これらの問いに答えなどあるのであろうか。

フィールドワークの一つであった嘉手納基地訪問の際に、ある沖縄の学生が私に言った。「これは、いつもの基地じゃない。みんなは騒音問題やその他の問題をこの状態の基地でわかってくれるのだろうか」と。私自身には１年間の沖縄滞在という経験があるとはいえ、ほんの数日間の会議としての沖縄滞在と沖縄の学生との交流で、沖縄の現状をわかったような気に陥っていた私に、その言葉は重くのしかかってきた。ちょうどその日は沖縄本島への台風の接近で、基地内はいつもに比べて静かで、そしてその場所が沖縄の一部であることを忘れてしまうかのような風景であった。そこには、私が知らない日常が存在していたのである。

結局、短すぎる日程と様々なアクシデントにも見舞われ、この会議の中では結論という結論は出てこなかった。それでも、私たち学生にとっては、この会議によって国籍やそれまでの各々の背景を超え、沖縄の現状を真剣にとらえるチャンスを得ることはできた。沖縄が抱える様々な問題は複合的な問題であり、構造的な問題でもある。だからこそ、これらの問題が特殊化されてしまうのかもしれないが、そこには何らかの普遍性としての問題解決の方法があるのではないだろうか。もちろん学生である私たちには、何か大きな政策提言ということは現段階では不可能なことである。しかし、それでもこの沖縄での会議をきっかけにした感情や行動は、今後の私たち自身にとって大きな意味を持つに違いない。私にとっての日米沖縄学生会議は、消化不良の部分も多々あったが、問題はここで終わりなのではなく今後どうしていくかである。それぞれの立場で、沖縄問題を考えていくことができれば、それは沖縄にとって大きな前進であると考えている。

沖縄側参加者ノート　又吉俊充

沖縄の平和教育とは何か、を私は学生会議を通して考えるようになった。安全保障を考える際に、「平和教育」は重要な鍵となる。私たちの祖父母は第二次世界大戦において悲惨な経験をした。それを次世代に語り継ぐことが沖縄においての「平和教育」だった。故に、私たち若い世代は祖父や祖母の話から培われた戦争への嫌悪感から、戦争に対して人が死ぬ→戦争はいけない→基地はいらない、というような極端に短絡的な思考しか持たなくなった。つまり私たちは非戦、平和を叫んではいるが「ではどうやって平和を創造するのか」という考えは持ち合わせていない。これは平和教育を考える上で重要な要素である。

学生会議中、JASCer の多くは沖縄の現状に対して理解は示してくれたが、基地の存在を肯定的に考えているように私は感じた。私自身も基地が完全悪と捉えているわけではないが、やはり沖デリと JASCer の考えは上手く融合することができなかった。私がこの会議で感じたジレンマはまさに基地の島沖縄そのものである。このジレンマと向き合い、悩みながら、沖縄の未来を作り上げることが私たち沖縄の学生の役割なのである。

沖縄側参加者ノート　又吉美樹

事前学習で沖縄のことについて、いろいろと勉強をしてきた。しかし、いざ始まってみると浅い知識のために、みんなから出る問いなどに答えてゆけない、ということがあった。沖縄に生まれ育ったにもかかわらずしっかりと答えきれない自分がイヤだった。沖縄のことを、改めて勉強し直そうと思う。生まれた時から基地と共存してきた現代っ子。違和感を持つことがあまり無いのかもしれない…。なぜ沖縄に基地が必要なのかを後輩たちに教えながら、自分自身もうちなーんちゅとしての誇りを持ち続けたいと思う。

サイトコーディネーター後記　　高沢健史

沖縄における基地問題。それは日米という国単位の問題であり、市民がいくら基地の塀の外で基地反対を叫んだとしても意味のないことだと言う人がいるかもしれない。しかし、基地問題は国レベルの問題であると同時に、沖縄の人々にとっては地域レベルでの問題でもある。普天間基地移転問題や米軍人による婦女暴行事件が話題となった数年前、沖縄は国民の注目を集めたが、近年「沖縄」がメディアに取り上げられる回数はめっきり減ってきている。マスメディアの影響力が強まる現代、人はメディアによる報道がなされないと、一見その問題は解決されたかのような錯覚に陥る。しかし、依然、沖縄には基地問題をはじめ様々な問題が存在し、その多くが日米関係に関連している。

沖縄サイト、とりわけ日米沖縄学生会議では全体テーマ「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」をもとに、基地問題を中心とした現在の沖縄が抱える問題に取り組んだ。もちろん、限られた４日間で有効な政策や解決策を提示できたわけではない。しかし、基地問題を抱え日米関係の縮図とも言える沖縄開催地において、戦争とは何か、基地問題とは何か、安全保障とは何か、日米両国が抱えるこれらの問題について、日本、アメリカ、沖縄の３つの視点を各参加者はある程度共有できたはずである。寝る間を惜しんで語り続けた４日間、この経験が一つの市民参加のかたちではないだろうか。日米沖縄学生会議は始まりの第一歩である。各参加者がそれぞれの思い、それぞれの考えを持ち帰り、これから行動に移していくことがテーマの達成へとつながるはずである。沖縄側参加者は日米沖縄学生会議に参加したことをきっかけに、今、沖縄において新しい団体を結成しようとしている。会議参加者だけに限らず、多くの人々を巻き込もうとしている。これは、会議終了後のテーマ達成に向けた一つの試みである、と言えるのではないだろうか。

最後に、この沖縄サイトを実現するにあたり、ご協力、ご支援して下さったすべての人にお礼を言いたい。いつも相談にのってくれた他の実行委員やサイトスタッフ、沖縄出張時に一人で沖縄に来た私を温かく迎え入れてくれた沖縄の学生たち、日米沖縄学生会議開催にあたり協力して下さった沖縄の方々、沖縄サイトを実現させるプロセスにおいて言葉では言い表せないほどのご協力をいただいた。ある時は会議室で、ある時は居酒屋で、多くの人々に出会い多くの人々と議論を交わした一つひとつが、この会議を作り上げたと信じている。

日米沖縄学生会議沖縄側参加者一覧

穴井　諭	琉球大学	医学部医学科	3年
伊保　夏子	沖縄キリスト教短期大学	英語科	1年
ウォンプラナワート・チャノクナート	チェンマイ大学院	教育学部教育心理学科	2年
大城　嘉絵美	沖縄キリスト教短期大学	英語科	2年
屋良　栄作	琉球大学大学院	人文社会科学研究科	修士1年
尾高　伸一郎	琉球大学	工学部環境建設工学科	4年
喜舎場　めぐみ	沖縄国際大学	法学部法学科	3年
國場　未友希	筑波大学	第三学群国際総合学類	3年
近藤　雅典	琉球大学	理学部海洋自然科学科	3年
斉藤　幸輝	沖縄国際大学	文学部社会学科	4年
城間　優香	沖縄キリスト教短期大学	英語科	1年
砂川　大悟	沖縄大学	法経学部法経学科	4年
砂川　ゆかり	沖縄大学	人文学部国際コミュニケーション学科	2年
園部　享弘	名桜大学	国際学部経営情報学科	4年
島袋　勝紀	沖縄国際大学	商経学部経済学科	2年
下地　敏史	名桜大学	国際学部国際文化学科	4年
外間　明日香	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	夜間
玉城　早矢香	沖縄国際大学	総合文化学部人間福祉学科	3年
田丸　尚絵	沖縄大学	法経学部法経学科	4年
津波　辰則	沖縄国際大学	商経学部経済学科	2年
渡久地 廉代	琉球大学	法文学部国際言語文化	4年
知花　愛実	沖縄キリスト教短期大学	英語科	2年
知花　美奈	沖縄キリスト教短期大学	英語科	2年
仲村　美乃	沖縄大学	人文学部国際コミュニケーション学科	4年
濱元　成江	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	2年
前田　卓郎	沖縄大学	人文学部福祉文化学科	4年
又吉　俊充	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	3年
又吉　美樹	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	2年
又吉　未早生	開邦高校	英語科	3年
宮城　清香	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4年
宮城　望	沖縄大学	人文学部国際コミュニケーション学科	3年
モーリス・ダドリー	メリーランド大学	Asian Studies	2年
山城　明美	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	2年
山田　直之	琉球大学	法文学部総合社会システム学科	3年

日韓米ジョイントディスカッション

コーディネーター：小林悦子

日韓米ジョイントディスカッションのスケジュール

8月8日　沖縄より京都到着
オープニングレセプション

8月9日　ディスカッション#1：
「日本、韓国、アメリカの各学生がお互いの国に抱いている印象について」
ディスカッション#2：
「北朝鮮問題」
ディスカッション#3：
「文化と社会」
全体プレゼンテーション
フェアウェルパーティー

8月10日　福井にむけて出発

日韓米ジョイントディスカッションのスタッフ

阿部幸音、安藤彩、飯田智紀、池田杏子、大宮貴史、小林悦子*
Onasolape Onakoya、Benjamin Larson、Kristine Tyson、Naoko Takashi、Zijing Zhang
（*はコーディネーターを示す）

日韓米ジョイントディスカッションの概要

第二次世界大戦から約 70 年、日米学生は友好な関係にあり、強固なパートナーシップが結ばれている。民間から国家レベルに至る様々な分野で日米間の交流が行われるようになった今日、日米学生会議はもはや「日米間の相互理解」や「日米関係」の追及のみに甘んじていてはいけないのではないか。「世界の中の日米」あるいは、他の国や地域との関係の中でのさらなるパートナーシップとしての「日米」に対する視野も持つべきではないのか。

第 55 回日米学生会議は、このような問題意識のもと発足した。そして、日米関係を他の国との関係性の中で捉え直すために、第 55 回日米学生会議では、日米双方の安全保障や政治経済から、文化や歴史認識に至るまであらゆる分野で重要な意味を持つ国である韓国の学生とのディスカッションが企画されたのである。これは、日韓米の学生の対話が持つ意義に共感して下さった、第 19 回日韓学生フォーラムとの共同企画として実施された。

両会議の都合上、日韓米の学生によるディスカッションに充てられる時間は非常に短かかった。この一度の対話だけで、「多角的な視野」を獲得できたとは決して言えない。しかし、日韓米の学生が一堂に会して話し合うという貴重な体験や、そこで得られる新しい出会いを、各個人が会議後も育み、日韓米の学生の交流を始めるきっかけを作ることに、このディスカッションの意義はあった。

8月8日　オープニングレセプション

日韓学生フォーラムの学生と日米学生会議の学生が初めて出会い、夕食を共にしながら名前覚えゲームなどを通して、交流を深めた。そして翌日から始まるジョイントディスカッションに向けて、互いに意識を高めあった。

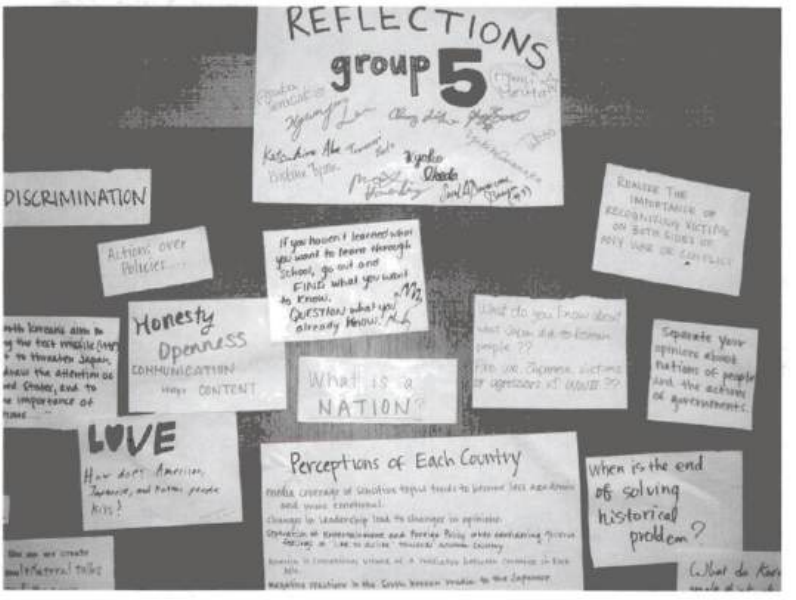
オープニングレセプションには日米学生会議参加者で、後に日韓学生フォーラムを創設した堺谷真人氏が駆けつけて下さった。

８月９日　ジョイントディスカッション、フェアウェルパーティー

日米学生会議参加者と日韓学生フォーラム参加者を混成グループに分け、「日本、韓国、アメリカの各学生がお互いの国に抱いている印象について」、「北朝鮮問題」、それぞれの国の「文化と社会」という３つのトピックについてディスカッションを行った。そして各グループは、話し合われた内容について、全参加者の前で発表した。

フェアウェルパーティーでは、日本、韓国、アメリカ学生有志による各国の文化や気質を表現したスキットが行われ、笑いを誘った。最後は、坂本九の甘い声が歌う「ジェンカ」にのって全員が踊り、楽しいムードの中、日韓米ジョイントディスカッションは終了した。

ディスカッション後のステージ発表では３ヵ国語が交互に飛び交うユニークなプレゼンテーションが行われた。写真はロールプレイ形式でディスカッション結果を発表したグループ。



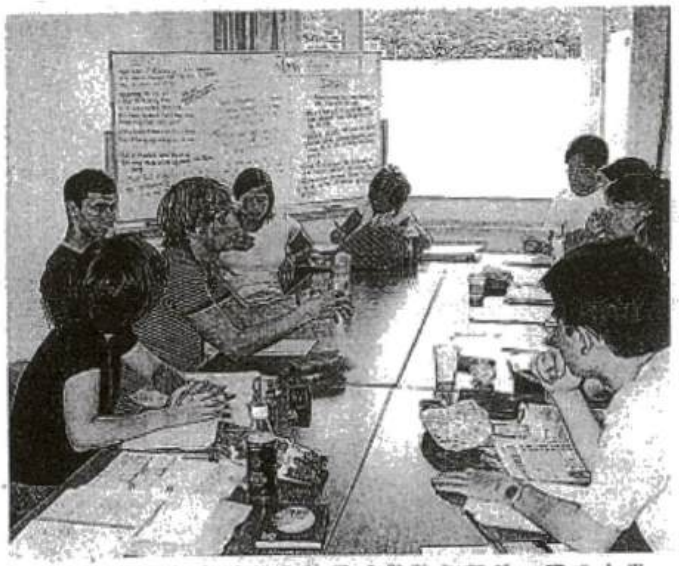
グループごとにディスカッションの結果をボードに自由に表現した。

『京都新聞』2003年8月10日

日米韓 きずな深く

国際問題 学生ら討論 立命大

日米韓三カ国の学生による「ジョイントディスカッション」（合同討論会）が九日、京都市北区の立命館大で開かれた。互いの国のイメージや朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）問題などを熱心に話し合い、相互理解を深めた。



日本の学生四十八人、米国三十六人、韓国十八人が参加した。約十人ずつの班に分かれ、英語で議論した。

「日米韓の相互イメージ」を述べ合った後、北朝鮮をテーマに話し合った。最近の核をめぐる情勢を議論した後、米国の学生が「南北が統一されると軍事力が大きくなる」との見方を示す一方、韓国の学生は「統一され、北朝鮮の脅威がなくなった後は、米国や日本の脅威に備える」と発言。日本の学生は「今は天皇も象徴で、そこまで（後略）考えている人はいない」などと発言し、白熱した議論を繰り広げた。

米国や韓国の学生を招いて毎年開催されている「日米学生会議」と「日韓学生フォーラム」が、それぞれ沖縄などを巡るツアーの途中で日程を合わせ、この日に合同企画した。多国間の視点で国際問題を語りあうことを狙いとしている。

議論を繰り広げる日米韓の学生たち（京都市北区・立命館大）

参加者ノート　安藤彩

ジョイントディスカッションが始まり話題が弾んできたころ、ふと、私たちは今どの国にいるのだろう？と思った。日本人である自分の隣には韓国人、反対側を向けばアメリカ人がいる。英語をベースに韓国語、日本語が飛び交うディスカッション。３ヵ国の人間が存在するということを確実に感じさせる会話と、それを全くといっていいほど感じさせない、打ち解けた空気が、その空間には共存していた。

私は、このジョイントディスカッションのスタッフとしてアイスブレーキングや討論の企画をしたり、勉強をしたり、日韓学生フォーラムのメンバーとミーティングをしたりと、会議の前からいろいろと準備を進めてきたこともあり、このジョイントディスカッションに対しては特別大きな期待と不安を抱いていた。準備を始めた頃は、日韓米３国間の歴史的な関係や問題どころか、最近の３国間関係に関する事柄に関してすら知識がなく、わからないから話すこともできない、意見を持てない、そんな悲惨な状態だった。それにもかかわらず、日韓米の３ヵ国の人間が集まるディスカッションで、日本人として意見を述べなければならない。私はできる限りの勉強をし、ほんの少しのことでもいいから意見を持とうと努力し、日本人としての自分の意見を反映させたいと考えていた。

そして当日のグループディスカッション。テーマは各国間のイメージ、北朝鮮問題や安全保障問題、社会や文化についての３セッションであった。テーマが深くなればなるほど知識豊富なメンバー同士の意見は対立し、白熱のディスカッションが行われた。そんな中で私は、韓国とアメリカのメンバーに「どう思う？」と聞かれてもうまく答えることができなかった。日本人としての意見をその議論に反映させなければ、と意気込めば意気込むほど、意見はうまくまとまってくれなかったのである。そのことにもどかしさを感じた。しかし話を進めるうちに、自分が日本人としてというよりむしろ、自分という一個人として意見を述べればみんながそれを聞いてくれ、認めてくれることに気がついた。そんな単純なことであったが、そのことに気付いてからは自分の思ったことを素直にそのまま述べ、それに対して誰かから意見が返ってくることをものすごく楽しむことができた。

その小さな会議室の中では、日本人、韓国人、アメリカ人という枠を超え、一人ひとりが「自分」として存在し、議題に対する意見交換がなされていた。ディスカッションを通してそれぞれの文化の相違点を発見し、みんなで驚いたり笑ったりしながら時間はあっという間に過ぎていった。

一体私たちは今どこの国にいるのだろう。ディスカッションが終わりに近づく頃にはもはや、そのことを気に留めることすら忘れていた。

第19回日韓学生フォーラム参加者ノート　石川聡史

日本人、韓国人、アメリカ人が一緒に議論をするということで、一体どんな感じになるのだろうという少しの緊張とともに、ディスカッションの日を迎えたが、全体的に言えば、楽しく有意義な時間を過ごすことができた。議論を通じて得られたことの一つといえば、アメリカと違い、日本と韓国が同じアジア圏に属しているということが実感できた一方で、日本、アメリカと韓国のそれぞれの違いに関しても、自分で感じられたということであろう。午前中の議論では、日韓米それぞれに対するイメージや差別問題について話し、午後は北朝鮮問題を中心に話し合ったが、とても和やかに意見を交換することができた。また、議論の時間だけでなく、合間の休憩時間や、前日のレセプションの時には、テーマにかかわりなく自由に話すことができ、その点もよかったと思う。二国間だけであると閉じた議論にもなりがちの中、このように多様性をもった機会を得られたことはとても有意義だった。

第19回日韓学生フォーラム実行委員後記　山田剛史

日韓米３ヵ国のディスカッションという話を最初に聞いたときは、漠然と「面白そうな企画だな」としか思わなかった。事前準備を重ねるにつれ、その思いは不安へとつながり、韓国、日本の知識に不足を感じたまま、本番を迎えることになった。本番前日は、日韓メンバーほぼ全員が自主的な勉強会を開き、対策を練っていた。ディスカッションは多岐にわたり、各国の印象を述べるにとどまらず、韓国の太陽政策、北朝鮮への対応などにも話題は及び、日韓学生フォーラムの話し合い以上に充実していたのではないかと思う。アメリカ側メンバーの興味の対象や、韓国メンバーの主張がかみ合っていたと思うし、なによりも日米学生会議の日本メンバーの的確な進め方、通訳があったおかげで理解も深まった。非常に刺激的だったという印象が強い。最後に我々の力不足をフォローしてくれた日米学生会議の皆様に心から感謝したい。

コーディネーター後記　小林悦子

「日米」学生会議であることの意義とは何か。「日米」だけで話し合っていていいのか。

これは、日米学生会議に関わる者にとって避けては通れない問いであろう。過去にも、数多くの日米学生会議参加者や実行委員が、この問いの前に立ち止まり、頭を悩ませてきた。この問いかけの可能性を広げるために、第55回実行委員会が試みたのが、「日米関係」だけでなく、他の国や地域との関係性という視点を会議に入れる、ということであった。日、米だけではなく第三国の視点を入れることで、日本とアメリカを語るということやその意味を客観的に、批判的に、挑戦的にとらえる場が欲しいと思ったのだ。また、他地域、特にアジアへの一般的認識や関心が高くないと言われているアメリカで学ぶ学生に、「日本」だけでなく他国を、日本との関係性を通じてより具体的な形で引き合わせたかった。

こうした思いから様々な学生国際交流団体に考えを打診し、企画成立となったのが、第19回日韓学生フォーラムとのジョイントディスカッションであった。双方の実行委員も知らなかったのだが、実は日韓学生フォーラムと日米学生会議の関係は深い。まず、日韓学生フォーラムの設立者が、元日米学生会議参加者であった。それこそ、冒頭に記した日米学生会議の存在意義に対する問いかけが、「日米」よりも対話の必要性があると感じられた韓国との学生交流、日韓学生フォーラムを生んだのであった。また、設立の8年後、第8回日韓学生フォーラムと第44回日米学生会議との間で、日本人参加者有志による合同勉強会や合同報告会が実施されている。今回の第55回日米学生会議と第19回日韓学生フォーラムのジョイントディスカッションは、日本人、アメリカ人、韓国人が一堂に会して議論するという、両団体にとってまた新たな前進を意味する試みとなった。

企画の準備は日米学生会議、日韓学生フォーラム双方のディスカッション担当スタッフにより行われたが、最も苦しんだのはディスカッションのテーマ設定、そして日韓米の学生間の知識や情報のギャップをどう埋めるかであった。アメリカの学生は朝鮮半島の事情をあまり知らないであろうことが予想され、どのような形態、テーマ、情報の提供の仕方であれば活発な話し合いができるかについて、非常に長い間検討と煩悶の日々が続いた。学生によるプレゼンテーション、レジュメの作成、勉強会の実施、映画上映など様々なアイディアが出されたが、レジュメ作成一つをとっても、その情報提供の作為性や解釈、意味付けの問題を巡って意見が分かれまとまらないこともあった。結局行き着いた3つのテーマや、結果として配布されたレジュメ資料は何ともないものに思われるかも知れないが、その形に持っていくまでの道のりは、非常に悩ましいものであったことをここに強調しておきたい。

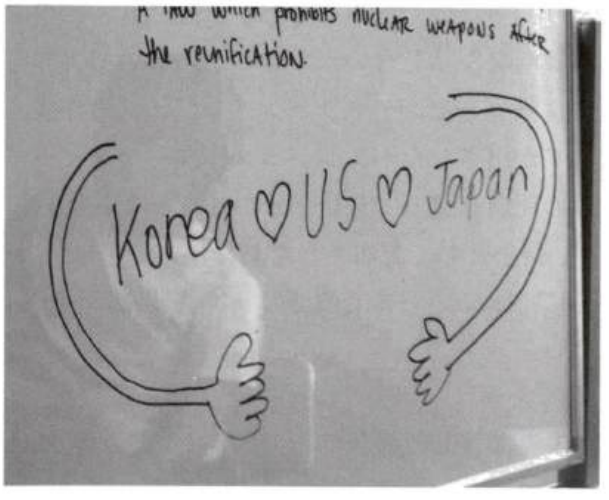
両団体の日程上の都合で、ディスカッションには一日しか費やすことができず、実際のディスカッションの場では納得のいくまで論点を深めることはできなかったものの、様々なテーマに触れ、互いの反応をうかがい合い、意外な返答を得たりすることができた点で、

非常に興味深い経験だった。しかし、後日、個人的に韓国で別の韓国人学生たちと話す機会があったのだが、会議中のジョイントディスカッションでは際立って表出していなかった韓国人学生の感情の高ぶりや普段耳にしない（私にとっては）過激な発言を聞くことができ、日米学生会議でのジョイントディスカッションが、その使用言語や企画設定の関係で、いかに制約された場であり、直接的な意見をぶつけられる環境では必ずしもなかったかに気付いた。それは短時間の間に、3 ヵ国の人間が、それぞれのコミュニケーションスタイルや情報差、言語的ハンディキャップを考慮しつつも、互いに本音で意見をぶつけること、わかりやすく想いを伝え合うことの難しさを痛感する経験でもあった。

第55回日米学生会議が実施した日韓米ジョイントディスカッションはほんのさわりに過ぎない。話し足りない、知り足りない、伝え足りない、という誰もがディスカッション後に感じたであろう欲求を、今後の対話を自ら求めるモメンタムに変えていくきっかけでしかない。

現在、日韓米の連携が必要とされる国際的課題の重みに対して、この 3 国間の人々の交流はあまりにも少ない。今回のジョイントディスカッションを最初のステップとして、参加者各自が日米、日韓、韓米、日韓米、それぞれの交流を粘り強く支えるチャネルキーパーになれたらと切に願う。

最後に、100 人余りの日韓米の学生で踊った「ジェンカ」、あんなに大規模でマルチナショナルで心弾む「ジェンカ」は初めてだった。あの一体感の瞬間をつくってくれ、そしてディスカッションの運営を担ってくれた第 55 回日米学生会議及び第 19 回日韓学生フォーラムの、ジョイントディスカッションスタッフのみんなに心から感謝の意を表したいと思う。準備段階において、初めての試みに不安を感じた瞬間もあった私にとって、スタッフのみんなの馬力には大いに救われた。本当にありがとうございました。



ディスカッション終了後の教室にて

福井サイト

サイトコーディネーター：江川響子

福井サイトスケジュール

8月10日　福井到着、レセプション、ホームステイ
8月11日　かみなか農楽舎での農業体験、ワラジ作り、ホームステイ
8月12日　関西電力大飯原子力発電所見学
　　原子力に関する講演会

福井サイトスタッフメンバー

江川響子*、藤井秀之、吉野茉美
（*はサイトコーディネーターを示す）

福井サイトの概要

福井県では、数ある日米関係の中でも、農業、エネルギー問題における日米関係を問い直すための学習を行った。（福井県はコシヒカリを生んだ研究所があるなど、日本有数の米どころである。また日本で最多の15基の原子力発電所がある。）そこでは、「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」をテーマに、「市民参加の視点」から農業やエネルギー問題を見直すためのプログラムを組んだ。

まず、農業学習に関しては上中町で実際に農業を体験し、日本の食糧生産に携わる市民の姿を学習した。上中町と小浜市で二日間にわたるホームステイをし、日本の家庭を実際に体験した。また、原子力発電に携わる様々な「市民」の声を学び、さらに実際に原子力発電所を訪問した。

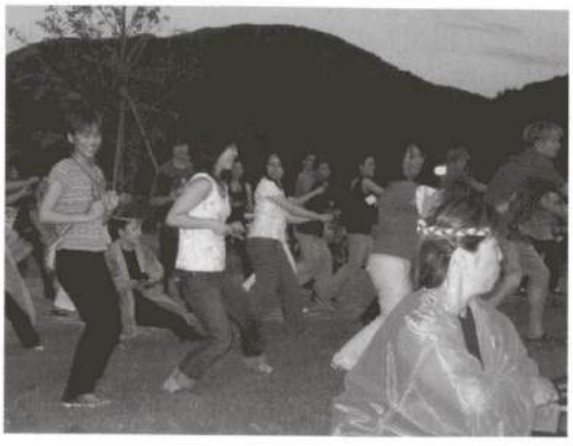
以上のように福井サイトでは農業、エネルギーの実際について参加者が自ら体験し、それぞれについて理解を深めた。

8月10日　レセプション、ホームステイ

福井県上中町の農楽舎にて、野外レセプションが開かれた。テーブルには福井県ならではの食事が並び、バーベキューも行われた。また地元の方のよさこい踊りで歓迎を受け、参加者の中には一緒に交じって踊る姿も見られた。これから2泊3日お世話になるホストファミリーとの対面を終えた参加者は、各自のホスト宅へと帰った。かみなか農楽舎に残った者もホスト宅でお世話になる者も、それぞれ楽しい夜を過ごした。

バスに揺られること4時間あまり。
上中町には盛夏の緑が広がっていた。

屋外レセプションにて乾杯の音頭をとる
上中町国際交流協会会長の武田敏孝氏



よさこい踊りを体験

８月11日　農作業体験、ワラジ作り、ホームステイ

８月11日、第55回日米学生会議参加者は、福井県上中町のかみなか農楽舎にて農作業を体験した。現地の方々の親切な指導の下、参加者たちは機械を用いない素朴な農作業を体験した。

昼食では、参加者自らが竹で製作した流しそうめんを楽しみ、午後からはワラジの製作を行った。日が沈みかけた頃、参加者はそれぞれのホームステイ先に戻り、ホストファミリーの手厚いもてなしを受けた。これまでの会議中に自然と触れ合うことの少なかった参加者にとっては貴重な体験となった。

農作業に挑戦

日米学生、上中で農業体験

わらじ作りに72人苦ワラジ

日米の大学生たちが参加する第五十五回日米学生会議の一行がこのほど、若狭地方を訪れ、ホームステイや農業体験で地元の人たちと交流した。

わらじ作りに挑戦する日米学生会議のメンバー＝上中町末野の農村総合公園

た。

次世代を担う若い人たちに社会問題をじっくり考えてもらおうと、国際教育振興会が主催。今年は日米から三十六人ずつの学生が参加。「市民参加の視点から考える」をテーマに東京や沖縄、京都などで講演会や学習会を開きながら、約一カ月にわたって共同生活を送っている。

十日に小浜市に入った一行は、同市や上中町の国際交流協会のメンバー宅に泊まり、十一日には同町末野の農村総合公園で、そばの種まきや小豆の土かぶせを体験した後、午後から地元の人の指導でわらじ作りに挑戦した。学生たちは「また失敗」「昔の人ってすごい」などと日本語や英語でわいわい話しながら、慣れない手付きでわらを編み上げていた。

十二日には、大飯町の大飯原発を見学した。

『福井新聞』2003年８月15日

ホストファミリーの温かいおもてなし

8月12日　原子力発電所見学、講演会

朝、ホストファミリーと最後のひとときを過ごした参加者は最寄り駅に再集合し、上中町を後にした。午前中は、大飯町にある関西電力「大飯原子力発電所」を訪れた。いったん施設の中に入ると発電所の警備はとても厳重であり、いまだ残る9.11テロ事件の影響が感じられた。参加者は、ガラス越しに原子力発電所の内部見学をした後、所内で勤務する方のお話をいただいた。午後からは小浜市勤労福祉会館にて、福井県庁の方や、関西電力の方などによる講演会に臨んだ。官、民両方の視点から、原子力発電をめぐる地方自治体の動向やメディアのあり方に関するお話をうかがえたことは、大変有意義だった。その後、京都へ向け福井を発った。

小浜市勤労福祉会館での講演会

ホストファミリーノート　　五十音順、敬称略

不安と緊張の中で迎えた日米の学生さんでしたが、二人とも気さくでかわいらしくって安心しました。食事も和食大好きと言ってくれてホッとしました。
昔習った単語も忘れ、身ぶり手ぶりと後はローマ字で書いて通じた時は嬉しかった。英会話の勉強の大切さを思いました。でもみんな楽しい思い出です。

下島栄一（上中町）

最初、主人がホームステイ受け入れを引き受けたと聞いた時には正直戸惑い、どうもてなしをすればいいかわからず、この話を断ってほしいと言っていたのですが、実際受け入れを終えてみると充分なこともできず大変なこともありましたが、子供もとても喜び、世代や国を越えての交流ができ楽しく充実した二日間を過ごせ、非常に良い体験ができて良かったと思います。見送りの時はとても名残惜しく感じました。

杉井常宏（上中町）

写真を見て、とっても懐かしく感じます。
子供たちにとっても私たちにとってもよい体験をさせていただきました。親子で琴をひくこともできましたし…。
短いホームステイではありましたが、また、上中町にも是非遊びに来て下さい。ツンくん、たけぞう、シンくん、マイク、元気で自分の夢にむかって頑張ってね。学生会議に参加された皆さん、今後の活躍を楽しみにしています！！

武田敏孝（上中町）

人生を選んでいくお二人に感動致しました。
エールを送ります。「ききょう」と、「包装紙」を大切にします。
瓜割の水を飲みにいつでも帰ってきて下さい。

田中陽（上中町）

予想もしませんでしたが、我が家でホームステイ受け入れすることになりました。
池田さんと Meghan さんの二人、短い間でしたが、ゆっくりとしてもらえたかな。
うちの２歳の子どもは、あれからしばらく「おねえちゃんは？」と二人を探していました。
緊張した大人をよそにすっかりなついていたようです。

玉井克幸（上中町）

アメリカの学生さんと上智大学の学生さんでしたが、二人とも礼儀正しくて明るくて私たち夫婦にも楽しい二日間でした。私は１年前から英会話を習っているので、私の Japanese English を二人に聞いてもらいましたが、二人とも「よくわかる」と言ってくれたので、少しだけ自信を持ちました。

玉井康友（小浜市）

簡潔に、感想の一部を記します。
まず、一番の印象は、なんとしっかりとした21歳と20歳だろう。私はこの頃、何を考え、何に興味を示していただろうか？そう思わされました。
これから数年後、彼女たちは学校社会から真の人間社会へと踏み出して行くわけだが、現在の様に力強く、信念を持ち、自己の成長と共に聞かせてもらった夢を、より熱いものに育てながら生きて欲しいと思います。
夢がかなった折には一報を下さいね。お祝いするのを楽しみにしております。

中塚雅喜（上中町）

日程的に一晩しか親しく交わる日がなかったのが少し寂しい。
今日初めてのことでしたが、早く現状がわかれば他の人にも聞いてみたり勧めたりできたと思います。アピールが不足していました。

能登直（小浜市）

夫婦二人の家に久しぶりに華やいだ空気が流れました。東京で学生生活を送る息子のように、私たちの子供を迎えた楽しさでした。学業に少しの手助けができたかと嬉しい思いでおります。次代を担うにふさわしい人達。加えて行儀のよさにも驚かされました。どうぞそのまま思いっきり人生に向けて進んでほしいと思います。
よい機会を下さってありがとうございました。

深谷嘉勝（小浜市）

機会を有効に過ごそうという意欲に敬服しました。そして、感動を一つひとつ伝えようという真剣さが伝わってきました。また、疑問に思うことを積極的に尋ねてこられる姿に心打たれました。
思い切り体験し、絆を深めこの縁を大切にしたい、と家族で対話と遊びと見学を主に努めましたが、日程の少なさに多少寂しく思いました。

松岡喜一（上中町）

我が家には、琉球大学の友利さんと中国系とアフリカ系とイタリア系とケイジャンのクオーター、トリンさんが来てくれました。とても気のいい二人で、楽しい二日間でした。
トリンさんに、4 つのうちどこの文化が好きかと尋ねたら、どれが一番とは決められないと返ってきました。私はいろんな国の文化が好きで、日本の文化はその中の一つだと思っていると話したら、彼は “I agree with you” と言ってくれました。うれしかったです。

宮田奏枝（上中町）

我が家は子供たちがそれぞれの地に行っているので、祖父母と私で満足してもらえるだろうかと、少し心配していました。幸い日本の学生さんは通訳をよくして下さり、言葉面では不自由なかったのですが、時折電子手帳でお互いやり取りし合うなど、普段使用しない手帳も大活躍。
我が家の娘もよくホームステイさせてもらっているので、「こんな感じかな？」と思いつつ、

また、祖父母も一生懸命もてなしに協力してくれました。時間もあまりなくいろいろ誘い出す事もなく、申し訳なかったなぁと思っています。私も勤めているので、日本食のもてなしだけで精一杯でした。また、そういうホームステイに慣れていないからかもしれません。でも、外国の方の文化にいろいろ触れさせてもらったり日本人の若い子より日本人らしい学生さんに感心させられた思いでした。最初はどんなおもてなしをしようかと心配でしたが、いろいろな国の方と接しられて、私自身が一歩前進する思いで、良い体験でした。ありがとうございました。

宮本洋子（上中町）

家族や地域にとって、とてもいい刺激になったと思っています。毎年でも上中へ来てほしいと思います。

森上美紀男（上中町）

参加者ノート　中村信之

「いつでも、戻ってきなさい。」
ホストファミリーである松岡さんは、こう言って私たちを見送ってくれた。

福井サイトは８月 10 日から 12 日という２泊３日のスケジュールで、他のサイトがほぼ１週間ずつ割り振られていたのを考えると随分と短い。8月 10 日にはレセプションがあり、11 日には農業体験、12 日の最終移動日には大飯原子力発電所訪問というスケジュールだ。私は JASC が始まる前から、密かにこのたった２泊３日しかない福井サイトを非常に楽しみにしていた。それは、福井ではホームステイ体験ができるからである。

ホストファミリーの方とは 10 日初日のレセプションでお会いした。基本的に一つのホストファミリーのお宅に、アメリカ側参加者と日本側参加者がペアになって滞在する。実行委員である EC を除いては、ほぼ全員の JASC 参加者がホームステイを体験できることとなった。私は同じ分科会に所属しているジェイ・リンとペアになり、松岡さんの自宅へホームステイすることになった。松岡さんはつい最近まで地元中学生を毎年オーストラリアへ研修留学させる福井県のプロジェクトの責任者を務めていた方で、国際交流に積極的な方であった。レセプション会場には娘さんの美樹さんと共に迎えに来て下さり、私はこれから始まるホームステイに心が弾んだ。

松岡さんは自宅に向かう車の中で「洋風の家なので、ジェイが気に入るかどうか不安です」と最後までホストとして JASC 参加者を受け入れるかどうか迷ったということをおっしゃっていた。いわゆる、「スタンダードな日本の家」を体験させた方がアメリカ側参加者にとってよい経験になるのではないかということであろう。実際のところ松岡さんのご自宅は「洋館」というよりもなんと「民宿」であり、ジェイと私は気に入らないも何もむしろ「スタンダードな日本の家」では体験できない様々なことに感動していた。特にジェイ

にとっては民宿の温泉も浴衣も初体験だったようで、思わぬところで貴重な日本文化が体験できたといえる。私はジェイと温泉につかりながら、これから松岡さんと過ごす楽しい時間について話がはずんだ。

松岡さんご一家は、実に快く私たちを歓迎して下さった。美味しく食べた食事、食事の後の談笑では時間がとてもゆっくり流れる。また松岡さんは瓜破の滝や鯖街道宿場町など、短い時間ながらも私たちに福井・若狭の魅力を数多く見せてくれた。11日の夜は最終日だということで、夕食後に卓球大会をした。実は私もジェイも卓球には特別の思い入れがある程ピンポン・ファンだったことに加え、松岡さん一家も卓球がとてもお上手なファミリーであった。そんなこともあり卓球大会は思いのほか、とても白熱したものとなった。途中から坂口紋野、エドメー・ナイトとそのホストファミリーも卓球に加わり、大人数で楽しい時間を過ごすことができた。私は強い卓球プレーヤーの方に出会うと興奮してしまう「タチ」であるので、松岡さんご一家の腕前に終始喜びっぱなしであった。

今までアメリカでは何回かホームステイを体験したことがあったが、母国日本でのホームステイは今回生まれて初めてであった。海外に出ていつも思うのは、「もっとよく日本を知らねばならない」といった義務感である。両親も日本人であり日本で育った時間も比較的長いので、日本の「習慣」などは私の体にしみついている。しかしながら狭い日本にも多様性は確かに存在し、「転勤族」でしかも都市部にしか住んだ経験のない私にとって、今回福井でホームステイ体験をし、今まで知らなかった「私にとって新しい日本」を少し知ることができたのは大きな収穫であった。

福井でのホームステイ体験は今まで知らなかった日本を知る契機にもなっただけでなく、毎年日米学生会議が大きな目標として掲げている「日米間の相互理解」にも非常に貢献していると実感している。日米双方の学生が家庭料理を口にし、テレビを見、みんなで談話する。レセプションのような華やかさからは程遠い、日本の家庭でどこでも目にするごく当たり前の日本の日常である。しかしながら一切の緊張感なくごく当たり前の毎日を共有することによって、日米双方から違和感がなくなっていくのを感じる。確かに生まれも育ちもバックグラウンドが全く違う者同士であるという事実は変わらないのであるが、異文化理解に必要な要素とはお互いがお互いのことを語り、あるいは今回の卓球大会のように心から楽しめる時間を共に過ごしたり、つまり個々人の時間を皆で過ごす時間へと割き、時間を共有することであると考えるのである。そういう意味で福井の松岡さんご一家と、そしてルームメイトであるジェイ・リンと過ごした二日間は短いながらも忘れがたい、第55回日米学生会議の中でとりわけ貴重な時間であったと感じている。

JASCはもう終わってしまったが、来年2004年にはジェイ・リンがニューヨークから日本へと語学留学することが決まっている。その時にはまた福井の松岡さんご一家を訪れ、再び卓球大会をやろうと約束している。

コーディネーター後記　　江川響子

福井サイトコーディネーターとして、これまで「なぜ福井サイトなのか」との質問を、多くの方から尋ねられた。2泊3日と短期間であるし、他のサイトと比べると、アメリカ人にも馴染みがない場所であるからだ。東京、沖縄、京都はこれまでに日米学生会議の開催地になったという前例があったことと、日本の文化、政治の中心都市ということで、それぞれサイトとしてすぐに選択された。第55回会議実行委員会発足当時は、この3サイトのみにするという方向で一旦は決まっていた。

しかしそれら3つのサイトのみでは、第55回日米学生会議としてのオリジナリティが出せないことに気付いた。この3サイトは、第53回会議を踏襲した部分がかなりあったからだ。また、「市民参加の視点から考える」という第55回会議のテーマ性はその3サイトの理念に十分に反映されていなかった。そういった議論があり、第4番目のサイトの必要性を認識し始めた。

第4サイト候補として挙がった場所の中に福井県があった。検討を重ねていくうちに福井県が最もふさわしいと判断した。その判断材料としてまず、「市民参加」が昨今日本で活発になってきた一つの理由として、中央から独立した地方自治が機能していないという原因に着目したことが挙げられる。そうした中央から地方への依存体制について、第4サイトでは取り上げたいと考えた。そういった依存の構造が具体的な問題となって生じている場所がいいと考えた。その中に、福井の原子力発電所が挙げられた。

福井県はそれ以外でもコシヒカリを生んだ県として農業が盛んであった。地方自治だけでなく、地元の方と実際に何か体験する中で日本の現在について見直そうという姿勢も、私たちの「市民参加」と言えるのではないかと考えた。それゆえ農業体験を取り入れた学習など、理念的に福井サイトは第55回会議のテーマにぴったりといえる。また、日程的に京都近辺で第4サイトを探していたのだが、京都から電車で2時間以内と近い福井県はロジスティクス的にもサイトとしてうってつけであった。

私がコーディネーターに就任した理由は、関西在住実行委員と関東在住実行委員の仕事分担の観点からも、京都在住で福井へ移動し易いことからも、私が最もふさわしいと判断し、自分で志願した。しかし、福井に一度も行ったことはなかったし、初めてのサイトだったため何から手をつけていいか分からず、焦ったことがしばしばあった。福井には、サイトコーディネーター就任後、計5回訪れ、足で情報を集め、使える要素、使えない要素をふるい分け、福井サイトの形を作っていった。コーディネーターとしては仕事の運び方において詰めが甘い部分が多々あったと反省しているが、おかげで色々なことを学ばせていただいた。

結果的には、お世話になったホストの方から、日米の学生との交流はお互い学びあうところがあったとおっしゃっていただくことができ、また何よりも、何人かの参加者が福井サイトは楽しかったとの感想を漏らしてくれるなど、福井サイトを評価してくれて、コーディネーターとして本望を遂げることができたと思っている。最後に、第55回日米学生会議の福井サイトでお世話になった多くの方々にこの場を借りてもう一度深く感謝したい。

京都サイト

サイトコーディネーター：堀抜功二

京都サイトスケジュール

8月12日	福井より京都到着
8月13日	分科会#9、#10／京都地元高校生交流企画#1
	リフレクションミーティング#3
8月14日	京都地元高校生交流企画#2
	文化体験#2：京都学レクチャー、フィールドトリップ
8月15日	分科会#11、全体討論#2
	フォーラム準備
8月16日	フォーラム準備、五山の送り火
8月17日	京都フォーラム
8月18日	リフレクションミーティング#4、新実行委員選挙
8月19日	自由時間／新実行委員ミーティング
8月20日	自由時間／新実行委員ミーティング／クロージングセレモニー
8月21日	アメリカ側参加者帰国／報告書ミーティング／日本側参加者解散

京都サイトのスタッフ

市川晶子、江川響子、中村信之、福家雄大、堀抜功二*、圓山由子、横田聡

（*はサイトコーディネーターを示す）

京都サイトの概要

日本を代表する古都「京都」は、1200年の歴史とその変遷の中に魅力を感じさせる。古くからの伝統行事や神社仏閣などの建造物、人々の生活の中に日本古来の文化を色濃く残す一方で、観光や学生の街として栄え、現在では多くのNGOやNPO、ベンチャー企業などを生み出しており、今なお発展を続けている。このように京都では、古い文化と新しい文化が共存しており、市民のたゆまぬ努力によって新旧二つの文化の調和が保たれている。会議では、これらの文化に触れるのみならず、それを維持する主体である「市民」に焦点を当てた。また、新しい試みとして、日韓学生フォーラムとの「日韓米ジョイントディスカッション」や地元高校生との交流企画も実施された。さらに、これらを含めた会議の成果を社会に発信する「京都フォーラム」が開催された。

8月13日　分科会#9、#10／高校生交流企画#1

京都の地元高校生（京都市立西京高等学校、京都市立堀川高等学校、京都市立紫野高等学校から参加）と日米学生会議との交流企画が実施された。これは、今後共に社会を担っていく高校生と大学生が交流することによって、互いに刺激を与え合うことを目的としている。日米学生会議にとっては新しい試みである。

初日の分科会活動では、「現代社会とジェンダー」、「天然資源」、「市民活動と地域社会活動」、「科学教育」の4つの分科会に高校生が分かれて参加した。各分科会はフィールドトリップや日米学生会議参加者による模擬授業、ディスカッションなど工夫を凝らした企画を通して高校生との交流、議論を行った。

高校生と共に「卵落としコンテスト」をした「科学教育」分科会

8月14日　高校生交流企画#2、文化体験#2

地元高校生との交流企画、第二日目は「文化体験」と題し、京都の伝統文化を学んだ。午前中は伝統建築保存家の安井清氏をお迎えし、「京都の伝統建築」という題でご講演いただいた。特に京都で安井氏が手掛けられた「門」について、スライドを交え解説が行われた。午後は、「しょうざん染色ギャラリー」、「京菓子資料館」、「八ツ橋と刺繍やかた」、「京都友禅文化会館」、「博物館さがの人形の家」の5ヵ所に分かれ、京都の伝統文化体験のフィールドトリップを行った。

高校生参加者ノート（アンケートの回答より抜粋）

京都市立西京高等学校、堀川高等学校、紫野高等学校から参加した皆さんの声。

とてもよかった。私は「市民活動と地域社会活動」の分科会に参加したのですが、普段考えたことのなかった「人種差別」などの社会問題について問題意識を持つことができ、とてもいい勉強になりました。午後からのフィールドトリップは、町の人にアンケートをとるというもので、人に立ち止まって話を聞いてもらうことはとても難しいことだと感じました。分科会の大学生の皆さんは、みんなフレンドリーでとても話しやすかったです。こんな多くの大学生と接することのできる機会は少ないので、本当に嬉しかった。皆さん、本当にありがとうございました。すごく楽しく素敵な一日でした。

貴重な経験ができてよかったと思う。参加して、実際に多くの人とコミュニケーションをとることは大切なことだと実感し、必ず今後に活かしていけるものだと思った。さらに、学校の英語の勉強により力を入れなければいけないと思った。

高校生でこのような体験はあまりできないので続けていって欲しいと思った。

友禅染はとてもきれいだった。京都に住んでいながら今まで全然知らなかったので、今回このチャンスが与えられて嬉しい。一つの着物を作るのに色々な過程があると知った。こんなにきれいな文化があるから京都は世界から注目されていると思うし、これからも友禅が残っていって欲しいと思った。

８月15日　分科会#11、CWD#2

CWDでは、通常のトピックとは少し離れ、日頃考える機会の少ない「想像力」について討論した。想像力を構築するものとは何か、我々の想像力を阻害している要素とは何かということや、人間にとっての想像力の重要性及びその保持の方法について、それぞれが個人の経験をふまえて意見を述べ合った。「想像力」という少々哲学的な討論議題を前に、「想像力」の定義に苦戦するなど、参加者一人ひとりの想像力が問われる貴重な場となった。

ディスカッションの内容をユニークにまとめるグループもあった。

８月16日　フォーラム準備、五山の送り火

京都フォーラムを翌日に控え、参加者は朝から展示用の分科会パネルの作成、そして午後からは並行してステージ発表の舞台リハーサルを行った。夕食後は、日本の伝統行事の一つであるお盆の中でも京都の風物詩として有名な五山の送り火の見学に出かけ、フォーラムに向けた準備で疲労のたまった心と体をリフレッシュさせた。各分科会のパネル準備やステージ出演者の打ち合わせ、スピーチ練習などフォーラム本番に向けた準備は深夜遅くまで続いた。

本番を明日に控え、リハーサルや打ち合わせにも熱が入った。

8月17日　京都フォーラム

京都市のほぼ中心、河原町御池に位置するショッピングモール「新風館」にて、第55回日米学生会議京都フォーラムを開催した。モールの中庭に位置する円形舞台では“The 55th Japan-America Student Conference”、“American Experience in Japan”、“Civic Participation”、“US-Japan Relations”、と4つのステージ企画を発表し、モールの3階には各分科会のパネルを展示するブースを設けた。

8月18日　リフレクションミーティング#4、新実行委員選挙

この日は本会議全体を振り返るための最後のリフレクションミーティングが行われた。前日の京都フォーラムや本会議企画に対する意見や批評、第56回日米学生会議開催の必要性や新実行委員の選出の方法などが会議参加者全員で話し合われた。この場で改めて、日本とアメリカの学生が1ヵ月間近く寝食を共にし、会議を行う意義や必要性について意見が交わされ、長い話し合いの後、来年度の会議開催に対する賛同が確認された。

新実行委員の選出過程としては、まず日米両参加者から推薦を受けた候補者が会議参加者全員の前で英語と日本語によるスピーチを行った。今年の会議の反省点や、自分はどのような会議を創りたいかについてスピーチした後、他の会議参加者から鋭い質問が浴びせられた。深夜まで続いた質疑応答を経て、日米両参加者による投票が行われ、日本側実行委員8名、アメリカ側実行委員8名が選出された。

実行委員選挙は真剣そのもの。立候補者のスピーチの後、オーディエンス側から立候補者へ質疑応答の時間が設けられた。

８月19日　新実行委員ミーティング

新たに発足した第56回日米学生会議実行委員会はこの日から、来年アメリカで開催される会議の構想を練る作業に入った。日米両国の新実行委員全員が一堂に会して企画に関する話し合いができるのは、おそらくこのときが最初で最後となるため、新実行委員は自由時間や睡眠時間も返上で、来年の会議のテーマや理念の確定を進めた。こうして決定した第56回日米学生会議の枠組みは“Kyoto Agreement”としてまとめられ、他の参加者に発表された。

８月20日　クロージングセレモニー

日米学生会議の本会議を締めくくるクロージングセレモニーでは参加者が、約１ヵ月を費やした共同プロジェクトの最後のひと時を、惜しむように味わっていた。京都ならではの催しとして迎えられた舞妓さんの美しい舞いと身のこなしは、最後の晩餐を大いに盛り上げた。最後に、各サイトで撮影された写真やビデオを全員で見ながら、参加者はそれぞれの日米学生会議を振り返った。

舞妓さん、芸子さんを囲んで

８月21日　アメリカ側参加者帰国、日本側参加者解散

この日をもって、第55回日米学生会議は閉幕した。青空の下、空港に向かうバスを前にして、アメリカ側参加者と日本側参加者は互いに抱き合い、いつまでも別れを惜しんでいた。やっとのことでアメリカ側参加者を乗せたバスが出発した後、日本側参加者は第55回日米学生会議として行う最後の活動となる報告書作成のミーティングを行った。

参加者は互いに再会を誓い合いながら、様々な思いを胸に、宿泊地の衣笠セミナーハウスをあとにした。

『法政』2003年10月号

Campus Life

「第55回日米学生会議」に参加して

吉野茉美（よしのまみ）さん（社会学部社会政策科学科3年）

1934年に日米両国の学生有志によって創設された日米学生会議は、伝統ある学生主体の交流イベントです。本年7月25日（金）～8月21日（木）、日本各地を会場に、第55回日米学生会議が開催されました。吉村真子教授のゼミでアジアの社会・経済・政治問題を学ぶ社会学部3年の吉野茉美さんは、全国の応募の中から日本側学生36人の1人に選ばれ、同会議に参加。5月上旬の春合宿からスタートした諸準備を経て、約1カ月にわたる共同生活を伴った同会議の多彩な活動に取り組みました。

↓8月8日（金）～10日（日）、京都で第19回日韓学生フォーラムとのジョイントセッションを実施。

↓福井では、農作業体験や原子力発電所の問題を見聞した。

→8つの分科会のうちの「現代社会とジェンダー」に参加。事前準備を経て、ディスカッションやフィールドトリップを行った。

↓沖縄サイトでは、沖縄の嘉手納基地訪問や、地元の大学生とのジョイントセッションが行われた。

←2002年春、東京都のスタディ・ツアーに参加し、タイの農村にホームスティしたことが、アジアへの関心を深める大きなきっかけになった。

――私は、高校時代のニュージーランド短期留学をきっかけに初めて英語に関心を持ちました。また、異文化の中で自分はアジア人だと認識したことから、大学一年の春にはタイの農村へのスタディ・ツアーに参加。そこで市民参加の国際協力に関心を持った私は、二年生から吉村真子教授のゼミに入り、自分のテーマとしてODAやNGOが国際協力に果たす役割を学びました。

今年二月中旬、私は偶然、駅張りのポスターで初めて日米学生会議を知りました。それまで同年代のアメリカの学生と真剣に話をする機会がなかったため、これは面白そうだと思い、テーマが「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」だったことで応募。無事、選考に通り、合宿や講演会、勉強会への参加といった準備活動を経て、七月下旬から、東京、沖縄、福井、京都の開催地で行われた約四週間のさまざまなイベントを経験しました。

日米両国の学生との交流やアカデミックな活動から得られたものは多く、私にとって日米学生会議への参加は素晴らしい体験となりました。法大生の参加者は、まだ、ごくわずかしかいませんが、様々なバックグラウンドを持った参加者が増えることを願っています。

13

『朝日新聞』2003年9月11日

同時多発テロ2年　邦人の目は
米国への視線　交錯

米国の同時多発テロ事件から、11日で2年。米国はアフガニスタンとイラクを武力で攻め、二つの国はいまも混乱のさなかにある。この間、米国に暮らしたり、向き合ったりした人たちは何を感じ取ったのか。

NY　外への想像力欠く

中込幸子さん

「safe（安全な）」。大阪府吹田市出身でニューヨークの非営利団体で働く中込幸子さん（52）は、この言葉をよく使うようになった。

帰宅する同僚に「安全な夜を」、旅行に行く友人には「安全な旅を」。世界貿易センタービルが崩壊し、当然と思ってきた安全が、実は保証されていないと痛感した。水、乾パン、防塵マスクを詰めた避難袋を用意した。

テロ直後、夫や恋人から暴力を受けたアジア系女性を支援する中込さんの団体に、ボランティアの応募者が殺到した。事件が、他者を思いやる気持ちを芽生えさせたと思った。いま「なんでブッシュはこんな愚かな戦争を始めたのか」と嘆く友人は多い。だが、あきらめたり、米兵の家族の反発を恐れたりして、行動を起こさないという。

中込さんは「米国は内側にきずなを深めたが、外の世界への想像力を欠いたままのように見える」と言う。

坂口誠さん

ニューヨーク近郊に住む資産運用会社員坂口誠さん（38）は、同僚ら知人3人を失った。

テロ後、他人に無関心だったニューヨーク市民が親切になったと感じている。今年5月、ヤンキースタジアムの駐車場で車の鍵をなくした。球場関係者や警察官が深夜まで探してくれた。滞在14年で、初めての経験だった。二つの戦争について、米国の友人は「自」防衛」と言う。それを否定する気にはなれない。

日本　学生同士で議論を企画

秦竹亮治さん

慶応大学1年の秦竹亮治さん（20）は今夏、日本で開かれた日米学生会議に実行委員長として参加し、約70人と語り合った。政治思想や宗教が違っても、お互いの理解は進むと実感した。

ただ、準備段階で、多数決でどんどん物事を進めようとする米国の学生たちとかみ合わない場面があった。「そんな価値の違いが相互理解を阻むのではないか」と思った。

この秋、メンバーがニューヨークで再び集まる話が持ち上がっている。違いを克服するすべを、もう一度探すつもりだ。

イラク　脱サラして人道支援に

原文次郎さん

原文次郎さん（36）は、日本国際ボランティアセンターの現地調整員として、7月からバグダッドにいる＝写真は同センター提供。

同時テロの時は、東芝に勤務するサラリーマンだった。犠牲者の中に同じ大学の出身者がいると知ったが、自分の問題とは思わなかった。

米国がアフガン攻撃に踏み切った時、現場の話が聞きたくて非政府組織（NGO）の報告会をいくつものぞき、インターネットを使った平和運動のスタッフになった。

今年1月に帰米し、5月まで、難民救援のためのNGOに参加した。米国人の喪失感は理解できる。だが、「情緒的な反応を報復戦争につなげる仕組みを断ち切らないと、暴力の連鎖は終わらない」と感じた。いま、人道支援のプロジェクトづくりを進めている。

京都フォーラム

2003年8月17日　新風館

京都フォーラムの理念

日米学生会議は、これまで非常に多くの財団、企業、個人の方々から物心両面からのご支援をいただいてきた。第55回日米学生会議も、長引く不況という状況下にもかかわらず、多くの関係者の力によって支えられた。こうして可能となった我々学生の活動を社会に発信し、その成果の社会還元を目指すため、第55回日米学生会議は京都サイトにて京都フォーラムを開催した。

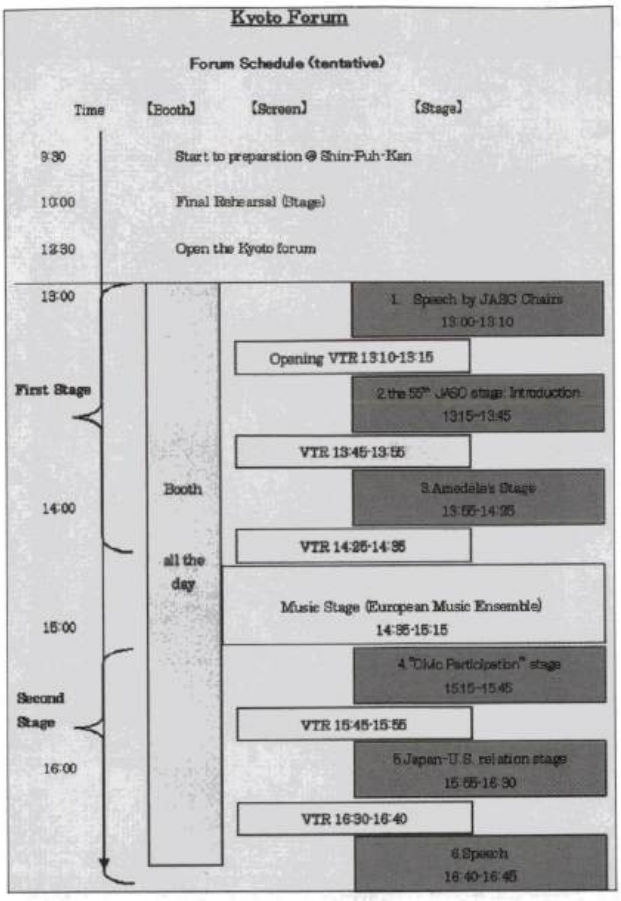
京都フォーラムの理念は、主に8つである。①事業報告、②会議参加者にとっての目的意識の共有、③学生だから、日米学生会議だから伝えたいことをアピールすること、④我々の問題提起から、来場者にも考えるきっかけを作ること、⑤広報活動、⑥日米学生会議に開放的な性格をもたせること、⑦第55回日米学生会議のテーマ「市民参加」の達成、⑧来場者やコミュニティに何らかの具体的な影響を与えること、である。

特に、「市民参加」という視点を強調してきた第55回日米学生会議にとっては、いかに幅広い層に成果を伝えていくかが重要な点となった。これまでの報告会は、大学の講堂やコンベンション施設の一室などで特定の層（一般の学生や日米学生会議のOB/OGなど）へ発信するという傾向があった。そこで、上記の理念を達成できる場所として、京都にある知名度の高いショッピングモールである「新風館」が選定された。このようなオープンスペースでのフォーラム開催は、日米学生会議にとって非常に画期的なことであった。

京都フォーラムのスタッフ

市川晶子、井手遊*、佐藤智紀*、鈴木理絵、中村信之*、野口なつ美、福家雄大
堀抜功二*、松井亮*、圓山由子、横田聡
Sarah LeBaron von Baeyer、Torin Martinez*、Leah Mullen、Maiko Nakarai*
Tina Shang、Naoko Takashi、Kristen White
（*はコーディネーターを示す）

計画段階のスケジュール表。4 つのステージのプログラム作りには、出演者、コーディネーター、スタッフがチームワークで取り組んだ。



ステージプログラム

第１部

13:00~13:10　オープニング
　第55回日米学生会議実行委員による挨拶

13:15~13:45　「第55回日米学生会議　イントロダクション」
　第55回日米学生会議の概要と活動報告　日米学生会議とは？
　会議でのディスカッションは、分科会を中心に行ってきました。各分科会の代表者が、写真のスライドを交えながら、それぞれの分科会の紹介と活動報告をいたします。

13:55~14:25　「American Experience in Japan」
　アメリカ側参加者全員によるステージ
　市民にとってアメリカは本当に身近なのでしょうか？アメリカの考え方・感覚を私達は本当に理解しているのでしょうか？そこで、アメリカ側参加者が日本で体験した様々なことを、カルチャーショック・勉学・言語・異文化理解・友情という面から発表します。個性とパワーに満ちたアメリカの学生による発表に注目！

第２部

15:15~15:45　「市民参加~Civic Participation~」
　「市民参加活動」とは？　このステージは第55回日米学生会議のメインテーマである「市民参加」について考える時間です。仮にあなたの街に原子力発電所が建設されるとします。そんな時あなたは「市民参加」としてどのような行動を取りますか？「原発に関するニュースを見る」、「となり近所の人と原発について話をする」、あるいは「原発建設反対のデモ活動をする」。あなただったらどんな「市民参加」をしますか？この中で「市民参加」にふさわしい行動とは何なのでしょうか？この答えをぜひ「市民参加~Civic Participation~」ステージで皆様と日米学生会議参加者一体となって考えましょう！

15:55~16:30　「日米関係~US-Japan Relations~」
　今年は、日米交流が始まってから 150 年という節目の年に当たります。いまや、日米関係は政治・経済の面で極めて良好な関係を築くに至りました。一方で、日米の世界に対する責任は増し、両国が抱える問題は山積しています。このステージでは、日米関係の歴史を振り返るとともに、日米の学生によるディスカッションを通して沖縄問題を考察します。そして、今後の日米関係はどうあるべきなのか？この

当日来場者に配布されたリーフレットの１ページ

第1ステージ： The 55th Japan-America Student Conference

第55回日米学生会議の概要を伝えるステージ。各分科会の活動を中心に、トークショー形式で発表された。

各分科会から1名がステージに上がり、分科会の趣旨や活動の概要を紹介した。

第2ステージ： American Experience in Japan

アメリカ側参加者の日本における様々な文化体験を描いたステージ。スキットを通して、アメリカ側参加者が受けたカルチャーショックがコミカルに表現された。

アメリカ側参加者が日本文化を感じた一場面、「名刺交換」のスキットに会場が沸いた。

第３ステージ： Civic Participation

第 55 回日米学生会議のメインテーマでもある「市民参加」についてのステージ。クイズやインタビューを交え、観客との双方向的なステージとなった。また、日米学生会議参加者の中から「市民参加」の体験談や考えも発表された。

第 3 ステージの一場面。フォーラムではアメリカ側参加者も日本語でスピーチをした。

第４ステージ： US-Japan Relations

今後の日米関係について、沖縄問題を一つの焦点として、日米学生会議参加者によるパネルディスカッションが行われた。第 55 回日米学生会議で行った沖縄の嘉手納米軍基地訪問や沖縄、韓国の学生とのディスカッションで得たことをもとに、日米両学生が日米両国の今後の協力体制のあり方や、市民による草の根での対話について論じた。

6 名の参加者がパネリストとなり、意見を出し合った。

エンディング

エンディングでは全員が舞台に上がり、「上を向いて歩こう／Sukiyaki Song」を斉唱して、フォーラムを締めくくった。

分科会パネルブース

8つの分科会が、本会議中のディスカッションで得た成果をパネルに展示した。いずれも個性溢れるパネルに仕上がり、会議中の情景を伝えていた。

フォーラムが始まる前に、各分科会は用意したパネルブースを設置した。グラフや写真を多用したり、アンケート結果を載せたりなど、それぞれに工夫が見られた。

ステージ外でのフォーラム作り

京都フォーラムは、すべての参加者が何らかの形でフォーラム作りに参加したのが大きな特徴である。ステージでプレゼンテーションやスピーチを行う参加者がいる一方、各ステージのコーディネーターや、音響、記録、照明、受付、会場整備などのスタッフとして舞台裏で活躍した参加者も多かった。

ステージでは複数のマイクを用い、BGM が入る時もある。当日は複数の音響係がステージ周辺の随所に配置され、万全を期した。

舞台袖からステージを見守る
フォーラムコーディネーター

本番直前まで打ち合わせをする
ステージコーディネーター

フォーラムの様子は当日のNHKニュース番組と翌日の朝日新聞で伝えられた。

日米の文化の違いについて述べる米国の学生ら＝中京区で

文化・基地…幅広く

中京 日米学生ら70人討論

「グローバル化社会と日米」をテーマに日米の大学生ら約70人が話し合う「第55回日米学生会議」（財団法人国際教育振興会主催）の京都フォーラムが17日、中京区の新風館であった。参加者は日米の文化の違いなどを発表した後、市民参加の政治や沖縄の米軍基地問題について意見を交わした。

フォーラムは、日米の文化の違いについて米国の学生が「日本のトイレは先進的で、ボタンだらけ」「お米ばかり食べていて飽きないのはなぜ？」と善意に合わせて話すなど、和やかな雰囲気で始まった。

その後、市民参加の政治について話し合い、聴衆からも「選挙に行くことで国を変えられる」「自治会に参加することも大切」といった声が上がった。沖縄の米軍基地問題では「米兵と地元の人たちの交流を深めるべきだ」「東アジアが自前の安全保障を確立しないといけない」といった意見を交わした。

同会議は戦前、悪化しつつあった日米関係を憂慮した両国の学生らが34年に創設した。隔年に日本と米国で開いている。今年は米国の学生36人が7月に来日。日本の学生とともに寝泊まりしながら東京、沖縄、京都、福井を回り、「天然資源」「科学教育」など八つの分科会に分かれて議論を進めた。米国の学生らは21日に帰国する予定。

『朝日新聞』2003年8月18日

フォーラムコーディネーター後記　佐藤智紀

「おーい、起きろよ！起きろって！」「フォーラム明日だぞ！」

京都フォーラムが翌日に迫った8月16日の深夜、フォーラムの統括を担当していた3人が最後のミーティングを開いていた。しかし、深夜に及ぶミーティングを連日行っていたせいで、私たちの疲労はピークに達していた。私たちはそれまでに、各ステージ企画をつなぎ合わせ、一つのフォーラムとしてまとめ上げること、そのための時間的な調整と統括、プログラムの作成などを主に行ってきた。そして16日の深夜、最後の確認をしようとしていたが、ミーティング中に一人また一人と眠ってしまい、なかなか進まない。互いに起こし合い、励まし合いながらも続けたミーティング。このミーティングの中に、今までの苦労が集約されていたような気がして感慨深かった。

それまでにも様々な苦労があった。アメリカの学生も加わったミーティングを、不慣れな英語でいかにまとめるか。いかに自分の意見を的確に伝えるか。どうしたら、なるべく多くの参加者をフォーラムに巻き込むことができるのか。第55回日米学生会議が掲げたテーマである「市民参加／Civic Participation」を、フォーラムでいかに表現するのか。どれも自分にとって困難な課題であり、うまく解決できたとはいえない。しかし、本会議の中でこのような課題に直面し、苦しみつつも行動したことで、フォーラムだけではなく本会議自体を作っていくことに関わっている、という実感をもつことができた。

フォーラム当日の朝、降りしきる雨を恨んだ。雨が、今までの皆の苦労を台無しにするのではないかと不安だったが、運良く雨は弱まりフォーラムがスタートした。各ステージ企画の出演者とそのリーダーからは、真剣さが伝わってきて本当に頼もしく、安心してステージを見守ることができた。そして、参加者全員で歌を唄い、フォーラムが終わった瞬間、無事に終わったんだという安堵感と、達成感がこみ上げてきた。その後、全力を注いできたものが終わってしまった寂しさをふと感じた。しばらくの間、複雑な感情の余韻に浸っていた。

フォーラムを終えた今、それが成功したといえるかどうかはわからない。「市民参加」を十分にアピールできたのか。それを皆に考えさせることができたのか。そもそも見に来てくれた人が少なかったのではないか。結局、自分達のためのフォーラムだったのではないか。フォーラムの方針や企画を決める段階から、もっと参加者の意見を取り入れるべきだったのではないか。それこそが、参加者全員で作り上げる日米学生会議の姿なのではないか…。しかし、参加者全員がフォーラムという目標に向かって努力し、皆で一つのことをやり遂げたという達成感を得たということは確かだと信じている。フォーラム直前は、参加者全員がパネル作りやステージ企画の作成や練習に没頭し、当日はそれぞれの役割に対し真摯に取り組んだ。フォーラムが皆の気持ちを一つにした。それが、終了直後の一体感を生んだのではないだろうか。その一体感と達成感を皆と味わえたこと。最高だった。このフォーラムに携わったすべての人に、この場を借りて心から感謝したい。

ステージコーディネーター後記　　中村信之

「最高の思い出を作ろう。」

そう言って井手遊は一枚の手紙を私に手渡した。8 月 17 日、第 55 回日米学生会議・京都フォーラム当日の朝の出来事であった。手紙にはこれまでの企画の段階で起こった様々なぶつかり合いのこと、そしてそれを乗り切って今「フォーラムを成功させる」という一つのゴールに向かっている喜びが書かれていた。本番独特の緊張感もこの手紙を見た瞬間、スーッと抜けていくようであった。フォーラム成功へ、集中するしかないと思えた。

第 55 回日米学生会議の本会議は 7 月 25 日から 8 月 21 日まで約 1 ヵ月間行われ、8 月 17 日は JASC の成果を外部に発信するという意味で当初からフォーラムが企画されていた。外部に JASC の成果を発信するという試みは毎年恒例行われていることであるが、例年は大学の講堂やどこかの会場を貸し切り、来場者は主に JASC の関係者、OB/OG の方々、そして JASC に興味のある学生、という中で行われる傾向がある。しかしながら第 55 回日米学生会議はそのメインテーマを「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」というように「市民参加」“Civic Participation” を強く掲げている。それゆえ、もともと JASC に関係していたり興味を持っていたりする人々に対してだけ報告会を行うのではなく、もっと広く一般に「市民」にターゲットを置いて第 55 回日米学生会議としてのアウトプットとしようということから、会場は京都の新風館というショッピングモールに設定された。

フォーラムは一日がかりで行われ、オープニングとクロージングのセッションに加え、それぞれ 30 分のステージが合計 4 本行われた。私はその中の一つである「市民参加」のステージで井手遊と共に責任者を務めることとなった。準備に取り掛かったのは沖縄サイトからで、その間スケジュールが非常にタイトに組まれていた。そのため本格的な企画に入れたのは最後のサイトである京都だっだ。その限られた時間の中で、「市民参加」という第 55 回日米学生会議のコアとなっているテーマを、30 分のステージでどう表現するかを決めることは決して簡単ではなかった。そもそも「市民参加」とは何かという根本的な問いに対して企画に加わったメンバーそれぞれが多様な見解を示していたし、「市民参加」が今回のメインテーマとなっていることから皆「市民参加」に対して「こだわりのある」理解を持っていた。そのため、なかなか一つの定義に結びつけるのが困難であった。前述の井手遊からの手紙に「企画の段階で様々なぶつかり合いがあった」と書かれていたことを紹介したが、まさにこの「市民参加」をなかなか一つのまとまりあるコンセプトにすることが難しかったため、連日連夜激しい議論が行われたことを示している。

本番までにステージが仕上がったのはまさにフォーラムの前日であり、リハーサルも前日と当日の 2 回しか行うことができなかった。リハーサルでは当日の流れを把握するのみ

で終わってしまったので、当日自分たちのステージを「30分以内で終わらせる」ことに関しては本番ギリギリまで打ち合わせが続いた。「市民参加」のステージはそのコンセプト上、JASC 参加者のプレゼンテーションだけでなく実際に観客の方々にもステージに参加してもらおうと、かねてから「クイズ」と「インタビュー」を取り入れていた。実際にクイズの回答時間とインタビューがどのくらいかかるかということは本番をやってみないことには分からなかっただけに、「市民参加」ステージのスタッフは当日多大なるプレッシャーに襲われていた。

いよいよ本番、「市民参加」のステージの始まりである。私はプレスルームで会場にある大画面を切り替える仕事をしていた。その他にタイムキーパー、音響、DV カメラの担当者がおり、これらのスタッフはマイクロフォンでコミュニケーションを取れるようになっていて、本番中はまさにこのマイクを使って時間を細かく刻みながら打ち合わせとステージの進行が同時に行われていた。当初一番心配していたのが、観客である「市民」の方が我々のクイズやインタビューに全く回答していただけないのではないかということであった。そもそもこの京都フォーラムそのものに一般の方が興味を持って見てくれるようにする、ということにこのフォーラム企画の難しさがある。しかしながら我々の心配をも吹き飛ばすかのごとく、一般のお客さんはクイズにもインタビューにも積極的に回答して下さるという結果であった。30分という非常に限られた中でステージを完了させなければならないということから、一般の市民の方にステージ参加してもらうことは大きなリスクであった。しかしながら我々が実践し、考え抜いた「市民参加」のアイディアを新風館で一般の方と共有し、さらに「市民参加」について一般の方も我々と一緒になって考え、発言してくれたことは第55回日米学生会議と市民が一体となった証拠であり、ここにまた一つの大きな「市民参加」活動が達成されたのではないかと私は考える。まさに「ハイリスク・ハイリターン」である。

“♪Summer of seventy-two JASCers♪”

「上を向いて歩こう」をJASC風にアレンジした第55回日米学生会議のテーマソングが、新風館に合唱となって響いている。クロージングである。2003 年夏、京都。今ここに 36 名の日本側参加者と 36 名のアメリカ側参加者が一つとなり、「市民参加」を成し遂げた。

サイト・フォーラムコーディネーター後記　　堀抜功二

サイトコーディネーターを一言で表すと、それはストレスフルな役職だということに尽きるだろう。何もこの場で、しかも実行委員として独白する必要はない。しかしながら、会議から「解放」されるまでは、まるで会社の中間管理職のようでであった。上からは怒鳴られ、下からは突付かれ…。このコーディネーター後記が、今後の日米学生会議において果敢にもサイトコーディネーターに挑もうという後輩にとって、何らかの支えになれば幸いである。

サイトコーディネーターは、サイトに関係することは基本的にすべて関わる。もちろん、他の実行委員や会議参加者（サイトスタッフ）と協力しながらである。本会議前はサイトの理念、プランの作成に始まり、宿泊地、食事、交通の手配から具体的なサイトにおけるイベントまで企画立案運営をする。時には、参加者や関係者からのクレームの処理にも追われる。頭を下げる日が続く。考えただけでも、胃が痛くなってしまう。

しかしながら、それと引き換えに素晴らしい経験をすることができた。常々、人にはよくこのように言っていた。「下手なインターンシップをするくらいなら、日米学生会議の実行委員をやったほうが何倍も勉強になる」と。

この言葉は、今でも正しかったと信じている。名刺の渡し方など、学生生活の中で覚える機会など稀である。「拝啓　時下益々御清栄の段、誠に…」などという文書も書くことはないだろう。それだけではないが、一つひとつが、社会勉強であった。日米学生会議とは、単なる学生団体を超えた「事業」として成り立っている。対外的な関係のほとんどは社会であり、甘えは許されない。各方面から時には褒められ、時にはけなされ、怒られ、どやされ。日米学生会議の実行委員として、私は社会や関係する多くの人々に育てられたといっても過言ではない。

京都サイトは、本会議直前まで確定しない部分が多々あった。見切り発車で本会議を迎えたものの、一度動いた会議を止めることは誰にもできない。自分が一番不安であった。コーディネーターとしての責任。サイトはすべて、計画通りに上手く回るのか？日々そんなことを心配しつつも、一面で非常に楽天的な性格が「何とかなる」と思い込ませる。

結果的に、京都サイトも無事に終えることができた。「何とかなった」のである。もちろん、真摯に反省しなければならない点もある。

なお、末筆ながら京都サイトにおいて関係各位には本当にお世話になった。私の至らない点が、多くの問題を生み、ご迷惑をかけたと思う。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたい。また、これまで支えてきてくれた第55回日米学生会議実行委員会と参加者全員にもお礼を言いたい。

第４章

本会議――分科会活動

移住労働者と外国人コミュニティ

科学教育

企業活動と倫理

健康と安全

現代社会とジェンダー

市民活動と地域社会活動

天然資源

民主的政治システム

移住労働者と外国人コミュニティ

Immigrant Workers and Foreign Communities

分科会メンバー

安藤彩（お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科）
井手遊（広島大学国際協力研究科教育文化専攻）
小林悦子*（慶應義塾大学総合政策学部）
中村信之（立命館大学国際関係学部／American University）
Sarah LeBaron von Baeyer (Oberlin College)
Benjamin Larson* (University of Washington)
Jie Lin (Cornell University)
Eri Otaka (The City University of New York)
Nmerichi Umennachi (University of Southern California)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

国際社会のグローバル化と日米社会の少子高齢化に伴い、移住労働者と外国人の流入は、労働力の供給源として、また、より複雑化している社会構造を構成する主体として、日米両社会においてますます注視されるべき存在となってきている。当分科会では、日米社会における移住労働者と外国人を取り巻く環境と、彼らが直面している問題を分析し、その解決のために国、地方自治体や市民団体、そして一人ひとりがどのような役割を担うことができるかを検討することを目的とした。

活動内容

1. 事前勉強

1.1. 川崎市外国人市民代表者会議

川崎市役所の主催で月 1 回開催される外国人市民代表者議会を傍聴した。ここでは正規滞在の外国人代表者が日々の生活や子供の教育などの問題について話し合い、年に 1 度市長に政策提言をしている。一口に「外国人」といっても、日本滞在歴や民族的背景により、行政に求めるニーズや視点が異なることが見てとれ、興味深かった。

1.2. 国際シンポジウム

「多文化共生に向けて～東アジアにおける外国人・移民問題の最前線から」

国内外の大学教授や市民団体が参加したシンポジウムでは、日本における外国人労働者の生活と制度的な生活保障に関する現状報告やパネルディスカッションが行われた。シンポジウムを通して、分科会メンバーは日本社会における外国人の「住み分け」と「潜在化」という現状、さらに「多文化共生」の状態とは何を指すのか、という問題意識を新たにし、分科会テーマに関する重要なインプットを得ることができた。

2. フィールドトリップ

2.1. 慈眼寺

慈眼寺は新宿区中井にある真言宗のお寺で、境内にタイ仏教の建物が建っている。住職さんはタイで上座部仏教の修行をした際、現地の人々の温かさに感動し、帰国以来、日本で増えていた出稼ぎ労働者の中でもタイ人、ビルマ人の支援を行っている。労働や教育、法律に関する支援ではなく、お寺の境内を在日タイ人、在日ビルマ人たちのお祭りに開放したり、彼らの相談相手になったりするなど精神的サポートを主として行っている活動例として、非常に新鮮な力を感じた。

2.2. 市民団体 A.P.F.S.（Asian People's Friendship Society）

A.P.F.S.は、超過滞在労働者の生活をサポートしている団体で、在留特別許可申告の支援、定期的なメディカルチェック、気軽な電話相談窓口など、制度面と精神面の両側で外国人を支えている。「市民参加」の具体例として、その活動開始の経緯や地域住民との摩擦など、具体的なお話をうかがうことができた。

2.3. 東京ジャーミイ　トルコ文化センター（モスク）

モスクを見学した後、文化センター副代表の方にインタビューをした。日本におけるトルコ人コミュニティの歴史や特徴、モスクがイスラムコミュニティ全体に対して持つ意味、そして 9.11 後イスラム教についてもっと知ろうとする日本人が増えた話など、多岐にわたってお話いただけた。在日朝鮮・韓国人とはまた異なる在日トルコ人の歴史とそこから生じる視点の違いは、「在日外国人」の多様性を論じる上で非常に貴重な情報となった。

2.4. 超過滞在労働者の方への取材

韓国から出稼ぎに来ている超過滞在労働者の方の声を聴いた。出稼ぎの経緯や、職場の現状、摘発をおびえ知り合いの韓国人ネットワークを頼りにひっそりと暮らしている生活の様子など、その内容は衝撃的で、移住労働者の現実や、私たちが生きている社会構造・経済構造の生々しい現実を実感した。

2.5. 大阪府生野区コリアタウン

鶴橋のコリアタウンは、どこにでもある日本の商店街のようで、外観的にも周辺地域の中に溶け込んでいるようであった。実際にコリアタウンを訪れることで、このようなエスニックコミュニティタウンの存在を、日本社会からの空間的住み分け／調和のとれた住み分けと見るか、「共生」の証とみるか、その意味合いについて問題意識が刺激された。

3. 講演「アメラジアンとアメラジアンスクールの現状」

琉球大学法文学部人間科学社会学専攻　野入直美氏

沖縄に多く存在するアメラジアン（米軍アメリカ人と現地女性との間に生まれた子供）は、社会的に様々な差別を受けている。講演後の質疑応答及び議論では、米軍基地に対する穏やかならぬ沖縄県民感情のはけ口としてのアメラジアンへの差別、そして沖縄におけるアメラジアンに関する教育や情報発信の不足などが論点となった。

総括

日本には多くの外国人がいる。一言に外国人といっても、来日の事情や日本における生活環境、社会的地位は様々である。合法的な滞在資格を持ち外国人のための議会で自らの希望を表明する機会を持つ者もいれば、いわゆる単純労働に従事する出稼ぎ労働者として来日し、超過滞在の摘発を恐れひっそりと暮らす者もいる。また同じ不法滞在者でも、日本の市民団体との連携や独自の相互互助ネットワークを駆使し、生き生きと暮らす外国人もいる。

この分科会では、日本に暮らす外国人の多様性――その暮らしぶりや社会との接点、コミュニティ形成や外国人を取り巻く環境の多様性――に着目した。フィールドトリップでは、外国人議会や不法滞在者の生活を支援する市民団体、タイ人の精神的支援を行うお寺やイスラム教徒が集うモスク、鶴橋のコリアタウンを訪れた。そんな中で、強く気付かされたことがある。それは、外国人を取り巻く現状が、決して日本社会の制度的構造だけにより規定されているわけではないということだ。そこには多様な human network が存在し、各外国人が主体的な状況選択を行い、構造的な条件を迂回できるよう、様々な生活、支援の形態が生まれていたのである。海外で、銭湯で、パチンコ屋で…。何気ない接触をきっかけに、日本人と外国人との連携が組織化され、同じ境遇にいる外国人同士のコミュニティが少しずつ形成されている。日本人と外国人が歩み寄り、快活な生活を送るためには、私たち一人ひとりが human to human の接触に喚起された感情を行動に移していくこと、ネットワークを少しずつ広めていくことが求められるだろう。

科学教育

Scientific Literacy

分科会メンバー

江川響子*（京都大学農学部）
野口なつ美（東京医科歯科大学医学部医学科）
藤井秀之（中央大学総合政策学部政策科学科）
横田聡（京都大学医学部医学科）
Christopher Cataldi (Stony Brook University)
Jill Kunishima (Mills College)
Kristine Tyson (Cornell University)
Rebecca Weisinger* (Columbia University)
(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

科学教育分科会は、科学教育、科学と社会の関係について考え、実際に科学教育の現場で実行しうる具体的な提言を行うことを目指した。そのため、分科会では、

1）科学政策立案、決定過程への市民参加（STS: Science, Technology and Society など）
2）科学知識に対する特定グループの排除（「理系」、「文系」の隔絶）
3）研究における平等（教授の権限や、科学の研究現場への女性の進出に関する問題について）
4）科学報道に対するメディアリテラシーの必要性

などのトピックを中心に議論を進めることを目的とした。

活動内容

1. フィールドトリップ

1.1. 「日経サイエンス」編集部

「理科離れ」が進んでいると言われている現在、メディアの果たす役割は大きい。メディアはどのように、科学ニュースを提供しているのだろうか。私たちは「日経サイエンス」編集部を訪問し、大衆にどのように科学情報を分かりやすく提供しているのかなどについて話をうかがった。「日経サイエンス」は "Scientific American"の日本語版であるが、すべてが翻訳というわけではない。当然日米で話題になる科学問題は異なるので、日本で話題になっている科学問題については「日経サイエンス」編集部が独自に調査し、専門家に依頼して書かれている。日本の大衆にとって身近な問題を取り上げることで興味を持ってもらおうという「日経サイエンス」側の努力が感じられた。

1.2. 科学博物館巡り in 東京

東京サイトでは、フィールドトリップとして、お台場にある「日本科学未来館」や渋谷にある「塩とタバコの博物館」、「NHK スタジオパーク」などに行った。市民、特に子供たちにとって、このような科学博物館の存在は、子供たちに科学に対する関心を持たせる上で非常に重要である。実際、私たちが訪問した時も夏休みということもあり、多くの小中学生がいた。子供たちが自分でこのような博物館に来ることで、科学の面白さを体験してもらいたい。

また、私たちが科学の啓蒙において重要な役割を担うと注目したのは、インストラクターである。現在日本の博物館で働くインストラクターはどのような人たちなのだろうか。「塩とタバコの博物館」において、小学生向けの実験のデモンストレーションを行っていたインストラクターにお話しをうかがった。残念ながらこれらについてリサーチ及び議論する時間はあまりなく、今後の私たちの課題といえるだろう。

2. 合同分科会

私たちの分科会では、京都において高校生と「科学教育」について考える合同分科会の時間を設けた。私たちの分科会に参加した高校生はほとんどが文系であったため、彼らがなぜ「理科系科目」に興味を持てなかったのか、またどうすれば興味がもてるのかなどを議論した。そして、最後に「卵落としコンテスト」なるものを行った。これは、ボール紙のみを使って、高い所から卵を落としても割れないような入れ物をつくる、という実験だ。現在の高校の理科教育では実験が少なく、またあったとしても教科書どおりのことをするので面白くない、という意見があった。この「卵落としコンテスト」を行うことによって、少しでも柔軟な思考力によってアイデアを生み出す面白さを感じてもらおうという意図があった。

3. テーブルセッション

私たちは現在の学生がどの程度科学に対して興味関心があるのかを知るために、アンケートを作成した。これらのアンケートは第55回日米学生会議参加者、沖縄の大学生、韓国の大学生、高校生などに配布した。これらの多くの学生が文系であったこともあり、科学が重要であるという認識はあるものの、メディアに依存していることがわかった。また、メディアが報道する科学問題を批判的に捉える学生が少ないことも明らかになった。

総括

1. 成果

「日経サイエンス」へのインタビューや科学博物館の訪問、高校生との議論、アンケートによる学生の科学意識調査など様々な調査を行うことで、現在の日本における大衆の科学意識がある程度把握できたといえるだろう。しかし、具体的な提言について議論することができず、日本の科学教育の現状把握だけに留まった感が否めない。

2. 今後の活動

私たち「科学教育」分科会は事後活動として、分科会のホームページ作成及びメールマガジンの発行によって、会議中には達成できなかった社会提言について考えていく予定である。これらの事後活動を続けていくことで、「科学教育」分科会当初の目的であった、「実際に科学教育の現場で実行しうる具体的な提言を行う」ことができることを私たちは信じている。

企業活動と倫理

Business Ethics

分科会メンバー

今中由希子（慶應義塾大学総合政策学部）
坂口紋野（慶應義塾大学商学部）
鹿谷幸史*（東京大学法学部）
野口直子（慶應義塾大学法学部政治学科）
宮崎慎太郎（神戸大学経営学部経営学科）
Jeff Hutchins (North Carolina State University)
Katy Liu (New York University)
Oanasolape Onakoya (Howard University)
Aziza Zakhidova (University of Pennsylvania)
(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

企業の経済活動の本質的な目標は、利潤追求による社員や株主の経済的満足である。しかし企業活動が大規模になり、人間社会や自然環境に大きな影響を与えるようになった現代においては、「社会や環境を守り、維持していく」という現代的な社会の要請に応える形で企業の短期的、長期的目標を修正して初めて、企業活動の持続可能な発展は可能となる。

当分科会では倫理的な企業活動とは何かを考え、その実践を促進する方法について、具体的な提案を行うことを目的とした。

活動内容

1. フィールドトリップ

1.1. オリックス株式会社（事前活動）

企業の中で実際に行われている企業倫理を学ぶことを目的として、商法改正を受け、「委員会等設置会社」に移行したオリックス株式会社にお話をうかがった。「委員会等設置会社」は、米国流の企業統治システムを導入し、経営改革をしようという動きにのっとったものである。世の中に出回っている企業の倫理的活動を評価する基準には必ずしも当てはまらない、企業倫理活動があることを学んだ。また、企業の特性であるお客様第一主義に関する理解を深めた。

1.2. 日本コカ・コーラ株式会社

コカ・コーラグループは責任ある企業市民であることを企業理念に掲げている。対外向けに行われている企業の倫理活動について学ぶことを目的としてお話をうかがった。今回の訪問でコカ・コーラボトラーズが行う社会貢献や、ペットボトル市場における、アメリカ市場と日本市場での動きの違いなどを知ることができた。利益を生み出してはじめて企業の倫理は成立するのだと実感した。

1.3. 内閣府産業再生機構

不良債権の本格的処理を支援するため今年の春設立された内閣府産業再生機構を訪問した。内閣府産業再生機構は危機に陥った日本企業を立て直すため、経営状況に応じて企業内では統廃合を促し、対外的には銀行間での利害を調整している。バブル崩壊後その処理に追われる日本企業は、現在どのような問題を抱え、政府はそれに対してどのような政策をとっているのかについて理解を深めた。

2. 講演

2.1. 大高巽氏

明食サービス株式会社の社長であり、倫理研究所の法人会員団体のメンバーでもある大高巽氏にご講演をいただいた。講演を通じて、企業倫理の理念やこの研究所が指導する中小企業での倫理の実践方法について学んだ。研究所に加盟する中小企業が年々増加しているという説明から、企業倫理に対する関心が確実に高まっていることを実感した。

2.2. 曳野孝氏

京都大学の曳野孝助教授からご講演をいただいた。企業倫理が持つ性格として、アメリカでは経済に対して、日本では社会に対してという違いがあるなど、新たな視点を提供して下さった。また、誰もが企業倫理を良いことだと理解しつつも、実際には企業倫理は社会に根付いていないとして、市民意識の低さの原因は何なのかについて、より具体的に考える機会を得ることができた。

3. ディスカッション

始めに、それぞれのメンバーがどの分野の企業倫理について関心があるのか、事前に勉強してきたことは何かについて意見を交わした。分科会メンバーの関心は大きく分けて、環境、地域社会活動、コンプライアンス、企業倫理の根付き方、など多岐に渡った。

ディスカッションを始める前に、企業倫理に対する意識統一を図り、アメリカ側参加者の一人である Jeff Hutchins の論文 "Creating Responsible Competitive Markets"（企業責任を伴った競争市場の創造）を読み、それをベースにディスカッションを行った。ディスカッションを通じて企業倫理に関する基礎知識を共有することができた。さらに、フィールドトリップで得た新たな視点をもとに、企業倫理の現状に関する問題提起を行い、更なるディスカッションを重ねた。

しかし、やがて各人の興味のばらつきが一層大きくなってきたため、メンバーの興味関心がどこにあるのかを再確認し、今後の分科会の方向性を検討する作業に大幅な時間を割くこととなった。言語の壁に加え、ディスカッションの展開をさらに促進させていくだけの新たな資料を手に入れることができないという環境に、議論が行き詰まることもしばしばであった。

最終的に、現在の企業倫理における最大の問題は人々にその内容が知られていないことにあるという点で意見が一致し、アンケートを作って、実際にどれだけの人が企業倫理について考えているのかを、日米学生会議の参加者をサンプルに考えることとなった。この調査をもとに、一般市民の企業倫理に対する意識を少しでも向上させることが当分科会に今できることだ、という意識の統一が図られ、京都フォーラムでの発表に向けて話し合いや考察を続けた。

4. 京都フォーラム

京都フォーラムでは、市民の企業倫理に対する関心度を上げることを、当分科会の最大の目標した。まず企業倫理とは何なのかということについて、国際化、情報開示、消費者志向、社会との共生、環境保護、男女平等、企業倫理、障害者雇用、公平な職場、をキーワードとし、カードめくり形式で説明した。次に企業倫理とは誰に関わる問題なのかを、株主、役員、従業員、市民社会、消費者、NGO、の 6 つの立場から考えてもらった。また、企業、市民社会、政府の三者が連携する社会構造の中でこそ、企業倫理の徹底が実現しうる、とのメッセージを図示した。日米学生会議のメンバー全員を対象として行ったアンケートの集計結果もグラフ化し、学生間における企業倫理の認知度などについて、分科会内で話し合われた考察を展示した。

総括

当分科会では、コーポレートガバナンスに代表される内的浄化や、社会貢献活動に代表される外的活動すべてを含んだ、企業倫理活動について話し合った。ディスカッションでは、企業の行う倫理的活動の重要性が再確認されたと同時に、大切だと認識されつつも不況などの社会状況によっては必ずしもその実践が徹底されていない不安定な状態にある企業倫理を、どのようにすればより社会に根付かせることができるか、が主な論点となった。

企業倫理は皆良いことだと言うが、その実践となるとなかなか実現されずにいた。なぜなら、企業が倫理活動を遂行しようとしまいと、市民における企業に対する権利者意識や社会全般の倫理に対する関心が高くない時は、倫理活動の不徹底が企業の立場を揺るがす要因にはなりえなかったからである。しかし昨今、日本では雪印、アメリカではエンロンに代表される大企業による、消費者の信頼を裏切る不誠実な企業活動が明らかにされ、企業活動における倫理の退廃に対する社会的関心が、高まっている。

そのため、ただ利益追求にのみ邁進するという姿勢を改め、その企業活動がどのような影響を社会に与えることになるのかを考慮することが、企業に求められるようになった。日米両国においても、法的にこれらの要請を企業に課す動きが活発になりつつある。

しかし、企業はただ法律だけを守っていればよいのだろうか？法律以上の倫理を企業に実行させるには、市民の企業倫理に対する意識の向上が必要である。市民が、社会をより住みやすい場にしたいとの声を上げ、社会を形づくる企業や政府に対してその発言力を高めていくとともに、互いに連携してくことが理想であろう。

企業に属したことの無い学生に企業倫理の何が分かるのか、というご指摘もあるかも知れない。しかし、一学生でしかないからこそ、学生には守るべき秘密も、触れてはならないタブーも、隠すべき問題もない。学生という立場を生かして様々な場に身を置くことができるからこそ、一消費者として、素直な疑問や批判、他社・他国との比較、そして直接的な要求を企業活動に投げかけられるのではないだろうか。また、企業倫理を求める声を学生が上げることで、学者やメディアよりも新鮮な影響力を、生活者、そしてやがて企業活動を担うことになる同年代の学生に与えることができるのではないだろうか。

京都フォーラムで、当分科会が目指したのもまさにこれである。一学生、一消費者でしかないからこそ、分科会メンバー一人ひとりが企業倫理に対する理解度を上げ、フォーラムを通じてそれを社会に示すことが重要だと考えた。フォーラムを通じて少しでも来場者や日米学生会議参加者の間に、企業倫理に対する意識の高まりを促すことができたとすれば、今回私たちが企業倫理を考える意味が大いに深められたといえよう。

企業倫理は、「利益追求によって生まれた不具合に対する調整原理」だという見方がある一方、「企業の利益を追求するだけでなく社会全体の利益を追求する方法」だという見方もある。どちらにしても、企業倫理の質を高めるにはより一層の市民の関心、消費者の関心が高まることが必要であり、そのためにはまず知ること、そして各自が自分の属性や立場を活かして動き出すことが重要であろう。

健康と安全

Domestic Health Issues

分科会メンバー

阿部幸音（東京都立大学法学部政治学科）
阪野葵（東北大学教育学部）
西納由紀*（一橋大学法学部）
福家雄大（立命館大学国際関係学部）
Michael Baik* (University of Texas at Austin)
Carmen Cheung (Wesleyan University)
Leah Mullen (Mills College)
Gabriel Rosen (Portland State University)
Asuka Terasaki
(University of Nebraska, Lincoln)
(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

世界的に見て、日本とアメリカは高い生活水準を実現している。しかし、日常生活における衛生や食料が比較的十分に保障された環境にあっても、なお検討されるべき健康に関連した問題は多くある。当分科会では、人々の健康で安全な暮らしの実現を考えるために以下の分野に注目した。

1) 社会福祉について。少子高齢化が進行する社会においてどのような福祉体制が求められているか検討する。具体的には、近年増加傾向にある自殺の実態と防止の取り組みや学習障害児の実態など、いまだ社会的認知度の低い問題について考える。
2) 性教育について。エイズを含む性感染症や10代の妊娠の増加、売春の低年齢化など、性に関連した問題の深刻化を防ぐために、特に若年層にどのような性教育が必要とされているのかを考える。
3) 食事情について。極端なダイエット志向や、そのような心理から発生する摂食障害の実態と、食習慣が一因となる成人病及びそれらの対策について検討する。
4) 緊急事態対応体制について。地震のような自然災害やSARSのような予期せぬ伝染病の発生など、人命が危機にさらされる事態に、より迅速に対応するためにはどのようなシステムが有効とされるのか検討する。

活動内容

1. テーブルセッション

事前準備として分科会メンバーが用意した小論文を担当者が発表し、議論を重ねた。

1.1. セッション#１

各メンバーの自己紹介と、プレゼンテーション日時決めを行った。

1.2. セッション#2

フィールドトリップ（後述）

1.3. セッション#3　プレゼンテーション（論文概要）

1.3.1. "The Provisions for Eating Disorder at University"：阪野

痩せ願望と不規則な食生活ゆえ、学生は摂食障害に陥りやすく、また一人暮らしの学生の多くはその食事を大学の食堂に頼る傾向がある。それゆえ、大学側にも学生の食の健康に対する責任があるといえ、具体的には以下の提案が挙げられる。大学食堂側は学生の意見や健康的なメニューを積極的に取り入れ、大学は定期的に学生の健康診断を行うことが望ましい。また、すでに摂食障害に苦しむ学生や周囲の者に対するサポートとして、小冊子やホームページでの情報提供、保健管理センターへ学生が気軽に訪れることのできる環境づくりなどが求められている。

1.3.2. "Disordered Eating and Obesity in the United States and Japan"：Rosen

アメリカのみならず、近年日本でも増加傾向にある肥満。その原因として、あらゆる加工食品が糖類を使用しており、またそういった加工食品が大量に消費されている現状がある。同時に過食症や拒食症も、マスメディアにより創り出された理想の body image に影響を受けやすい若者がその患者の大半であり、摂食障害は社会的、文化的な要因が深く関わっているのである。

1.4. セッション#4　プレゼンテーション（論文概要）

1.4.1. "SARS, Severe Acute Respiratory Syndrome, A Strong Impact on the Economy"：Terasaki

SARS が世界的に広まっていく中で、アメリカと日本における経済的影響や社会福祉制度を比較した。患者の管理システムを構築することや、新しいワクチンの開発には時間と費用がかさむ。また社会福祉制度の整っていないアメリカでは、SARS の流行に公的機関が上手く対応できていなかった。日本の場合、SARS 患者こそ発生しなかったものの、輸出･航空･旅行業界では大幅な収益減少に苦しんだ。しかし全体として、SARS 患者が減少しているのは良い兆候だと結論づけている。

1.4.2. "SARS, Severe Acute Respiratory Syndrome, Government Policy in China, Vietnam and Japan" ：阿部

世界的に流行したSARSであるが、感染が同時期に広まったにもかかわらず全く異なる結末を辿った国があった。中国とヴェトナムである。政府主導の情報隠蔽によって大量の犠牲者を出してしまった中国に比べ、ヴェトナム政府はまず、初期段階での情報公開と他国からの援助の受け入れ、また患者隔離と接触者追跡調査を徹底し、加えて医師達の独自の方針、つまり日光消毒と換気によってわずか2ヵ月でSARS制圧に成功したのであった。今冬再び感染拡大の恐れがあるとされるSARSに備えて、日本も警戒態勢を緩めず、ヴェトナム政府のすばやい対応から学ぶべき点は多いだろう。

1.5. セッション#5　合同分科会

健康で安全な生活のためには差別のない社会の実現が不可欠であるとの観点から「現代社会とジェンダー」分科会と合同勉強会を持った。講師は同性愛者などの法的サポートにご尽力されている中川重徳弁護士で、同性愛者が「府中青年の家」の宿泊利用を東京都に拒否されたという事件における訴訟で、いかに同性愛者の視点で争ってきたかということについて貴重なお話をうかがうことができた。

1.6. セッション#6　プレゼンテーション（論文概要）

1.6.1. "The Need for Long-term Health Care in the Progressively Aging Society in the United States." : Cheung

急速に進む高齢化社会において、高齢者のhealth care systemの運用は、その長期的ケアの必要性ゆえに財政的問題が生じている。また日本のような健康保険制度のないアメリカでは、受けられる医療の質も貧富の差と比例しており、そのことはアメリカ国内の平均寿命が他の先進諸国と比べて低いこととも関係している。高齢者のmanaged careを充実させるためにアメリカ政府は今後財政の使い道を修整していく必要があるだろう。

1.6.2. "Learning Disabilities— I didn't listen to the teacher, the clock, and to the bathroom door open and close" : Mullen

かつてはただの「変わっている子」、「落ち着きのない子」としてしか扱われることのなかった子供たちには、自閉症児や注意欠陥多動性障害児の他に、日本では未だ社会的認知度の低い、学習障害児（LD児）と称される子供たちもいる。LD児は大抵の場合、適切な支援を行えば日常生活にはほとんど支障がないにも関わらず、彼らはかつてその名の通り「障害」があるとされていた。しかし近年になってLD児は障害があるのではなく、他の子供たちとは異なるステップで物事を学習するのだという認識に変化してきている。日本でもLD児に対する正しい情報と認識と深めるべきである。

1.7. セッション#7

那覇市観光を行い、「一万人のエイサー祭り」を見学した。

1.8. セッション#8

フィールドトリップ（後述）

1.9. セッション#9　プレゼンテーション（論文概要）

1.9.1. "The Case for Comprehensive Sexual Education"：Baik

アメリカにおける性感染症（STD: Sexually Transmitted Disease）感染率は他の国と比べて50～100倍高いと言われ、また性行為の低年齢化とともに望まない妊娠やHIV感染者は1時間に二人の割合で増加中である。このことからも若者に対する性教育の必要性は明白であるが、性教育に関する二つの議論がある。一つは禁欲を説く方法（Abstinence Only：AO）であり、もう一つは避妊法や感染症予防を視野に入れた性教育方法（Abstinence Plus：AP）であるが、STDやHIV感染拡大の現状を考えると、後者のほうが有効であろう。

1.9.2. 「HIVを考える～理解と対策の日米比較～」：西納

HIV拡大阻止のための取り組みを国家、社会、個人レベルにおいて日米比較を行った。特に日本においては、薬害エイズ問題のようなことが今後起きないために、そして感染者に対する偏見や人権侵害を取り除くためにも国家、社会レベルでの取り組みが求められるが、アメリカのケースから学べる点は多い。また日米両国にとって性教育の重要性は言うまでもないが、各家庭でも性がもっとオープンに語られるような環境があるべきではないだろうか。

1.10. セッション#10

京都フォーラム会場「新風館」の下見をした。

1.11. セッション#11　プレゼンテーション（論文概要）

"The Suicide Issue"：福家

日本では1998年以降、不況による中年男性の自殺が増加している。心の病が原因とされる自殺だが、WHOによると精神的病の罹患率は国によってほとんど差異がないとされる。また統計によれば自殺の割合は国によって異なり、これは、自殺に社会的要因が大きく関わっていることを示している。自殺防止のために、国家レベルでは、他国とも情報を共有できるようなシステムを構築したり、また個人レベルでは自殺に対する偏見をなくすことや、教育の現場で自殺について考えさせる機会を与えたりすることが必要である。

2. フィールドトリップ

2.1. パナソニックセンター

7月30日、東京サイト「パナソニックセンター」にて、最新の健康器具や環境に優しいエコ商品の体験や見学を行った。

2.2. 糸満市高齢者健康づくりセンター願寿館

8月4日、沖縄サイト「糸満市高齢者健康づくりセンター願寿館」を訪れ、地域リハビリテーションへの取り組みを見学することで、高齢者福祉の理想的なかたちと現状への理解を深めた。

3. 京都フォーラム

フォーラムでは各自が担当したテーマについて、「市民参加」の視点から一般来場客にも興味を持っていただけるよう、分かり易い説明や目に付きやすいレイアウトを考えたパネルでの発表を行った。その際、社会に対する注意喚起や提言などを可能な限りしていきたいとの思いから、分科会セッションにおけるディスカッションと、各自の小論文に基づいた説明に力を入れた。

総括

主に日本側の参加者はフォーラムにおいて短期的目標の成果を発表したいと考えていた。すなわち、社会に対して何らかの有益な情報を発信することである。会議当初は、相互理解を深めるという長期的目標とは別に、この短期的目標がアメリカ側参加者と共有することができないという葛藤があったが、多くの議論や全体での話し合いを通して、次第にこの短期的目標の達成をも視野に入れた分科会セッションとなっていった。例えば、"The Need for Long-term Health Care in the Progressively Aging Society in the United States"のプレゼンテーションで高齢化社会に対応した市民参加型プログラムの必要性を認識した分科会メンバーは、長寿で有名な沖縄県糸満市の健康センターへのフィールドトリップを急遽計画し、同様のプログラムの必要性をフォーラムで紹介することができた。この体験は、日本のように国民皆保健制度を持たないアメリカ社会にとっても参考になるものだ、とアメリカ側参加者は感じたようで、結果として相互理解という長期的な目標達成にも繋がるものであった。

このように短期的目標、長期的目標を立て、その達成に向かって一丸となれたことは、この会議を通して得ることのできた最良の経験であった。

現代社会とジェンダー

Gender Issues

分科会メンバー

鈴木理絵*（筑波大学修士課程教育研究科）
友利将悟（琉球大学法文学部）
乗竹亮治（慶應義塾大学総合政策学部）
原奈央（関西外国語大学外国語学部）
吉野茉美（法政大学社会学部）
Tiffany Hirata (University of Washington)
Leona Middleton*
(Washington University in St. Louis)
Kristen White (University of Kansas)
Patrick Wyant (West Chester University)
Zijing Zhang (New York University)
(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

現代社会とジェンダー分科会は、社会的・文化的性差に関する問題、すなわちジェンダー問題について日米の視点から現状を把握し、より良い社会の在り方を模索することを目標に討論を行ってきた。会議参加者である学生が、他の世代や他の価値観を持つ者など、バックグラウンドを異にする者、共通の問題意識を持つ者、あるいは無関心な者を含む社会に向けて疑問や提言を投げかけ、それぞれの立場の架け橋となることを当分科会の方向性とし、討論、講師を招いての勉強会、社会発信の場を設定した。

ジェンダー問題はその範囲が広く多岐にわたるため、抽象論に陥りやすいといえる。そこで当分科会は、①社会的性役割（身体イメージ）、②社会的性差別（同性愛者の人権）、③伝統的家族観（戸籍）、の３つのトピックを取り上げ、討論を行った。これらのトピックが、本会議テーマである「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」とどのように関連しているか後に考察するが、分科会を通して浮かび上がってきたものは人の多様性であった。ここに討論の実を報告する。

活動内容

1. 分科会スケジュール

7月28日（月）	#1	自己紹介及び分科会の方向性についての話し合い
7月30日（水）	#2	Body Image：The Cult of Thin-ness
7月31日（木）	#3	社会的性役割
8月 1日（金）	#4	同性愛者の人権問題
	#5	弁護士・中川重徳氏による勉強会
8月 3日（日）	#6、#7	日本における戸籍
8月 4日（月）	#8	各自リサーチ
8月13日（水）	#9、#10	京都地元高校生交流企画
8月15日（金）	#11	京都フォーラム準備

2. 討論内容

2.1. 社会的性役割：身体イメージ

アメリカにおける深刻な女性問題の一つに、痩せ願望による摂食障害が問題となっていることから、身体イメージとジェンダーがどのように関っているのか討論した。討論の視点としては、時代、男女の性差による身体イメージの差異があるのか検討した。

まず欧米における身体イメージは時代による意味付けによって変化し、日本においても同様のことがいえるという意見が出された。例えば20世紀前、豊かさを象徴するふくよかな女性が好まれ、工業化商業化が進んだ1920年代は、効率化という観点からスリムな身体イメージが求められた。戦時中は「産めよ増やせよ」の下、健康的な女性像が、そしてマスメディアが発達し飽食の時代である現在においては、コマーシャリズムの煽りと自己コントロールという観点から痩身の女性像が求められていると確認した。

次に男女の性差による身体イメージについてであるが、（日米において）女性は男性に比べ身体的なことで評価される傾向があるという意見が出された。例えば人間の行動について、男性が成果や能力、地位で評価されるのに対し、女性は男性のそれに加え、「女性はホルモンの影響で感情的である」という判断や外見による評価が女性を縛っているのではないかと討論した。そこで、男女の性差によって身体イメージに違いがあるのかを明らかにするため、日米学生会議参加者対象にアンケートを行った。

アンケート項目は全部で7項目設けたが、各々の身体イメージについての大きな男女差はみられず、結果に男女の違いが現れたものはパートナーに求める条件であった（表1）。パートナーに求める条件をみると、男性が身体条件を挙げているのに対し女性は性格的事柄を挙げているところに特徴があると思われた。この結果は異性愛のコンテクストにおい

て、男性が女性に対し身体的条件を求めることが、女性の外見に関する意識過剰を促していると読み取ることができた。(性的指向を問うていないので、必ずしも男女のカップルに限らないことに注意されたい。) また、日米男性に共通する条件「背が低い」は、男性のプライドの現れなのであろうか、興味深く思われた。

身体イメージ及び社会的性役割は、時代によって変容することが明らかとなり、固定化されるべきものではないという結論に当分科会は落ち着いた。身体イメージや社会的性役割が、一体誰にとっての何のためのものであるのか、マスメディアに翻弄されることなく批判眼を持って現代社会をみていく必要性を考えさせられたトピックであった。

表1　パートナーに求める条件

	男性	女性
米国	1. 体型がよい 2. 気が利く 3. 背が低い	1. 自信のある 2. 知的な 3. 気が利く
日本	1. 面白い 2. 背が低い 3. やさしい	1. 知的な 2. 自立した 3. 親切な

2.2. 社会的性差別：同性愛者を取り巻く現状

社会的性差別の中でも同性愛について取り上げ、日米の同性愛者を取り巻く現状の把握に努めた。まず現状把握の前提として、同性愛の歴史を概観した。西欧社会における同性愛が敵意の対象となったのは12世紀以降、中世盛期の法治国家の出現により国家が人間の私的側面を規制し、多数派からの逸脱（同性愛）は不吉で脅威的なものとみなされていたことを確認した。同性愛に対する寛容の現れは20世紀以降、ゲイを処罰から解放する動きとして西欧で現れ、アメリカでは70年代に同性愛者の解放運動が展開し、一方男色の伝統がありゲイの処罰規定のない日本では、80年代に同性愛者が社会的認知へ向けて行動を始めたことも確認した。(90年代日本における同性愛者の権利主張に関しては、勉強会「府中青年の家」裁判のところで述べる。)

現在アメリカでは、積極的に同性の婚姻を求める動きがあり、また同性カップルが事実婚の一つとして法的保護が認められている州がある一方で、同性愛行為を犯罪とするソドミー法が採用されている州もあり、州によってその対応が大きく異なるようである。日本においては、同性カップルの婚姻や法的保護は認められておらず、同性カップルの社会的認知がなされているとはいえない状況である。以下（表2）の内容が討論で出された。

表2　同性愛者を取り巻く現状・日米比較

	アメリカ	日本
宗教的背景	キリスト教	仏教・儒教
法的保護	・ 同性間の登録パートナーシップ制度（ニューヨーク州、カリフォルニア州、ハワイ州） ・ シビル・ユニオン法（バーモント州）	特になし
性教育	・ 小・中・高等学校において同性愛についての説明はあるが、異性愛のそれと比べると記述は少ない。 ・ 大学レベルでは、多くの学校でオープンな議論及び活動がなされている。	・ 小・中・高等学校において同性愛についての説明はあるが、異性愛のそれと比べると記述は少ない。 ・ 大学レベルでは、同性愛者のエンパワメントのためのサークルが立ち上げられつつあるが、オープンな形をとっていない。
カミングアウト	家族・宗教・州・人による。	家族・土地・人による。
同性愛のイメージ	マイナスイメージ／ファッション／芸術	マイナスイメージ／笑いの対象／ファッション／芸術家・芸能人

2.3　同性愛者の人権：勉強会　「府中青年の家」裁判　（講師：中川重徳氏）

東京オリンピックセンターにて、弁護士である中川重徳氏を講師としてお招きし、当分科会と「健康と安全」分科会とで合同勉強会を行った。中川氏は「府中青年の家」裁判で、日本において初めて同性愛者の権利について法廷に持ちこみ勝訴に導いた方で、事件や裁判の過程で、経験されたことを中心にお話しされた。お話しの後は質疑応答を通して意見交換を行った。以下、「府中青年の家」裁判の概要を基に報告する。（中川氏のコメントは斜体文字で示す。）

2.3.1　発端

1990年2月、「動くゲイとレズビアンの会」（旧称アカー）が東京都府中青年の家で合宿中に、他団体による差別や嫌がらせを受けた。青年の家所長は、嫌がらせに対処するよう要請したアカー側に対して、「都民のコンセンサスを得られていない同性愛者の施設利用は今後お断りする」と発言、東京都教育委員会は同年 4 月、「男女は別室に泊まらなければならない」という慣例（男女別室ルール）を楯に同性愛者の宿泊利用を拒否したことが事件の発端となった。

2.3.2 東京都を提訴

アカーは1991年2月、東京都教育委員会決定を不服として東京都を提訴した。

原告：動くゲイとレズビアンの会（旧称アカー）

被告：東京都

東京都は「男女別室ルール」を楯に反論。

（以下、斜体文字は中川氏のコメント）

「裁判を起こした当時、弁護士は私と森野嘉郎弁護士の二人だった。先輩の弁護士の中には『時期尚早だ』、『青年の家のような教育施設となると、行政の裁量が広く認められてしまう。もっとケースを選ばなければダメだ』と言うような人も多かった。アカーや私たちにとって大きかったのは、海外で同性愛者の権利のために闘ってきた人々の励ましだった。

当初は『男女別室ルール』をどう切り崩してよいか分からなかったが、全国の青年の家に向けて、男女で泊まれるか、と電話で調べてみると、実は男女でも泊めている施設が出てきたり、行政の施設であっても『男女の部屋割りはグループの責任に任せる』と規則に書いてあることが分かり、大きな壁が崩れた。また、サンフランシスコ教育委員会委員長トム・アミアーノ氏（同性愛者だということを公表して教育委員に立候補しトップ当選した人）を証言者として呼んだ。」

2.3.3 第一審判決

1994年3月にアカー側が完全勝訴。

判決は、同性愛者について「男女別室ルール」を理由に拒絶するという単純な考え方自体が違法であると認めた。「同性愛・同性愛者について」という項目を設けた。中川氏によれば、これは同性愛も異性愛も人間の性的指向の一つとして、双方を同列に置いた定義を述べたという点で、非常に画期的なものであった。

2.3.4. 東京都控訴

1994年4月、東京都は東京高裁に控訴。

控訴人：東京都

被控訴人：動くゲイとレズビアンの会（旧称アカー）

東京都の主張は大きく変わり、これまで「同性愛とか同性愛者ということが問題でなく、性的に惹かれる者同士が同じ部屋に泊まるのが問題」と言っていたものが、高裁では「同性愛という性的指向を、性的自己決定能力を十分に持たない小学生や青少年に知らせ混乱をもたらすこと自体が問題である」とその主張を変えた。それに対しアカー側は、「その混乱とはどういう混乱なのか、混乱すると主張する研究やデータはあるのか」、「アメリカではレズビアンのカップルと暮らしている子供たちと、異性愛者の親と暮らしている子供たちの知的な発達や性的指向の形成、自尊心などを比較して違いがないという実証的な研究がたくさんある」と反論。東京都は有効な反論を出さないままこの件についての主張を控えた。

2.3.5. 高裁判決

1997 年 9 月、アカー側勝訴。判決は、「平成 2 年当時は、一般国民も行政当局も、同性愛ないし同性愛者については無関心であって、正確な知識もなかったものと考えられる。しかし、一般国民はともかくとして、都教育委員会を含む行政当局としては、その職務を行うについて、少数者である同性愛者をも視野に入れた、肌理の細かな配慮が必要であり、同性愛者の権利、利益を十分に擁護することが要請されているものというべきであって、無関心であったり知識がなかったりということは公権力の行使にあたる者として許されないことである。このことは現在ではもちろん、平成 2 年当時においても同様である」と述べ、「都教育委員会にも、その職権を行うにつき過失があったというべきである」と結論付けた。

最後に中川氏は、友人からの「カミングアウト」や「府中青年の家」裁判を通して、異性愛中心の社会を見つめ直したことを、例を挙げながら加えた。飲み会の席で同性愛を笑いの「ネタ」にした会話の中で、自分はどのように応えればよいのか。黙っていれば、その場を逃れることはできるが後になって自己嫌悪し、「ネタ」にするのは良くないと言えば、場はしらけてしまうという。中川氏のこのような葛藤は、現実場面における自分自身の問題として疑問を投げかけているように思われた。

2.4. 伝統的家族観：戸籍

現代社会とジェンダーを考える上で日米の違いに焦点を当て、日本独自の戸籍について取り上げた。そして、戸籍の存在がどのように日常生活に浸透し、人々の意識や家族観に現れているのかを検討した。

日本における戸籍は、個人の家族関係や特性に関る事実を登録し、公証する制度としてその役割を果たしている。しかし、家族単位の登録制度になっているため、標準的家族像を示すことによって他の家族形態を差別し、戸籍筆頭者の特別扱いから家意識と家父長制意識を温存するなどの問題点が日本側参加者から挙げられた。戸籍筆頭者に関しては 9 割以上が男性であり、また戸籍における続柄記載に関しては、婚内子と婚外子の記載方法が違うことから、制度上、家族の間に序列をもたらしているという共通認識に立った。戸籍の存在と人の意識という点について、婚姻の際は「入籍」、離婚の際は戸籍に×印が付くことから「バツ 1、バツ 2」、あるいは「戸籍が汚れる」という言い方をするというように、戸籍が日常レベルでも無意識的に現れていると確認した。

一方、アメリカは戸籍のような家族単位の身分登録制度ではなく、個人単位の出生、婚姻、死亡といった事件別に登録し、公証する制度であるため、個人のプライバシーが保護されるというメリットが挙げられた。日本における戸籍の編成方法を個人単位にするか否かという議論にはいたらなかったが、今後の戸籍制度を考える上での示唆になると思われた。

戸籍問題を通して日米のジェンダー問題の相違を明確にするという意図があったが、日本側の説明不足により、アメリカ側参加者に誤解や混乱を招いたため、同じ土俵に立って議論ができなかったことが最大の反省点であった。

3. 社会的発信

3.1. 京都地元高校生交流企画

立命館大学衣笠セミナーハウスにて、当分科会の社会発信の一環として、高校生に対するジェンダーについての問題意識のきっかけ作り、及び高校生と大学生のジェンダーに関する価値観の交換を目的に、西京高校、堀川高校の学生（8名）、高校教諭（1名）、日米学生会議学生（9名）の計18名でセッションを行った。セッションは昼食を挟んでおよそ7時間行われた。午前中は主に、宝塚歌劇団「ベルサイユのバラ」のビデオを用いて男女の性差、性役割について意見交換し、午後は、社会的性役割、身体イメージ、セクシュアリティについて討論した。

午後の社会的性役割についての討論では、二つのグループに分かれ、身近に感じる社会的性役割をテーマにスキットづくりを行った。グループ①は洗剤のCMには女性ばかりが登場することを指摘し、洗剤CM男性版をスキットにして発表し、グループ②は会社における男女差に注目し、社長が女性社員にお茶やコピー、マッサージを頼み、女性の我慢が爆発するというスキットを発表した。どちらもメディアによる男女の取り上げ方の違いを指摘し、特に後者は社会に強く残る男女差について取り上げたものだった。

身体イメージについては、若者向けファッション雑誌の切抜きを貼ったポスターやアンケートを参考に、高校生の理想の男女像について話し合われ、日米の理想の男女像の違いという話にも及んだ。男性像については、米国の若年層ではがっしりとした体型が人気であるのに対して、日本では美少年が人気であり、女性像については、米国では目をエキゾチックに見せようとするのに対して、日本では目を大きく見せようとするなど、身近な話題が挙げられた。

セクシュアリティについては、東京サイトでの中川氏のお話を伝えながら話し合った。友人など身近な人が同性愛者であるとカミングアウトしたらどのように思うか、という問いかけに対して、ほとんどの高校生が問題はなく、その人はその人だから接し方も変わらない、時代の変化が良い方向に向かっているのではないか、など前向きな意見が多くみられた。

セッション全体を通して、高校生からは、「学校では教わらないことであり、普段あまり意識しないジェンダーについて考える良い機会になった」、「英語に圧倒されてしまい、なかなか思っていたことや意見が言えなかった」などの感想が寄せられた。大学生参加者側からは、高校生の熱意に驚かされた一方、セッションの準備が不十分であったのではないかという反省も挙がった。今回、高校生参加者がすべて女性であったため、一部の限られた高校生との意見交換にとどまったものの、当初のセッションの目的を概ね達成できたのではないかと思われる。

3.2. 京都フォーラム

分科会発表の場として、京都フォーラムにてパネルによる展示を行った。見学者の中には、高校生ジョイントセッションの参加者も来ており、分科会や日米学生会議に興味関心のある様子だった。当分科会で、京都フォーラムを念頭に置いて当初から討論してきたつもりだったが、準備が足りず、言語の壁や時間的制限のある中で質の高い発表をすることへの限界が感じられた。映像や音声を用いた発表などができるとより良かった。

総括～現代社会とジェンダー分科会・市民参加の視点から～

「ジェンダー問題に答えはない。」当分科会の参加者誰もが感じたことではないだろうか。

当分科会で取り上げた 3 つのトピック、社会的性役割、社会的性差別、伝統的家族観のどれもが時代や地域、そして個人の認識によって異なり、異なる問題を抱えている。しかし時空を超えて共通することは、社会の中で人は生き、差別や偏見と闘っている人がいるという事実である。ジェンダー問題を扱う現代的意義は、ジェンダーというフィルターを通して既存の社会構造を見つめ、複雑に絡み合った問題の解決へ向けてその糸口を探っていくところにあるのではないだろうか。

社会的性差別のところで同性愛者の人権についての裁判を取り上げたが、裁判を通して見えてきたことは、日本の現実社会が異性愛者を中心として構成されていることであった。もし仮に、同性愛や両性愛が、異性愛と同列に選択肢の一つとして社会的認知がなされているのであれば、性的少数者は特異な者として社会から映ることなく日常生活を営んでいるかもしれない。ジェンダーは、社会における権力構造の中の弱者（社会的少数者）問題を浮き彫りにし、既存の社会を懐疑する眼を示唆している。

社会的少数者の問題は、実社会を映し出す鏡であるように思われる。「障害者」、「高齢者」、「外国人」、「同性愛者」などという言葉やその存在は、社会や常識に対し疑問を投げかけているようにみえる。今ある社会が何のために、どのような人を中心に動いているのか。これを検証することなしに社会を受け入れることに対して、社会的少数者の問題は警鐘を鳴らしている。

現代社会は理念として、社会的少数者を社会の片隅に追いやることなく社会全体のこととして捉える方向に移行しつつあるが、具体的な政策決定の場において当事者の意見がどれほど反映されているのか疑念が残る。確かに政策決定にみられる多数決も重要な社会参加の一側面であるが、それと同時に、立法過程における少数者の意思を表明する場や働きかけの法的、教育的保障が不可欠である。社会において一つの正しい答えなど存在しない。同じ一つの事実であってもその見方や解釈、認識によってそこには違った世界が映し出され、人の生きている世界は多様で、社会はそのような多様性を包括しているからである。

人の多様性が捨象されることなく、これからのグローバル化社会を生きるに当たって必要なことは、価値の転換というよりもむしろ、価値の相対化であるのかもしれない。

当分科会の参加者は、ジェンダー問題に取り組む中、混乱と困惑を続けてきた。「学生である参加者が、ジェンダー問題に関してそれぞれの立場の架け橋となること」、と当初は大義名分を掲げていたが、それを果たすことなく本会議は終了した。今後参加者に課せられた課題は、討論を通して感じた混乱や困惑、疑問を問い続け、意識的に社会と接点を持ちながら問いに応えていこうとする姿勢を保ち続けることではないだろうか。ジェンダー問題に「答え」はないが、「応え」はある。見つけた課題に対し、一人ひとりが応えていくことが、市民参加の視点として必要不可欠なものであると感じている。

市民活動と地域社会活動

Community Studies & Social Activism

分科会メンバー

池田杏子（津田塾大学学芸学部国際関係学科）
大宮貴史（慶應義塾大学総合政策学部）
高沢健史*（関西学院大学総合政策学部）
角田武士（国際基督教大学行政学研究科国際関係論専攻）
豊田紀子（上智大学比較文化学部比較文化学科）
Meghan Green (University California, Berkely)
Hui Jun Huang (Wesleyan University)
Marina Li* (Mills College)
Torin Martinez (University of North Carolina at Chapel Hill)
Tina Shang (Princeton University)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

NGO や NPO、ボランティアなどの言葉が定着してきたことからも、近年、社会における市民のプレゼンスが高まってきたことがうかがえる。これを受けて当分科会は設置された。市民活動についてディスカッションをするといっても、その活動形態や活動分野は様々である。そのため、すべての市民活動に共通する “involvement”という言葉をキーワードに、どのようにすれば人々を効果的に市民活動に巻き込むことができるかということに焦点を当てることとなった。そのための作業として、日米間における “volunteer”や “activism”、“community”などの言葉の比較、定義を行うことや各参加者が専門分野や興味に応じて書いた論文に関するディスカッションを行うことが挙げられた。また、実際に市民活動を行っている NGO や市民グループを訪ねることで現実的な議論を行うように心掛けた。これらのプロセスを通して、当分科会では市民活動における “involvement”のあり方を探ることにした。

活動内容

1. 事前活動

1.1. アムネスティー・インターナショナル（事前活動）

この組織は、世界的な規模を持つ国際 NGO であり、「良心の囚人」という言葉や死刑廃止キャンペーンなどで広く知られている。

当初の日本側参加者は、市民がどのようにして国際問題といういわゆる「遠い存在」のものに対して積極的に活動を行っていくことができるか、ということに関心を置いていたために、アムネスティーという巨大な組織の運営、またその方針に非常に大きな興味関心を向けていた。しかし、大きな組織であればあるほど、足下の活動が見えなくなることが多くなってしまう。そのことは、NGO という地に足のついた活動が重要である組織にとって致命的な問題であると実感させられた。

1.2. 木楽舎（事前活動）

雑誌「ソトコト」は主に環境問題やスローフード・スローライフなどを特集しており、環境や食に関する NGO との協力や情報の掲載を行っている。ここで私たちが最も関心を持ったことは雑誌と企業との関係である。企業との関係はどの程度重視されているのか、つまり、経済的な支援はどのようにして得ているのか、という点である。インタビューを通して、利益を目的としていない組織と利益を目的としている組織との間ではどのような違いが見られるのか、を考えるヒントを得た。

2. 実地研修

2.1. 講演

2.1.1. 山岡義典氏（日本 NPO センター常任理事）

日米間の地域社会活動と市民活動の違いに関する、共益と相互扶助を追及した住民・市民型と、社会的利益を求める NPO・NGO 団体の特徴をふまえた上での考察、また、社会的使命を追求する団体と、利益追求を果たす企業の特徴、及び企業の社会貢献についてのお話をうかがった。これらの違いや共通点は単に結果という表面的なものにとどめておくのではなく、両市民の「価値観」の違いというものにこそ、大きな違いがあると考えられた。比較という形をとることで互いの国における市民活動の特徴や問題点が改めて浮き彫りになったといえる。

2.1.2. 野入直美氏（琉球大学法文学部人間科学社会学専攻）

アメリカ人とアジア人の間の子供、特に母親がアジア人で父親がアメリカ人の場合、その子供は「アメラジアン」と呼ばれる。沖縄には米軍アメリカ人と現地女性との間にできたアメラジアンが多く存在するが、人種、国籍、言葉、経済的な問題から、差別を受けている。野入氏は、アメラジアンを受け入れる際の学校側の不公平な対応を指摘し、そこから生まれてくる様々な問題を解決するために、日米両政府の協力と市民の理解が必須だと述べた。

2.2. フィールドトリップ

2.2.1. JICA（国際協力事業団：Japan International Cooperation Agency）

JICAは日本が行う開発援助の中心的な実施機関であり、モノだけではない、人と人との関係を重視した開発援助を行うことを目標としている。

ここではまず、JICAの組織概要や仕事内容がまとめてある紹介ビデオを見た後に、JICAとNGOとの連携事業、また国連・政府・企業との連携事業について詳しく話を聞き、その後、一般市民を国際協力にどのように「巻き込む」かという方法についての意見交換を行った。

2.2.2. 渋谷区児童福祉センター

渋谷区児童福祉センターは遊びを通して子供たちの健やかな成長を図り、子供たちを情操豊かにするための施設である。

市民活動についての議論を交わしていた当分科会は、実際に市民がボランティアに関わる場を訪問し、自らボランティア活動を行うことに意味があると考え、渋谷区が提供する児童福祉センターを訪問した。施設の概要を聞くとともに、区からの援助のあり方や財政上の問題点について考えさせられた。いくら公的な施設であるとは言っても、国や市民からの更なる協力や理解が必要であるとの認識が生まれた。

3. 京都地元高校生交流企画（紫野高校・西京高校）

市民分科会の各アメリカ側参加者が考える「市民活動」を、両高校生徒の前で発表し、全体で意見交換した。その後白梅町駅付近にて、一般市民が抱く「市民活動」のイメージや意見について、高校生と共にアンケートを収集した。

4. テーブルセッション

自己紹介から始まった当分科会は、今後どのように議論を進めていくかの話し合いに重点を置いた。その第一歩として、まずはお互いの理解を深めようということから、市民活動や地域社会活動に関する言葉の定義を探ることにした。主な用語は、“volunteer”、“activism”、“community”の3つである。同時に、「日米学生会議」という位置付けから、日米間における地域社会活動の違いなども話し合った。「分科会進行方法」をめぐっては、それが以降の分科会の柱となることから、慎重に話し合いを行った。結果、どのように人々を市民活動或いは地域社会活動に巻き込むことができるかをメインテーマに、分科会を進めることにした。

「人々の巻き込み」を実行するために、実際にそれらの活動に参加している人々には、どのような共通点があるのか、アンケートを用いて統計を取ることとなった。作成したアンケートは、京都サイトで合同セッションを行った地元の高校生と共に、京都市内の路上にて一般の人を対象に配った。また、このアンケートの結果は京都フォーラムの分科会展示物として使用した。

5. 京都フォーラム

当分科会は、渋谷区児童福祉センターでのボランティア報告やフィールドワークとして訪ねたJICA職員の方からの講義のまとめ、そして、実際に分科会で作った性別、関心、経験などを盛り込んだアンケート「日本人のボランティアに対する意識調査」の結果から日本人のボランティア像というものを考察し、数値的に立証した。これによって視覚的に日本人のボランティア像を理解することができる内容になったと考える。また、展示の際、当分科会の発表を閲覧者に受動的に見学してもらうだけでなく、我々の分科会が出した質問に対して「YES」、「NO」と明記した二つの設置してあるペットボトルの中に、豆を入れてもらい、実際の声を反映しようと試みた。

総括

「市民活動と地域社会活動」――その抽象的なタイトルから、どのように話し合いを進めどのように議論を結論づけるか、私たちは多くの苦戦を強いられた。事実、限られた時間の中で最も話し合いがなされたのは「分科会進行方法」に関してであった。進行方法をめぐる議論は、主なものとして二つに集約することができる。一つは、日本側参加者の総意である「国際問題にどのようにして市民レベルが関わりを持ち、解決を図るための活動を行うことができるかを議論する」という点と、アメリカ側参加者それぞれの意見として出された「各自の関心問題にどのように市民レベルが関わりを持ち、解決を図るための活動を行うことができるかを議論する」という点である。

日本側参加者が意図して「国際問題」という言葉に固執したのは、上述のように当分科会での議論が抽象的に終るのを恐れたからである。つまり、具体的に目の前に存在する国際問題を議論の軸に置くことで、より中身のある深い議論をすることができると考えたのである。また、1ヵ月という短い時間の中で、さらには互いに知らない者同士という環境の中で、「国際問題」という共通基盤を持つことは有益であると思われた。

一方のアメリカ側参加者は、日本側参加者と相反する考えをしていた。それは、「たった1ヵ月ではお互いを知ることは不可能である。それゆえ、各自の関心問題を議論することが最良である」というものだった。これら全く異なる分科会のアプローチ方法を統一させることは、実に至難の技であった。しかし、私たちが乗り越えなければならない壁はそれだけではなかった。

日本側参加者は、この分科会が社会的還元を目的としている日米学生会議という位置付けから成り立っているという事実をふまえ、日米両学生による「共通した目標」を持つことが必要だと主張した。同時に、この「共通した目標」によって生み出される社会的還元を当分科会の最終目標にすべきだと訴えた。しかしながら、このことについても先の件と

同様に、アメリカ側参加者からの反対の声があがった。彼らは、彼ら個人の目標があって日本に来たこと、また社会的還元など私たちのような学生に成しえることではないと論じたのである。

すべてが上手くいかず、前進しない日々が続いた。結局、事を動かしたのは両者による「妥協」であった。日本側参加者は、「国際問題」という一語にこだわらず、参加者個人個人を配慮し、それぞれの「関心問題」を尊重した。アメリカ側参加者は、「個人」という一語に執着するのではなく、日米学生会議への帰属意識を高め、「共通性」から来る「目標」を尊んだ。その瞬間からすべてがプラスの方向へと向かい始め、そして、すべてがゼロからのスタートを切ったのである。

私たちが得た最初のコンセンサスは、「どのように人々を市民活動や地域社会活動に巻き込むことができるか」というものだった。それは結果的に、私たちが今まで話し続けた、今後の分科会における進行方法を定めるものとなった。市民活動も地域社会活動も人が存在して、はじめて成り立つものである。「人々の巻き込み」を議論の軸にそえることで、当初、対立の原因となった「国際問題」対「各自の関心問題」という構図に入った亀裂を埋めることができた。つまり、それら二つに共通する「人」にフォーカスを当てることで、日本側参加者、アメリカ側参加者それぞれの意図を同時に汲み取る事ができたのである。最終的に、この「人々の市民活動や地域社会活動への巻き込み」は私たちの目標となり、同時に分科会を進めていく上での原動力となった。

分科会後半は、いかにして人々に市民活動や地域社会活動に興味を持ってもらい、参加させることができるのかを話し合った。その結果として、実際にそれらの活動に参加している人には、どのような共通点があるのかアンケートを用いて統計を取ることとなった。アンケートに載せる質問事項を一つ作るのにも多くの時間と苦労を費やした。また、日米間の異文化習慣による常識の違いからも、たびたび意見の相違が表立った。作られたアンケートは、京都サイトで合同セッションを行った地元の高校生と共に、京都市内の路上において一般の人を対象に配られた。

アンケートの統計分析は、想像以上に難しかった。結果、私たちはアンケートによる統計を、目標としていた「人々の市民活動や地域社会活動への巻き込み」を行うための結論に結びつけることはできなかった。それはひとえに、私たちの計画性の不備にあることは間違いない。多くの時間を割くこととなった、「分科会進行方法」をめぐる議論一つを取ってみても、事前にアメリカ側参加者と緻密に連絡を取り協議するなど、いくらでも時間を有効に使うための策はあったはずである。また、京都フォーラムの準備に気がとられ、本題の分科会の中身がおろそかになっていた事実も否めない。

私たちは多くの課題を残したまま、分科会を終えることとなったが、私たちが得たものは決してゼロではない。当初、「市民活動と地域社会活動」という非常に幅広いテーマに基づいて議論するということは、日米の市民活動の捉え方自体が違うということもあり、両学生のコンセンサスを得ることは至難の業であったが、議論を重ねていくうちに、お互いの違いを認識しながらも、共通点を見出せることができたことは、大きな前進だった。また、京都の町で行ったアンケート調査では、「机上の空論」を打破したある種の「市民活動」に挑み、数々のフィールドトリップを通じて、本や話し合いだけでは得ることができない情報を体で感じることができたことは、非常によい経験となった。

１ヵ月間、「巻き込む」こと “Involvement” をモットーに、私たちは活動してきた。ここで培った不屈の精神は我々をこれからも動かし続け、日米両学生それぞれが、各分野において人々を巻き込んでいく際の支えとなるであろう。

天然資源

Natural Resource Issues

分科会メンバー

市川晶子（立命館大学国際関係学部）
伊中英輔（東京大学法学部）
堀抜功二*（立命館大学国際関係学部）
山口健介（東京大学新領域創生科学研究科）
Max Homerding* (University of Central Oklahoma)
Edemee Knight (Guilford College)
Michael Kraft (Columbia College)
Joannie Yau (New York University)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

日米両国にとって、近現代を通じて天然資源問題は、重要な課題であり続けている。

過去を振り返れば、アメリカは石炭や鉄鋼などの豊富な資源を利用し、北部地域での工業発達を成し遂げ、19 世紀末にはイギリスを抜いて世界一の工業国となった。そしてその豊富な資源は、現在のアメリカの圧倒的国力を支える主要因の一つとなったといえよう。

一方、日本では江戸時代以前は稀少な天然資源を持続的に利用する試みがなされてきたが、明治維新以後は富国強兵政策のもと欧米化、近代化が指向され、その過程で資源利用は大量消費型へと移行することになった。そして結果的に、資源供給拡大への欲求は、太平洋戦争における「大東亜共栄圏」を目指した日本軍の行動となって現れた。

さて、このように両国は国内資源埋蔵量によって、対照的な歴史を歩んできたと言ってよいが、相互依存の深まる社会において天然資源管理は今後、平和や人権と並び恒久的な概

念として国家の枠組みを超えて追求されねばならない課題であるといえよう。また戦後、資源の大量消費を前提として発展を遂げてきた日米両国のような先進国にとって、持続的な天然資源管理の追及は義務だと思われる。

以上のような理由から、天然資源分科会では、第55回日米学生会議のテーマである「市民参加」の視点から、特に「水」に関わる諸問題を一つの切り口とし、フィールドトリップ、インタビュー、ディスカッションを行ってきた。水は「資源」として強調されることなく、蛇口をひねればいつでも出てくる公共財として捉えられがちである。それ故、保全活動はこれまで不十分であった。しかし先に京都で開催された「世界水フォーラム」でも多数の事例が報告されたように、途上国や一部の先進国すでに水供給に関して危機的な状況にあり、今後需給バランスは一層悪くなるだろうと考えられる。さらに、水はその他の天然資源に関わる問題構造を凝縮している。以上のような点から、今回の会議では主に水について焦点を当てることとした。

活動内容

1. 本会議中の活動

1.1. セッション#1　フィールドトリップ：「アサザプロジェクト」訪問

霞ヶ浦において活動する特定非営利活動法人「アサザ基金」（アサザプロジェクト）を訪問し、ビオトープの見学、実地体験、プロジェクト主催者へのインタビューを実施した。アサザプロジェクトの主な活動は、①小学校における環境教育、②失われた水辺の生物多様性の復元、③水源林から湖まで流域の全体的な管理、の３つからなり、地域に根ざした活動を行っている。主催者へのインタビューの中では、環境教育から今後の社会システムのあり方まで幅広いお話をうかがい、この時の議論は、その後の天然資源分科会の議論の基礎となった。特に、「市民参加」としてのアサザプロジェクトの活動は、市民、地域、企業、行政などを巻き込んだ大規模なものであり、当分科会に非常に大きなインパクトを与えた。

アサザプロジェクト訪問

1.2. セッション#2

分科会参加者の問題意識を共有し、その後の議論の方向性や予定について話し合うとともに、フィールドトリップで訪問したアサザプロジェクトについて振り返った。このような環境保全型 NPO の役割について、カリフォルニア州コロラド川の事例との比較を題材に、アメリカ側参加者と議論を行った。

1.3. セッション#3　フィールドトリップ：環境省訪問

環境省「廃棄物・リサイクル対策部」を訪問し、循環型社会のあり方、特にごみ焼却やリサイクルについて、同部循環型社会推進室室長補佐の染野憲治氏からお話をうかがった。日本では平成 12 年に循環型社会形成推進基本法が公布され、今後ペットボトルなどのリサイクルも促進されていくとのことであったが、アメリカ側参加者からはこれらの点について「スローライフ」や「環境プレミアム」などアメリカでの取り組みが紹介された。一般廃棄物リサイクル率にいてはアメリカ（28%、96 年）の方が日本（10.7%、96 年）に比べ、はるかに高いとの指摘があった。アメリカでのリサイクル活動は、主に経済原理に沿った形で進められていると考えられるが、今後日本がどのようにリサイクル率を高めていくかについて、具体事例を交えながら議論が行われた。

1.4. セッション#4、#5

環境省でのレクチャーを振り返り、循環型社会やアサザプロジェクト訪問時に提起された「新しい社会システム」についての議論が行われた。

1.5. セッション#6、#7

分科会参加者が会議前に執筆してきた論文のプレゼンテーションを行った。本会議前のリサーチと、本会議中のディスカッションやフィールドトリップを通じての視点や論点の変化が窺えた。

1.6. セッション#8

これまでの活動について小括し、京都フォーラムを視野に入れたディスカッションを行った。

1.7. セッション#9、#10　京都地元高校生交流企画

京都の地元高校生との交流企画を行った。午前中にフィールドトリップを行い、午後にはディスカッションを行った。

京都において地元伏見の地下水を利用して清酒造りを行っている月桂冠株式会社を訪問した。月桂冠大倉記念館の名誉館長である栗山一秀氏より、日本酒の製造過程の基礎を説明していただいた後、月桂冠と地域との関わりについての講演をうかがった。月桂冠は、江戸時代より地元での慈善・福祉活動を通して地元住民との間に強い絆を作っている。それを基礎に、現在まで地下水をきれいに保つ努力を地元住民とともに協力して進めているとのことであった。利益優先主義の見返りとして、地元住民との関係が悪化している一部企業も存在する現状において、このような地域密着型の企業は、今後環境保全という観点からも高く評価されるべきだろう。

またその後の議論では、企業と住民の資源を通じた関係、及び高校における環境教育の問題点について地元高校生を交えて話し合った。高校生側からは、地元にいてもそのような地下水の利用のされ方などの認識が不十分であり、現状の環境教育から「気付き」を強めるような教育のあり方が、今後求められるだろうとの指摘がなされた。

1.8. セッション#11 京都フォーラム準備

これまでの本会議中の活動を総括し、再度「天然資源」に関する問題の本質について話し合われた。その後、京都フォーラムへ向けた分科会展示パネルの作成に取り組んだ。

2. 京都フォーラム

ステージ上で当分科会の活動を概説し、分科会ブースでは、本会議中の活動の様子をパネルにして展示した。また見学者に対しては、当分科会での活動や天然資源について説明を行った。

総括

活動全体を通して最も焦点が当てられたのは、天然資源保全において決定的に重要なのは、「我々市民を、いかに各アクター（行政・企業・NGO/NPO）が喚起できるか？」という点であった。そして、各フィールドトリップを通し、各アクターが成しうる具体的な活動例を学ぶことがきた。

アサザプロジェクトでは、NPO が小学校でのビオトープ作りを通して小学生からその親、やがて究極的には市民全般への環境教育の伝播を図っていた。環境省でのお話からは、行政がコンテスト形式を用いて、具体的な循環型社会のアイデアを市民に募ることによって、市民の環境に対する問題意識を高めようとしている試みがあった。また、月桂冠株式会社の活動からは、地元企業が歴史的な慈善・福祉事業を通した市民との良好な関係を基にして市民との絆を深め、環境保全に取り組む成功例を学ぶことができた。つまり、各アクターが異なる方法で、市民に対する環境保全への「動機付け」を巧みに行っていたのである。

天然資源保全や環境保全は、多くの場合、現状の生活水準を落すものとして捉えられがちである。つまりこれだけ保全が謳われる世の中にあっても、なお本心では「できれば自分は保全活動に参加せずに、他人がしてくれればいいのに」と感じている人が大多数であることは否定できないだろう。

こうして起こる「囚人のジレンマ」に対して、今後いかに対処していくのか。今回訪問した各アクターは、見事な成功事例を我々に提供してくれていたように思う。アメリカと日本という世界でも有数の大量消費社会に生まれ育った我々は、現在の途上国で暮らす人々の何倍の資源を今まで浪費してきただろうか？我々学生が実社会の一員として各方面で活躍する際には、今回の経験を活かし、市民としてだけではなく、同時に自らが将来所属するであろうアクター（行政・企業・NGO/NPO）の立場から、天然資源保全に貢献できればと考える。

民主的政治システム

Democratic Politics

分科会メンバー

飯田智紀（慶應義塾大学法学部）
河本健志（明治大学政治経済学部）
佐藤智紀（東京大学教養学部）
松井亮（東京大学法学部）
圓山由子（京都産業大学理学部）
Hana Heineken* (Princeton University)
MacKenzie Graham (Whitman University)
Joshua Katcher (Cornell University)
Maiko Nakarai (Harvard University)
Naoko Takashi (Smith University)
(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

第55回日米学生会議のテーマである「市民参加」について考えるにあたり、様々な議題への市民の積極的活動に焦点を当てるだけでなく、市民によって示された意見を反映させることのできる政治システムの構築を目指すこともまた重要である。当分科会では、日米両国において、政治意思決定プロセスへの市民参加を促すために、政府の果たすべき役割について考察することを目的とした。

活動内容

1. フィールドトリップ

1.1. 国会見学

7月28日、橋本龍太郎衆議院議員の秘書である藤村健氏の案内で国会見学をした。見学後、橋本龍太郎氏の事務所で藤村氏と歓談し、国の政治の現場から生の声を聞くことができた。この訪問により、市民と政治家の溝を埋め、市民が主体的に政治に関わるためには、国の政治の実態を国民がよく知る必要があると強く感じた。

1.2. 山岡義典氏による講演会

7月30日、日本NPOセンター常任理事の山岡義典氏を招いての講演会を、「市民活動と地域社会活動」分科会と合同で行った。NPOに関する基本的な知識から、社会貢献活動を軸とした社会のあり方を含む、日本のNPOの現状、ジレンマを知る機会となった。

1.3. 伊藤悠氏を囲んでのディスカッション

7月31日、目黒区役所を訪問し、目黒区長の薬師寺克一氏と面談した。その後、区議会議員の伊藤悠氏と歓談した。活発な意見交換がなされ、市民に一番身近な政治である「地方議会」という、地域社会レベルにおける市民と政治の関係、政治の現状を学んだ。

1.4. 那須勲氏を囲んでのディスカッション

8月1日、NGO「日本おにぎり隊」の運営に携わっている那須勲氏と歓談した。那須氏の豊かな人生経験と活発に行っているNGO活動の話を聞くことにより、市民参加の重要性とその可能性を認識した。

2. 議論内容

日米の学生が揃っての初めての議論において、以下の4点、①教育、②NGO/NPOのあり方、③選挙行動、④政策決定プロセス、から民主的な政治システムを考察することとし、各自の書いた論文を参考に、担当者を決め、ディスカッションを行った。

2.1. 教育

市民が政治システムに参加していけるようにするために、教育が果たす役割は大きい。教育を通じて政治の仕組みを理解し、市民が自らを社会への重要な参加者及び貢献者であると認識することが、民主的な政治や社会を実現することにつながっていく。議論を始めるにあたり、私たちは教育の視点から考えることにした。

日米に共通する問題点として、政治についての知識の不足が指摘された。政治に関する知識不足によって、政治の動向の理解や、政治に対する自らの判断ができない。そして、

それは政治に対する無関心へとつながっていく。政治は難解で、自分たちの手の届かないもの、政治家に任せておけばいいものという態度が広く社会に定着してしまう。また、たとえ政治や社会の形成に関わっていく意識があったとしても、政治に関する知識の不足により、どのように行動すべきなのか、いかに意見を反映させればいいのかがわからない、という事態に陥ることが考えられる。この状況は特に、貧富、そして教育水準の差が大きいアメリカで多く見られる現象であると指摘された。

これらの問題点を生み出した要因として、学校教育における公民の授業数の減少とその内容、政治報道のあり方などが挙げられた。政治の授業の相対的な少なさを受けて、その授業内容も政治の仕組みに重点を置いたものにとどまっている。授業をはじめとした教育の場において、政治の表面的な知識だけではなく、我々市民が社会を形成していく主体であり、政治に責任を負っている主体である、という意識を根付かせる教育が重要であることが指摘された。また、政治報道ではやや難解な用語と解説が用いられがちである。なるべく多くの市民が自ら政治を洞察することができるよう、市民を意識した、より分かり易い報道を目指すべきだという主張がなされた。

2.2. NGO/NPO のあり方

社会そして社会問題の解決に積極的に関わろうとする時、個人一人の力では限界がある場合がある。しかし、ある共通意識を持った市民が集まり、一つのことを達成しようとする時、それは問題解決に向かう大きな力となっていく。そのような可能性をもった組織に、NGO や NPO が挙げられる。有効性かつ可能性を秘めた NGO/NPO を、我々市民は民主的な政治システムの中でどのように位置付けたらいいのだろうか。私たちはこの点について話し合った。

最初に、両国の学生が抱いている NGO/NPO へのイメージの違いを比較した。アメリカでは、NGO や NPO の存在は大きく、時として過度の影響力を持つ場合がある。また、メディアが頻繁に取り上げるために、社会的認知度も高いことが指摘された。一方日本では、NGO や NPO という言葉に対して親しみを感じる人は多くはなく、「理想論を唱えるだけではないのか」、「社会的影響力などないのではないか」といった偏見を持っている人も依然としているということが指摘された。この比較をふまえ、イメージを改善し、NGO/NPO が社会において重要な役割を果たしているという認識を広め、その参加を促すことが重要であるという意見が出された。そして、議論はその考察へと移っていった。

まず、一般的な市民活動がそうであるように、草の根の活動が重要であるという指摘がなされた。社会のあり方は、急に変えられるものではない。まずは、より多くの人に NGO/NPO 活動に参加してもらい、実際に体験してもらう必要がある。実際に参加し体験することによって得るものは多く、NGO や NPO の可能性も見出しやすい。そのためにも、NGO/NPO は活動をより透明なものにし、市民が参加し易いものにしていく必要がある。

また、メディアが果たす役割も大きい。ある時だけ特定の NGO/NPO に注目するのではなく、コツコツと行われている草の根の活動に着目することの重要性が指摘された。そして最後に、NGO/NPO が実際に社会に影響を与え、成功を収めた例を広めることなどによって、より多くの人がその可能性を知るきっかけを作ることの必要性が訴えられた。一市民として何か行動をしたい、と思っている人はどこかにいるはずである。そのような人たちのために、きっかけを作ることもまた重要である。

2.3. 選挙行動

市民が直接かつ公的に自らの意見を政治に反映させることができる場、それが選挙である。民主的な政治を実現していくために、市民が有する最も重要な手段といえよう。自分の意見に最も近い政策を掲げる候補者・政党に投票し、その意見を政治の場で代弁してもらい、市民は政治の方向付けや社会の形成に関わっていくのだ。

まず、現在の選挙における問題点について意見が交わされた。選挙の構造的な問題、政党の問題などが挙がったが、最も着目した問題が投票率の低さだった。市民は政治に参加するための自らの権利をなぜ行使しないのか。特に、若い世代ではその傾向が顕著である。議論はその要因と改善策の考察に移っていった。

投票率が低い要因として、政治への関心の低さ、単身世帯の増加などの社会の変化、一票では何も変えられないという意識など、様々な要因が指摘された。改善策の議論に移ると、まずオーストラリアなどで採用されている義務投票制が挙がったが、分科会の中で強く反発する意見も出され、議論は熱を帯びた。投票の義務化により市民の政治への参加意識を高め、高い投票率によって国民の総意がより反映される。また、候補者や政党は投票を呼びかける必要性がなくなり、政策の充実化に力を注ぐことができるのではないか。しかしその一方で、投票の義務化はそもそも民主的ではなく、政治や社会のあり方に意見を提示するかしないかの決断は、あくまで市民の自由であり、権利である。投票率の低さの問題を、投票の義務化によって解決することは安直であり、社会的要因の改善に目を向けるべきだという意見が対抗した。

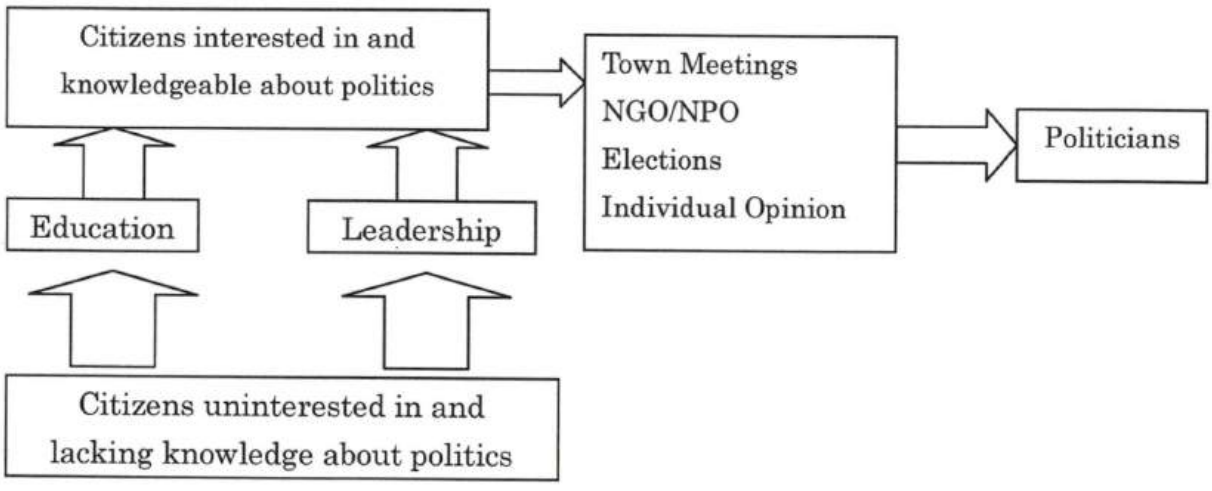
他の改善策としては、教育による市民、中でも若い世代の政治意識向上や、学生による大学での選挙広報、すなわち投票に行くよう促す活動を、学生の手によって行う試みが挙げられた。後者はアメリカ側の学生の一人が実際に行っており、その体験談や有用性について意見が交わされた。

2.4. 政策決定プロセス

実際に政策が決定される際、そこにはどこまで市民の意見が反映されているのだろうか。そして、市民の意見が反映されやすい民主的な政策決定プロセスとは、どのようなものなのだろうか。教育、選挙、NGO/NPO についての考察をふまえ、この点について議論した。

まず、現在の政策決定プロセスを日米で比較しながら確認し、問題点を挙げていった。選挙システム、政党、省庁など、政治的な構造の問題点が挙がる中で、そもそも市民はどこまで政策決定に関与すべきなのか、どこまで関与することが可能なのかという疑問も生じた。事後説明のみにすべき政策が多いことは事実であると同時に、市民が政策決定に影響を与えられる機会は、およそ選挙や世論の形成などに限られている。このような状況をふまえ、政策決定プロセスの構造的な問題に迫るのではなく、市民としてまず何ができるのかという視点にシフトしていった。

政治の構造的な問題以前に、市民が現在、政策決定に影響を与えることのできる手段を、より意味あるものにすることが重要なのではないか。政治に関する理解と知識を深め、社会の形成に積極的に関わっていこうとする市民の底上げを図ることで、より強力な市民参加の実現を目指していく。それによって、既存の政策決定プロセスにおいても、市民の声をより反映させることができるのではないかという意見が提示された。



総括

「未完のプロジェクト」、この言葉ほど当分科会の活動を表す言葉はないだろう。日米の参加者は民主主義の危機という共通の問題意識を持ち、この分科会に集った。そして、政治教育、NGO/NPO のあり方、選挙行動、政策決定プロセスといった観点から民主主義の危機に対してアプローチを行った。しかし、その過程では様々な困難があった。

その一つは、日米参加者間の民主主義に対する認識の違いに起因するものであった。一般化に伴う語弊を恐れずに言えば、アメリカ側の参加者は投票の義務化といった議論に代表されるように、民主主義それ自体を価値としてとらえる傾向にあった。他方、日本側の参加者は民主主義を他の根源的な価値を達成するための手段に過ぎず、現代社会においてそれが適合的であるに過ぎないと考えていたように思われる。このような認識におけるギャップが時に議論の齟齬を引き起こした。

もう一つは、当分科会のテーマである「民主主義」それ自体に伴う問題である。民主主義とは民衆の活力の無軌道性というそれ固有の脆弱性のために、そもそもジレンマを内包している。そのため、真の民主的政治システムなど存在しえない。そして、そのような答えのないテーマを扱うことは私たちに一種の諦めの感を生じさせ、議論を時に非生産的なものとさせた。

問題の原因となった日米間の認識の違い、「民主主義」に共通するものは「未完のプロジェクト」という性質である。しかし、「未完のプロジェクト」であるがゆえに、絶えずそれに取り組むことが必要である。当分科会の活動は自分たちの議論の不十分さを認識し続けながらも、見えないゴールに対して一歩ずつ足を進める過程であった。そして、その一歩一歩に意味を付与すること——それが参加者各人のこれからの使命なのではないかと思っている。

第5章

エッセイで綴る日米学生会議

日米学生会議を問う——市民参加と第55回日米学生会議

相互理解——Mutual Understanding

文化交流とアカデミズム

日本再発見

日米学生会議と理系学生

ノミニケーション

夜の分科会

「日米」「学生」「会議」とは何か

学生による運営の限界と可能性

未来の日米学生会議へむけて——残された課題と提案

第55回日米学生会議が目指したもの

日米学生会議を問う
——市民参加と第55回日米学生会議

中村信之

「市民参加とは、何か。」

この難題を考えることから第55回日米学生会議は始まり、この難題に答えた「京都フォーラム」をもって第55回日米学生会議は終わった。

第55回日米学生会議のテーマは「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」となっていて、「市民参加」を大きく掲げている。一口に「市民参加」と言っても個々人によって考えの違いがあるため、なかなか一つに定義することは難しい。「市民参加」とは一般的に「自立した個人が公共性の創生に参画すること」と定義されている。分かりやすくいえば、一人の個人が家族、近隣住民、あるいはNGOやボランティア団体といった周囲の人々と何らかのつながりを持ち、社会の主体となって積極的に社会の諸問題へと取り組む姿勢であるといえようか。

そもそも日米学生会議は開始当初から「市民参加」の色が極めて濃い団体であるといえる。日米間の相互理解が著しく不足していた1934年、日本の学生が何の団体にも頼らずに自らが主体となってアメリカの大学生と相互理解のために熱く議論したところに日米学生会議の起源がある。それから第二次世界大戦を経て幾度か休止に追い込まれた時期もあるが、1964年から再び企業団体の援助などを得ながら今日にいたるまで、毎年日本とアメリカ交互に場所を移しつつ日米学生会議が続いている。メインテーマ、スケジュールのコーディネイト、財務管理、広報、参加者選抜、そして参加者そのものすべての主体が学生である。日米の学生が協力しながら社会の諸問題について毎年熱く議論し、相互理解への架け橋となり続けている日米学生会議は、その団体の性格上、「市民参加」であり続けた団体であるといえる。

このようにもともと「市民参加」の色が強い団体であるにも関わらず、第55回日米学生会議はあえて「市民参加」をテーマとして掲げた。従来の日米学生会議は学生同士の人間交流や相互理解に重点を置いてきたが、今回の第55回日米学生会議では「より強く」社会と我々参加者が主体的に関わりながら、社会の諸問題へと立ち向かっていこうという姿勢にオリジナリティがある。そのことは各サイトのスケジュールや分科会の内容に、少なからず影響している。例えば今回の沖縄サイトでは、地元の学生を加えて基地問題など今現在沖縄が抱える社会問題について議論し、福井サイトでは、地元住民の方と一緒に農業を通じて社会勉強を行った。そして日韓学生フォーラムと合同でディスカッションを行い、「日米」という従来の枠組みを超えて話し合いをするという試みもなされた。

中でも第55回日米学生会議において最も注目されるべき「市民参加」は、京都サイトで行われた「京都フォーラム」である。従来であれば学生会議の報告会の会場は屋内施設が一般的で、その来場者もJASCのアルムナイや関係者が多かった。しかし今回の第55回日米学生会議では、もっと広く一般に日米学生会議の成果を伝えたいというコンセプトで、会場を京都のショッピングモールである「新風館」に設定した。買い物をしている人々を惹きつけてなんとかフォーラムを見てもらおうと、従来の報告会に比べるとエンターテイメント性の高いものとなった。報告者が舞台でスピーチを行うだけでなく、スキットと呼ばれる短い劇も作った。また一般の人にクイズやインタビューも行い、観客と学生会議参加者が一体となったステージとなった。

「京都フォーラム」で私たち第55回日米学生会議が伝えたかったメッセージは、「市民参加は、あなたもできる」ということだ。例えば私たち大学生は、思う存分好きなように4年間という時間を過ごすことを社会から許された、ある種「浮世離れした」社会的身分であるともいえる。そんな自由な時間を日米学生会議というイベントに費やし、「市民参加」を成し遂げることができた。そして「市民参加」を行ったことによって、改めて自分たち学生が社会の中の一員であること、そして形は様々であるが個々人が積極的に社会に関わることができたという確かな手ごたえを得ることができた。「市民参加」と一言でいってもアプローチもゴールも人それぞれによって全く異なるのであるが、どんな場所であろうが、どんな年齢であろうが、「市民参加」をやろうと決めたその瞬間から社会に対して何かができるのだという可能性が生まれる。些細なことからでも「市民参加」は可能であり、一人ひとりが主体的に社会に対して働きかけることができる、という「人一人の社会に対する可能性」というメッセージを、京都フォーラムで私たちは伝えたつもりだ。

こうして日米学生会議の事後報告書を書き、読んでいるその時から私たちはJASCのアルムナイである。しかしそれは「終わり」ではなく、私たちは新たな「市民参加」へと歩いているのである。第55回日米学生会議を「市民参加」の通過点とし、私たち学生会議参加者自身が「人一人の社会に対する可能性」を新たな市民参加で実践していこう。京都フォーラムでのメッセージを、これからも共に伝えていこうではないか。

JASCerの市民参加は、これからも続く。

相互理解——Mutual Understanding

井手遊

交通手段や情報通信技術の発展にともない、モノや人は世界中を移動し、もはや国家間の相互依存なしでは国が成り立たないような時代になった。海外から留学や就労のため来日する人の数は確実に増加している。同時に、留学や就労のため海外に行く日本人の数も増加している。21 世紀はグローバルな時代であるといわれるが、それは、モノや人が世界中を行き来し、お互いの国の依存なしには生活ができないといったことを指すのであろう。

日本に住む文化背景の異なる人々が増えるにつれ、我々が日常的に何らかの形でこれらの人々と接する機会も増えた。「国際化」という言葉が頻繁に使われるようになり、英語を中心とした外国語学習も盛んになった。世界中で人の移動が進むにつれ、帰国子女のように、親の仕事や勉学の関係で国外の学校に通う経験をもつ子供も増えている。「相互理解」や「異文化理解」の重要性が謳われるようになり、多くの自治体が「多文化共生社会」を目指すようにもなった。初等・中等教育ではカリキュラムの中に「総合的な学習の時間」が設けられ、多くの学校は国際理解教育をその中の一つのテーマとして行うようにもなった。

グローバル化や国際化がこれほど謳われている現代、国際交流や異文化というと一見華やかで楽しいことだというイメージがある。しかし、ここで考えなければならないことがある。どうして近年その重要性が謳われてはじめたのか、ということである。

以前から、日本は単一民族の国であるかのように思われており、外国人や多文化の影響を受け育った人たちを排斥してしまうようなことがある。先ほど、初等・中等教育における国際理解教育について述べたが、これが導入された理由の一つとして帰国子女や外国人子弟に対するいじめの存在があったのかもしれない。また世界を見ても、国内外の紛争は止むことを知らない。地球規模の経済の不均衡が顕著に存在し、アメリカを中心とした先進国へ権力が集中している。民族や宗教の違いから、その差異を理解できないものだと考え、その違いを消滅させようと対立が生じているのである。いわゆる、自民族中心主義の考え方である。

異文化コミュニケーション学者であるミルトン・ベネットは、人はもともと自分の所属する文化を中心に考える自文化中心主義の考え方を持っているが、異文化に対する感受性が高まるにつれ、いかなる文化にも優劣はないという文化相対主義の考えへと移行していくと主張している。例えば、ある人と出会い、最初は「あの人はどうしてもっと仕事をテキパキやることができないのだろう」と自己を中心に考えていたとしても、違う視点から物事を見ることができるようになると、「あの人は一見遅く見えるけど、それは慎重に仕事

をしているからなのだ」と相手の視点に立った解釈や評価ができるようになるのである。つまり、異文化との相互理解とは、相手の視点に立ち、尊敬の念を持って接することができるようになることであると言えよう。

日米学生会議を通して参加者たちは、「相互理解」についてしばしば考えた。この日米学生会議は、他の参加者とのよりよいコミュニケーションの方法を常に考えた１ヵ月でもあった。本会議中、日本側参加者はアメリカ側参加者が使う英語が聞き取れず、また何か言いたいことがあってもそれを英語で伝えられず、フラストレーションを感じた。一方、アメリカ側参加者は、日本側参加者が何かフラストレーションを感じているのは分かるものの、日本側参加者が日本側でのみ問題を討論してしまったため、アメリカ側参加者には伝わらず、フラストレーションを感じてしまったことがあった。日本側参加者がフラストレーションを内輪で話し合ったことは、日本側としては確かに納得がいく。アメリカ側参加者に伝えたいことがあっても言語が障害となり伝えられないもどかしさを日本側同士で共感し合い、そして何をフラストレーションに思っているのかを皆で話し合うことによって具体的にまとめ、その後アメリカ側参加者に伝えようと考えたのだ。しかしアメリカ側参加者は、「話したいことがあれば内輪で話すのではなく、きちんと目の前ではっきりと言って欲しい」と思っていたのである。

お互いがお互いを理解することが、相互理解である。その相互理解を実現するために、日米両国の参加者たちがそれぞれの文化で適切だと思う方法で討論したため、そのプロセスにおいて文化差が顕著化し、互いが衝突したのだった。先ほど、異文化との相互理解には相手の視点に立ち尊敬の念を持って接することが重要であると述べたが、上記の例では互いが同じ目標を持っていたにもかかわらず、自己の文化の価値観を以って問題を解決しようとしたために、上のような事態が生じたと言えるだろう。

このように、異なる文化背景を持つ者同士がコミュニケーションを持つ時、互いが互いを尊敬し、理解しようと努力したのにもかかわらず、ミスコミュニケーションが起こってしまうという事例はよくある。「相手のことを思って言ったのに」と日本人にとっては丁寧で親切なことであると思っている行動が、文化が違えば、失礼で不親切な態度であると思われてしまうこともあるのである。

「相互理解は難しい」と感じるかもしれない。しかし、解決法は意外と簡単なものかもしれない。会議中、上記のような事態が起こった時、日米参加者は全員で集い、話し合いの場を持ったのである。自分がどう思い、どうしてほしいのかを相手に伝えることで、両者が相手の思うところを理解したのだ。日米学生会議では互いが相互理解という目標を持っていたため、相互の考えが理解できると、相手を思いやる参加者たちはお互い歩み寄って行くことが容易にできたのである。

参加者の中には大勢の前で意見を言うことを難しいと感じた者もいたのも事実である。しかしその場合は、少人数のグループでも、1対1でもいいから、自分の思うことを伝えることが大切ではないかと思う。相手を思いやり、尊敬の念をもって伝えることで相互理解への大きな一歩を踏み出すことができるのだから。

異文化に接する重要性。それは、異文化を学ぶことにより、その違いに対しショックを受けることもあるが、それと同時に、自分が今まで考えたこともない視点を学ぶこともあり、その新たな視点を私たちの日常の中に取り込むことによって自己成長していくことにある、と説明できよう。また同時に、異文化を理解する過程は、自文化との比較をすることなしには実現できない。この比較のプロセスを行うためには自己や自文化について知っておく必要があるが、私たちはこの比較のプロセスを通じて初めて、それまで当たり前だと思っていた自己を新たに認識することも多いのである。つまり異文化との出会いは、他者のみならず自己への認識を深め、自己成長を促進するのだ。

人は異文化を持つ人と接するとき、自分とは全く違うのだと差異を強調してしまうことが多い。しかし、より深く接するにつれ、実際には人間として共通する部分がほとんどであることに気付く。異文化を持つ人をその人が所属する文化で判断するのではなく、一個人として判断し、尊敬の念を持ち、相手を思いやる気持ちを忘れずに付き合うことができれば、両者の相互理解が深まると共に、上で述べたような異文化接触の恩恵を受けることができるだろう。

人は一人では生きていくことはできない。また、人は他人とのコミュニケーションを通して成長する。このエッセイでは、異文化を外国の文化のみを指すかのように述べてきた。しかし、この世界には一人として同じ人間はいないことを考えると、異文化コミュニケーションは対人間コミュニケーションの延長にあるものであることも理解できる。日米学生会議においてはアメリカ側参加者と日本側参加者の間の相互理解について述べられることが多い。しかし、もちろん日本側参加者同士でも相互理解を目指していたことは言うまでもない。意見の食い違いで議論したこともあった。その議論を通じ、自分が今まで考えもしなかった新たな視点を学ぶこともできたし、自分の論点の甘さを痛感することもできた。つまり、この議論があったからこそ、私自身も成長できたし、第55回日米学生会議をさらに良いものに作っていくことができたのだ。1ヵ月の共同生活を通し、寝食を共にした総勢72名の参加者たち。お互いが他者との切磋琢磨を通して、お互いを良く知り、相互理解が生まれ、かけがえのない友人となることができたのである。

急速に変化していく社会の中で、人は他者とのコミュニケーションをおろそかにしてしまうこともある。日米学生会議を通して学んだ、人と出逢うことの幸せ、そして彼らとの意思疎通が図れ、相互理解が生まれた時の充実感。「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」をテーマに第55回日米学生会議は開催された。世界中の人々がそれぞれ相互理解の大切さを本当の意味で理解することができれば、人類が共存し、平和な世界が構築されるのかもしれない。

文化交流とアカデミズム

今中由希子

私は日米学生会議で「企業活動と倫理」の分科会に参加していたため、電車で東芝のバッジをつけている人に思わず「東芝の企業倫理について社内では情報共有されていると思いますか？」と聞いてしまったことがある。帰ってきた反応は、目が点、声がぼそぼそぼそ。幸いなことに電車が彼の降りる駅に着いたらしく、会話はそれで終わった。

交流とは人が集まれば起こるものではない。電車に乗っている時に隣に座っている人が自分の関心あるテーマについて記事や雑誌、本を読んでいる時、その人に声をかけたくなった経験はないだろうか。電車には様々な人（学生、サラリーマン、フリーター、公務員、弁護士、子供、ポケットに小銭が2、3枚しかない人から、財布に札束を挟んでいる人まで）が乗っている。しかしそのように人材豊富な電車ではあるが、電車の中では交流はなかなか生まれない。

日米学生会議の参加者は日本かアメリカの大学に通っている学生であり、電車に乗り合わせた人々と同じように、様々な性格や興味を持った人間の集まりである。しかし、日米学生会議と電車では大きく異なる。最大の違いは、日米学生会議では、参加している学生の間に信頼のネットワークが存在することだ。この信頼のネットワークの上で、私たちは様々な「交流」をすることができたのである。

「文化交流」がその一つである。「文化」と一言で言っても、これは会議に参加していた日本、アメリカ、カナダ、台湾、中国、ナイジェリア、ウズベキスタンなどのナショナル文化だけでなく、学生の大学文化や若者のポップカルチャーなどローカル文化も含めたものであった。

もう一つの「交流」は「アカデミズム」といわれる、知識や問題意識の交流である。文化と同様、ここでも様々なレベルでの交流が行われ、行政・市民社会・企業についてのマクロ的な意見交換だけでなく、私たち学生、若者が一当事者として何を成しえるかというミクロ的な意見交換が展開した。

また、これらの交流はある特定の時間や場所で行われたものではなく、「文化交流」は沖縄で空手を経験している時にだけ起こったものではないし、「アカデミズム」は分科会で議論している時にだけ起こったものではない。ご飯を食べながら、ベッドで寝転がりながら、夜一緒に騒ぎながらも文化、そして知識の交流は絶えず行われていたのである。

72名の人間が1ヵ月間、同じ電車に揺られながら、いつでも、どこでも、最初はためらいがちに、やがて恥ずかしがらず積極的に、多様な「交流」を重ねては信頼のネットワークの糧としていく。それが、日米学生会議であった。

日本再発見

伊中英輔

「自己の立脚点を疑え」という言葉がある。人間誰しもドグマにはまっているものであり、そのドグマから抜け出すためにはまず己を見直さなくてはならないということである。

私たちは日本人である。アメリカの学生に対して、「日本では…」という言葉で私たちの社会の現状を説明する。私たちもまた、「日本」というドグマの中にいるのだ。しかし、私たちはそのドグマをどれだけ理解しているのだろうか。

日本は単一民族からなる国家である。こう言った政治家をメディアは嘲笑し、我々ももちろんその政治家の不見識を笑った。だが一方で、日本の中の一地域に住んでいる我々が実際日本の多様性をどれだけ認識しているのかは、かなりの部分で疑問がある。確かにアイヌ文化も、沖縄文化も日本の多様性を示すものだ。国籍についても、日本人だけでなく、韓国人、中国人など様々な国の人々が日本には集まっている。頭では理解できる。だが、感覚的な部分でどれだけ理解できているだろうか。狭いコミュニティの中で特定の人としか話さない生活の中で、誰しも無意識のうちに生じる誤解があるのではないだろうか。

そんなぼんやりとした自分の感情を、日米学生会議は時に明確に示してくれた。沖縄の学生とのディスカッション。そこで聞かれる「ナイチャー」（本土の人）という言葉は、頭では分かっていながらどこかショッキングであった。沖縄人というアイデンティティというものの想像を超えた強さ。この事実はまた、自分の多様性に対する尊重の念がいかに小さかったかを如実に表していた。沖縄問題に対する本土の人々の関心が概して低いのは、単に基地が隣にないからではない。沖縄が離れているからではない。沖縄というアイデンティティを社会が省みてこなかったからではないか。沖縄は、未だに日本からは疎外された存在であると思う。沖縄の人々がどんなに声を張り上げて基地反対を訴えても、その声は空しく響く。

福井にて。農作業から伝わる大地の感覚。濃緑の自然。だが、山中から突如として現れる、現代科学技術の最先端である原子力発電所。美しい田園風景から飛び出したこの要塞のような建物は、まさに異常である。美しい自然は残しておきたいが、産業構造の変化の中で農業、林業、漁業だけではやっていけない。そこに、人々の生活水準を上げる手段としての補助金を伴った原子力発電所が登場する。たとえ、安全性のいかにかかわらず原子力発電所が歓迎すべきものでなかったにしても、補助金に一度手を出した自治体はそれなしでの財政がありえなくなってしまう。ここにもまた、矛盾を抱えた人々が存在する。コンクリートの白色と緑の断絶は見事なほどのコントラストであるが、これはそのまま社会の断絶を投影しているともいえよう。私たちの生活は、このような誰かへのしわ寄せの上に成り立っているのである。電気もガスも水も、スイッチをひねれば出てくると想像しがちな生活の中で、どれだけの人々が、そのしわ寄せを想像できるだろうか。それ以前に、日本の豊かな緑を、自然と共生した生活を、どれだけの人々が想像できるのであろうか。原子力発電所が建っているという事実だけではない。緑や、伝統文化など、原子力発電所により失われたもの、そして補助金という、原子力発電所に

より得たものを理解しない限り、福井の人々の中にあるゆがみは、理解しようがない。

金閣寺、銀閣寺、竜安寺、嵐山。最後に私たちが目にしたのは、古都京都の風景であった。京都の美しさをアメリカの学生と話しながら気付くのは、京都の風景のエキゾチックさ。しかし、これは奇妙な話ではないか。何故私たちにとって、「私たちの文化」である京都がエキゾチックなのか。もちろん上方文化という地域差を含めたにせよ、私たちの京都に対する視点は、圧倒的に第三者的である。自分たちでさえ理解できないものを、自分たちの文化と誇るこの矛盾。そこに、時代の断絶がある。夏目漱石は江戸から明治にかけた時代の転換を、外発的な開化と評した。それは時代の転換を理解しないままに、外国から押し付けられた社会の転換を意味する。その結果として生じた、内面的、主体的な自己意識である近代的自我と封建的精神との狭間に、夏目漱石は苦しんだが、この苦悩は未だなくなってはいない。少なくとも、京都の町並みを見て感じる奇妙な感覚は、時代の断絶を如実に表していよう。伝統文化が私たちの文化であると断言もできず、とはいえ空虚感を代わりに埋めてくれるような文化は、少なくとも近代日本の中からは生じていない。我が身を振り返れば、日本人というアイデンティティがあまりにも薄弱であるということに気付く。

アメリカの学生と日本各地を旅し、気付く日本の中の断絶。それは時に空間的な断絶であり、時間的な断絶であり、精神的な断絶である。これらのギャップを超えて、日本の多様性を認識できた時に、初めて私たちは「日本では…」という言葉でもって自分たちの社会の現状を、アメリカの人々に説明することができるのではないだろうか。

最初に述べたドグマを解決する手段として、想像力という言葉がある。私たちがすべての人々の立場を体験することは不可能であるにせよ、それを想像することは可能である。だが言うは易し、行うは難し。何も無いところから想像力を広げるのは難しい。しかし、日米学生会議では、アメリカの学生という存在が私たちを写す鏡となり、想像力を広げる触媒となってくれた。日本学生メンバーの言葉の中に、「アメリカの学生と歩いている時には、いつも歩いている新宿が違う空間に見える」という意見があった。このように自分を相対的、客観的に見つめることができてこそ、初めて他者を理解することも可能になる。沖縄の学生の弁。「沖縄に住んでいると沖縄の基地があまりにも身近で大きすぎ、断固反対と言いたくなるが、本土の学生、アメリカの学生と話をする中で、国際社会の文脈の中でも基地が見えるようになった。」これもまた、日米学生会議があったからこそ生まれた想像力であろう。

以上に記してきたことは、読む人によっては非常に陳腐でくだらないという印象を持たれるかもしれない。例え日米学生会議に参加しなかったとしても、何冊かの本を読めば容易に日本の多様性など理解できるのに、1ヵ月という期間を費やしてそれだけの感想しか得られなかったのか、というそしりを受けるかもしれない。それらの批判は甘受しよう。だが、言葉で表せる以上に、日米学生会議を通じて感じた日本の姿への衝撃は大きく、また日米学生会議を通じた日本に対するメタ認知は意義深いものであった、と私は信じている。素晴らしい体験を与えてくれた日米学生会議に、この場を借りて深く感謝をしたい。

日米学生会議と理系学生

圓山由子

まず、このエッセイを書くにあたって一つの疑問を感じた。「なぜ『日米学生会議と理系学生』という章があるのか。」

日米学生会議にとって「理系学生」達は、「理系学生にしかできない」役割を果たしていたのであろうか？「文系学生」とは違った存在であったのか？

理系学生の一人として参加した私にとって、少なくとも会議中、自分自身が理系であるということを意識させられたことは全くなかった。専門分野を意識しなかったのは、私が「民主的政治システム」分科会という、自分の専攻である物理とはあまり関わりがない分野の分科会に所属したためであろう。私以外にも理系学生はいたが、全員が「科学教育」分科会所属であった。

会議中、あまり他の分科会の活動に目を向けられなかったためよく分からないが、私以外の理系学生は自分の専門分野を意識することもあったろうし、その専門性を発揮していただろう。私の分科会では、各自の専門性がはっきりと表れていた。そのため、理系である自分が、自分の教養不足のためであるのだけれども、やや部外者であるような感じがした。

しかし、分科会以外の時間では、参加者の専門分野を感じることはあまりなかった。理系も文系もなかった。各自がそれぞれ「個性」を発揮し、その個性は専門分野が何かで分けられるようなものではなかった。私の目から見てこの第 55 回日米学生会議での印象は、この「分科会以外の時間」の方がずっと強かった。だから、会議全体を通して見ると、各自の専門性を感じることは少なかったと今になって思う。私も他の理系学生も、「理系だから」ということで会議全体において特別大きな役割を果たしていなかったと思う。別に一人も理系学生がいなかったとしても、今回の第 55 回日米学生会議に劣ることになるとは思わない。その学生が、「理系」か「文系」かということより、もっと広い範囲で「どんな人間か」ということが、この日米学生会議に大きな影響を与えていると思った。

日米学生会議と理系学生

横田聡

「『理系』『文系』って分けて考えること自体がばかげている。そんなのアメリカにはないよ。」とは、ある日本側参加者の意見。確かに、理系文系という「枠組み」はアメリカにはない。しかし、高校の授業から理科系教科や文科系教科どちらかにある程度偏ってとる傾向が強いそうだ。どちらにしても、人文社会科学系に進んだ者にとっては、科学はあまり魅力のない分野らしい。

日本では国家官僚や会社社長、国会議員など政治や経済を動かしている人たちに占める理系の割合が他国に比べてかなり低い。こうした、科学に興味を持てなかった人たちによって教育が語られた先の教育改革では、「理系危機」が叫ばれた。

かくいう僕たち理系の人間も「安保についてはよく知らないし…」「政治って、いま何が起こっているの？」となっている傾向が強いことは否めない。現に、日米学生会議にも応募の時点で理系の人は少なかったと聞く。

このように興味が分かれたままであると文理の分離分割はますます進むばかりだ。だから、僕たち一人ひとりが自分の専門とする分野や仕事とする分野だけでなく、アンテナを伸ばすこと、また、他の人に自分の興味のあることの楽しさを伝えることが大事だ。

日米学生会議はその歴史の中で「日米」の架け橋としての大きな役割を果たしてきたし、これからも同じように役割を果たしていくであろう。同時に理系文系の架け橋にもなってほしいと思う。

ノミニケーション

河本健志

ノミニケーション。どこでこんな言葉が生まれたのは知らないが、ここでは、「酒を楽しみ、友と語り、酒を通し、異文化を知る」と訳をしたい。

お酒は万国共通。飲酒が宗教で禁じられたイスラム圏でも、お酒にまつわる詩は存在する。そして中国の歴史は、お酒の歴史と共にある、とさえ言われている。そんなお酒を通じて、アメリカ側学生と異文化コミュニケーションし、また東京、沖縄、福井、京都において、様々な人々と有意義な一時を共有できた。そんな意味で、第55回日米学生会議は、お酒と共にあった夏、とも言える。

ここである詩を引用したい。杜甫の「飲中八仙の歌」である。そこで彼は、「李白は酒を一斗飲んで詩を百篇作った」と詠んだ。我々学生は、麦酒を飲んで友を100人以上作った。これは、お酒の力というものが、どれだけ人間に非日常的な力を与えてくれることかを証明している。そして、李白と杜甫はお酒を飲み、無二の親友の間柄になったという。私たちも、多くの友人達とお酒を片手に親交を深め、彼らに劣らない友情を築き上げた。これが、まさしくノミニケーションである。

我々はただお酒を飲んでその場を楽しんでいたわけではない。ノミニケーションの場を通し、異文化体験、お酒にまつわる互いの文化を理解し合った。日本文化特有の居酒屋において、あるアメリカ側の友人達は、そのお店の雰囲気と焼酎、枝豆、冷奴、雑炊、塩辛などをこよなく愛した。相手の食文化を知る事は、相互理解のまず第一歩である。そして彼らは、日本人のお酒の注ぎ方からも、日本文化の理解を深めた。さらに、日本人がお酒を楽しむ際の方法の一つである、掛け声を掛け合いながら相手にお酒を勧める方法さえも彼らは吸収した。これも、ノミニケーションならではの異文化体験である。

さらにお酒は、思いもつかないような力を私たちに与えてくれた。それは不思議な言語能力の発達である。英語が自然と耳に入り、自然と口にしている自分たちに驚きを覚えた。それは、日本側だけではなく、アメリカ側学生も同感であった。

ノミニケーションにはもう一つ、重要な役割がある。それは普段は言えないフラストレーションの解決である。多くの場合、相手に自分の不満など悩みを打ち明けることで、心は少しでも晴れるものだ。その事で、また気持ちを切り替えて物事に取り組める。これは、学生会議でも同じである。1ヵ月寝食共にすれば、文化の違いや意見の違いで問題は起きるのが当然で、その問題は相手に非があるわけではなく解決策がない場合が大半である。そのような時に、相手に自分の気持ちを話すことで気持ちを切り替えられる場合もある。これは、大変重要なことである。社会に出ればノミニケーションがこのような役割のために使われることもあるであろう。

最後に、会議中杯を交わしてくれた友人に感謝の意を述べ、そして会議中にお酒を通して迷惑をかけた友人に、ここで謝罪をしたい。もちろん、ノミニケーションをして周りの人々に迷惑をかけては問題である。しかしその場を通じなくては、わかりあえない心と心のキャッチボールもあることを理解してもらいたい。

李白と杜甫は、二度と再会することはなかった。しかし、第55回日米学生会議の学生たちは、いつの日か世界のどこかで再会し、ノミニケーションをすることを願う。

ノミニケーション

江川響子

円滑にコミュニケーションを進めるための舞台装置には色々あっていいと思うし、その中にアルコール類の飲用による酩酊作用を利用するという方法もあって全くよいと思う。法律に違反していない範囲であれば、の話であるが。お互い酒を飲み「酔った」振りをして、普通の精神状態ではできないとされる言動に及ぶことも、法律に違反しない範囲であればよい。これも人間関係を促進するための一手段として、肯定的な面もあるだろう。楽しく、他人に迷惑をかけなければ、コミュニケーションのツールとして否定されるべきではない。

しかし、私は「馴れ合い」を生むだけのノミニケーションは否定したい。お互い喧々諤々シラフで意見をぶつける中で生まれる結束が、一番強いはずである。シラフでコミュニケーションを取れない気まずさを酒屋の騒がしい雰囲気と酒の酩酊作用で打ち消して図るコミュニケーションは、単なるごまかしではないだろうか。学生時代ならいいかもしれないが、これがビジネスの場になると、コミュニケーションツールとして飲みを重視するというのはとんだ発想である。単なる「馴れ合い」で厳しいビジネスの世界を生き残れるわけはない。Nominication という造語は、お互いいい意味で人格を傷つけ合うことを避ける日本人の特性をよく表しているのではないだろうか。

夜の分科会

飯田智紀

第55回日米学生会議では、決められていたプログラムは大体夜の9時過ぎにはすべて終了していた。すると夜の9時過ぎから翌朝の9時にまたプログラムがスタートするまでの間は、睡眠を取る時間であると同時に、日米の学生が自由に交流する時間でもあるのだ。この時間のことを、「夜の分科会」と参加者は称し、様々な出来事が起きた。

まずこの会議ならではと感じたのが、「風呂場会議」というものだ。これは何かと言うと、ただ単に日米の学生が一緒に風呂に入り、その時に多種多様な話をしたというだけのものだ。(男性の方ではこれが頻繁に行われたが、女性の方ではあまり行われなかったらしい。)普通の世間話から、お互いの人生観、恋愛観、将来の夢など真面目なものからくだらないものまで、数え切れないほど多くの話がされた。大浴槽に何人も入りながら、身も心も裸にして語り合うというのは、今回の会議が日本開催であったからこそ実現した、特別なものだろう。この風呂場会議をきっかけに、親交が深まり、友情が芽生えると同時に、それが実際のディスカッションをより活発かつ円滑にする力にもなった。

次に紹介するのは、「フラストレーション会議」と称されるミーティングであった。これはお互いの陰口を言い合うものではなく、各自がこの会議中どのような悩みを抱えているのかを暴露し、その悩みをどう解決できるかを数人で模索する場であった。話された話題の例を挙げるとすれば、実行委員の運営方法に対する不満や改善点の提案、日米学生会議に参加する前に抱いていたイメージと現実の差に対する憤りなどを挙げることができる。しかし、中でも一番の問題になったのが、言語の壁をどのように乗り越えるかであった。本会議中、英語で自分の意思を伝えるのが難しい人、英語で何が話し合われているのかを理解するのが難しい人は、どうしても英語と日本語のできる学生に通訳や翻訳を頼むことになり、なかなか自分の口から自分の気持ちを表現できないことにフラストレーションを感じていた。言語の壁というのは日本の学生とアメリカの学生の間にあっただけではなく、日本側からの参加者の中にも英語が得意な人、不得意な人といったような語学力の壁があった。そのため「日本側参加者の英語力が一緒だったらいいのに」や「英語の話せる日本側参加者は、本会議が始まったら急にアメリカ側参加者のように見えた」といったコメントがされたりもした。これは必ずしも誰もが感じていた思いではなく、もちろんこのコメントに対する反対意見もあり、多くの衝突があった。しかしお互いが本音で語り合っていたので、衝突はあったものの、それが相互理解を深めるきっかけになったとも言えた。自己満足のための語りの場、互いの傷をなめ合う場と言ってしまえば、その通りかもしれないが、このように本音で真剣に語り合うことができたため、多くのことを学び友情関係が深まったと言える。

1ヵ月間という期間、文化も生活習慣も異なる日米の学生が共同生活をするのだから、多くの衝突があって当たり前だ。また日米間の対立だけではなく、日本側参加者内での衝突、アメリカ側参加者内での衝突も無論発生する。しかしこの会議を通して感じたのは、これらは文化的背景の差異が原因になっているというよりは、個々の考え方の差異が原因になっている場合の方が多いということである。数々の衝突を通じて、参加者はお互いを日本側、アメリカ側といった枠にはめて人を見るのでなく、お互いの存在を尊重し合うことを学んでいったと感じている。個性的な72名の学生が集ったこの会議で、衝突が起きないはずがない。しかし仮に衝突が起きても、この夜の分科会と称される時間を使い相互理解が深まると同時に、真剣に本音で語り合うことが可能だったため、参加者は多くのことを学んだ。真面目な話からくだけた話題も話せたこの時間こそが、日米学生会議が提供してくれた、最大の相互理解を深める機会であったと言っても過言ではないだろう。

「日米」「学生」「会議」とは何か

坂口紋野

日米学生会議は、来年、70周年を迎える。多くの学生会議の中でも、最も歴史があるとされている。そのように由緒ある学生会議が、このように続いてきたのは、過去の先輩方の努力と企業、団体の方々からの甚大なご理解、ご協力があったからに他ならない。しかし、歴史ある学生会議であればあるほど、「継続」の色を濃くして、大した議論もなく会議が続いていく感も否めない。ここで、改めて現在の日米学生会議の意義を問うてみたいと思う。

まず、なぜ、「日米」なのか。150年もかけて構築された日米関係は、今でも強い結びつきを見せている。ただ、経済力第１位、第２位の国を担う若者が考えなければならないことは、ある点では共有していると思う。例えば、先進国として世界の持続可能な発展のためにどのように貢献できるのか、そしてどのように責任を果たせるのかなどである。中には、日米の学生が語るよりも、日本があまり接点をもっていないような国と語ったほうがよい、という批判を述べる人がいる。しかし、私は日本にとって重要なアメリカとの関係を、多様な側面からさらに考えていく必要性があると思う。

では、なぜ、「学生」なのか。学生団体を一言で述べると、「学生が主体的に活動する集団」と言える。ある目的を掲げて、期間限定で集まったメンバーで構成されている。このような学生の行動はどのような意義があるのか。学生は特定の利益集団に属さないため、社会の一員として自由闊達な意見を言える。そして、時間と行動力を活かして、様々なところへ行って先代に話を聞くことから発展させ、次世代を担うものとして、新しい考え提案することができる。また、学生の時分から世の中に関心をもち、学生なりに社会に働きかけることで、市民一人ひとりがより良い社会を創ることができるという気概を持つことができるだろう。このことは、今後の人生をより充実なものにすると考えられる。

最後に、なぜ、「会議」なのか。　情報化社会の到来により、インターネットやメールを使って、世界のあらゆる人々との意見交換の場を持つことが可能となっている。さらに、アメリカの国内情勢や国民感情などの情報が否応なく日本にも入っているのも事実である。そのような恵まれた環境では、互いの文化を全く知らないという人は皆無だろう。しかし、直接、机を並べて語る意義は大いにある。まず、顔をつき合わすことは、１対１の信頼醸成に一役を買う。１ヵ月にわたって、真剣に語り合ったり、ふざけ合ったり、自分の意見を述べたりすることを繰り返し、さらに、互いの言語を学ぼうと努力をする。このように、相互理解や友情や信頼を通して、より活発に意見を述べるという習慣が身につくことは、未来を創る私たちの今後の活動において、重要な点である。

このように、現在でも日米学生会議を実行する意義は、様々な視点から見出すことができる。これは本会議の間に、参加者同士で何度も話し合われたことでもあった。本会議がその社会的な評価に甘んじることなく、学生会議の草分けとして、その判断力や改善する力を継続し、発展していくことを願っている。

学生による運営の限界と可能性

市川晶子

日米学生会議は、創設当時から学生が自らの手で創り上げてきた長い歴史と誇りがある。しかし、すべてが学生による積極的な働きかけによって運営されていた当時と比べると、現在の日米学生会議は、主催団体である財団法人国際教育振興会やJASC, Inc.により継続的な支援が保障されており、安定した会議規模と運営や財務活動における組織的サポートが約束されている。このことから、日米学生会議は主催団体から提供される快適な運営環境に安住し、そこで継承されてきた会議運営の形式を毎度こなすだけで、真に「学生主体」であった創始当初の緊迫感に欠けているのではないか。「学生による運営」は本当に内実を伴っているのか。このような問題意識を抱く者もいるであろう。

そこで、半世紀を越える長い歴史と共に、組織としての惰性を問われてもおかしくない日米学生会議の運営体制の中で、「学生による運営」がどれほど実現されているのか、果たして「学生による運営」が理想だけに終わっていないかを考察する。

第55回日米学生会議では、「学生による運営」という言葉に疑問を抱く参加者が少なからずいた。その最大の理由は、日米学生会議を実際に維持、運営するための「資金」という問題にあった。様々な賛助者や団体、企業から多額の資金援助を受ける限り、学生が対外的なことに配慮せねばならなくなる事実は否めず、企画運営の面でも場合によっては、自らに一定の制約を課せざるをえないこともありうるからだ。また、財政面でより有利な条件を得ようとする主催団体側の思いが、かえって「学生主体」を脆弱にしてしまう側面も否めない。例えば、第56回日米学生会議の開催地が、資金援助や日米学生会議70周年記念事業の関係で、すでに一部ではあるが、アメリカ側主催団体によって決定されていたこと、そして学生はその決定された枠組みに沿う形で第56回日米学生会議を創らねばならないことが挙げられる。

このように、今日の日米学生会議を厳しく分析すると、学生による企画運営の現状は、時にはある制約のもとでしか実現されていないことがうかがえる。しかし、日米学生会議自体の社会的認知度が相対的に低下している事実に加えて、多額の資金調達の必要性、会議の企画運営と大学生活との両立の負担や効率性といった、学生が抱える実際問題を考慮すると、やはり、多種多様な形で外部からの支援が、会議の実質的機能に必要不可欠であることは否定できない。つまり、学生の立場としては、学生による自主的な運営を望む気持ちを抱く一方で、資金や時間の制約を全負担できないという現実との板挟みの状態にあ

るのだ。

もちろん、企画運営の際に厳しい条件が課されても、強い信念で現在の問題に取り組むのが「学生」である。様々な制約の中でも「学生による運営」が保障されているからこそ、日米学生会議に秘められる可能性は多数存在するのである。例えば、ある程度の外枠がすでに構築されていたとしても、その中で型にはまらない柔軟な考えを、会議企画の隅々にまで活かす強みを学生は持っている。また、会議の意義を問い続けるための時間的、肉体的、精神的な余裕やパワーがあり、「学生」という特有の立場から、ダイナミックな社会変革を実現することも大いに期待できる。さらに、企画運営を進める中で、社会との直接的対話の機会が増え、様々な人々と将来的な縦横の良好関係を築くことも可能となる。そして、学生の「自由な発想」に社会的意義が見出される可能性も十二分に存在するのである。

学生による運営は、常に限界と可能性の間に位置していると言えよう。しかし、それを可能性に導くか、それとも限界を理由に逃避するかは、すべて学生の積極的かつ主体的な意欲と行動にかかっている。日米学生会議は、多様な課題と、それを越える多大なる可能性を秘めて今日にいたる。日米学生会議という学生のエンパワメントの貴重な機会を大いに活かし、「過去」の学生が直面した限界や課題に対して、「現在」の学生がその可能性をもって、精一杯の体当たりで改革に臨み、「将来」の学生へ新たな問題提起をすることこそが、学生による運営の一番の魅力であり、最大の挑戦ではないだろうか。

未来の日米学生会議へむけて
——残された課題と提案

阿部幸音

時間の威力とはすごいもので、とかく思い出は美しくなりがちである。私を含め、多くの参加者にとっての第55回日米学生会議もその例外ではないかもしれない。しかし、会議中、我々が確かに感じていたいくつかの不満や疑問点は、今後の日米学生会議にとって、改善のためのヒントでもあるのだ。そこで今夏の経験をただの楽しく美しい思い出としてではなく、批判的な視点で振り返ることで、いくつかの具体的な提案をしてみたい。これからも続いていくであろう日米学生会議の更なる発展に少しでも寄与できれば幸いである。

会議開催の間中、日米両国の学生は、お互いが会議を通して達成したいとする「目標」にズレを感じて悩み、時には衝突を繰り返した。つまり、アメリカ側参加者の多くが、文化交流を通して日米間の友情を育みたいという、どちらかといえば個人的で「長期的目標」を持っていたのに対し、日本側参加者はそれに加えて、「短期的目標」を持ってよりシリアスな態度で会議に臨む傾向があった。ここでいう「短期的目標」とは、会議によって得たものを何らかの形で社会に発信し還元する、という会議が全体として達成すべき（と思われていた）目標のことであった。このような「目標」のズレによる温度差や「期待はずれ感」は、結果として新実行委員選出の際に「文化交流かアカデミズムか」というような議論にまで発展し、最後の最後まで尾をひいたのであった。

ここでこのような態度や意識の違いを、アメリカ側の個人主義と日本側の全体主義、というステレオタイプ的価値観の差異に求めることには意味がないだろう。それよりも、参加者の募集段階から両国間での調整が必要なのだと思う。例えば、大抵の会議参加者にとってこの会議と出会うきっかけとなるであろうポスターやそのキャッチフレーズは、応募者に会議の大まかなイメージを与える。日米間の文化交流を主目的とした会議なのか、それとも分野ごとに専門的な話し合いをすることで特定の問題に対する解決方法を模索するのか、はたまた日本 vs.アメリカ的にディベートをするのか、等々である。このように日米間で応募者の抱くイメージに大きな違いが生じないように、広報では両国同様の表現を使うなど事前に配慮しておく必要性がある。そうすることで、今年も一部の参加者が悩んだような「期待はずれ感」や、会議の雰囲気に対する違和感などの原因の一端を解消できるのではないかと考える。

次に、アメリカ側参加者は地理的な問題から、日本側参加者が行ったような春合宿や事前準備のための講演会など、全員が会議前に集まる機会を持たない。一方、日本側参加者は専門家を招いての講演会や勉強会などの事前準備を通して連帯を強め、そして会議に対するシリアスな雰囲気を形成しがちである。このことも、日米間の会議に対する温度差を生み出してしまう原因になっていると考えられる。実際、日本側参加者が春合宿などを行ったことを知って、それは不公平だと不満を漏らしたアメリカ側参加者もいた。しかし、だからといって両国間で事前準備に極端な差がでないよう、日本側が事前準備を減らす必要はないだろう。ただ、せめてどのような準備を行っているか

相互に連絡を取り合うように、これも早い段階での調整が必要であると考える。具体的にはインターネットを活用しての義務的なオンライン・ミーティングなどである。全員が一度に参加することは難しいにしても、実行委員のみならず、参加者もグループごとにあらかじめ連絡しあってミーティングを行うことは可能だろうし、早くから英語での意見交換をしておくことは日本側参加者にとっては精神的な準備にもなるだろう。ただし、このようにインターネット環境が必要な場合は、そのことも募集段階で参加者に公示しておくべきである。なぜなら今年の会議では、事前にパソコンの有無やインターネット環境に関してその必要性が知らされることはほとんどなかったため、会議への参加が決定してからその重要性に気付き、困惑した参加者がいたのも事実だからである。

最後に「言葉の壁」について考えてみたい。これまで会議への参加条件として、語学力はあまり重要ではないとされてきた。そのため会議参加者の語学力には当然ばらつきが生じ、今年度の会議では、語学力のある者が常に通訳をしなくてはならず負担が大きいなどの問題が生じていたことは、もちろん今後の課題であるだろう。さらにこれとは別に、参加者の多くは「言葉の壁」を意識して、なかなか積極的にコミュニケーションを図れないという心理的な問題も抱えていた。このような問題は特に会議初期に多く見られ、参加者のストレスを増大させていた。このような心理的な「壁」をできる限り早く解消することは、その後の会議をスムーズに行い、より充実させる上で大変重要である。そのためにバディ・システムのようなものがあったらよいのではないだろうか。つまり、日米両国の学生をそれぞれの語学力に応じて予めバディ（二人一組）にして、会議開催の間、バディは相互に協力し合うというものである。ある人が、他の人と打ち解けるためには、意味のある体験を共有することが必要であり、その際、時間の長短はあまり関係ないと私は考える。そのことから、特に最初のうちは、例えば全員参加型のオリエンテーションやリフレクションミーティングよりは、短くてもバディ単位で共有する時間があったほうが、参加者にとって有益ではないかと考える。さらに、会議を通して特に親しい友人や相談相手を得ることができるだろうし、お互いへの理解が深まれば会話も弾み議論も深まるだろう。逆に分科会は、会議が始まってすぐに行うよりは、もう少し後半に集中的に行ったほうが効率的ではないだろうか。またこのシステムを会議開催中の講演会やレセプションなどでも活用すれば、先に述べたような通訳の問題も解決に近づくかもしれない。全日程を通してのバディ・システムは形骸化することも十分考えられるが、少なくとも参加者の緊張状態が解けるまではこのようなシステムを導入してみたらどうだろうか。

会議が行われるということは、そこには理由や手段、目的があるはずであり、目的達成のためには目標があるべきである。では日米学生会議の目的とはなんだろうか。それは一言で表現するならば「相互理解」ということになろう。この点に関して深く検証することはしないが、多くの参加者が折に触れて口にしていた「相互理解／mutual understanding」こそが、当会議の設置当初から続いている目的であると理解している。目的達成のための手段やその過程における目標は、個人レベルにおいてはいくつあっても良いだろう。しかし会議全体としては、目的、すなわち相互理解達成のためにどのような目標を設置し、どのような手段を講じるべきか、という点について我々は今一度再考すべきなのではないだろうか。それはつまり、様々な学生による会議が乱立する現在において、日米学生会議がどのような意味を持つのか、今後どうしていくべきなのか、という根本的な問いを考えるということでもあるのだ。

第55回日米学生会議が目指したもの

乗竹亮治

第1節　はじめに

日米学生会議は人生に似ていると感じることが多々ある。いや、人生の縮図と呼ぶべきか。これと信じたひと夏に向け、1年間準備をする。その過程で募った参加者と共にひと夏の花を咲かせるものの、もろくも参加者からの批判にさらされ、作り上げてきたものはいとも簡単にくずされ、次世代が新たな夏に向けて動き出す。これを人生の縮図と呼ばずに何と呼ぼうか（僕が日米学生会議に魅了され続けている理由は、ここにあるのかもしれない）。

では、人生の縮図であるならば、どのような姿勢が求められているのだろうか。先人たちが築き上げてきたものを学び、そしてまた、自らのみならず、次世代のために努力を惜しまぬべきだろう。この視点は近年の日米学生会議にやや欠けていたかもしれない。無論、70年近くに及ぶ過去の歴史は、膨大なものであるし、それを解きほぐすことよりも、その時その時の時勢に応じた会議を構想することのほうを、近年の各回会議が重要視したことも当然のことであるかもしれない。しかし、結果的に日米学生会議の縦のつながりが希薄になり、社会的な組織の成長がおろそかにされてきたのもまた事実である。

第48回日米学生会議日本側報告書編集後記には、下記のようなくだりがある。
「（前略）準備活動中、京都大学総合人間学部助教授（当時）のカール・ベッカー氏に、日米学生会議の意義についてお話をうかがう機会があった。私自身は直接参加できなかったのだが、後に伝え聞いたことは、私の悩みに対して示唆に富むものだった。日米学生会議で成果を出さなくては、という意見は多いが、1ヵ月の私たちの会議によって、ドラスティックに社会が変ることはありえないだろう。ならば、会議の意義を何に求めるのか、という話になる。私は、日米学生会議を『教育機関』だと捉えていたし、現在でもそれは変わらない。少々陳腐な言い方になるが、参加者がその人生の中で、会議に学んだことを何らかの形で活かせれば、つまり、日米学生会議が『教育の場』になれば、それだけで大きな成果だと考えていた。しかし、ベッカー氏は、日米学生会議自体が48回という回数を重ねているにも関わらず、社会的に成長していないことを疑問視していたのだ。合わせて、社会的な認知度の低さや、個人へのインプットを超えた成果を出せていないことの理由として、縦のつながりが非常におろそかにされていることを挙げていた。（後略）」

我々はこの批判を甘んじて受け入れる必要があるだろう。各回の実行委員会には、時勢に応じた会議を構想すると共に、これまでの歩みを振り返り、「変える必要のないもの」、

「変えなくてはいけないもの」を見据え、日米学生会議の社会的成長に貢献する責務があると思える。

国際交流が一般のものとなって久しい。1934年当時のような緊迫した日米関係もない。であるからこそ、日米学生会議は常に前進を求め、時代のニーズに応えつつ、果敢に成長をしていかなければならないのではないだろうか。

このような時代的要請を受け、第55回日米学生会議実行委員会は、過去の資料を読みあさり、日米学生会議の再定義に努めてきた。本稿は、第55回日米学生会議実行委員会が過去を振り返り、思い悩み、そして一筋の光を見出すまでの足跡の記録であり、また、過去の先人たちが達成してきた成果の集大成である。

第2節　日米学生会議の社会的成長を求めて

現在日米学生会議は、前年度の会議終盤において新実行委員選挙を行い、そこで選ばれた実行委員会が次年度会議を企画・運営するというシステムをとっている。このようなシステムが構築されたのは、1973年からと言ってよい。1954年、第15回会議を境に、会議は中断することとなるが、次に再開した1964年の第16回会議開催以降、日米学生会議は運営形態をめぐって模索を続けることになる。そのような時代的要請の中、1973年の第25回日米学生会議において、抜本的な改革がなされ、現在の形態が整備されることとなる。第25回会議で形作られた形態とは、主に、(1) 各回ごとに総合テーマを策定する、(2) 会議開催期間をこれまでの2週間などから約1ヵ月間とする、(3) 実行委員会が主体的に参加者選考を行う、そして (4) 前年度参加者から次年度実行委員を選出する、の4点であると言えよう。(4) に関しては、第16回会議以降も行われてきたことではあるが、それが正式に形作られたのは、様々な改革が行われ形態整備が進んだ第25回会議からであると言える。これらは、現在の会議における礎ともなっており、華々しく再開された第16回会議もさることながら、第25回会議を70年近くにおよぶ歴史の中での中興の祖と言っても過言ではないだろう。

本稿では特に、(4) の前年度参加者から次年度実行委員を選出するという組織運営形態に注目して、論を進めてゆきたい。

前年度参加者から次年度実行委員が選ばれるということは、日米学生会議を経験できるのは最大で二つの夏であり、実行委員としての任期は1年間ということである (※)。この極めて迅速な世代交代は、原則として4年ほどしかない学生時代において、各参加者が日米学生会議以外の様々な活動を行ったり、日米学生会議の経験をふまえて、次のステップに進むにあたって大いにメリットがあると言える。また、毎年の会議が全く新たな実行委

員会によって形作られることによって、一定のイデオロギーにしばられることなく時代の要請に即した会議の構築が可能になるだろう。

そして何よりも、各回の会議がそれぞれ異なる実行委員会により企画・運営されることで、実行委員会の持つ絶対性や専制性が相対的に低下し、参加者が実行委員会を批判しやすくなり、より良い次回会議を作ろうとする新実行委員会のモチベーションにもつながることとなる。

しかし同時にデメリットも存在する。世代交代が迅速であるということは、効果的な引継ぎができないということでもある。つまり、各回の会議があまりに独立して存在しているため、何を踏襲すべきか、何を変えていくべきかの見極めが困難であり、縦のつながりが希薄なのである。なお、ここでの縦のつながり、効果的な引継ぎとは、組織の社会的成長という視点に立ったものであり、歴代参加者の結束力や人脈としての縦のつながりは極めて強固であるし、実行委員の各役職としての引継ぎは効果的に行われている。

例えば、日米学生会議を開催する意義に関して、「1934 年当時などとは違い、日米関係が良好な今日において、なぜ今、日米学生会議なのか」という自問自答が第 41 回会議あたりから頻繁に行われるようになる。これはもっともな問いであろうけれども、日米学生会議はこの問いに答えを出すまで、10 年余りの歳月を要し、各回の報告書には、日米学生会議の意義に関して思い悩む実行委員会の姿が如実に表われている。現在、「日米学生会議とは実践的教育機関であり、長期に及ぶ友情を育み、将来の日米関係や世界に貢献するものである」という見方がようやく主流になりつつあるものの、いまだ明確な解答を模索している段階にあるとも言え、第 55 回会議でも何度も話題に上った問いであった。

この自問自答一つにしても、日米学生会議が社会的に組織として成長する速度が極めてゆるやかであることが見て取れる。これはひとえに、毎回異なる実行委員会が会議を企画・運営するというシステムに起因すると言えるだろう。組織を社会的に成長させるにあたり、何をどのように悩んだか、どのような議論が起こり、どのような答えが見えたか、もしくは見えかけているのか。これらが効率的に引き継がれず、踏襲すべき論点が見えぬまま、振り出しから新たな会議理念が構想されがちになってしまう。

では、任期を引き延ばすべきだろうか。誰かが数年間会議に残れば、社会的成長の進展は図れるかもしれない。しかし、それでは、先に挙げたメリットも消滅してしまうだろう。

前年度参加者から次年度実行委員を選出するというシステム内で、いかに社会的成長の効率性を達成するかという、既存のシステム内での改革が希求されていたのである。

第 55 回会議がたどり着いた解決策は、下記の通りであり、一定の成功を収めたと自負し

ている。

それは、旧実行委員会から新たに選出された新実行委員会への引継ぎという概念から脱し、新たに集まった参加者に、日米学生会議が抱えている社会的成長に関する論点を大量に提示していく、という発想の転換である。つまり、新たに参加者が集まった時点で、彼らを潜在的な第56回会議実行委員とみなし、これまでの日米学生会議の詳細な歩みや、過去の報告書からの引用、日米学生会議に関する論文などを参加者と共有し、彼らを実行委員会の意識レベルまでなるべく引き上げ、その参加者から選ばれた第56回実行委員会が、現在の論点を十分に理解した上で社会的成長に取り組める、という環境の整備である。これらはこれまで決して十分に行われておらず、例えば第55回会議実行委員会は、参加者当時、日米学生会議の大まかな歴史を知りえたのみであった。

今回は、具体的には、第55回会議参加者が初めて一堂に会する春合宿において、これまでの会議の歴史を詳細に振り返り、社会的成長の足跡を見つめた。また、日米学生会議に関する論文を配布し、夏の本会議までの期間には、幾度となく過去の報告書や実施要綱の引用をメーリングリスト上で配信し、第55回会議実行委員会としての課題も共有し、今後の課題を考察するきっかけ作りを惜しまなかった。

これらは、裏を返せば、第55回会議実行委員会が逃げも隠れもできないことを意味し、それだけ参加者が実行委員会と対等な情報を得る分、第55回会議が彼らからの批判を受ける可能性が増すことを意味する。しかしながら、批判を恐れて殻に閉じこもっていて、何が達成できようか。建設的な批判を第55回会議が受けずして、より良い第56回会議が構想されるだろうか。

2003年秋現在、無事第55回本会議は終了し、第56回会議が始動している。第56回会議の総合テーマは、第56回実行委員会ミーティングにおいて、「第55回会議が目指した“Civic Participation”は日米学生会議の性格上と時勢上、適切なテーマ設定であったと言えるが十分に達しえなかった」という批判の下、同じく“Civic”という言葉を使用し、“Civic Commitment”という語句を含んだものとなった。第55回会議はこの批判を甘んじて受け入れ、反省する必要があると共に、分断され独立された総合テーマが乱立していた近年において、これまでの足跡を踏まえた形で、このような既存テーマの深化が決定されたことに関し、社会的成長の進展に一定の貢献ができたと感じる。

第55回実行委員会は、言わば日米学生会議中毒のように、1年間の任期を務めてきた。そのような中、現在のシステムの抜本的な改革を第55回会議に期待する声も一部ではあった。もし、本格的に会議の組織運営形態を変えるようなことが起こっていれば、第55回会議も第二の中興の祖として、今後の歴史に名を残すこととなったかもしれない。しかし、抜本的な改革には痛みを伴う。第25回会議の際に行われた改革は、相当な痛みを伴ったも

のであったと耳にしている。そのような痛みを伴う改革が必要な時期もあっただろうし、いかなる組織においても不可欠な要素であるだろう。しかし、今日の日米学生会議に求められていたものは、痛みを伴わずして組織を活性化させる努力であり、言わばソフトパワーによる改革であったと確信している。

※なお、このシステムは明文化されているわけではなく、慣例として行われているのみで、言わばかつてのアメリカ大統領選挙の「三選は好まず」のようなものである。よって、2年連続して実行委員に立候補し、3度の夏を経験する者もごくまれにいるし、それ自体を非難する意図は全くない。

第3節　より精度の高いアウトプットのために

なぜ今、日米学生会議なのか。日米の学生が話し合うことは、日米関係が安定化した今日でも意味があるのか。現存する日米学生会議は手段が目的化した過去の残骸ではないのか。日米学生会議は悩んできた。

しかし、時代と共に組織の意義は変容してよいものだろうし、いくら日米関係が安定化したからといって、最も歴史がある日米両国学生による交流から意義が消えるはずはない。むしろ、日米関係が相対的に安定化した今だからこそ可能な二国間交流も存在するだろうし、歴史と共に安定した地盤を築いてきた日米学生会議が果たせる役割は限りなく多い。

現在の日米学生会議が果たせる役割は何なのか。どのような視点が日米関係を語る上で求められ、どのような会議を形作るべきなのか。このようなコンテクストで語られる自問自答には大いに意味があるし、各回の会議がより時代の要請に合ったものとなるために、必要な問いであろう。しかし、なぜ今さら日米学生会議をやる必要があるのか、もはや日米学生会議が果たせる役割はないのではないか、と思い「留まって」しまう自問自答は、いささかナンセンスであろう。だが、ここ10年近く日米学生会議はこの自問自答の呪縛から長く逃れられずにきた。そして、それにはそれなりの理由がある。

第2節では、この自問自答を例に挙げ、日米学生会議における社会的成長の可能性について考えたが、ここでは、この自問自答がなぜ起こり、それが必要以上にネガティブな発想を伴って繰り返されてきたのか、について考えたい。

まず第一に「1934年神話」である。日米学生会議の発端となった1934年の無鉄砲な渡米と、会議開催に向けた当時の学生の意気込みがあまりにセンセーショナルであり、極度のヒロイズムを誘発させる点である。これにより、現在の日米学生会議は手段が目的化した過去の残骸ではないのか、というコンテクストでのディスコースが久しく存在していると言える。言わば日米学生会議に内在する宿命である。

そして第二に、ここ数十年に及ぶ国際交流の一般化である。数万人の日本人留学生がアメリカで学び、アメリカ系企業の日本進出も目覚しく、日米両国間の姉妹都市協定を挙げればきりがない。国際交流を標榜する学生による諸団体も数多く乱立している。このような状況の中、日米学生会議への社会的注目度が相対的に薄れているとも言えなくない。開戦前夜や終戦直後であったり、日本人の海外渡航がまだまだ物珍しかった時代に、日米両国の学生が対等に語り合おうとしたことは、センセーショナルであり、言わば事件的である。しかし、現代においては、学生間交流も日米交流も決して珍しいものではなくなったのである。

この二つの理由が相まって、近年の日米学生会議は常に不安を抱えながら、その存在意義を模索していたとも言えよう。

このような背景の中、第55回会議が目指したものは、具体的な成果、アウトプットを求め、そしてそれを社会発信することである。個人的な成果すなわちインプットに加えて、会議としてのアウトプットを社会発信できる能力が、近年の日米学生会議に求められ続けてきたのもまた事実であった。すなわち、様々な国際交流が盛んな今日において、単に参加者個人にとっての教育機関として存在しているのみならず、日米学生会議としての独自のスタンスを社会に発信する能力が求められているのである。

第55回会議ではこれを二つの改革によって達成しようとした。まず第一に、より具体的な分科会テーマの設定である。これまでのように「経済」、「政治」、「文化」といったような大枠的な分科会テーマ設定ではなく、より具体的なテーマを設定した。これによって、的を絞って議論することを可能にし、より具体的なアウトプットを提言しやすくしようとした。第二に、オープンスペースでのフォーラムの開催である。これまで日米学生会議は会議終盤にひと夏の成果を発表すべく、フォーラムを開催してきた。しかし、そのフォーラムの開催場所は大学の講堂であったり、コンベンション施設の一室であったりし、訪れる方もまばらであったという現状があった。第55回会議ではこれを改善し、京都市内に最近誕生し話題を呼んでいるショッピングモールでフォーラムを開催した。これは全く新しい試みであった。

ではこの二つの改革は成功を収めたのだろうか。これまで問題視されてきたことに解決策を見出そうとし、改革を行おうとした努力は大いに認められるべきであろう。しかし、これにより具体的なアウトプットが発信できたか、というと疑問の余地が残るだろう。反省点を挙げるとすれば、日米の実行委員会間や参加者間でのコンセンサス作りと本会議前からの準備がもう少し達成できていれば、より効果的であったかもしれない。すなわち、会議前から日米両国参加者が連携して準備を行えるような体制を日米両国実行委員会が作り上げ、参加者各人がアウトプット重視の方針を認識した上で本会議に臨める環境が整備されている必要があったと思われる。特に、国土の大きさゆえに、事前準備活動が思うよ

うに行えないアメリカ側に意識の欠落があったかもしれない。また、実行委員や参加者の専門性不足、知識不足も、無論大きな障壁であった。大いに改善は図られたと思うが、まだまだ足りぬところはあっただろう。

また、学生間交流の根本的な意義と、このような社会発信重視の発想は、ややもすると矛盾するのかもしれないとも感じ、この二つのバランスを保つことの難しさを感じずにはいられなかった。

もし社会発信を重視するのであれば、ひと夏に日米の学生が集まるのではない別の組織作りが必要であるかもしれないし、専門家による知識人交流のほうがよほど効果的であろう。そして、オープンスペースでのフォーラムであるが、企画運営自体は、大いに成功であったと思われるものの、予想されていたような集客ができたかとなると、まだまだ改善の余地はあるだろう。

しかし一つ言えることは、参加者や実行委員会がこのような果敢な挑戦に取り組んでいく中で培った友情と相互理解は非常に強固なものとなった、ということである。単に交流したのみならず、壮大なる共同目標に向かって敗北感や達成感を共に感じるなかで培った友情は厚く、信頼できるものとなった。

また、これは感覚的なものだが、日米学生会議には、草の根交流と知識人交流の中間的な役割を担える可能性があると感じる。山崎正和氏をはじめ、知識人交流の希薄さに警鐘を鳴らす論客の存在は恒常的なものとなりつつあるし、知識人交流と草の根交流の断絶を危惧する声も多い。学生だからこそできる交流を大いに満喫しつつも、より高度な議論と結論を達成すべく努力する責務が日米学生会議にはあるのではないだろうか。今後の日米学生会議のバランスのとれた会議構築に期待したい。

最後に、先に挙げた自問自答が、必要以上にネガティブな発想を伴って繰り返されてきた制度的な原因とも言える観念的伝統に触れたい。それは、「翌年の会議開催は、会議参加者が必要を認めた場合のみ決定される」という伝統である。古くは、第 2 回日米学生会議がアメリカ側参加者の発意によって開催決定となった史実にもさかのぼるであろうし、この観念的伝統を保持することによって、日米学生会議が学生の意志によって継続されてきた「学生の学生による学生のための会議」であるという正当性を保ちうるとも言える。しかしながら、現存する日米学生会議は極めて安定的なものとなっており、継続が期待され、また円滑に継続するための関係諸団体との協力体制も充実したものとなっている。このような現状とこの観念的伝統は相容れなくなってきているのが実際ではなかろうか。第 55 回日米学生会議では、上記の明文化を行わなかったものの、この観念的伝統を全く打破したり改訂したりするにはいたらなかった。結果として、会議存在意義に関するネガティブな自問自答を完全に過去のものとすることはできなかったし、実行委員会内でも、この観念

的伝統の保持か棄却かに関しては、意見の分かれたところであった。今日の日米学生会議は、会議の継続や次年度会議の開催を前提とした上で、どのような会議が求められ、どのような会議を形作るべきか、という建設的な存在意義の模索を行う必要があるだろう。

第4節　脱「予定調和」にむけて

ヴィルヘルム・ライプニッツは、神の手により秩序づけられた世界における個体全体は、あらかじめ調和を予定された「予定調和」の中にいるという論旨を展開したそうだ。とりわけ日米学生会議は、この秩序づけられた世界になる可能性を常にはらんでいると言える。第49回日米学生会議日本側報告書の記述に、このことを端的に表現した記述がある。

「(前略) 応募者が殺到して選考が厳しくなるとき、日米学生会議は『知日派知米派学生会議』になる可能性を常にはらんでいる。しかし、そのような『分かり合うべくして、分かり合う』ような会議、『相互理解と調和と友情があらかじめ予定されている』ような会議、『日米の参加者が、日本人離れ・アメリカ人離れしている』ような会議は『知日派知米派学生会議』でこそあれ、『日米学生会議』では決してないように思われるのである。(後略)」

この指摘は大いに熟慮する必要があるだろう。選考に関わるプロセスにおいて、果たしてどこまで参加者の「日米関係への意識」や「日米関係におけるこれまでの経験」を重要視するべきか。それが強すぎれば、まさしく予定調和に陥ってしまうであろうし、弱すぎれば会議が成り立たないかもしれない。

第55回日米学生会議では、近年の会議がやや「知日派知米派学生会議」であった傾向を踏まえ、相対的に脱「予定調和」を目指したと言える。これにより様々な参加者が多様性のある価値観のもと会議を構成し、よりハードルが高い相互理解に果敢に挑み、厚い友情を築けたことは言うまでもない。しかしこの試みは、同時として、大いに反省を伴うものであったかもしれない。

まず第一に、アメリカ側と日本側の認識に若干のずれがあった点である。アメリカ側には比較的知日派が多かったのに対し、日本側の参加者はバラエティーに富んでいた。これにより、日本側参加者で、特にこれまでの日米関係における経験が少ない参加者に、かなり高いハードルが課せられた可能性がある。また、これに付随する形で、日本側参加者で、日米関係における経験が豊富でアメリカ側とのコミュニケーション能力に長けていた者に、予想以上の負担と責務が負わされた可能性も否定できない。

また第二に、具体的なアウトプットの提言など、その他の第55回会議が目指した構想に若干の矛盾が存在した点である。相互理解や人間関係の構築に予想以上の労力が必要とな

り、具体的なアウトプットを提示できるまでのアカデミックな議論が展開されるまで、やや時間を要したと言える。

無論、第55回日米学生会議が様々な多様性を内包して開催されたことで得られた、より強固な信頼関係と相互理解の結晶は代えがたい成果である。しかし同時に、日米学生会議に今後求められている姿を考え、日米学生会議という組織が今後社会的に成長を求め、果たしうる役割を模索していくのであれば、「知日派知米派学生会議」となることも視野に入れる必要があるのかもしれない。

第5節　日米実行委員会の共同歩調にむけて

日米両国が持つ規模の差は様々な点で歴然としている。世界の超大国であり、誰もがその存在を認めるアメリカに対して、一般的にアメリカ人にとってみれば、日本はアジア地域の一主要同盟国であるに過ぎない。無論、日米関係は極めて重要視されるべき存在であろうが、国力の差は歴然としているし、日本は偏狭のナショナリズムに陥るのではなく、冷静にその立場を見極め、アメリカをはじめ世界と向き合う必要がある。

この差は、日米学生会議においても、これまで全くなかったとは言い難い。すなわち、日米学生会議は日本側の熱き想いによって、これまで継続されてきたという側面である。アメリカ側参加者にとって、日米学生会議が、アジアの一国である日本人学生との交流と議論の場であるのに対し、日本側参加者にとっては、「アメリカ」人学生との交流と議論の場であるのだ。これまでの日米両国実行委員会の熱意を見ても、この差はあっただろう。

しかし、果たしてそれでよいのだろうか。日米学生会議は学生による二国間交流機関である。会議の企画・運営に当たる両国実行委員会は、国益や特定の利益にしばられることのない学生であり、客観的な両国の差に関係なく、それぞれの熱き想いを会議の成功に向け傾ける必要があるだろうし、それこそが二国間交流の真の成功につながるはずである。学生主体の日米学生会議は、この二国間交流としての成功を達成しうるに極めて近い立場にいると言える。では、日米両国実行委員会が共同歩調をとるには、どのような改善策が必要であろうか。

ここで現状を鑑みたい。日米両国の実行委員会は、1年間ものあいだ、地球半周分離れて仕事をすることになる。異なる言語を母国語とする両国実行委員会が地球半周分の距離をもろともせず会議を成功に導くことは、並大抵の努力では済まされない。このような背景のなか、日米相互開催により継続されてきた日米学生会議の実行委員会には次のような傾向があった。すなわち、ホスト国側の実行委員会が会議をお膳立てし、ゲスト国側を迎え入れるという姿勢である。これは、効率的な組織運営体系であるかもしれない。

しかし第55回会議は、これにアンチテーゼを投げかけたい。

日米両国実行委員会が毎回の会議を共同で構想し、企画運営する体制があってこそ、より二国間の差に関係がない形で、各回の両国実行委員会はモチベーションを保ちえて、より対等で安定的なバイラテラルの交流が実現できるのではないだろうか。無論、会議の総合テーマや分科会設定は日米両国の実行委員会で決定されてきた。しかし大枠の決定後は、主にホスト国側の実行委員会が会議準備に奔走してきた現状が、これまであった。

第55回会議は、この点において、極めて成功を収めたと言えるだろう。ホスト国側であった日本側実行委員会はアメリカ側と逐一情報を交換し、アメリカ側の意見を常に求め、彼らの構想に聞く耳を持ち続けた。また、アメリカ側実行委員長のHana Heinekenをはじめ、アメリカ側実行委員会の努力も目を見張るものがあった。アメリカ側の主催団体である、JASC, Inc.も本年のアメリカ側実行委員会の活動ぶりを非常に高く評価している。また、この成功の影には、メーリングリストの活用をはじめとするウェブ上のコミュニケーションツールの多用などが挙げられる。コミュニケーションの重要性を認識した１年間でもあった。

もちろんいたらぬ点もあった。些細なコミュニケーション不足が、その後尾をひき、いつの間にか大きな認識の違いを生み出した事例も幾つかある。改善の余地はまだまだあるだろう。また、ホスト国側でしか決定しえない事項があるのも確かだ。例えば各開催予定地での折衝を繰り返す中で、現実的な側面から、ホスト国側が決定しゲスト国側に通達する形式を取らざるをえない場合もあるだろう。しかし、両者が緊密にコミュニケーションを取り続けることによって、認識の違いを大いに埋めることができる事実に間違いはない。日米両国の実行委員会が共同で毎回の会議を形作るという姿勢は今後も極めて重要であると考える。

また、現在のシステムでは、本会議終盤に行われる両国の実行委員会ミーティングによって、次回会議の大枠が決定される。つまり、会議終盤の数日間に、次年度実行委員会は次年度会議の大枠を決定するために、集中的に議論を重ねる必要がある。これは、その後１年間両国実行委員会が合同でミーティングを持つ機会がなく、会議の大枠を合同で決定するためには、その数日間しかない、という認識のもとに作られた近年の伝統によって継続されてきた。しかしながら、ウェブ上でのコミュニケーションツールなどが飛躍的に活用可能な今日においては、この急務的なミーティングのメリットは極めて希薄になっていると思われる。このような激務ともとれるミーティングによって生み出されてしまうであろう、建設的な視点からの会議構想の欠如は、時としてフェータルなものとなる可能性がある。今後の改善が必要な点であろう。

また、これまで日米学生会議は報告会を行ってきたが、それは、アメリカ開催時におい

て、日本社会に会議の成果を発表するため、会議終了後のその年の11月頃、日本側が日本国内にて報告会を開催するという主旨であった。これは極めて有意義な企画であると言えるが、一方で、日本開催時におけるアメリカ側によるアメリカ国内での報告会は、これまで開かれてこなかった。日本開催であった第55回日米学生会議実行委員会は、とりわけアメリカ側実行委員会と参加者の熱意により、アメリカ国内での報告会の開催を決定した。2003年11月20日、ニューヨークのジャパン・ソサエティにおいて報告会を開催することを決定している。より対等で安定的なバイラレテラルの関係構築に向けて、極めて大きな意味を持つ企画であると確信する。

第6節　おわりに

日米学生会議事務所に乱雑に埃をかぶって積まれていた過去の報告書の山は、我々にとって、宝の山であった。特に、過去の資料を研究する役割を担っていた私にとっては、宝以外何ものでもなかった。読んでもらう絵本を選び、嬉々として読み手のもとに駆け寄る子供のように目を輝かせ、かつての報告書を山から抜き出し、耽読していった。今では、第56回会議実行委員の助けもあり、過去の報告書は年代順に整理され、本棚に並んでいる。

第55回日米学生会議実行委員会は、単に第55回会議を独立した一つの事業と捉え、成功を求めるのみではなく、日米学生会議という組織にとっての社会的成長や今後の存在意義を常に熟慮しながら活動を進めてきた。本稿はその熟考そのものである。

また、第55回会議が日米学生会議のこれまでの歩みを綿密に見つめ直すにあたって感じたことは、日米学生会議はこれまでただ単に面々と継続されてきたわけではなく、変革に変革が積み重なって今日の姿となっているということである。常に変化を恐れず新たな挑戦を果敢に挑んできた学生達の情熱により、55回という回数を重ねてきたのである。

このことは、1934年当時の「創世記」と、「幾たびの中断を経ながら今日まで綿々と受け継がれてきた会議」という通り一遍の「近代史」しか共有されてこなかった我々には、驚きを伴うものであったし、今日の日米学生会議に求められている「現代史」を積極的に論じ合う上での、動機付けにもなった。

無論、我々にいたらぬ点は多々あっただろう。我々が過去から学び、改善しようとした幾つかの視点のなかには、相容れない矛盾した要素もあっただろうし、成功よりも失敗が多かったかもしれない。第55回会議が実践できたことは、本当に些細なことであったとも感じる。全く白紙と言ってもよい状態からスタートし、膨大な過去の報告書を読み込み、そして日米学生会議のこれまでの歩みを整理し、そこから今日的日米学生会議の意義を考える上での事象を紡ぎ出すという作業に、1年間という時間はあまりに短すぎたし、第55

回日米学生会議自体の事前準備と並行して行うことは困難を極めた。

しかし、第55回日米学生会議という言わば壮大な実験は、今後の日米学生会議が歩む道筋において、一つの指針になると我々は信じてやまない。また、長い歴史を振り返り、このような改善を行おうとした第55回会議の取り組みは、日米学生会議のみならず、あらゆる組織にとって、一つのサンプルとなるのではないだろうか。

我々がたったひと夏のために傾けてきた情熱を、本稿からも感じ取っていただければ、幸いである。

第6章

会議をふりかえって

会議参加者の感想

五十音順に掲載

会議をふりかえって

会議参加者の感想

阿部幸音

私にとって、日米学生会議は様々な意味で全く予想外のものであった。

会議参加前には、「会議」というからには、具体的な結果や結論を導き出すための「会社の会議」のようなシリアスなものを私はイメージし、期待すると同時に、かといって１ヵ月で何ができるのだろかとも考えていた。結論を言えば、会議の形態に対する私の予想は外れ未消化部分が残ったのも事実ではあるが、同じく予想外だったのは、わずか １ ヵ月の間に通常とは異なるタイプの信頼関係で結ばれた、多くの素晴らしい友人たちができたことであった。

以前、学生会議を知るある知人から、当会議の学歴偏重の傾向と集団お見合い的要素を指摘されていた私は、会議中は批判的な視点を忘れないようにしようと無意識のうちに心に決めていた。だが実際に参加してみてそのような指摘はほとんど的外れであり、めったに得ることのできない居心地の良い人間関係を築くことができたのは、この会議で得た一番大きなものであると思うのだ。

ところで、このような居心地のよさは当然ながら最初からあったわけではなく、私にとっては一つの経験がきっかけとなっていたように思う。会議における「自分の居場所」をなかなか見つけられず、また様々なフラストレーションが溜まっていた会議 5 日目頃のことだ。私の所属していた分科会では、沖縄滞在中に、京都フォーラムに向けてどのような分科会セッションをするかということについて意見が分かれたことがあった。他の分科会がするように、アンケートのようなものを行うか、またはフィールドトリップを実施するか、という二つの意見があった。私の分科会ではこれまでにほとんどフィールドトリップがなかったこともあり、私はその実施を希望していた。しかし、通常は訪問先の機関に打診するなどある程度の時間が必要であったが、会議中にはほとんどそれがなかったのも承知の上だった。自分が言い出したからには責任を持ってフィールドトリップを可能にしようと考えた私は、会議が始まって以来初めて、自分から何かをしよう、という気持ちになっていた。幸運なことに、沖縄出身の友人や糸満市役所の方の紹介で、分科会のテーマに適った機関に訪問することができたのだが、この経験は、特に言葉の問題で自信を失いかけていた私が再び前向きになるきっかけとなった、と今は思うのである。

当たり前のことではあるが、集団で何かを成し遂げるとき、各人意識の持ち様によって得られるものも違うはずだ。このたびの学生会議では、どのような意識をもって参加するか、またいかに積極的に会議に関わろうとするか、という積極性の重要さを改めて感じたのだった。別の言葉でいえば、会議を作り上げていくという意識をもつこと、それも実質性あるものとして持つかどうか、ということが個人的には重要なターニングポイントであった。

今後、この日米学生会議がどのようなものになっていくのか、それはまだわからない。しかし私にとっての会議がそうであったように、これからも常にいい意味での予想外を期待するとともに、さらなる日米学生会議の前進を願ってやまない。

安藤彩

日米学生会議の面接試験のとき、面接官から投げかけられた一つの質問がある。「(私が書いた小論文で取り上げた「日本における外国人労働者の受け入れ態勢」の問題に対して) あなたにできることは何だと思いますか?」

その時、自分が興味を持って一生懸命調べたり考えたりした問題に対しての質問であったから余計に、たとえこじ付けだとしてもなんとか答えを出したかった。しかしとっさにその答えは出ず、結局「わかりません」と答えてしまった。面接が終わってからも、参加者としての合格通知が届いてからも、本会議が始まってからでさえもその答えはなかなか見つからず、ずっと心の中に引っかかっていた。社会を取り巻く問題に対して、私には一体何ができるのだろうか、そもそも学生であり、世の中にとって小さな存在である自分にできることがあるのだろうか。本会議が始まる前、分科会が「移住労働者と外国人コミュニティ」だったこともあり、私は面接のときに答えることができなかったこの質問への答えを見つけ出すことを、この夏の最大の目標として掲げた。十代最後の夏を 1 ヵ月かけてでも、どうしてもこの答えを探し当てたかったのである。

本会議での経験はどれもとても貴重で、ワクワクして、心から楽しかった。すべて日程が決められていたが、その決められた日程どおり 72 人の参加者たちと毎日を過ごせることが、嬉しくて仕方なかった。日本人もアメリカ人も一緒にたわいもないおしゃべりをしたり、見学をしたり、講演を聴いたり、真剣に話し合ったりするそのすべてが新鮮で、でもなぜか居心地のいい、そんな不思議な空間だった。何か活動をするたびに、そこには様々な問題点が浮き上がり、その都度私は、この問題に対して自分にできることはなんだろう、と考えた。しかし考えれば考えるほど自分の存在を小さく感じるばかりで、そんな自分にできそうなことなど見えてこなかった。もちろん、英語でうまくコミュニケーションがで

きないことや集団生活によるフラストレーションも味わった。あまりに個性的すぎる参加者の中にいる自分の「普通さ」加減に情けなさを感じたこともあった。しかし、私にはそんなことにいつまでもくよくよしている暇はなかった。どんなに毎日が楽しくて充実していても、探している答えを見つけなければ私の 1 ヵ月が空白のまま終わってしまいそうでこわかったのである。私は毎日、笑ったり話したり眠気をこらえたりしながら、ただ必死で答えを探していた。

――「考え続けること」それが、答えだ。本会議が終わり、アメリカ側参加者が帰国し、日本側参加者もポツポツとそれぞれの道を帰って行き、自分も、無機質に見える東京にたどり着いた。その時、私はいつのまにか探していた答えを知っていた。それはごく身近にあった。本会議が終わってはじめて、そのことに気が付いたのだ。私はこの夏、日米学生会議に参加して、自分から積極的に社会を取り巻く現実を知ろうとし、問題を見つけ出そうとし、自分にできることは何かを模索し、問題について考え続けた。英語でのコミュニケーションがうまくいかなくても、なんとか周りの意見を聴き自分の意見を伝えようと努力しながら、分科会のメンバーや他の参加者と共に語り合った。様々な意見に自分を照らし合わせることを恐れなかった。今振り返れば私は、日米学生会議という異空間に自ら身を置き、自分にできることを毎日実行し続けていたではないか。

私の手元に具体的な形として残ったものは、数十枚の写真と、メモを取り続けたノートブック、膨大な量のプリント類を詰め込んだファイル、大好きな友達とおそろいで買ったお守り。およそ両手に抱え込んでしまえるほどの物しか残っていない。だから、自分の周りの人たちに、この夏の経験をちゃんと伝えることができない。「何を得たの？」と聞かれても、得たような気がするものは山のようにあるが、得たということを証明できるものがないから結局、うまく答えられない。しかし私は確信している。この夏、私は素晴らしい時を過ごした。自分と向き合い、友達と向き合い、一つの答えを見つけるために夏の 1 ヵ月を全力で過ごした。この一言では言い表せない経験を、自信を持って胸に秘めておこうと思う。

飯田智紀

第 55 回日米学生会が終わった今、よく聞かれる質問がある。それは「日米学生会議って何なの？」という質問である。この問題の答えは 7 月に会議が始まる前にも考えたことがあったが、あえて答えを出さないでいた。その理由は実際に会議に参加してみなければその意義はわからないし、たとえ参加したからといってひと夏だけではこの歴史ある会議の価値を十分に見出せないのではないかなと思っていたからだ。しかしそう言いつつも、「日米学生会議は自分にいい刺激を与えてくれる場なのだろうな」と勝手

にそのイメージを描いていた。大学に入学する前からこの会議の存在を知っていた私は、絶対参加しようと心に決めていたせいか、気が付かぬうちに日米学生会議が自分を変えてくれると頼っていたのかもしれない。

会議が始まって二日後の夜、私はこの会議に参加してひと夏を費やそうと選択をしたことが失敗だったのではないかと正直感じていた。そのように感じたのにはいくつかの理由があったが、やはり最大の理由は学生主体の会議の弱さを垣間見てしまったからであろう。予想もしていなかった素晴らしい仲間たちに囲まれていたのは事実であった。だが、その歯車一つひとつが全然噛み合っていないし、噛み合うようなプログラムになっていないと感じた。しかしその時に気が付いたことがあった。それは自分が今までは「この会議はあくまでも自分の人生の中の通過点にしか過ぎない」と言いつつも、この会議が自分に与えてくれるものにすごく期待をしていたのだ。その姿勢はまるで、いい商品を提供してもらえるのを、ただひたすら待っているお客であった。この様な姿勢で会議に臨んでいた自分が恥ずかしくなった。と同時に、自分からこの機会を意味あるものにしていかないとこの会議から学ぶものは減ってしまうと痛感した。

帰国子女である私は、英語での日常会話を苦痛には感じなかった。とにかく英語を話して、英語を話す感覚を取り戻そうと必死であった。語学力の未熟さは百も承知であったため、とにかく英語を使い少しでも多くの人とコミュニケーションを図ることによって様々なことを吸収しようとした。その結果、会議に参加したことを後悔していた自分のことを忘れてしまうほど、この「日米学生会議」という空間を満喫していた。すべてがうまくいっていて、参加者全員が同じ気持ちを共有していると確信していた。

しかしそれが勝手な思い込みであったことに気づくまでに、そう長く時間はかからなかった。やはり人種も異なり、個性豊かな学生が集まっているということは、その個々の会議に対する満足度、充実感も異なっていた。それに気づかないでいた己の勝手さを後悔すると同時に、気持ちの中で舞い上がっていた部分を落ち着かせ、より広い視野で物事を見るようにした。すると今までは見えていなかったことが見えるようになり、薄々感じていたが見て見ぬふりをしていたことを逃げずに直視できるようになった。その時初めて「相互理解」への道を見出した気がした。

日米学生会議の参加者たちはたった 1 ヵ月という期間しか共にしないにもかかわらず、何年も昔から知っていたかのような親密な関係になれるのだ。それはお互いを理解しようとする「相互理解」を試みる姿勢を相手に見せ、本音で語り合えるからであろう。この会議は 1 ヵ月間共同生活をするため、自分の本性を隠し続けるのは大変難しく、本音で語り合わないと何もできないという空間になる。特に不器用である自分はただでさえ本音でしか語り合うことができないため、そう強く感じた。しかしこの不器用さこそが、この会議を満喫するためには必要不可欠であったような気がする。

1ヵ月と限られた時間の中に多くのものが凝縮されている日米学生会議。その凝縮されているものは何なのかを見出せるか否かは、参加者がどれだけ主体的に会議に参加するかによって左右される。不器用であった自分は会議のすべての面において本音で体当たりしていったため、相互理解への確かなる手ごたえを得ると同時に、その凝縮されているものの素晴らしさを体感した。そして参加者全員がこの日米学生会議を通じて、会議が始まって以来脈々と継承されてきている、「日米の相互理解の精神」を様々な形で継承したと思われる。この事実こそが日米学生会議の意義であり、この会議の姿であると思った。

第55回日米学生会議が終わった3日後、自分は20歳になった。10代最後の夏、日米学生会議に参加して、素晴らしい仲間たちと共にかけがえのない夏を過ごせたことに、とても満足している。

池田杏子

この1ヵ月、私は4度泣いた。
1度目は、自分の英語力の無さに情けなくて泣いた。
2度目は、自分自身を表現できないことに悔しくて泣いた。
3度目は、様々な壁を乗り越えようとせずに、ただ甘えている自分に苛立ち泣いた。
4度目は、そんな私を受け入れてくれ、励まし、共に挑戦していってくれた友に、この会議で出会ったすべての人たちに感謝して泣いた。

元来、言語（日本語）を用いずに行うコミュニケーション能力というものを全くと言っていいほど持ち合わせていない私にとって、この日米学生会議では自分自身をどう相手に表現してよいのかわからず、初めての分科会ディスカッションの時点ですでに混乱が始まっていた。今まで蓄えてきた知識や情報など何の役にも立たない、そう感じさせるほど私にとっての言語の壁は大きかった。英語力の不足とコミュニケーション能力の不足は想像以上のショックとフラストレーションを私に抱かせたのである。また、他の参加者たちのモチベーションの高さ、そしてその才能のすばらしさに圧倒され、卑屈になっていく自分が嫌でたまらなかった。だがそうは言っても、その時点では何をどうすればよいのかを私はわからず、気が付くと自分自身のことだけに精一杯でただ毎日を消化していくことになってしまっていた。

こんな自分が参加者の一人として発言していいのだろうか、むしろ、こんな自分が参加してよかったのだろうか、と悩む日々が最後まで続いた。参加者としての「責任」と「権利」の間で自分がどう動けばよいのか全くわからなかった。

会議が終わった今だからこそ言えるのだろうが、もっとああしておけばよかった、こうしておけばよかったということは本当に多々ある。後悔と懺悔の繰り返しとはまさしくこ

のことを指すのかもしれない。それはつまり、私にとっての日米学生会議とはアカデミズムを追及する場でもなく、相互理解を促進する場でもなく、自己を再認識する場であったと言えるのだろう。

しかし、そんな中でも確信を持って言えることが一つある。それはこの会議で出会えた仲間たちは本当に「最高」だったということだ。彼らと出会えたおかげで私の世界はより広く柔軟なものへと生まれ変わり、今後へと発展させていくことが可能となった。彼らのおかげで私は一歩ずつながらも前に進み挑戦していくことができた。励ましや支えという言葉の本当の意味を、彼らが教えてくれたと思う。生涯の友を得た喜びと確信は言葉では言い表すことはできない。だが、心の底からこの出会いに感謝している。そしてこの出会いのチャンスをくれた実行委員たち全員に感謝と敬意を表したい。

辛さや悲しみ、悔しさからくる涙が、感謝や感動の涙へと変わった。
このことに深い意味があるのかもしれない。
この夏をありがとう。

市川晶子

7月26日(土)晴れ。
東京の地に初めて日米学生72人が揃った時、体中に感動が走った。
何かとてつもないことが私の身に起こるに違いない、そう確信した。

72人の出逢い/ スキット&お土産交換/ 不安·期待·緊張/ 数々の講演会とレセプション/ アメリカ側参加者との交流の少なさ/ 分科会のフィールドトリップ/ 社会へのOutputとは何か/ 身体的·精神的疲労/ 初沖縄上陸/ 地上戦が繰り広げられた沖縄/ 戦争と平和/ 声に出ない恐怖/ 嘉手納基地訪問と基地問題/ 沖縄学生の生声/「本土」と「沖縄」/ 沖縄問題への熱い眼差し/ 台風直撃で経験した24時間停電/ 飛行機で爆睡する仲間/ 空から見る日本/「国家」という曖昧な枠組み/ 日本全土異常気象/ 蝉の大合唱/ 日韓米ジョイントディスカッション/ 通訳の嵐/ 北朝鮮問題をめぐる日韓米/ 学生の無知/ 様々な人との交流/ 福井で大自然に抱かれる日米学生/ ホームステイファミリーとの時間/ 汗を流した農業体験/ 流し素麺とスイカの種飛ばし大会/ 草鞋や竹箸作り/ のんびりとした空間/ 畳の上での雑魚寝/ 日米学生の一体感の再確認/ 原子力発電所訪問/ 大自然の中の人工的産物/ 被爆?危険?安全?/ バスに揺られての長旅/ 病人大量発生/ 京都の規則や門限の中での生活/ 高校生との交流/ 京都文化体験による京都再発見/ 京都フォーラムへの最終準備/ 焦りを見せる分科会/ 時間と疲労との戦い/ 日米学生間での意見の相違/ 五山の送り火/ 蝉の抜け殻/ 自分との葛藤/ 日米を越えた学生同士の固い絆/ 雨の中の京都フォーラム/ 55th JASCer Song/ 京都フォーラムの反省/ 日米学生会議

とは何か/ 第 55 回日米学生会議と第 56 回日米学生会議/ 日米学生間における日米学生会議の認識の違い/ 朝·昼·夕·夜と日米学生会議の意義を考える会議/ 少しずつ前へ/ 夜中の2時に終了した新実行委員選挙/ 第56回日米学生会議の始動/ 写真撮影と閉会式/ 帰国·帰宅準備/ 別れ際の抱擁と再会の約束…

毎日、答えのない問いに頭を絞って、答えを求めるべく挑戦した。
様々なことを学ぶ中で、人間の素晴らしさ、儚さ、そして愚かさを噛み締めた。
時に、自分とは何かを考えさせられ、自分自身の未熟さに気付かされた。
仲間と顔を合わすたび、日米学生会議の意義や社会問題を夜中まで議論し合った。
仲間と一緒に、馬鹿なこともいっぱいした。お腹が痛くなるほど、いっぱい笑った。
ルームメイトたちと、将来の道を語り合い、お互いの活躍を励まし合った。
…気が付くと、いつの間にか、一人ひとりの魅力に惹かれていた。

8月21日(木) 晴れ。
1ヵ月前とは異なる感動が心を奮い立たせていた。自然と涙が込み上げてきた。
アメリカ側参加者が乗るバスが出発する。誰にも見つからないように溢れる涙を拭った。
…私は何か変わったのだろうか。
1ヵ月で得たものは大きい。でも、それが何なのか、まだわからない。
…ただ、一つだけ言えることがある。
2003年、71人の熱い仲間たちと過ごした「熱い夏」は、生涯の宝物となるということ。
そして、第55回日米学生会議は、一人ひとりの心の中で永遠の旅を続けるということ。

井手遊

第 55 回日米学生会議の感想を記すにあたり、最初に述べておきたいことがある。第55回日米学生会議の開催にご尽力いただいた方々、そしてこの素晴らしい会議を 1 年間にわたり作り上げてきた実行委員に深く感謝の意を示したい。多くの方の協力がなければ、私がこの日米学生会議の存在を知ることもなかっただろうし、参加しようと決意することもなかっただろう。多くの仲間と出会い、これほど素晴らしい夏を過ごすことができた日米学生会議に出会うことができて本当によかった。

私と日米学生会議の出会いは偶然だった。たまたま立ち寄った大学の学生課のいつもはほとんど行くことのないセクション。そこで目にした日米学生会議参加者募集のパンフレット。「真剣に語り合う夏があってもいいと思う」というキャッチフレーズが目に入った。「おもしろそう」と単純に思った。しかし同時に、時間的心配と経済的心配が頭をよぎった。応募締切は 1 週間後。しかも、第 2 次選考の面接場所は広島からは若干距離のある、

京都の立命館大学。しかし、そんな心配はインターネットでこの日米学生会議を調べてみると、すぐに吹っ飛んでしまった。貴重な仲間に出会い、一生経験できないような経験ができるかもしれない、そう思ったのだ。

第 1 次選考は書類審査。合格通知を受け取った。第 2 次試験は京都の立命館大学にて。試験当日に広島から京都まで行くことは困難であったため、宿を予約し前日に京都へと向かった。高校の修学旅行以来の京都では、懐かしい思い出がよみがえってきた。いよいよ第 2 次選考。少し早めに試験会場に着いた私は、会場の外のベンチで日米学生会議の資料を読んでいた。そこを実行委員長の乗竹氏が通りかかる。今まさに読んでいた資料に載っていた人が目の前をよぎると、闘志が湧いてきた。筆記試験が終わり、面接が始まった。面接の後半では受験者同士で討論するよう求められ、私たちのグループは非常に充実したディスカッションを持つことができた。会って間もないのに、あれほど熱い討論が交わせる、日米学生会議に驚いた。面接後すっかり仲良くなった一同は一緒に昼ごはんを食べに行った。レストランで私たち受験者同士は意気投合し、何時間も話題が尽きることはなかった。私の電車の時間もあり、「また会おう」と再開を約束して別れた。そして数週間後、合格通知を受け取る日。下宿先の大家さんに結果が着いたらすぐに携帯に連絡をしてもらうようにお願いした。その日は電話が来なかった。また次の日も電話が来ない。「おかしい…」。面接で知り合った受験者にＥメールを送ってみる。「発送が遅れたらしいよ」との返事が来て、一安心。そして今日こそ来ると思ったその日、大家さんからの電話がかかってきた。授業の合間をぬってアパートまで取りに行った。そして受け取った結果。「合格」だった。

参加者全員との初対面はゴールデンウィーク中に行われた春合宿だった。そこで、出会った 36 人の日本側参加者。36 もの強烈な個性がそこにはあった。実行委員長の乗竹氏からの日米学生会議の長い歴史を振り返る講義は、今でも大変印象に残っている。「日米学生会議ってすごい」、そう思った。様々なディスカッションや参加者との会話であっという間に過ぎ去ってしまった 3 日間。たった 3 日の合宿で友情が芽生えた。本音でぶつかれる、熱い人たちがそこにはいた。「こんなに熱い 36 人が 1 ヵ月間、共に同じ釜の飯を食い、生活したらどうなるのだろう」とワクワクした。本会議までの数ヵ月間、様々な事前活動が行われた。広島に住んでいる私は、その多くに参加することはできなかったが、少ない機会から最大限に学ぶことはできたと思う。

そして、本会議。本会議は 1 ヵ月という長期に渡るものであったが、本当にあっという間に過ぎ去ってしまったという感想を持つ。しかし、そこには多くの貴重な体験や学びがあったことはいうまでもない。防衛大学校や米国大使館、嘉手納基地訪問など、大学で研究に打ち込んでいるだけでは、絶対に経験することができない非常に貴重な体験。私が通う広島大学は首都圏の大学と違い、大学と社会が切り離されがちである。そういう私にとって、日米学生会議は私と社会とをつなぐ役割を果たしていたように思う。また、大学で

高等教育交流と異文化コミュニケーションを学ぶ私は、常に「異文化とのよりよい付き合い方」を考えており、アカデミックな側面からもこの会議を通して学ぶことは多かった。異文化を持つ人との人間関係の形成は、言語や文化などの「違い」に注目してしまいがちであるため、一般的には難しいといわれている。しかし、日米学生会議を経験すると、本当にそうなのかとも疑問に思う。文化をどう定義するかにもよるが、一人ひとりが異なる環境で育ち異なることを考えれば異文化コミュニケーションは対人間コミュニケーションの一つであることに気づく。社会心理学では、対人関係の発展には近接性、類似性、自己開示などが重要であるといわれているが、この日米学生会議では72人が1ヵ月間、共に生活し、共通の目標を掲げ共通の話題を話しあうことで、互いの共通性を認識し、そして自分自身をさらけ出し本音で語りあったことで、日本側参加者・アメリカ側参加者を問わず強固な友人関係を発展することができたと私は考えている。つまり、日米学生会議そのものが、今から何十年と続くかもしれないと感じさせるくらい強固な対人関係を発展させるのに良い環境であったといえるだろう。

確かに1ヵ月という期間は、社会の諸問題について語るのには短すぎる。世界には多くの問題があり、その中から限られたトピックを選び、それについて熱い議論がこの1ヵ月間交わされても、絶対的結論を得ることは無理なことであろう。会議が終わった今、何か物足りなさを感じるのもまた事実である。日米学生会議に対して持っていた偉大さや憧れをしてみれば当然であろう。しかし注目すべき点は、この1ヵ月間で学んだ知識、体験、そして何よりもこの日米学生会議を通じて出会った多くの友人、そのすべてが私の一生の宝となる、そのことであろう。人は他人とのコミュニケーションを通じ成長する。この会議で出会った友人たちがこれからは、私たちの日常生活のなかにしばしば登場し、彼らとの切磋琢磨を通じ、私が現在感じている「物足りなさ」は一つひとつ解決されていくだろう。この夏を素晴らしいものにしてくれた友人に心から感謝しつつ、将来、おのおののよさを活かし、それぞれの道で輝く人材となることを祈っている。

本会議の後半では、第56回日米学生会議の新実行委員を選ぶ選挙の話が参加者間の会話で話されるようになった。そういう会話を交わしていたときである。私は一人の友人から「実行委員に立候補しなよ」と声をかけられた。大学院生である私は、来年は修士論文研究や就職活動などで多忙となるだろうと思い、立候補は諦めていた。しかし、次々と他の友人からも同じように声をかけられ始め、わたしの心は揺れ動き始めた。生涯を通じ国際交流・国際協力分野で活躍したいと考える私にとって、実行委員の一員として活動することは私にとって必ずプラスになる、そう思い始めたのである。しかし、問題はまたもや時間的問題と経済的問題。実行委員を務めるだけの時間的余裕があるのか、そして頻繁に東京で行われる会議に参加できるだけの経済的余裕があるのか。選挙が行われる直前まで悩み続けた。その私に友人の一人がこう助言した。「悩んでいるのだったら出てみるべきだよ。」「確かにそうだ、後悔はしたくない。」私は決心した。

そして選挙当日。日本側・アメリカ側のどちらも定数よりはるかに上回る候補者が立候補を決めた。それぞれの候補者の演説が始まる。いよいよ私の演説の出番。多くの友人のサポートがあり、思うところは伝えることができたと思う。続いて質疑応答が行われる。最初の質問は、「あなたは第 56 回日米学生会議をアカデミックなものにしたいか？それとも異文化交流的要素を重視したいか？」であった。私はこの質問に困惑した。前にも述べたが、私にとって異文化接触は、アカデミックであったからである。この質問を投げかけられた私は、日米学生会議において異文化接触とはアカデミックなものとは性質を異とするものであるように考えられているのかと思い、ショックを受けてしまった。質疑応答はその後深夜遅くまで続き、選挙へと移った。結果が出るまで起きていようと思ったが、昨晩ほとんど寝ていなかったこともあり、就寝を促され部屋に戻った。

あまり眠れずに迎えた早朝。結果を見に行く。自分の名はそこにはなかった。しかし、横に何かが書いてある。決選投票の案内だ。日本側実行委員の最後のポジションに候補者の二人が同数であったため、決選投票を行うとあったのである。そこに見つけた自分の名前。そう、まだ選挙は終わっていなかったのである。すぐさま投票に向かう。二度目の投票は、新実行委員のメンバーが公表された状態で、記名投票という形式だった。しかも、タイムリミットは数時間後。昨晩選挙で遅くなったため、まだ布団の中でその知らせを耳にしていないものもいた。皆はちゃんと投票してくれるのだろうか、自分は第 56 回日米学生会議の実行委員となれるのだろうか、不安な気持ちで数時間が過ぎた。結果は、敗戦。悔しい気持ちでいっぱいだった。「ゆうには他の道があるよ」と多くの友人から声をかけられた。それが嫌でたまらなかった。しばらくして他の友人たちが「ゆうに投票したよ」と次々と声をかけてくれたことに、私は安堵した。「自分の考えをわかってくれた人もいたんだ」と。

会議が終了し、いくらか時間が過ぎた今、選挙の結果にはようやく納得ができるようになった。確かに決選投票の方法に多少の疑問が残るのも事実である。しかし、あの緊迫した状況では第 55 回会議実行委員が下した判断は正しかったといえるだろう。私は半年前、将来の夢に向かい更なる知識を獲得し多くの経験を積むという目標をたて、大学院へ入学した。夏期休暇が終わり、大学に戻った今、私は精一杯自分の勉学に励んでいる。同時に、インターンシップや大学の留学生課でのアルバイトなど、目標を達成しようと自分なりに精一杯努力している。第 56 回会議実行委員になっていたら、もしかすると私には重荷になりすぎていたかもしれない。博士課程前期の全過程を修了するまであと 1 年半ある。これからも努力を怠ることなく、将来の夢に向かって精一杯走り続けていくつもりである。

第 55 回日米学生会議が終わり、内容の濃い 1 ヵ月から日常へと戻った参加者たちの多くは、急激な変化に対し気持ちの整理がつかず目の前の現実生活から逃避してしまったということを聞いた。それほど、この日米学生会議は私たちの心の中にしみわたり、一生忘れることができない体験となったのである。日米学生会議という枠組みを意味あるものにしてくれた 71 人の参加者。彼らに再度感謝の意を示したい。

私の第55回日米学生会議は、すがすがしい気持ちで参加者たちに別れを伝えることができなかった。特に第56回会議実行委員のメンバーにはそうである。時間はかかったが、心の整理がついた今なら心から言える。第56回日米学生会議を素晴らしいものに作り上げてほしいと。第56回会議に異文化問題について討論する分科会が存在しないことは確かに残念である。しかし、異文化と向き合うことなくして日米学生会議を行うことは不可能である。異文化問題がアカデミックな問題として多く討論され、第56回日米学生会議が第55回日米学生会議と同様、いやそれ以上に素晴らしいものとなることを期待する。

伊中英輔

日米学生会議終了5日後よりアメリカに旅立ち留学生活が始まった。忙殺される毎日の中でも、未だ夢の中であの1ヵ月がふと脳裏に浮かぶ。だが、何もしなければ時間はただ遠くへ流れていってしまう。山のように積まれた日米学生会議の思い出も、砂上の楼閣のごとく塵芥となって消えていってしまうのだろうか。

あの1ヵ月の中で、日米学生会議についての批判を様々に聞いた。裏を返せば、それぞれの人々が必死に日米学生会議の意味づけを探していたのだろう。アカデミックな議論を期待していても高尚な議論を出来るはずもない。異文化理解を期待していてもアメリカの学生とのコミュニケーションの壁は埋まらない。社会発信を期待していてもその成果は自己満足でしかない。スローガンだけの市民参加。だがこれは日米学生会議への批判というよりも、むしろ日米学生会議というハコが期待している成果を全く挙げられない自分たち自身への叱咤であったと言えよう。このコストとベネフィットの格差を生み出した自分自身に憤りを覚える人もいれば、諦念を伴った満足を覚える人もいた。

私はどちらかと言えば後者だ。日米学生会議が期待する成果は、私たちの能力ではかなり厳しいということは参加前からある程度予想がついた。もちろん、それでも自分なりの努力はし、自分なりに日米学生会議という時間を満喫することはできた。本当に、この1ヵ月は、楽しかった。

成果の如何はともかくとして、日米学生会議で出会った人々は本当に素晴らしかった。日本に対してこんなにも興味をもってくれて、日本を知ろうとしてくれる人がいるのか。アメリカの学生に対する率直な感想としては、この驚きが一番大きい。彼らの異文化に対する尊重と、日本人学生との積極的なコミュニケーションの姿勢に感銘を覚えた。「最も国際化されていない」と揶揄されるアメリカの中で、彼らの存在は貴重だ。また日本人学生も様々なバックグラウンドを持ち、様々な哲学を持ち、自分の思考に新鮮な風を与えてくれた。彼らの博識の前で自分の無知を恥じることもたびたびあった。

個人的な意見としては、この人と人とのつながりこそが日米学生会議の最大の意義なのではないかと思う。出会うことのなかったであろう70数人が出会い、各人のマインドに何らかの化学反応を起こすことができた。このような機会は自分の人生の中で後にも先にもない様に思う。そしてこの化学反応は、日米学生会議の終了と同時に終わりを迎えたわけではない。むしろ、日米学生会議の中で生まれた友情を維持し、互いが互いを刺激し続けてこそ、日米学生会議の本当の意義が生まれるように思う。

もうすでに来年の日米学生会議に向けた準備は始まっている。より良い会議を作ろうと多くの人が努力している。しかし、一方で、今回の日米学生会議が残したものを忘れてはならない。出会った人々、あふれ出た問題意識、これを自分の人生と結び付けていくことが重要である。

最後に、この会議を作り上げてくれた実行委員の方々、主催者の方々、そのほか多くの後援者の方々、そして、1ヵ月という時間を共にした仲間たちに、深く御礼申し上げたい。ありがとうございました。

今中由紀子

私は「1ヵ月勉強していた」と言えないし、「1ヵ月間遊んでいた」とも言えない。レベルの高いアカデミックな議論をできなかったのは現実だ。様々な興味や専攻を持っている人たちが集まっていたため、分科会の中でも専門性を追求できる人材がそろっていなかった。

そして何よりも言語の壁は予想していたより大きかった。しかし、だからといって私は1ヵ月間遊んでいたとは絶対に言えない。

それでは、1ヵ月間何をしていたのか。「1ヵ月間悩んでいた」と言えるかもしれない。日米学生会議参加者としてだけでなく学生、友達、女性、日本人、本土人、消費者、国民、人間として何がしたいのか？何ができるのか？

自分がいつもは考えないことを考えさせられた。
悩みを通して自分は挑戦された。悩みを通して人間関係は深まった。
いや、違う。過去形ではない。

これからも、日米学生会議のメンバーとのネットワークは続くし、深まるのだ。これからも相談にのってもらい、悩み、刺激され、挑戦されていくのだ。

「第55回日米学生会議、本日をもちまして終了」と筆で書いてある紙。でもよく見ると「終了」の前にだれかが赤ペンで「一応」と書いてある。

「一応終了」。そう、第55回日米学生会議はこれからも続く。

これからの私たちに期待して下さい。

江川響子

第55回日米学生会議は第54回会議とは3つの点において全く違うものでした。まず英語を使用せざるをえない状況が増えたという点。これは実行委員をしていると仕方のないことでした。次に一時たりとも気を抜けなかった点。これも実行委員として仕方のないことでした。上記二つの変化があった第55回会議は私にとってよい訓練となりました。最後に一番の相違点は、よい同志、そして友達を見つけたことです。自分好みの分科会を作ることができたため、自分と志向の似た友達、つまり同志を見つけることができました。Academic background は違いながらも、本会議後も知的に刺激しあえる彼らは私にとっての貴重な財産となりました。また、個性豊かな実行委員と準備段階で多くの時間を共にしたことで、本会議前と比べて自分の考え方に幅をもたせることができるようになったことも、第54回会議にはなかった大きな収穫でした。これも他6名の実行委員の寛容あってのことだと思っています。皆に対して心から感謝します。

大宮貴史

キーワード　「熱い思い」、「友情」

「アメリカ人と真剣に話をしたことがありません」

この一言から私の日米学生会議が始まった。この言葉を面接のときに実行委員の人に言った。この一言でこの会議に参加することができたかどうかは定かではないが、少なくてもアメリカ人に何か言いたいことがあるという「熱い思い」は伝わったのであろう。この会議に参加している人間を見るとある共通点がある。それは、皆何かに対して「熱い思い」を持っていることである。自分の興味の持っていることを話したくて集まってきているのである。これは日米両学生共通であった。この熱い人たちとそれも日米両方の学生と1ヵ月間共同生活をすることは経験したくてもまずできない。四六時中、同じメンバーの人と同じトピックについて議論し、食を共にし、一日が終わるこの生活はある意味怖い。一度、この会議に足を踏み入れたら、二度（？）と脱出することはできないかもしれない。でも、それだけ得るものも大きいということが言える。政治から恋愛観まで日米で話し合うこの会議は本当に恐ろしい。皆、1ヵ月間寝る間も惜しんで語り合って

いた。よく、恋人と結婚する前に同棲したほうがいいといわれる。それは、一緒に生活することによって相手のいいところや悪いところがわかるからであろう。ある意味、この会議は同棲よりも相手を理解できるのではないだろうか。

ここまで読むと、自分にはこの会議は、耐えられないと思う人がいると思う。しかし、この会議に参加するとどのようなものを得ることができるかを紹介したい。本会議中の 1 ヵ月間で自分の中で最も印象に残っているシーンがある。それは、オリンピックセンターで行われた日米学生会議の開会式でのことである。開会式は、第 55 回会議の両国の学生が初めて会った翌日に開かれたので、まだ参加者は互いの会話がぎこちなく、距離を置いていた。そんな中、開会式に去年（第 54 回会議）の参加者である日米両方の学生が多数遊びにきていた。そのときばかりは今回（第 55 回会議）の実行委員も第 54 回会議参加者の顔に戻り、再会を喜び、抱き合っていた。彼らの姿を見て、今は第 55 回会議のメンバーも会話がぎこちないが、どんどんわかり合っていくことでき、彼ら第 54 回会議の参加者のように再会を喜ぶほど、この 1 ヵ月はかけがえのない思い出となるのだなあとわくわくしたのを覚えている。つまり、この 1 ヵ月で得られるものとして一番に挙げることができるのは、「友情」である。友情は、同じ境遇を共有した時間が長ければ長いほどその結束は強いものとなるはずである。この 1 ヵ月間を共有したことによって、参加者一人ひとりがいろいろ言い合いになることもあったと思う。だが、それは自然のことである。72 人と共同で生活していれば気に入らないことも出てきて当然である。やりきれないこともあるはずである。しかし、会議の最終日、参加者全員が別れを惜しみ泣いたところを見れば、どれだけこの会議を皆が愛したかがよくわかる。そして、どれだけみんな打ち解けあったのかがわかる。この会議はそういうものなのである。

これほど、日米学生会議の良さを説明すると自分自身がこの 1 ヵ月間、期待していた通りであったように思われるであろう。しかし、残念ながら自分がこの学生会議に期待していたものと現実は違う点がいくつかあった。逆に、いくつかの疑問を投げかけられた気がする。それは、「本当に会議という名の通りのことが達成できたのであろうか」や「なぜ今、日米の学生が共に生活して、話し合わなければいけないのであろうか」などである。これらの問題からもわかるように自分自身、この日米学生会議を 1 ヵ月間では噛み砕くことができなかった。逆に裏を返せば、毎回参加者が満足できない点が複数あるからこそこの会議は 55 回も続いてきたのではないかとも言うことができる。毎回、課題点を残してそれらを次の参加者が解決しようとする。これの繰り返しなのではないだろうか。私は、来年もこの日米学生会議に実行委員として参加する。それは、第 55 回会議では自分自身満足できない点があり、来年の会議ではそれらを達成したいと考えているからである。

ここまで読み、この会議に参加してみたいと感じた人と絶対参加したくないと感じた両方の人がいると思う。あなたが前者であろうと後者であろうとこの冊子を読んでいる以上この会議に興味を持っているはずである。最近、社会問題に強く関心を持っている学生は

多数いると思う。しかし、それをどこにぶつけてよいのかわからないでいるのではないだろうか。何か「熱い思い」を持っているのなら迷わず、日米学生会議に参加することを勧める。

最後にこの学生会議に関わって下さったすべての人たちにお礼を申し上げたい。また、日米学生会議といっしょにジョイントしてくれた沖縄の学生、日韓学生フォーラムの学生にも感謝の意を表したいと思う。最後に分科会のメンバー、そして、第55回会議JASCersみんなに「ありがとう」と言いたい。私は、この第55回日米学生会議に参加できて本当によかったと心から思う。

河本健志

よく聞かれるが、日米学生会議はどうだった？この問いが一番難しい。楽しかった、いい経験をすることができたという感想はもちろんである。それはさておき、私にとって、日米学生会議とは、自分という存在を見直す場であった。

私にとって今年の夏の1ヵ月間はなんだったのか。それは、自分が20余年生きてきた中で、初めて真剣に「考える」ということをしたと思える。知っているだけのことは色々ある。しかし今までの自分はその物事と向かい合い、自分なりに考えるという作業を怠ってきた。

まず、この会議に応募する際の書類を書く作業で、現在の自分とは何かを考えた。そして会期中には天皇の存在や市民活動に対する意識から始まり、志望動機と自己アピールの違い、さらには.自分の髪型に至るまで、友人から投げかけられた質問に自分の考えを述べられなかった。すべて今までは、当たり前と思っていたこと、知っていたことが、自分の考えを持つという考える作業の前段階で止まっていた。これは、英語能力の以前の問題であり、自分の未熟さを感じた。そんな自分に対して他の日本人学生は、自分の考えを議論し合っていた。この一面を見ても、昼夜、場所を問わず、時には京都のある居酒屋で生中を片手に、友人と議論ができたその環境は、私の宝である。

加えて会議中には、様々な面で「自分」について考えた。

自分の正直な気持を述べると、なにか溶け込めない感情を抱いていた。今まで、集団の中でそんな気持ちを感じることは稀であった。そんな自分に初めて気付かされた。その原因は、自分にあるのだが、ここで伝えたいことはそんな自分の存在を認めてくれる友人がいたことである。本当に心から感謝をしたい。友人の大切さ、暖かさを感じ、私もそんな

心配りのできる人間になりたい。会議で会った友人たちも、私の本当の宝である。

ここで、最初の問いである、日米学生会議はどうだったという問いに戻ると、何を伝えればいいのか悩んだ。様々な気持ちが入り混じり、はっきりと言葉に表せない。そこで、昨年の参加者の感想を初めから読み直した。そこには、自分と同じ気持ちのアルムナイがいた。やっとその質問の答えを見つけられた。やはり同じ感情を抱く、時を共有したわけでもないのに、仲間たちがそこにはいた。それは、深い友情を感じ、時には孤独感、違和感なども持った仲間だった。なぜかわからないが、とても幸せな気分で一杯だった。もし第56回日米学生会議の参加者も第55回日米学生会議の皆の感想を読んだ時は、同じ気持ちになるかもしれない。それは、過去のアルムナイの方々から未来の参加者に向かう、仲間という一本の道を通じた共同体であると思いたい。

8月21日、京都で別れた72人の仲間たち。我々は、各々生きる道は違うが、将来につながる道の途中で、ペリー来航150周年という記念すべき年に、ひと夏を共に歩んだかけがえのない仲間だ。社会に出て、いつの日かこのつながりを役立てたい。

最後に、こんな機会を与えてくれた日米学生会議に関わって下さった皆様、さらにECをはじめ友人のみんなに深く感謝しています。ありがとう。

本当に最後に、気合の入ってない、もやしのような「押忍」には、何か引っかかるものを感じていました。押忍の意味には「忍耐、尊敬、感謝」があります。「押忍」は、もっとこう気合を入れて、「押忍！」です。

小林悦子

何やら派手なポスターを小脇に抱えながらトランクをガラガラ引いてまわる女。

これが、レッツプロモートJASCスタイルの私、1年前の私の姿である。必須アイテムであるトランクの中には、過去の会議報告書や今年度実施要綱、大小様々なポスターやリーフレット、そしてあらゆる壁と掲示板に対応できる文房具セットを詰め、日米学生会議の広報に出かけた。自分の大学へ、他キャンパスへ、他大学へ、図書館へ、主要駅へ、郵便局へ、そして果ては企業説明会にもトランクを鳴らして参上した。一人でも多くの人の関心と一人でも多くの学生の好奇心を喚起するため、そして第55回日米学生会議の血肉となるJASCerを探すために、広報活動にいそしんでいた。

大勢に奇異に見られながらも私がトランクを引き回し続けていたのは、共に日米学生会議に取り組む仲間、共にどこかで広報トランクを引きずっているであろう仲間がいたからだった。元来ドライで怠け者の私を揺り動かすほどの感動深さとひたむきさを持つ仲間の努力を前には、さすがの私も何かしなければと、せっせとトランクを詰めていた。そして、詰めながら、黙々と私以上の働きをする他の実行委員に対して、強い憧れの念を抱かずにはいられなかった。私は自分の欠点克服、改心を何度も決意したものの、過去 1 年間はそんな更正の誓いと挫折を何度も繰り返していたように思う。

実施要綱を運んだトランクから出てきたのは、個々に魅力を放つデリたちであった。共にひと夏を過ごさせてもらえる一人として、皆との出会いは非常に光栄なことであった。第 55 回日米学生会議の主人公が集結し、55 回目の JASC が始まることに期待をふくらませながらも、実行委員としての私は本会議前、そして本会議中ある感情にとらわれていた。それは、一瞬の気の緩みを突いて、そう遠くないが昔、何かが脇道にそれた気配。やがて、理念と実際の歯車が少しずつかみ合わなくなり、気がつけば事態を舵取りするはずのハンドルが手の届かないところへいってしまい、踏みとどまるはずのブレーキペダルが遠のいている感触。

本会議が近づくにつれ、そして特に本会議が始まり、言葉上の「企画」が現実のものとして立ち現れるにつれて、この感触は私をたびたび襲った。急に（少なくとも私にはそう感じられた）あらわになった大小様々な本会議の詰めの甘さにたじろいでいた私にとって、本会議開幕から会議日程は冷酷なスピードで進んでいくように感じられた。

第 55 回日米学生会議の実行委員会としてのスタートを切った時、実行委員の胸に刻まれていた前回会議の反省点、そして思い描いていたビジョンが、何の取りこぼしもなく第 55 回会議企画に反映できているか。この点の徹底に監視の目を光らせていたつもりが、いつの間に狂いを生じさせていたのだろうか。怒涛のように押し寄せるジャスクワーク、大学の課題や試験、そして就職活動の中で、ちょっと手綱を緩めた隙に取りこぼしが積み重なっていたようだ。一体いつから、どこでこのような企画の隙やコンセプトのぬかりが放置されたままになっていたのだろうか。建設的ではないと知りながらも、本会議前、そして本会議中、自問してしまう自分がいた。

しかし、そんな私の憂鬱がささいではないにしても、悲観するほど致命的でもないじゃないかと示してくれたのは他実行委員、そして何よりも参加者たちだった。今からできることがあることを教えてくれた。このひと夏は、人の心遣いと底力、可能性を心から感じることのできた日々であり、他の実行委員の気迫と使命感、そして会議参加者たちの情熱と積極性に、私は何度も襟を正される思いであった。自分の器の小ささを嫌悪しながら、本当に何度も彼らの存在に励まされた。

第55回日米学生会議の企画、運営を担う立場にいた者として、満足のゆかなかった点は多いというわけでもないが、決して少なくもない。それは本会議中、特に様々な不足点に気付き始めてからの私自身の姿勢に対しての批判も含む。私が、本会議の進展と同時並行的に、本会議を少しでも改善しようと100%のベストを尽くしたのかと問われれば、本当に悔しけれども、胸を張って「これ以上の努力はできないくらい頑張ったぜ！」、と言い返せない。自分の身体的、精神的、知的体力の脆さを痛感する。また、日米学生会議には、私が向かえば受け入れてくれたであろう人々、豊富な時間、凝縮された様々なチャンスがあったのに、それをフル活用するには私はあまりにも言いわけがましく、理屈っぽく、勇気がなかった、という思いも残る。

1年前の夏、私は日米学生会議の会議としての存在意義に疑念を抱いていた。が、他の実行委員（候補）への期待、彼らと一緒に仕事をする魅力に惹かれ、カウンターパートとしての彼らへの信頼を唯一の理由に、実行委員になった。案の定、それぞれが私にはない資質と能力を持つ実行委員との協働作業は、非常に楽しいもので、スキップしながら毎月の実行委員合宿に行き、仕事のために重いトランクを市中引き回しもした。一方、日米学生会議の意義に関する私の疑念についてだが、1年たった今も相変わらず同じようなところに立ちつくしたままだが、若干、日米学生会議に対して寛容になった気がする。しかし、依然としてはっきりした自分なりの答えを言えずにいる。

日米学生会議の歴史の重みや「日米」「学生」「会議」であることに意識が行き過ぎて、会議の現場で実際に起きていることを軽んじてはいなかったか。結局は自分個人が異文化交流というよりも人間交流に果敢に挑まなかったために、「日米学生会議」にまつわる歴史的前提にこだわり、その枠組みが明示的に提供すべき意義の不足を指摘しているのか。日米学生会議の中身やアウトプットにおける「日米」性をどこに求めるべきなのか。

今後も様々な問いに形を変えて、日米学生会議での経験は手放しの喜びだけでなく一種の苦味を伴って、私に迫り続けるであろう。日米学生会議という凝縮された非日常の世界がもたらした思いや問いかけや改心の決意を、私が生き続けていく日常の世界に持ち帰りたい。そして、この1年、このひと夏に恥じぬ今後を歩んでいきたいと思う。

最後に、第55回日米学生会議の実現を可能にして下さったすべての人々、会議を批判し、支えて下さったすべての人々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

坂口紋野

日米学生会議が終わって、早くも2週間が過ぎようとしている。会議中によく聞いたセミの鳴き声を聞く機会も極端に少なくなってしまった。このように季節が移っていく中、第55回日米学生会議に参加したことを独りで振り返ってみる。

この会議に参加した意味がそれぞれ違うように、この会議で得られたものも十人十色である。運命のごとく集まったメンバーは、1ヵ月の共同生活をした。いつもなら、自分の中にしまい込んでしまいそうな、些細な悩みや冗談でさえも、すぐ横にいる仲間に話すという生活。話さずとも、相手の行動を見ているだけで、自分と違う着眼点を持っていることがわかる生活。外国語が私の周りを飛び交う生活。今までに体験したことがないような新鮮な空間だった。

この空間は私が想像していた以上に不思議な場所だった。自分の長所や短所や、さらには自分の試金石のようなものを探すことができた。また、自分の可能性に拡大の余地があるような気にもなった。色々なことを考えて理想を抱えていても、失敗する恐さや熱意が足りなくて、積極的に先頭に立って行動をしていくことを控えていた過去の自分がいた。

セミは、一生のほとんどを土の中で生活している。しかし、私たちは彼らとは全く違う世界に住んでいる。私たちは一生を地上で過ごし、外界からの刺激を常に受けられるような、恵まれた環境で生活しているのだ。まだまだ、知識不足であったり経験不足ではあったりするけれど、市民として、学生として、社会に私の考えを発信することはできる。たったこれだけのことが何かを生む可能性があるということを確信したのだ。

私がここに書いたことは、第55回日米学生会議の断片に過ぎない。書き足りないような変化が私の中で起こったのは確かである。そして、この貴重な経験が、将来の大きな糧になることを確信している。このような機会を作るために働きかけて下さったすべての方に感謝している。ありがとうございました。そして、来年もまた、新たな可能性を見つけ、素敵な仲間に会えるような会議が開催されるように、実行委員の一人として精一杯がんばるつもりでいる。

阪野葵

日米学生会議が終了した現在も、活動全体を見つめることができない自分がいる。それは、私におよぼした影響があまりに大きいためだからだ。仲間と過ごした日々を回想すると、無限に想い出が浮かび、尽きることはない。

こんなにも熱心に世の中の問題を知ろうとし、解決策を模索したことはなかった。こんなにも仲間と向き合い、熱く語り合ったことはなかった。こんなにも真剣に自分というものを考え、素直になれたことはなかった。

すべてが、第55回日米学生会議に参加し、71名の素敵なメンバーにめぐり会えたから可能だったことだ。私たちの活動に協力していただいた方々、会議のコーディネイトに奔走してくれた実行委員、共に2003年夏を駆け抜けた参加者の皆、忘れられない時をありがとうございます。

佐藤智紀

「真剣に語り合う夏があってもいいと思う…」

日米学生会議の存在を、友人の話や大学で行われた説明会で知った私は、早速日米学生会議のホームページにアクセスしてみた。すると、突然この言葉が浮かび上がってきたのだった。パソコンの画面上にぼんやりと浮かんでは消えていくこの言葉に、思わず深く頷いてしまった。自分の利害を一切気にせず、自分をさらけ出して意見をぶつけ合うことは、学生時代にしかできないのではないか。そう思った瞬間、この言葉を追いかけ始めた。ただ、熱い夏にしたかった。

春合宿や数々の勉強会、防衛大生との交流などを経て、本会議を迎えた。分科会での議論やフィールドトリップ、沖縄や韓国の学生を交えてのディスカッション、沖縄での平和祈念公園や嘉手納基地の訪問、福井でのホームステイ、京都フォーラムの開催…日米学生会議で経験したことのほとんどが、刺激に溢れた全く新しいものだった。

これらの経験を振り返る時、そこには必ず1ヵ月弱の生活を共にした仲間たちがいる。この夏を一緒に過ごした仲間の顔が浮かぶ。その仲間がいたからこその日米学生会議だった。新たな経験を得たことはさることながら、その経験を共にしてきた、個性豊かな仲間たちに出会えたことが、この会議を通して得た最高の成果である。

そしてこの夏、その仲間たちと真剣に語り合った。分科会でのディスカッションはもちろんのこと、様々な話題について、夜遅くまで語り合った。しかし、残念ながら、アメリカ側の参加者と十分に語り合えたとはいえない。語学の壁、そして自分のコミュニケーション能力の不足。うまく通じ合えない悔しさや歯がゆさをいつも感じていた。自分の無力さを痛感した。あの言葉を追いかけてきただけに、それが十分にできないことが悔しくてならなかった。

日米学生会議は自分の原動力だった。常に、この夏を見据えていたように思う。そうさせる何か、自分を突き動かす何かがこの会議にはあった。そして、来年の実行委員として、日米学生会議はこれからも自分の原動力であり続ける。この夏集った日米の学生のエネルギーに、学生の可能性を信じながら。この夏を共に過ごした仲間と、再び何かができる喜びを噛み締めながら。来年の夏に集う、新たな仲間たちに会えることを楽しみにしながら。そんな思いを胸に、前へと進んでゆきたい。

鹿谷幸史

「日米学生会議とは、1ヵ月間、日米両国の学生が日本中を回りながら共同生活を送り、現代社会が抱える様々な問題について英語で議論し合い、それを通して相互理解を深め、世界の平和に貢献しようとする学生の団体です。」

この1年間、幾度となく口にした言葉だ。

第55回日米学生会議の準備期間中、会議参加志望者、賛助者、協力者の方々に、できるかぎり平易かつ簡潔に趣旨をわかっていただこうと、必死で考え抜いた末にたどり着いた。

共同生活、英語で議論、相互理解、世界平和…どれも聞こえの良い言葉である。

では、「1ヵ月の共同生活」とはどれほど心地よいものなのだろうか。

実は、この聞こえの良さと現実のギャップに、私を含めた参加者は大いに苦しんだ。「1ヵ月間、日米の学生が共同生活を送る」ということは、一日24時間プライバシーなどほとんどない環境で、自分の体調や精神状態とは関係なく、常に誰かとコミュニケーションを図り続けなければならないことを意味する。それもただ漫然とおしゃべりしていればよいのではなく、あるテーマについて期限までに一定の成果を求められるというプレッシャーのもと、英語を使用言語として、である。

考えてみてほしい。どれほど人と交流するのが好きな人でも、24 時間他人の目にさらされ続けることにどれだけ耐えられるだろうか。多くの人は、2、3 日もすればうんざりして逃げ出したくなってしまうだろう。

日米学生会議においても、この初めての体験に多くの人が苦しんだ。今回の会議でも「英語だけがなぜ公用語なのか？日本語も公用語にすべきではないか？」という問いの形で問題提起されたが、この問題の本質は使用言語そのものではなく、共同生活からくる極度のストレスであり、このストレスが英語でのディスカッションに対する不満を加速させていたように思われる。

しかし、このストレスフルな状況を乗り越えることこそ日米学生会議の醍醐味ではなかろうか。一日 24 時間×1 ヵ月間、自分を飾り続けることはできない。赤裸々の自分をさらけ出してガチンコ勝負するしかない。時には衝突も起こるが、だからこそ表面的でない相互理解が進むのだと思う。そして、共同生活やその他の強いストレスに悩まされた時、それに背を向け「自分の殻に閉じこもっている」という状況に気づかされ、最終的には自らその殻を破る経験をできること、それこそが日米学生会議が他にはない特別な存在である所以であると思う。

私は第 54 回日米学生会議に参加した際、「テロ問題」を通じて同じような経験をし、同時に閉じこもっていた自分が悔しかった。今回の第 55 回会議でも多くの人が苦しんだと思う。だが、2 回の会議を経験して、やはりこの苦しみを体験し、自分の殻を破って新たな力を獲得することこそが、日米学生会議の最大の意義であると確信を強めることができた。

第 55 回日米学生会議実行委員の一人として、皆が 1 ヵ月間様々な不満をかかえ、苦しみながらも、新たな力を獲得してくれたことがとてもうれしい。

これから皆は、獲得した力をどのように使っていくのだろうか。非常に楽しみである。

鈴木理絵

2003 年 8 月、私は糸満の夜空を見上げていた。風のない夜で、空には星が散りばめられ大地を照らすスポットライトのようだった。地にはエイサー踊りの太鼓の音が響き、踊り手は地と天空を行き交い、辺り一帯は人の織り成す熱に包まれていた。それから 1 ヵ月。一人見上げる夜空は遠く、目に映るその景色は静止している。周りから秋の虫の鳴き声が聴こえるだけだ。あの熱い夏は幻だったのだろうかと、ふと思うときがある。

「人との出逢いはすべて必然である」とは、以前私の知人が言った言葉である。日米学生会議に参加し、皆と出逢いその「空気」を共有し、空を見上げたことは、その時の私にとって必然の帰結であり、必要であったに違いないと回想する。たとえ今、あの夏が幻であったと感じるにしても、遠い懐かしい思い出だけでは終わらない何かがある。

日米学生会議を経て人生観が変わったとは言えない。ただ私という人間の一側面を再確認し、自分自身を知った。これまでの私の日常生活で知りうる人たちと異質な存在である日米学生会議の皆と出逢えたからこそ、知ることができたのだと思う。皆との出逢いが少なくとも私の人生に影響し続け、自身に対して疑問を投げかけ、自身を突き動かす一つの力となっている。自身の資質に何が最も適し、何を実践していくべきなのかということを見極め、行動に移さねばならないと切に感じ、専門であるヒューマンケアに力を注いでゆきたいと感ずる。

日米学生会議を通して皆とその「空気」を共有するという経験は、教育における子供との関りに大変似ていると感じる。教育という営み(ヒューマンケア)において子供と関わるとき、子供と向き合って何かをするというのではなく、子供と同じ視線に立って付き合っていく。その付き合い方が「空気」を共有することだと私は思うからだ。およそ30日に及ぶ日米学生会議においても、皆それぞれ視点は違えども同じ視線に立って共同生活を送り、時と場と感情を共有してきた。私は改めて「空気」を共有することの面白さを自分の内に発見した。

日米学生会議が終了し、参加者は各地に散らばっていった。会議自体は終わってしまったが、私はようやくスタートラインに立ったという気がしている。自分のこれから成すべきことがより鮮明になったからだ。これから、それぞれが生きる日常で、どう頑張り、心にどのような風を吹き込み、空を見上げるのか。見上げる空は一つであっても、そこに映る空は違う。またいつか皆に再会し、皆に映った空の景色を感じてみたい。日米学生会議を、夏をもって終わらせることなく心のどこかに置き、日々送りたいと思う。

2003年夏、多くの出来事が起こり、考える間もなく過ぎ去った。しかし、見上げた空が眩しく美しく映ったのは、「空気」をつくっている人たちがそこにいたからに違いない。幻ではない、あれは確かに現実であったと心に刻まれている。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった方々、日米学生会議を通して出逢ったすべての人に感謝したい。ありがとう、と。

高沢健史

日米学生会議は「学生の、学生による、学生のための会議である。」日米学生会議に関する過去の文献を探している最中に出会ったのがこの言葉である。この言葉を聞いた時、まさにそうだと思った。1から10まで、いや100まですべて自分たちの手で自由に会議を創ることができると実行委員になった時から感じていた。しかも、その舞台はとてつもなく大きかった。会議の内容をすべて企画できるということはもちろんのこと、財務活動に関して数々の大手企業に訪問することもできるし、新たな賛助企業や団体を発掘することもできる。著名人の講演会をすることもできれば、フィールドトリップで省庁やNGOなどに訪問することもできる。日米学生会議はやろうと思えばその多くの企画を行うことができる可能性を秘めている。後の第55回日米学生会議という劇をどれだけすばらしく演じるかは私たち実行委員の腕次第であった。実行委員になった当初、この日米学生会議という大舞台の上で1年間思いきり自由に暴れて、実行委員という役を演じてやろうと思っていた。そういった意味でまさに私にとって日米学生会議とは「挑戦」であった。

実行委員になった当初、それまで申請書を書くことや企業に電話がけをするといったことに一切縁のなかった私は本当に何をしたらよいのかわからなかった。第55回会議を今までにない新しいものにしてやろうという気持ちは逸るが、無意識のうちに過去の会議の踏襲になりがちであり、これではだめだと何度も何度も考え直した。一日何十件ものメール、毎月の実行委員合宿、何十時間何百時間というミーティング、申請書の束、幾度となくその場から逃げ出したいと思った。しかし、ルーティーンワークにしても、経験のない新しいことにしても、その一つひとつが私にとっては「挑戦」であった。どれだけ素晴らしい日米学生会議にできるかという「挑戦」。また、その壁に「挑戦」にすることによって、この日米学生会議を通して何か新しい自分を発見できるのではないかと感じていた。

本会議は、それまでの1年間の準備が嘘のようにあっという間に終わってしまった。日米学生会議は花火のようであり、その輝きは一瞬であるが、準備には大変な時間がかかる。本会議のための準備をしている間は、日米学生会議とは申請書を書いたり、電話がけをしたりと、ある種オフィスワークであると考えるようになっていた。しかし、本会議が始まり、他の71名の参加者と会った時、やはりこれこそJASCだなと第54回日米学生会議のあの時と同様のなんともいえない雰囲気を感じた。会議中には多くの困難があった。参加者からの第55回会議の内容に対する批判や台風などの思わぬハプニング、アメリカ側参加者と日本側参加者の意見が食い違い、収拾がつかないことも多々あった。しかし、本会議の準備をしていた時とは違い、早く終わってほしいとも逃げ出したいとも全く思わなかった。逆に、その一つひとつの出来事がまさに日米学生会議であり、1年間作り上げてきたものなのだと実感していた。その時、JASCという花火を打ち上げるために今まで頑張ってきたのだと思えた。

会議が終わり考えた。この第55回日米学生会議で私たちは何を語り、何を語りえなかったのか、何を学び、何を学びえなかったのか、会議中、ここには書きつくせないほど実に多くのことを考えた。日米関係とは何か。国家とは何か。市民参加とは何か。文化交流とは何か。相互理解とは何か。日米学生会議とは何か。答えが出たものもあれば、そうでないものもある。また、余計にわからなくなったものもある。この中でも最も考えたのは、やはり1年かけて携わってきた日米学生会議とは何かということであった。

古くからの歴史を持つ日米学生会議は他の交流プログラムとは何が違うのか。アカデミックに重点を置くのか、文化交流に重点を置くのか。これらの議論は第54回会議でもなされた議論であった。会議と名前がついている以上、文化交流だけでは終わらない日米学生会議にしたいと実行委員の誰もが考えたはずである。

文化交流は簡単である。見たことのない建物、慣れない習慣や文化に接することは多少の好奇心があればすぐに成しえる。しかし、それ以上のお互いの価値観や考え方の共有は非常に難しい。何か一つのことを共にやり遂げる時、お互いが満足のいくものをつくるならば、互いの考え方、価値観、意見を認め合わなければならない。しかし、互いの共通点、合致点を探ることは時間がかかり、面倒な作業である。グループワークでも一人で行う方が容易であることは多々ある。また、互いを認め合わないことが民族対立や紛争、テロなど現在の世界における問題を引き起こしているとも言える。しかし、あきらめず他者を知ろうとする姿勢こそが、何らかの共通点を見出し、解決策を作り出すことへとつながるのである。分科会でのディスカッションではアメリカ側参加者と日本側参加者の間で意見の対立が多く見られた。また、アメリカ側参加者の発言機会の方が多かったが、彼らには常に日本側参加者の意見を聞く姿勢が感じられた。互いに他者を理解しようとすること。当り前のことなのだが、それこそがまさに相互理解なのだと改めて感じた。

私は第55回日米学生会議を、成功や失敗などという二文字の言葉では到底説明できない。そこには成功もあり、失敗ももちろんあったからだ。第55回会議を終え、果たしてテーマである「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」は達成できたのであろうか。戦争、テロ、貧困、差別、環境問題、現代社会が抱える様々な問題に市民参加の視点から取り組もうとうしたこの1ヵ月。もちろん、それぞれの問題に対して有効で具体的な政策提案ができたとは言えないかもしれない。しかし、72名の参加者が日米の抱える問題、世界が抱える問題について激しく議論を交わし、それらの答えを得ようと全力で挑んだ1ヵ月間こそが市民参加であり、第55回会議のテーマである「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」を体現したのではないだろうか。

最後に、会議に参加したすべての仲間、会議開催のために協力して下さった方々にお礼を言いたい。準備段階においても、決して一人では成しえなかったことも他の実行委員はもちろんのこと、企画内容の作成に積極的に関わってくれた参加者がいたからこそ成しえ

たのだと確信している。また、第 55 回日米学生会議実行委員と共に第 55 回会議を創り上げることができ、そんな仲間とめぐり逢えたことを心から嬉しく思う。

この感想文を書くにあたり、何度となく筆がとまった。それだけ第 55 回会議は私にとってあまりにも大きな存在であり、極めて多くのことを経験させてくれた会議であった。会議の準備中、会議中に起きた一つひとつの出来事が今も鮮明に思い起こされる。それらはあの場にいた 72 名の参加者にしか分からないものである。また、同時にそれらは私にとって一生の宝である。この日米学生会議から得た宝をバネにこれからも常に前に向かって挑戦していきたい。

角田武士

忘れもしないあの瞬間。「真剣に語りあう夏があってもいいと思う…」と書かれたポスターを見つけたその瞬間である。この刹那よりも短い時の中で、多くのことがめまぐるしく私の脳裏を駆け巡った。当時、大学生であった私は、大学院に進学することがすでに決まっており、あとは卒業を待つのみであった。「大学院生活」という新たな環境に、夢や希望を膨らまし、大学院入学の日から卒業の日までを毎日のごとく想像していた。しかしながら、それら想像の多くは、山のような書籍に囲まれた無表情の私が、机に向かっているという実に味気ないものであった。悪夢に近いこの想像を壊してやりたい、2 年間という限られた大学院生としての時間をただ研究のみに終らせるのではなく、人とのつながりを持ちながら彩りたいと、いつしか私は思うようになっていた。そのような状況で、私がこのポスターに魅了されることは必然以外の何ものでもなかった。そして、気付けば JASCer として存在する私がいた。

1934 年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮し、日米学生会議を創設した日本の学生たち。彼らは平和を強く望んだに違いない。従来、戦争や紛争のない状態と理解されていた平和も、ノルウェー出身の平和研究者ヨハン・ガルトゥングによって称えられた「構造的暴力」という概念によって大きく変化した。(ヨハン・ガルトゥングは、平和を「暴力がないこと」と定義する。ここで暴力とは、妨げられなければ達成されえた状態と現実との差を生んだ原因、とされる。『平和学がわかる』朝日新聞社、2002 年、143 頁から引用。) しかし、時と共に変化し続ける「平和」という概念とは対照的に不変の真理がある。それは、人々による「平和」の懇願である。

私もまた「平和」を強く願う者の一人である。大学生の時から、また現在大学院においても平和に関する諸問題について研究を続けてきた。しかしながら、私が今まで行ってきた、平和創造への貢献と信じる行動は、まさに自己満足の世界を描いているにすぎなかった。つまり、自分の考えを他人に述べるわけでもなく、他人の意見を聞くわけでもないの

である。そのような中で、世界の人々が何事にも怯えることなく平和に暮らせるよう貢献することが、私にはできるのであろうかを問いかけてみた。答えは当然「NO」である。この矛盾の糸をとき解くためにも、私は日米学生会議で繰り広げられる議論に強く期待していた。実際に、日米学生会議中も常にそのことを念頭に取り組んできた。

異なるバック・グランドを持つ72人。光り輝く個性を持ち合わせた72人。それら72人によって構成される日米学生会議。そのことは、72人それぞれが思い描く日米学生会議があることを当然意味しているだろう。しかし、本会議参加当初の私はその事実を忘れていた。日米学生会議という缶の蓋を開け、「議論」の二文字を幾度探せど見つからず、私の期待とは大きく異なる現実に苛立ちを覚えた。結局、見つかった二文字は「会話」であった。思わず、誤った缶を選んでしまったのかと思った。「人とのつながりを持って大学院生活を彩りたい」、「平和創造に寄与したい」という願いを、ただの「会話」という道具で」叶えることはできないと感じ落胆した。どこにでも転がっている「会話」、そんな陳腐な道具では満足することができない自分がいた。

しかしながら、ふと気付けば素晴らしき友が私の周りにいた。共に笑い、感動し、そして涙する。共に唄い、踊り、そして喜びをわかち合う。そんな素敵な友がいた。「私たちって最高じゃない」と言い幸せを惜しみなく与えてくれる者、鋭い視点で物事をとらえる知的センスに溢れる者、いつも笑顔で安らぎを与えてくれる者、笑いの追及に没頭しながらも熱く語り合うこと忘れない者、私はJASCer 72人すべての人を心から愛す。そして、この愛が「会話」によって生み出された事実を私は認識しなければならない。「会話」は想像以上の潜在的能力を秘めていた。私が抱いた「人とのつながりを持って大学院生活を彩りたい」という希望の芽は、確実に「会話」という水によって大きく育てられているだろう。また、この愛は「平和」に結びつくかもしれない。愛することから「平和」は始まるのである。「平和」とはそんなものであろう。平和の芽は着実に育っているのである、JASCerたちの手によって。日米学生会議という缶を選んだ私の選択は間違いではなかった。願いを叶える道具は違えど、私の願いは確実に叶いつつある。

日米学生会議が発足して以来、日米関係は明らかに良好になったと言えよう。しかし、かといって日米学生会議が存在する意義がもはや無いというのは甚だ疑問である。なぜなら、当時学生だった創設者4人は「平和」を望んだのである。世界に平和が訪れていない以上、私たちはその追及を行わなければならない。人間愛を作り出す日米学生会議。そんな会議を誰が不要と言えようか。日米学生会議、そこに存在意義が隠されているのである。最後に、私は幾度となく「なぜ彼らJASCerにもっと早く出会わなかったのだろう」と思った。そして後悔すらした。しかし、それは全くの勘違いである。彼らとは22年目に会うべくして出会い、22年目に出会ったからこそ私は今こうして彼らを愛することができたのだと思う。彼らにめぐり逢えた奇跡を私の一生の宝物にし、そしてこの奇跡を与えてくれた日米学生会議を、私は一生誇りにしたいと思う。

友利将悟

本会議が終わり、はやくも2週間が過ぎた。様々な出来事が頭をよぎる。本当にいろいろなことがあった。ありすぎて、「どんな夏だったか」と聞かれても、形容に窮する。それでも、一つだけ。2003年は「出会いの夏」だった。

事前活動。沖縄において、沖縄側参加者集めのために広報に回った。今まで会ったこともない学生たちと、勉強会や講演会を開いたり、仕事を分け合ったりした。多くの社会人とも会った。講演者探しをしたり、広報をしたり、話しを聞いたり、叱責されたり。多くのことを勉強させてもらった。人と出会うことは楽しい。出会うたびに変化があり、成長する自分がいる。もちろん、成長していない自分もいる。だから、疲れることもあった。それでも、新しく人と出会い、人を知っていくことは、こんなにも楽しいものだと、素直に思える自分がいる。目と目を合わせて、真剣に語る。そうすると、血が体中を巡るのを感じる。興奮に胸が躍る。2003年以前の私には、想像もつかなかったことだ。

この思いは、もちろん、日本側参加者とアメリカ側参加者にも通じる。春合宿の頃は、ただ必死になって、自分の中にある日本側参加者像に追いつこうと躍起になっていた。そこにはとてつもない偏見を持っている自分がいた。彼ら／彼女らと言葉を交わす前に、すでに守りの姿勢に入っていた自分がいた。自分の卑小さを知った。アメリカ側参加者に対しても、同じことが言える。相手にするのが、生身の人間ではなく、自分のつくったイメージ像なら、こんな楽な生き方はない。

そんな浅はかな私の考えは、本会議が始まるとすぐに打ち壊された。みなそれぞれに悩みを持っていたり、些細なことを気にしたり、繊細で、相手の話しに耳を傾ける。人間の温かさがそこにはあった。それに気付かされただけでなく、尊敬できるみんなとの出会いがあった。学問に対する情熱、学外での活動、高みを目指すまっすぐな眼差し。頑張っている人々が2003年の夏、一つの場所に集まったことにひたすら感動を覚える。会議が始まる前に持っていた、対等な関係ができるのか、という漠然とした不安感は、今思えば、杞憂というものだ。

想像もしていなかった素晴らしい出会い。私の中の偏見も砕かれ、今は、ただただ、その出会いに、出会う場を作ってくれた日米学生会議に感謝でいっぱいだ。

豊田紀子

平和な社会を作るには、どうしたらよいのか。世界には、貧困や紛争、差別を始め、様々な問題が存在する。世の中は明らかに不平等である。私は幼い頃から、テレビ画面に映し出される、弟や妹の生活を支えるために働きに出かける子供、戦争に巻き込まれて自分の家どころか手足を失ってしまった子供、餓死寸前になっている子供の姿を見るたびに、なぜ、私と同じ年位の子が、生まれた国が違うだけで、こんなにも「生きる」ことに対しての意味が違うのか、と疑問に思うと同時に、「生きる」ことに何の心配もない暮らしをしていることに、罪悪感を覚えた。日本という先進国に生まれ、人種的差別や宗教的差別を感じることもなく、学校に通って勉強でき、食べるものに困ることもない私は、同じ「地球人」として、彼らの状況を改善するために何らかの行動を起こすことが「義務」ではないか、と感じた。その思いは年を追うごとに強くなっていったが、グローバル化が進み、情報化社会の進行などによって世の中が大きく変化を遂げていく中で、これからの国際関係は、外交と政府間の関係だけでなく、非国家間関係、個人同士のコミュニケーションのつながりというものが、益々重要になってくるのではないか、と強く感じるようになった。そもそも、「社会」というのは、小さいコミュニティーから大都市に至るまで、人間が作っているのである。それならば、私たち先進国に住む市民としては、基本的人権を主張したり推進したりすることも大事だが、それよりもむしろ、地球市民として個人的に、また仲間と一緒に、世界に対して何か行えることがあるはずではないか、と考え始めた。

そういう思いを胸にしながら、「日米学生会議」と出会った。第 55 回日米学生会議のテーマ「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」は、まさに興味あるトピックであり、「日米二国間の相互関係を世界中の国との関係性の中で再定義し、世界に対して日米両国の学生が何をなしえるのかを考える」や「市民一人ひとりが社会の問題解決に向かってどのように働きかけていくことができるのか」という文章に、なんとも言えない興奮を覚えた。

会議に参加し、防衛大学生や日米政府関係者との交流や、基地問題を抱える沖縄学生たちとの討論、福井のホームステイ先で原子力発電所に対する不安感を耳にするなど、普段会うことのできない方々と出会い、彼らが生活の中で感じている思いに直接触れることによって、私は改めて、国や地方が抱える様々な問題点について考えさせられた。貧困や紛争、差別などの問題は、簡単に解決できるものではない。しかし、自分の身近にないからといって無視してよいというものではなく、そのような問題が存在し、それによって被害を被っている人々がいることを忘れてはならない、ということを改めて感じた。少なくとも、問題解決に対して、何らかの行動を起こしたいと思う人たちが存在していているということを肌で感じ取ることができ、嬉しかったと同時に、希望を持てた。この経験から得たさらなる強い思いを胸に、少しでも、平和で、不安や恐怖のない生活を人々が送れるよ

う、恵まれていない人が少しでもチャンスが与えられる世の中になるよう、そしていつかきっと、私が世の中に存在する様々な問題を解決していく一翼となれるよう、努力しようと思う。

基調講演会や他学生団体とのディスカッション、様々な地域に住む人々との交流など、常にいい緊張感と刺激で包まれた時間を過ごせただけでも貴重な経験だったが、何にも増して私が感動し、刺激を受けたのは、それを "Feel&Share" できる仲間が常に私の横にいたからであった。様々なジャンルにおいて興味関心を持ち、リーダーシップ、行動力があり、加えて人間的に魅力のある同年代の人々と同じ時間と空間を共有できたのは、本当に幸せであった。輝いている仲間たちと共に過ごせたことで、いい刺激を与えられ、彼らのオーラが私を「輝きたい」と思わせてくれた。そのような「いい刺激やいい影響」を与えてくれたみんなには、本当に感謝したいと思う。吸収するものが多くあった2003年の夏は、これからも頑張っていこうという向上心と、生涯に渡って継続させていきたい同年代の尊敬する仲間との出会いをくれた、様々な意味で刺激的であり、濃い 1 ヵ月だった。日米学生会議から得た経験を糧にして、努力を怠らず、前を向いて歩いていきたいと思う。

中村信之

「いかに、『違う者』と一緒に仕事をするか。それを学びたい。」

これは第 55 回日米学生会議の春合宿中に行われたレセプションでの挨拶の際に、私が日米学生会議を志望する理由として述べたスピーチの一部である。「人は、一人ひとり違います。その『違う者』同士が集まり、社会を作っています。『違う者』たちと共に、いかに共生していくかが私たちの課題です。」スピーチの内容を、今でもはっきりと思い出せる。

私は日米学生会議を通して、当初の目的が果たせたのであろうか。

私は 1999 年から 2002 年までをワシントン D.C.で過ごし、2003 年現在、残りの大学生活を京都で過ごしている。私が 3 年間の留学で最も勉強になったことは、「人間の多様性」である。アメリカでは、誰もが違った。言葉も、人種も、国籍も、文化も、その背景にある者すべてが他と違うのだ。他と違うからこそ、甘えなどは通用しない。しっかりと自律した個人が、地に足をつけて自分を表現していかなければ到底やっていけない社会であった。それが私のアメリカに対する印象である。そのようなアメリカでの生活を通して、私は「自分」を手に入れたつもりになっていた。

2002年の5月に日本へと帰国し、久しぶりに始まる日本での新生活でまず悩まされたのが「逆カルチャーショック」であった。具体的に言えば、日本のキャンパスにいるとどこか居心地が悪さを感じるということだ。他と違うということが心地よかった「はず」であるのに、それが逆に居心地の悪さの原因となっていた。アメリカでしっかりと「自分」を見つけたつもりでいた私は、日本において他人と比べてしか「自分」を把握していない事実に愕然とショックを受け、戸惑いと同時に焦りを感じた。

「結局アメリカで得たものとは、一体何だったのであろうか。」

私はアメリカで過ごした3年間で得たものが一体何であったのかを原点に戻って確かめるべく、そして一人ひとり全く違う者同士が集まる中でいかに仕事をすることができるかを学ぶべく、日米学生会議に挑戦するに至った。もう一度アメリカ人学生と飾ることなく裸で語り合うことによって、アメリカで得たものを確認できると思った。私にとっての日米学生会議が、今始動した。

日米学生会議を1ヵ月間こなすということは、私にとって簡単なことではなかった。特に会議が始まった当初は、過度のフラストレーションとストレスで潰されそうであった。私にとってのフラストレーションは2種類あり、一つ目は「コミュニケーションスタイルの違いから生じるアメデリとの間のフラストレーション」、もう一つは「多様な集団の中でどう自分を位置づけるかという難しさから生じるフラストレーション」である。

アメデリとの摩擦によるフラストレーションは、一番初めの分科会で生じた。分科会の方向性を巡り激しいディスカッションが起きた。所属する分科会の「移民」というテーマは広く、参加者の興味も多岐に渡る。全員の興味を上手く包括し分科会として一つのゴールを見出したいのであるが、どうも上手くコンセンサスが取れない。いつまで経っても進展のない議論に、私は苛立ちを感じていた。とりあえず自分が思う最良のアイデアを発言してみるが、すぐに別の案が出てボツになってしまう。アメデリとのコミュニケーションはまるで「暖簾に腕押し」のようで、自分が何を発言しても否定されてしまうという印象を受けた。自分の意見が何一つ通らない分科会での疎外感と、議題が決まらない苛立ちで私はひどく落ち込んでしまった。これからこのメンバーで1ヵ月を過ごすのかと思うと、先が暗闇に見えた。

分科会初日は分科会のアメデリと話す気分ではなかった。しかし分科会のコーディネーターであるベン・ラーソンが私のストレスフルな様子を察したらしく、何度も声を掛けてくる。最初のうちは軽い返答でごまかしていたが、「この際、全部言ってしまおう」とその夜、分科会のフラストレーションについてすべて話をした。ベンによれば分科会の最中にアイデアを頻繁に出すのはアメリカでは普通のスタイルで、相手の意見を否定しているのではないという。それを聞いて自分の中に新しい何かが、発想の転換のようなものが瞬間

的に芽生えた。

「私たちはとりあえず様々なアイデアを出しそのうちの一つを採用して、だめなら別のアイデアに方向性と移してみます。」
「完全に皆の意見を一致させることなく、まずは会議を停滞させることなく前に進ませることを重視するんです。」

このようにベンはアメリカ人のディスカッションスタイルを丁寧に「日本語で」語ってくれ、アメデリが分科会で悪気はなかったのだと語った。もちろん私もアメデリ側に悪気があったとは思っていなかったが、その一方で根本的に価値観が違うので何を議論しても何も生まれないのではないかという失望感は抱いていた。しかし改めてベンにアメリカ式のディスカッションと日本式のディスカッションが違うということを教えられ、目の覚めるような気持ちになった。私は自分の知らない間に「形式ばった交流会」を日米学生会議に期待してしまっていた。しかし自分にとって都合のよいことを相手に期待するのではなく、違う相手を理解すること、すなわち異文化コミュニケーションとは難しいのだという基本的なことをベンに教えてもらったような気がした。ここではコミュニケーションギャップを乗り越え、日米双方の学生が語り合えるのかと思うと感動した。留学時代には出会えなかった、自分の知らない「アメリカ」に出会えるという期待が生まれた。

もう一つ私が日米学生会議中に抱えたフラストレーションは「多様な集団の中でどう自分を位置づけるかという難しさ」から生じたものだ。これまでいくつかの学生イベントを経験してきたが、こんなにも自分の居場所に困った経験がない。日米学生会議では日本側参加者もアメリカ側参加者も誰もが「違う」ということのみならず、同時に皆とても才能と個性のあるメンバーばかりであった。したがって、私の中の中途半端なものなどは到底通用しない。リーダーシップや企画力、英語力、あるいはパフォーマンス。これまで自分に自信のあったものを、「誰か」が上手くこなしてしまうのだ。私が当初やろうとしていたことが、「誰か」によって円滑に進められていくという環境が日米学生会議である。

「自分がいなくても、会議は順調に進行する。」

私は自分が日米学生会議に参加する意義がどうしても見出せず、それが原因で孤独を感じていた。自分がこの会議にいる意味は何なのだろうか、と。

当初は自分でもどうしようもなかったフラストレーションも、中盤辺りになると随分と落ち着いてくるものだ。自分のフラストレーションを聞いてもらい、また相手のフラストレーションを聞くことによって、参加者が互いにバランスを保つようになっていった。早い話がフラストレーションを抱えているのが自分だけでないことを知り、気持ちが楽になったのである。皆と様々なスケジュール、あるいはコミュニケーションを共有することに

よって日米学生会議参加者の様々な部分を知っていった。同時に、私自身に対する周りの理解も確実に広がっていると自分自身感じていた。その繰り返しの中で、日米学生会議参加者は結束していったように感じる。

先日アメリカ側参加者と日本側参加者が惜別の別れを惜しんだ、京都の「あのバス停」を通った。そのバス停は、実は私が毎日利用する場所でもある。通るたびに、あの時の別れのシーンが脳をよぎる。日米学生会議に対してノルタルジーになる瞬間だ。最後まで抱き合っていた者、再会を約束した者、影からそっと涙をぬぐって見守っていた者…。日米学生会議中、私たちJASCerには「1ヵ月経てば、離れ離れになる」という切迫した雰囲気が常にあった。だからこそ眠い目をこすりながらも、毎晩心ゆくまで語り合ったのだ。

私が日米学生会議で答えを見つけたかった二つの問い。

「私がアメリカで得たものとは、何か。」

私がアメリカで得たものとは「自分」ではなく、むしろ「自分を探すことの難しさ」だったのかもしれない。様々な人間がいる環境に置かれると、どうしても必要なのは「自分」である。しかし「自分」という存在は一番知っているようでいて、実は一番捉えるのが難しい。良いところも、悪いところも、強いところも、弱いところも、すべて混在して一人の人間を構成している。見たくない部分にはふたをしたいが、それでは「自分」という全体像が見えなくなってしまう。多様な人間がいる日米学生会議だからこそ「自分」探しに苦労した経験から、このことに気づくことができた。

「いかに、『違う者』と一緒に仕事をするか。」

この答えを短い文章でまとめることは今の私にはできない。しかし敢えて言うなら、第55回日米学生会議の「経験そのもの」がこの問いの答えであるように思う。

2003年夏。同世代の若者に囲まれ、ありのままで自分自身を見つめなおした日米学生会議。日米学生会議でなければ、この経験はできなかったと強く思う。

西納由紀

私にとって2回目の日米学生会議、しかし最初で最後の「第55回日米学生会議」が終わった。会議が終わった今、何かを成し遂げたという達成感と、いつもの下宿に一人戻ったどうしようもない孤独感と日常感とが心の中に同居している。私にとって日米学生会議とは何なのか、この1年をかけて作ってきたものは何なのか。この1年を振り返って、今その日々に思いを馳せてみる。

第54回日米学生会議では、新実行委員選挙は会議の最終開催地、サンディエゴにて行われた。選挙前夜も当日も、私はドロドロと悩んでいた。「実行委員」という役職に全く興味がなかったわけではないが、かといって立候補するほど積極的だったわけでもなかった。第54回会議において、私は会議の内容を存分に楽しみつつ、しかし一方で大いに不満を表明していた参加者の一人であった。これだけの予算があり、こんなに意識の高い学生が集っている。やり方次第で日米学生会議はもっと存在意義が高められるのではないか。まだまだ眠ったままのポテンシャルがあるのではないか。そう自問する一方で、すでに忙しくしていた学生生活のどこから時間を捻出できるのか、私のような者でも務まるのか、悩み続けた。躊躇の渦の中にいた私が前に踏み出す最後の決め手となったのは、結局私を推薦してくれた人たちの存在だった。会議の規模、実行委員の手腕、参加者の熱意、そのすべてが圧倒的だった第54回会議の参加者の中で、私は決して目立っていたわけでも、突出して積極的だったわけでもなかった。一参加者であった私を、それでも「ぜひ」と実行委員に推してくれる人がいる、ということは、私には取り下げられないほど重くそしてありがたい事実だった。結局推薦を引き受け、スピーチをし、投票のプロセスを経て実行委員になった。1年前のその時のことは今でも鮮明に覚えている。サンディエゴでの選挙を経て第55回会議の実行委員になったメンバーの一人ひとりには、それぞれの動機があり、思い入れがあったことだろう。とにもかくにも、こうして立ち上がったのが第55回会議だった。そして私たち「新」日本側実行委員は、第54回会議を終えた直後の感動と、第55回会議へ向けての期待と、でき上がったばかりの会議の枠組みを日本に持ち帰ったのだ。

仕事を開始した当初、チームとしての足並みがそろわないまま、初めて取り組む仕事が次々と流れ込んでくる中で、非常にフラストレーションのたまった時期があった。実行委員としての仕事は膨大で、学業や就職活動と両立してこれをこなすのは正直大変だった。特に私が広報や出版をはじめとした、実行委員全員の協力を必要とする仕事を担当していたということも負荷を大きくした。軌道に乗るまでは、心は焦っても仕事は進まないという空回りの時期もあった。

しかし、これがいつ頃からか、徐々に解消されていった。最初は寄せ集めでしかなかった実行委員が、お互いの性格や個性、長所をよく知るようになり、お互いを単なる仕事仲間としてではなく、友人として、家族の一員のような存在として認めるようになった。そ

の過程で醸成された信頼関係が、実行委員会全体の潤滑油となったのではないかと思う。

実行委員としての仕事は事務的なことや雑務が多く、必ずしも楽しいものばかりではない。ミーティングや合宿で、返上しなければならない週末の方が多かったりもする。だが、志を同じにして共に仕事に打ち込む実行委員がいるという事実に終始支えられ、助けられた。その個性と人格を心から尊敬する仲間と仕事ができたことをとても誇りに思うし、彼らと同じ第55回会議というボートに乗れたことは、大変冒険的で心弾むことだったと今振り返って思う。

このように2002年8月から2003年5月まで、第55回会議というのは実質、日本側実行委員7名の地道な活動を指していた。それゆえ、2003年5月の春合宿で日本側参加者が初めて一堂に会し、第55回会議が36名の団体に拡大したのを目の当たりにした時の感動はひとしおだった。会議の中で最も大切な要素である「参加者」がついに来た！という感慨があった。そして、本会議が始まってアメリカ側参加者が到着し、初めて総勢72名が集った時の感動は、春合宿の際のそれを上回った。まるで第55回会議が突然爆発的に大きくなったように感じた。また日本側実行委員が日本において、アメリカ側実行委員がアメリカにおいて、この1年間活動してきた成果が一気に目の前に現れたようでもあった。

こうして本会議が始まった。本会議の一日一日はあまりにもなめらかに流れていった。半年前から取りかかっていた一日が、前日深夜まで詳細をつめていた一日が、次々と過去のものになっていった。一日が経つたびに、これまでの1年間の1週間分くらいが、ビリッと大きな音を立てて、日めくりカレンダーのように、ばっさりとちぎり取られていくようにも感じた。

今回の会議に参加しながら、私が最後まで取り外せない眼鏡があった。それは日米学生会議を「事業」として見る目であった。参加者として参加した第54回会議と、実行委員として参加した第55回会議とは、私の中で完全に異なっていた。第54回会議は、まさに「参加」するものであり、初めての環境の中で、周囲から何をいかに吸収できるか、成長できるか、充実感を得られるか、奮闘する日々だった。だが、第55回会議では、私はプロデューサーの側に回り、「事業」として会議を見ていた。これにはメリットとデメリットの両方があった。メリットとは、そう割り切ることによって、実行委員としての仕事に専念し、仕事の完成度を高めることができたということである。デメリットとは、この場合、完成度を追求する対象はあくまでも実行委員の仕事の内容であり、必ずしも第55回会議の内容の充実そのものではないということだ。つまり、枠組みを確実に形作ることにより専念し、その中身や内容の充実は参加者の発意と行動力に任せていたということだ。このようなわけで、会議の最中は、自分がもし参加者としてこの会議に参加していたらどのように評価するだろうかという点について、十分に注意を払うことができなかった感がある。これが理由となって、会議が終わった今も、実行委員としての達成感は高いものの、会議の参加

者として、あるいは分科会のコーディネーターとしては、肯定的に評価できない面が残る。

第54回会議の際に私が感じていたフラストレーションとは、主に「参加者」としての会議を見た際に気付いた「会議の欠陥」であり、「改善の余地」でもあった。第54回会議よりも参加者スタッフの裁量を上げたり、ホスト側ではない実行委員（今年はアメリカ側実行委員）にも上手く仕事を分配したりなどと工夫することによって、ある程度改善できた点もある。しかし、夜の飲み会に迷惑を被る参加者が出るということや、会議のアカデミック度が参加者が当初期待していたほど高くない、などという会議の中身や内容に関することについては、結局第55回会議でも改善されなかった。自身を顧みれば、例えば議論そのものに参加することより、議論の場と時間を確保するために奔走していたことが多かった。ストラクチャーを丁寧に作っても、その内容にもしっかり関わらないと、参加者として会議から得られるものは少なくなるし、参加者の視点から会議の充実度を評価することも難しくなる。このジレンマを会議の最中にしばしば感じていた。

毎年の会議は参加者全員を満足させられるわけではない。会議は完結しない。そうであればこそ、よりよい会議を目指して次年度の会議が発足する——とは第55回会議実行委員の共通認識である。第55回会議実行委員は実際に参加した第54回会議をはじめ過去の会議を精査しつつ、何が足りなかったのか、何が求められているのか、検討を重ねた。そして、私たちなりに精一杯、第55回会議を作った。しかしもちろん第55回会議も完全ではなかった。何が「完全」なのかもわからなかった。そんな状況の中で第55回会議の終わりに、次年度の会議を作る意思を持った参加者によって、第56回日米学生会議実行委員会が発足した。次回会議の実行委員が、この第55回会議をどのように振り返り、何を評価し、何を批判するのか、定かではないが、どのような形にせよ、第55回会議を厳しくかつ建設的に検証して、来年につなげていってほしいと思っている。

とにもかくにも、2003年8月21日をもって本会議は終了した。第55回会議も日米学生会議の長い歴史の1ページになろうとしている。

この日米学生会議には毎回変わっていくものと変わらないものがあると思う。来年で70周年を迎える日米学生会議は、その時々の世相を反映して、形式や概要について常に変化を遂げてきた。日米学生会議のテーマや議題となる事項は毎年変化するし、日米学生会議そのものの社会的意義も同様に変容する。例えば、日米学生会議が発足した当時の日米学生会議が有した意義、意味というのは、現代の社会において、あるいは日米関係において確実に異なってきている。また留学や旅行で容易に渡航できるようになり、同類の組織である各種「学生会議」や「学生フォーラム」が多数発足している現在において、日米学生会議が発足した当初にこの会議に期待されていたような非政府的外交使節としての役割、貴重な草の根交流の場、学生が会議を立ち上げるという先駆的な新鮮さ、といった価値は相対的に薄れてきている。社会のいわゆるエリート層にあった学生が、準外交的交流を行

っていた時代から、学生を「一市民」と明示して市民レベルでの社会参画を考えようと試みた第55回会議に至るまで、その変化は著しい。

他方、日米学生会議について普遍的なものもある。それは会議を通して培われる深くて確かな人間関係である。この1年を振り返って、その日々に今一度思いを馳せてみる。実行委員としての生活はまさに日米学生会議に生き、日米学生会議に生かされる日々だった。そしてそれだけではなく、日米学生会議は友情を、人間関係とは何かを、教えてくれた。日米学生会議を舞台として何度も何度も一期一会が重ねられていく。無数の人が日米学生会議を通じてつながり、別れていく。会議後に連絡を取り合って、親しい間柄を保つ人の中にも、そうでない人の中にも、確実に日米学生会議での経験は生きている。日米学生会議を共通項として世代を超えた人がつながり、専門分野を超えて交流が広がり、県境を州境を国境を越えて交流が広がる。本会議中だけを見ても、苦しい時があり、それを乗り越える時があり、笑いも涙も、恋愛も別れもある。そのような、人が生きていく中で直面する様々な感情のぶつかり合いや融和、出会いや別れを濃縮して体験させてくれる——これが、日米学生会議の普遍的な魅力として存在し続けてきたものなのではないかと思う。

最後に、私は、第54回会議、第55回会議に参加することによって、日米学生会議から一つの大きな挑戦を課されたと思っている。それは、社会が日米学生会議を通して私に多大な投資をしたということである。第54回会議で訪れたアメリカの街、数をこなした講演会や勉強会、第55回会議を作るにあたって得た様々な社会勉強、そして何よりも心から尊敬してやまない同期の実行委員と参加者の面々との出会い。日米学生会議に出会わなかった私と、日米学生会議に出会って、とことんそれに浸った私と、何がどう異なり、後者の私はこれから社会でどのようにその実を成熟させていくのか、これが問われていると思うのだ。

この意味において、私にとっての日米学生会議は終わらない。

野口直子

後悔しないように努力する、これがこの1ヵ月で学んだ一番大きなことだと思う。環境が整っていないからできない、相手の理解がないからできない、今までこんな文句を並べ続けてたくさんのことを諦めてきた。しかし、今回の1ヵ月を経て確実にその考えは変わった。環境が整っていないなら整えればいい、相手の理解がないなら作ればいい、そんなふうに思うようになった。

私は英語ができない。それにもかかわらず、会議中は自分の考えの深い部分を英語で表

現しなければならない。言いたいことが言えない、聞きたいことが聞けない。英語での会話に大きなストレスを感じていた。最悪の状態の時には英語を話さないのはもちろん、ただの“Morning！”という挨拶でさえ聞きたくないと思った。

ストレスが頂点に達した時、英語に対する拒否反応についてみんなに相談した。その時「後で後悔するくらいなら、後悔しないように今努力するべきだ」と仲間から言われた。はっとした。英語ができないとウジウジして、このまま会議が終わってしまったら絶対に後悔するとわかっていた。

小会議から数日後、リフレクションの時間に、皆のストレスの原因を話し合うことになった。アメリカ側は、日本側が意見を言わないことがストレスだった。「なぜ日本側は意見を言わないのか。」怒りにも似たこの質問が間髪入れず、何度も繰り返し質問された。日本側の意見を聞くために一度アメリカ側は黙ろうという提案もあったが、なかなかアメリカ側からの発言は止まらなかった。その燃え盛る炎のような英語での発言の中に、英語難民の私などが入り込める余地は無かった。しかし、私は彼らの質問に答えたいと思っていた。言われっぱなしでは日本側にもアメリカ側にも、しこりが残る。それだけは嫌だった。

「意見を言わないのは、何も考えていないからではない。私のように、今何が英語で話されているかを理解するのに時間がかかる学生は、途切れない英語の会話に割り込むことができないから、意見が言えないでいる。理解するのにも自分の意見を英語に直すのにも、アメリカ側学生よりも時間がかかることをわかって欲しい。だから会話と会話の間にポーズを作ってもらいたい。」

一度話し始めたら意外と言えるものだ。しょっちゅうつまったが、そのたびにみんながサポートしてくれた。アメリカ側のある学生は「あなたが今日発言してくれたことによって、明日からのアメリカ側参加者の態度は変わるわ」と声をかけてくれた。嬉しかった。こんなにも真剣に、日本をわかろうとしてくれている友がいる。ここで自分を閉じてしまってはいけない。もっとみんなのことを知りたいと思った。そのあと 2 週間、私は英語で話し続けた。

日米学生会議は存在価値があるか否かという問題があるが、私はそれに対してイエスでもノーでもあると思う。それは私が、イエスにするのもノーにするのも自分次第だと思っているからだ。日米学生会議参加を通じて気が付いたことや、得た素晴らしい仲間たちはこれからの私の生き方を確実に変えた。第55回日米学生会議のメンバーであることは私の誇りだ。学生のうちにみんなに会えてよかった。これからもより良いものを作ろうというモチベーションを常に忘れず、この素晴らしい仲間たちと生涯刺激し合って生きていきたい。

野口なつ美

第 55 回日米学生会議とは…一言では語り尽くせない存在である。私にとって、この夏はあまりにも濃く、筆舌に尽くしがたい。恐らく、こんなにも非日常の世界に生きる機会は、二度と来ないであろう。日米両国の 72 人の学生が、多くの貴重な経験を通し、ありとあらゆる感情をぶつけ合う。そこには、言葉では理解し合えないものが確かに存在した。

どんなときも傍にいてくれたみんな、ありがとう。こんな素敵な個性豊かな仲間と出会う機会を与えてくれた第 55 回日米学生会議に感謝したい。

乗竹亮治

今思えば、2001 年 9 月 11 日であったかもしれない。

「インターナショナル」などとは程遠い東京の雑踏で育った僕だったが、高校時代に何度か海外に行く機会があり、特にふた夏を過ごしたアメリカに強く惹かれた。また当時、「日常生活の小さな幸せ」といったようなものに人生の価値は潜んでいるのではないか、などと考えていた僕にとって、グリーンの芝生がバックヤードに広がり、明るい日差しが差し込む平屋には大きな冷蔵庫があり、地元ベースボールチームの成績に一喜一憂し…なんていう「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」は、幸せの形として映って仕方がなかった。17 歳だった。

アメリカへの恋情は高まるばかりで、高校卒業後、アメリカの大学に行きたいと考えるようになり、カントリー&ウェスタンがどこからともなく流れてくるようなオクラホマ州の、なんの変哲もない州立大学に入り、ごく普通のアメリカンとしての生き方を目指すべく、暮らし始めたのだった。また、留学生の多い大学で、世界 100 カ国近くからの学生がいる環境は魅力的だった。

ところが渡米後 3 ヵ月も経たぬうちに起きたのが、あの悲惨な米国同時多発テロ事件だった。何もかもが変ってしまったことは想像に難くないと思う。特に僕が行った一つのスピーチが僕自身を大きく変えることとなった。テロ事件を受けて、大学当局はイスラム教徒の学生を擁護するべく、彼らに対する差別的な発言などを禁止する声明を発表したのだが、それをある集会で発表していたときのことだった。テロ事件直後であったことを考えれば当然のことだが、アメリカ人学生の表情は決して明るいものではなく、彼らに大学側の意図が伝わっているかどうかは疑問だった。そのとき、僕の頭の中をめぐったのは、仲

のよいサウジアラビア人留学生達の顔だった。思わず立ち上がり、アメリカ人学生に伝わるような表現を必死に探し、即興でスピーチを始めていた。

「僕はイスラム教徒ではないが、彼らと同じくインターナショナル生です。よって、多くのイスラム教徒の友人がいます。彼らは我々と同じく、この国に敬意を感じ、そしてこの国で学んでいます。今、僕はあなた方に、もう一度、アメリカとは何かを考えて欲しいのです。僕の祖父は、第二次世界大戦中、海軍の人間でした。それはつまり、60 年前、僕の祖父は、アメリカに対して戦ったのです。彼はアメリカ軍によって、東南アジアで捕虜となりました。数年後、祖国に戻った彼は、この国を憎んでいたでしょうか。いいえ。彼は一度戦ったこの国を憎むことはしなかった。それは、きっと、アメリカ軍人、つまりこの国の人々が彼に対し、誠意を持って対応したからではないでしょうか。そして、彼の孫である僕は、今、このアメリカで、この国を愛し、あなた方と共に学んでいるのです。いかなる信念を持つ人々、いかなる文化的背景を持つ人々に対しても、理解を示し、寛容に門戸を開いてきたのがアメリカではないでしょうか。敵軍の捕虜にさえ、親しみを感じる雄大な心が、アメリカ人の心ではないでしょうか。その美徳こそ、この国が『約束の地』（Promised Land）と呼ばれるゆえんではないでしょうか。アメリカ合衆国。それは僕の祖父が戦った国です。しかし、同時に、僕の祖父が憎まなかった国でもあるのです。僕はこの国を愛している。God Bless America（アメリカに祝福あれ）。」

あの時、僕は本当に必死だった。そして、話し終わった僕を、アメリカ人学生たちは大きな拍手で包んでくれたのだった。

単にアラブ系留学生のことを想っての行動だったが、このスピーチが思わぬ方向に転がり出すことになる。この話が学長の耳に伝わり、彼が“Wisdom from an Old Enemy”というタイトルで新聞記事を書き、それが州内の新聞に掲載された。忙しい生活が始まり、「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」なんてものはどこかに吹き飛んでしまった。また、一留学生として、一日本人として、僕に何ができるのだろうか、を考える生活の始まりでもあった。

その後、様々な活動に従事していく中で、出会ったのが第 54 回日米学生会議のパンフレットだった。

そして、この二国間による学生交流に没頭することとなり、第 55 回実行委員会の一員として第 55 回日米学生会議を形作ることとなった。第 55 回会議を担当するにあたり、日本の大学に入り直した。まさに、人生のための JASC というより、JASC のための人生といった 2 年間だった。

もし、あの米国同時多発テロがなければ、僕は今でもオクラホマ州の片田舎でカウチに座り、沈みゆく夕日を眺めていたかもしれない。

そして、どこにいたとしても、何が起きたとしても、純粋にアラブ系学生のことを想って必死になった、あの一瞬の気持ちを大切に生きていきたいと思う。

最後になったが、1年間を共に過ごし、共に悩み、共に笑い、ときにはぶつかり合い、ときには理解し合い、今となってはまさしく家族のような第55回実行委員会のみんなにありがとうと言いたい。お調子者で、仕事が甘く、ああだこうだ言っているだけの男を寛容にも支えてくれ、厳しくも優しくも見守り続けてくれ、しっかりした仕事ぶりでいつもフォローをしてくれるみんながいてこその第55回日米学生会議だった。そして、そんな実行委員会をさらに大きな温かい目で見守ってくれた参加者のみんな、ほんとうにありがとう。いい出会いがたくさんあった夏だった。

こないだ、吉祥寺でいい店を見つけたんだよね。次の集まりは、そこにしようぜ。

原奈央

私における第55回日米学生会議は以下の4つの事柄で表すことができる。

胃痛：東京オリンピックセンター集合前夜。荷物をしながら激しく襲う胃痛と闘っていた。春合宿で味わったあの和やかな雰囲気も忘れ、ついにきてしまった本会議を前に、言いようのない緊張と不安で朝早出というのも忘れ、なかなか寝付けなかった。参宮橋駅からオリンピックセンターまでの足取りも心もち重かった。しかし、集合部屋で参加者の顔を見た瞬間、緊張感が一瞬で解れていった。最初に出会ってまだ数回しか顔を合わせていないメンバーなのに、その瞬間はまるで1年ぶりに家族と再会したような感覚を味わっていた。この会議で知り合った人々にはなぜか、ずっと前から知り合いのであるかのような感覚が共通の認識としてあった。

笑い：アメリカ側参加者到着と同時に、それまでの一定だった日米学生会議の雰囲気が180度変わった。人数が倍になったということに加えて、日本側参加者に垣間見られる緊張の面持ちがその変化の要因だったことは間違いない。それから数日間、オリエンテーションや分科会、レセプションなどを通してお互いがよく話すようになり、そこには国、文化、言葉を超えたまさに「日米学生会議」的な雰囲気が漂いはじめていた。

衝突：公私共に両国の学生が入り混じり、開催地を移動するにつれ、72人の一体感が生まれていた。と同時に、そこに新たに両国それぞれにおいて強烈な一体感が生まれていたのである。それは、まさに私の予期しなかった出来事の一つでもあった。会議において、互いが真剣であればあるほど、その思いが相手に伝わりにくくなる。異文化理解、相互理

解の困難の極みであった。それぞれ違ったバックグラウンドを持つ人間による意見交換から得られるものへの期待ばかりが膨らんだ私は、日頃から異文化交流の経験は乏しいほうではないはずなのに、この場で改めて、異文化における衝突の偉大さに気付かされた。

友情：この会議の意義は私にとって何だったのだろう、私は何を得ることができたのか。幾度となく考えてみた。市民参加への意義だったのか、1ヵ月間喋り続けた末の英語力か、それとも1ヵ月を通して得た経験なのか。そのどれもが事実であることは間違いない。しかし、何よりも強く胸に残るもの——それは日米学生会議で知り合った71名一人ひとりの笑顔である。出会って数ヵ月、数日もたたないうちにあれほどまで熱く語り、笑い、泣き、信頼できた仲間が他にあっただろうか。日米学生会議という箱の中で出会ってしまった私たちに、はたして他の選択肢があったのだろうか。この会うべくして会った仲間たちとの出会いこそが私にとっての会議参加への意義を満たすといっても過言ではない。この絆は、この先永遠に途絶えることなく、新たな道を切り開きながら輝き続けることだろう。

福家雄大

そこに集う仲間たちの寛容さ、柔軟さ、知的好奇心の高さ、そして多様性に初めて触れ、感じたことのない内的なエネルギーの高揚を感じたのは5月の春合宿のときだった。このとき僕は確かに自分の中に新しい世界が飛び込んできたことを感じると同時に、自分自身がその未知の世界に足を踏み入れたことを感じた。そして、この仲間たちと共に何かが始まる、何か新しいものが創り出されていく、その過程の中に僕自身もその一員として足跡を刻んでいくということに大きな喜びを感じ、期待に胸を高鳴らせていたことを思い出す。

しかし、本会議で僕が直面したものは、そんな華々しいエネルギーとエネルギーのぶつかりあいではなく、あまりにも無力な自分だった。会議中のあらゆる場面において発想と創造性の乏しさ、またそれをある意味裏付ける知識の無さを今更ながら改めて認識させられた。また、異なった文化的背景を背負ったもの同士の間で発揮されるべきコミュニケーション能力の乏しさ、集団の中で互いに居心地のよい空間をつくりだすことに対する自分の力の無さというものも、まざまざと見せつけられたようだった。だが、それは今ある自分をそのままに近いかたちで見つめることができた時間だったともいえる。1ヵ月という期間、朝起きて寝るまでの、時には寝ずに過ごす一日を多くの人間に囲まれていながら、自分自身と向き合うということは一見矛盾しているように映るかもしれない。しかし、第55回日米学生会議に集った仲間たちの豊かな人間性と彼らの人となりを深く知るにつれ、それらは僕自身の中にある、目をそらしてしまいがちな部分、触れずに流しておいた部分を、僕の目の前であらわにせずにはいなかった。

結局のところ、僕が参加した第55回日米学生会議とは、僕自身にとっては会議開催前に自分が抱いていた期待を満たすためのゴールではなく、自分自身を的確に認識するための契機であったのかもしれない。もちろん僕は会議開催前に感じていた胸の高鳴りを忘れたわけでもないし、そのとき描いた期待を諦めたわけではない。第55回の日米学生会議はこの夏で終わったが、ここでこの仲間たちと築いた友情と深い関係は長く続いてゆく。彼らと語り合った夢と分かち合った様々な場面での感動は、これからも僕のうちにあるエネルギーを突き動かしてやまないだろう。第55回日米学生会議の仲間たちとの出会いは本当に不思議なめぐりあわせだったが、この不思議なめぐりあわせに心から感謝したい。

藤井秀之

この会議に参加することで、私は何か変わることができるだろうか。これが日米学生会議に応募したときの疑問だった。私は、絶えず自己革新し続けて行きたい、という信念を持ち続けていた。しかし、大学に入学して1年が過ぎ、大学という巨大な組織の中で自分を見失わずに鍛え続けるにも限界があるし、それだけでは「井の中の蛙」になってしまうのでは、という恐怖感が生まれていた。そういった知的欲求不満の中で、私は日米学生会議を見つけたのである。

私はこの会議に参加して変わったのか、変わっていないのか。会議に参加してしばらく経つが、まだよく分からないな、というのが私の結論だ。もともと、変わる、変わらないという評価自体、マクロ・ミクロの視点によって捉え方が異なるし、元来このような問いに答えること自体愚かしいことなのかもしれない。しかし、私がこの問いに答えることができない理由は別にある。それは、私の第55回日米学生会議は終わっていないからまだ答えられないのだ。その意味では、この報告書というものも、まだ終わっていないから報告などできませんよ、と書きたくなる…が、形式上それではいけないと思われるので、中間報告のつもりで私は書いている。もともと、会議期間は7月25日～8月21日と設定されていた。従って、8月21日、いや、京都フォーラムが終わった時点で、第55回日米学生会議は終わっていたのかもしれない。だが、私にとって終わったのは、山から切ってきた木々で「第55回日米学生会議」という名の家を組み立てただけで、まだ人が住めるような家は建てていないのでは、と感じた。簡単に言えば、満足していないということなのだが…。

では、この不満足の状態をどのように解消すればよいのだろうか。おそらく多くの参加者は、大学生活で、あるいは他の学生団体の活動やボランティア活動、アルバイトなどで、第55回日米学生会議での経験を活かそうと考えていると思う。あるいは、第56回会議の

実行委員に選ばれた参加者は、第55回会議での問題点を少しでも解消しようとこれから活動していくだろう。しかし、第55回日米学生会議で出会った素晴らしい仲間が、今後ばらばらになって、たまに会うだけの仲間になるのはあまりにも惜しい気がする。まだまだこのメンバーで何かできないかな、という勝手な思いが私にはあったのだ。したがって、私としてはこの仲間と共に、今後もなにかしらの行動をしていきたいと考えている。それが私にとって、日米学生会議に参加したことの証になると信じているからだ。

会議を通じて知り合った友人たちとのネットワークを活かして、新たはネットワークを構築していく。このような人と人とのつながりを構築していくことが、今後の私にとって大きな財産となるであろう。この第55回日米学生会議が、私にとっては一つのネットワークなのだ。今後このネットワークをさらに拡張、発展していくために、私の第55回日米学生会議はまだまだ続くのである。私が本当の第55回日米学生会議最終報告書を書くことができる日はまだまだ先のようだ。

堀抜功二

2003年9月26日、金曜日の夕方。部屋の外では、アザーンが聞こえる。

第55回日米学生会議報告書の感想文。一度書いて提出したものの、なぜかシックリこない。なぜだろう？感想文の編集担当者には随分と迷惑をかけている。しかし、もう一度書きたい。そう思い、再度感想文を書くことにする。

とは言いつつも、一向に言葉が浮かんでこない。自分はこの会議で何を、どう、感じたのか？自問自答しつつ、時間は過ぎる。会議を終えてたかが1ヵ月。会議を総括しろ、というのが到底無理な話だ。私は日本側実行委員として、それ以前に11ヵ月に渡る準備期間を経験してきたのである。合計1年という時間を消化するには、1ヵ月ではあまりに短い。

2002年の夏、アメリカ合衆国サンディエゴ。覚束無い英語を必死に使い、何とかついていこうとしたNew EC Meeting（新実行委員会議）。帰国後の実施要綱の作成、ポスターの発送、ホームページの更新、メールマガジンの執筆、説明会の開催、サロン・ド・ジャスク、参加者の面接、選考合宿、合格通知発送、春合宿、京都サイトの立案、深夜のチャット会議、月に一度の東京ミーティング、京都駅発新宿行き深夜バス「ドリーム京都号」、西院のスターバックス、関係各所へのあいさつ回り、汗まみれになったスーツ、交換される名刺、プレゼンテーションと交渉、資料作成、初めて1万円を超えた携帯電話の明細、毎日のメールチェック、胃の痛くなるストレスフルな日々、単位を落としそうな国際法の期末試験…。月並みな言葉であるが、まさにアッと言う間に過ぎ去っていった。手元には、A5サイズの「JASCノート」と題された4冊のノートが残っている。

ふと思い出し、自分のパソコンの中に取り込んでおいたビデオを見てみる。春合宿や本会議中の映像である。まるで昨日のように、会議中の情景が思い出される。しかし、この時自分が何を考えていたのか、あまりよく覚えていない。なぜだろうか。

いや、あまりに私にとっての日米学生会議というものが、どこか感覚的過ぎて言葉に置き換えられないのではないだろうか。きっと村上春樹なら上手くエッセイの中で表現するだろうに、と思わず考えてしまう。

72人の参加者がいた。そこには、72通りの日米学生会議が存在した。その中の一人として、自分が過ごした日米学生会議を語ることは、今の自分にとっては非常に困難な作業である。やはり、分からない。

10年後、20年後に自分自身でこの報告書を読み返した時、あまりの青臭さに閉口するだろう。いや、すでにこの感想を読んでいる方々にとっても、そういうことが言えるのではないだろうか。最後まで読んでいただいた皆さんに感謝したい。

末筆ながら、今回の会議でお世話になった皆様、自分を支えてくれた友人、すべての日米学生会議参加者、アメリカ側実行委員に謝意を示したい。そして、家族のように付き合った日本側実行委員は、私にとって素晴らしい財産である。ありがとう。もしかしたら、日米学生会議を通じての一人ひとりとの「出会い」そのものが、私にとっての日米学生会議だったのかもしれない。

松井亮

友人A：日米学生会議に参加してきたんだって？？
自分：夏だからね♪
友人A：楽しかった？
自分：もちろん！！ホームステイもしたし、沖縄も行ったし…。
友人A：へぇ～、おもしろそうだね…。
自分：日米学生会議の一番いいところは「何もない」ところじゃないかな～？もちろんハードの部分は全部スタッフが準備してくれるけど、分科会にしたって、会議全体の到達点にしたって、オープン・スペースになってるし…。
友人A：何が一番印象に残った？？
自分：英語のすごい日本人参加者かな…。日本人の英語が聞き取れないのは衝撃だったなぁ～。英語勉強しなくちゃ。
友人A：アメリカ人も参加したんでしょ？
自分：一番衝撃だったのは、アメリカ人もテンションが低い時があるってことがわかった時かな。アメリカ人ってみんなテンションが高いイメージしかなかったから(笑)。

友人A：議論はどうだった？
自分：アメリカ人は日本人が全然問題意識をもってないところについて熱かったりして、違いを感じることができて楽しかったよ。
友人A：それにしても、1ヵ月間はでも長いよね？
自分：そうでもなかったよ。楽しい仲間といれたおかげで。「日米学生会議のみんなへ」とかけてコンビニととく。
友人A：その心は？
自分：サンクス☆

最後になりますが、このような機会を与えてくれた皆様、いつも夜遅くまでミーティングをしていた実行委員に感謝します。ありがとうございました。

圓山由子

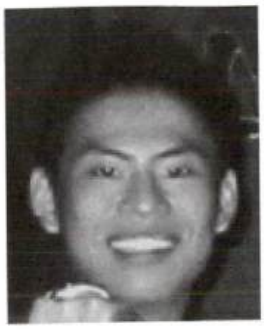
「日米学生会議ってなんなの？どんなことしてるの？」

私が日米学生会議に参加したことを話すと、必ず聞かれることである。正直、私はこの質問をされると非常に困る。なんと答えたらよいかわからないからだ。「日米の学生が合宿しながら、社会問題について議論するんだけど…。」とりあえずの答えは用意してある。しかし、日米学生会議を説明できているとは思えない。合宿前にも、合宿後も同様の質問を何度かされたが、未だに私は答えられない。

なぜか？決して、この第55回日米学生会議が無意味でやりがいのなかった会議だとは思っていない。むしろ、会議中は充実しすぎているくらいの日々だった。確かに充実した日々だった。しかし、「全体の輪郭」が今もぼやけたまま見えてこないのだ。自分が全体として何をつかんだのか？一体何ができたのか？また、何ができなかったのか？個別には、これらを見つけることができる。共同生活の中でのコミュニケーション、協力して仕事をこなしていくこと、英語力の不足、他人の心を読むことの難しさ、色々ある。たくさんある。けれども、これらは一つひとつ独立していて、互いに相関関係を持っていない。言い換えると「日米学生会議」で何をやったのか？できなかったのか、つまり私にとって「第55回日米学生会議とは何だったのか？」の答えとなるものを持てないでいる。

思うに、日米学生会議は今、「私」という個体を構成している「原子」の一部になっているのではないか。「日米学生会議」として一つにまとまった形では意味を成しえないが、会議でのかけがえのない経験の一つひとつがそれぞれ「私」に取り込まれ、私に計り知れない影響を与えている、そういうものなのではないかと感じられる。答えは見つからない。しかし、「答えがない」のが「正解」なのではないかと思う。

宮崎慎太郎



日米学生会議。それは僕にとって、とても長く、そしてとても短い1ヵ月だった。

会議が始まったとき、僕は日記を毎日つけようと思い立ったが、それは2週間と続かなかった。そのわけは、決して僕が怠惰なのではなく、僕にとって会議があまりにもheavyで、毎日生活してゆく（会議に参加する）だけで精一杯だったから。そんな状態で日記などつける余裕がなかったのだ、とかなり自己弁護じみた言いわけをしてみる。

しかし、実際僕にとってこの会議は自らの持つすべてを注ぎ込まなければいけないほど、大きなものだったといえる。限られた時間の中で最大限を得ようとすれば、こちらも最大限で臨まなければならない。各サイトでのイベント、講演会、仲間たちとの議論、それだけではない。何気ない日々の会話でさえも、刺激に満ち満ちていて、僕を疲れさせた。そう、それは疲れるほどに僕の価値観を崩そうと試み、そしてそのたびに僕は自らを見つめ直し、価値観を守るか変えるかの選択を迫られた。会議に参加するまでは、それがこれほどまで大変なものだとは思いもよらなかった。さらにそこには、言語の壁がある時さえあるのだ。最初から分かっていたことではあったが、やはり大きな障害であった。言いたいことを口にできないもどかしさ、理解したいのにできないくやしさ。幾度自分の力のなさを痛感する場面があったことか。そんなわけで、毎日僕が床につく頃には、完全に消耗しきり、すぐに眠りに落ちなかった日はなかった。…もちろんある部分恒常的な睡眠不足のせいでもあるのだが。

夜な夜な繰り返される談話。この会議で一番疲れたのも、実はこの夜の談話である。精神的にも肉体的にも相当疲れるのであるが、しかし相当に面白かった。この中で僕はどれだけのものを得たのだろう。夢、勉学、人生…などというまじめなトピックはほとんどなかったとはいえ、そこには相手の人となりを感じるための多くの要素が含まれていた。しかし、その人となりを知ることこそが、僕が一番やりたかったことなのである。同じところへ行き、同じものを見て、そして僕が感じたものとは違う何を感じるのか。日本人同士でも違う、いわんや、日本に住まわない人ならばさらに違う。知らないことを知り、気付かなかったことに気付かされ、自分がいかに井の中の蛙であったかを知った。JASCで得た最大のもの、それは紛れもなくこの自分の視野の広がりだ。感じた者にしか語れない多くの言葉を聞くことができた。それだけで、僕の第55回日米学生会議は大成功だったと言える。

72人が真剣に語り合う夏。それがこの日米学生会議だと思い、参加して、それが日米学生会議だったと感じた夏だった。

山口健介

1ヵ月にわたる会議が終わり「日常」に戻り、「非日常」の日々を時折振り返る。そんな時、「日米学生会議」という仰々しい名の会議において、自分が何を達成したのかについて当惑することが多々ある。「閉ざされた世界のうちで、同じ仲間72人と長期間共に過ごす」ことが特殊で非日常的な体験であることは容易に理解できても、その意義について明確に認識することは難しい。例えば「学術的意義」や「文化交流的意義」を求めるのであれば、「日米学生会議」がベストな方法ではないだろう。また会議が始まった第二次世界大戦時分のような政治的緊張が日米間に認められない現在の国際関係において、積極的な「政治的意義」を見出すことも難しい。原初的には「日米学生会議」は、日米で意見が対立するようなテーマがあって、それについて「学生」という自由な立場で意見を出し合うことに意義が見出されていたのだと思う。しかしその一方で、現在の「会議」の意義は異なる場所に所在するからこそ、その意義付けが困難なのだろう。しかしながら、個人的には教科書的な意義が見出せない際に、「教科書的な意義と異なる意義を探し出すプロセス」がそれ自身として重要な意味を持つと思う。

意義付けにおける葛藤の中で、まず思い起こさねばならなかったのは、学生会議参加の動機だった。「非日常の中に身をおくことで、学校で体験できないことをやる」という動機に従えば、学校で達成することが不可能で、学生会議で達成することができた諸々の出来事を思い起こすことが、最初の一歩として重要だと思われた。

さてある本によれば、「行動の成否には必ず原因があり、その原因はその人の心の中にある」そうだ。「あいつは何をやらしてもうまくいく。」このような発言を様々な場面で繰り返し聞くにつけ、この法則を思い出す。確かに一つのことのみに図抜けた才能を持つ人がいる一方で、それよりも「マルチ」にどんなことでもできてしまう人のほうが自分の身の回りにも多いように感じる。後者のような人の成功の要因は、上の法則に照らせば彼らの「心の中」にあるということになろう。「物事に真摯に取り組む気持ち」、「人とまっすぐ向かい合う気持ち」、「素直に失敗を認め向上しようとする気持ち」。このような気持ちこそは、汎用性を持って自分たちの行動をよい方向へと導いてくれるだろう。これらの人生における重要性は、どんなに強調してもし過ぎることはないと思う。

しかしながら学校で教わるのは、行動の仕方や技術であり、その裏にあるこうした内面的な部分までは学ぶことができない。これは学校が限られた時間で授業を受け、詰め込んだ知識の下でテストを受け評価される場所である以上、仕方のないことだといえるだろう。このような言説は様々な場面で語られることだが、現代において最も悩ましいのは学校そのものではなく、学校以外において内面的な部分を成長させる機会がほとんどないことではないだろうか。例えばお年よりや親類縁者の話からは、内面的な部分は友達づきあいや家族との関係を通して従来醸成されてきたことがうかがえる。しかし現在の忙しい世の中

で、そのような絆や関係といったものを相互にじっくり確認し合い、互いの内面を高め合う機会を見つけるのは至難の技だといえる。

自分にとっての「日米学生会議」の意義は、このような現状のもとで見出される。つまり、ひとたび「閉鎖的」な空間を「濃密な」と読み替えれば、「会議」が作り出していた空間が自分たちの内面を強烈に成長させていた「場」として強烈に思い起されるのである。夜毎、ロビーで語り合い、ナイーブに他人そして自身について考えをめぐらせ、お互いの内面をさらけ出したこと。当初は遠慮しがちだった他人との交わりが多くなるのに比例するかのように、自分の内面が変化していったこと。こもりがちな自分の内面をまるで花が開くかのように出せるようになり、そうすることで相手の内面と対話ができるようになっていったこと。もちろんすべての仲間とそのようになれたわけではないのだが、一人か二人、内面を通わすことのできた仲間は、自分にとってかけがえのない財産であるし、このようなプロセスを経て自分の内面の変化を感じることができたことは、会議を通して最大の収穫だったと思う。

この内面の変化という大きな果実を今後も持ち続けられるかどうか、今はまだわからない。しかしこれから社会に出た後も、その内面が持続、発展して自分の今後の人生の「原因」になっていく可能性を想像すると、この会議の意義が自分にとって人生単位で捉えるべきものだとさえ感じられ、ここで会議の意義を軽々しく述べることに抵抗を覚えるほどである。今はただ 1 ヵ月間の会議が終わり、このような幸福な気持ちでいられることを素直に喜びたい。内面の成長、そしてそれを支えてくれたかけがえのない友人を今後も大事にして、第 55 回日米学生会議を自分のこれからの長い人生にとってさらに意義深いものにできたらと思う。

最後になりましたが、このような素晴らしい会議を開催して下さった、賛助団体や企業の方々、そして本会議実行委員会の皆様、どうもありがとうございました。そして第 56 回日米学生会議実行委員の方々、来年の会議がまた多くの会議参加者にとって実り多きものとなることをお祈りします。

横田聡

これでもう何度目だろう。パソコンに向かい電源をつける。Word を起動する。何を書こうか。書いては消し、書いては消し。もう感想文の締め切りは何日も前の話だ。いまだに、自分にとっての第 55 回日米学生会議の意味を、噛み砕けていない。

英語で出遅れた。思うようにコミュニケーションが取れない。議論なんて遠い向こうのことのように感じられた。通訳依頼の「T」サインがあることに甘えていた。それではどうにもならない。

もっと議論の時間が欲しい。あっという間に時は過ぎた。初めから「アウトプット」と言われ続けてきたにもかかわらず、僕たちの分科会のフォーラムでのアウトプットはいいものとは決していえなかった。何を目的に、何をどう話し合っているのか。見失うことがよくあった。

そうした自分への不満や納得がいかない部分が、次へ進む原動力になっていった。幸い、僕たちの分科会では事後活動としてメールマガジンの発行が始まった。そう、終わりじゃない。これからなんだ。

たったひと月足らずで何ができる。この 1 ヵ月間、東京、沖縄、京都、福井とめぐり、また最後に京都に戻り、その行く先々で二度とないような経験もした。でも、それだけでは OB/OG のいう「私は日米学生会議に参加したから…」にはならないと思う。

「これから」この経験をどうするか、出会った仲間と何を築けるか。これで終わりにしないこと、ただの思い出にしないこと。何にでもなりえる大きな可能性を、この日米学生会議から手に入れた。

日米学生会議劣等生は、これからの巻き返しを誓う。

吉野茉美

第53回日米学生会議参加者の中でこの日米学生会議を「食べ放題のバイキング」と表現した人がいる。まさにその通りだと思う。どんな料理を選ぶのかは自由、そして時にその料理さえもつくるという環境。自己の主体性に大きく任されている場なのである。

果たして私はこの会議を通して「お腹いっぱい」になることができたのか？残念ながら答えは「NO」である。これまで置かれたことのないこのような環境に戸惑っている間に、本会議が終わってしまったというのが正直な感想である。知識や語学の準備不足を大痛感することも多くあった。

それでは、私は何も食することがなかったのか？その答えもまた「NO」である。メインディッシュやデザートに行き着くことはできなかったが、私はこの会議から多くのことを学んだし、考えた。各サイトや分科会で学んだことはもちろん、この会議を通して得たこれまで出会ったことのない個性や熱意あふれる参加者との出会いは、私に大きな刺激を与えてくれた。彼らはすべての物事に対して主体的に考える大切さを教えてくれた。時に彼らのパワーに圧倒され、自分の未熟さに対して苛立つこともあった。普段の大学生活では決して感じることのない感情を持ち、何よりも自分と向き合う機会が持てたこの3週間は、私にとって非常に貴重な時間だったと言える。

本会議としての第55回日米学生会議は終わってしまったが、私は「お腹いっぱい」になれる日が来ることを目指し、これからもこの会議で得たことを活かしていきたい。

第7章

第56回日米学生会議概要

第56回日米学生会議テーマ

開催期間及び開催地

会議の過程

会議中のプログラム

第56回日米学生会議概要

企画・運営　第56回日米学生会議実行委員会

第56回日米学生会議テーマ

Re-evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues

今、再考の時—日米関係と私たちの使命

1934年、悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により、両国の関係改善を目指して日米学生会議は創設された。彼らが当時抱いていた思い、彼らを行動に突き動かした思いとは、どのようなものだったのだろうか。創設当時のOB/OGの手記や話からは、社会で起きている様々な問題に対し、ただ傍観するのではなく、その問題について自らも当事者であると捉え行動しようとする思い、問題の解決を誰かに任せるのではなく、自らもその解決の一翼を担おうという思いが、彼らの原動力であったことがうかがえる。

2004年、第56回日米学生会議をもって、日米学生会議は創設70周年を迎える。創設以来、時代が大きく変遷する中で、日米学生会議は歴史を重ね、その時々の社会問題に対し真摯に取り組んできた。時代が変わりこそすれ、創設当時の精神、あらゆる問題を自らのものと捉え行動していく精神は、現在に至るまで変わらずこの会議に宿っている。

では、今私たちの生きる時代とはどのような時代なのだろうか。70年前とは異なり、日米関係は極めて強固な関係を築いている。国家から民間のレベルに至るまで、密接な関係を構築し、二国間の交流はますます活発になっている。また、今日世界のグローバル化が進行していることは否定できない事実だろう。しかし、グローバル化によって多くの恩恵がもたらされる一方で、それに伴う様々な問題が、国境を越えて広がっている。世界が目まぐるしく移り変わり、これまでの既定概念の枠を越えた事象が見られるようになった現代において、日米関係を再考する必要は高まっていると言えよう。日本と米国は現在、国際社会において多大な影響力を持つ国である。だからこそ、日本と米国の二国間のみで語るのではなく、国際社会の中の日米関係を考えなければならない。現代において日米関係はどうあるべきか。国境を越えて広がる問題に対し、日米はどのような役割を果たしていけるのか。日米学生会議を貫く精神は、これらの新たな課題へと向かっていく。

第56回日米学生会議は、この精神を胸に、今動き出した。今日のあらゆる問題に対し、私たちには何ができるのか。どう行動すればよいのか。学生ができることには限界があるかもしれない。しかし、私たちはいかなる利害にもとらわれず議論し合い、その方法を常に模索していく。その意見と行動を社会へと発信し、それに対する意見を積極的に取り入れ、社会との双方向的な関係を目指していく。それこそが、私たちの使命である。

開催期間及び開催地

開催期間

2004年7月24日～2004年8月21日

ハワイ

日本人にとって、ハワイは最も身近なアメリカということができるのではないだろうか。年間に4万人もの日本人観光客がこの島の魅力に惹かれ訪れる。歴史的にも日本とハワイの関係は深く、明治時代頃から、職を求めて多くの日本人がこの島を目指して太平洋を渡った。そして、今でも多様な日系人社会が日本文化を継承し続けている。しかしその一方で、太平洋戦争の火ぶたが切られた場所がハワイのパールハーバーであることを忘れてはならない。また、2001年に起きた実習船えひめ丸の衝突事故は、記憶に新しいところである。日米の学生が、両国の文化が共存するこの島を訪れ、日米間で起きた様々な問題を議論することにより、多角的な視野が得られると考える。

サンフランシスコ

アメリカ人にとって、「住んでみたい街」として最も人気のある都市がサンフランシスコである。この街には現在でも、1万人以上の日系人が暮らしているといわれ、アメリカの中でも特に、日本との関係が歴史的にも密接な都市である。一方で、サンフランシスコ湾周辺地域は、ヒッピー文化や同性愛文化の発祥の地として有名なだけではなく、ベトナム反戦運動の中心地でもあったことから、「ニューエイジムーブメント」の盛んな気風を備えている。また、東京の山手線内に収まってしまうほどの土地の中に、アジア系、ヒスパニック系を筆頭に、様々な民族が混ざり合って生活しており、サンフランシスコはまさに「多民族国家アメリカ」を象徴する街といっても過言ではないだろう。このように、滞在期間こそ短いが、市民活動の意義や民族問題など様々な問題を考察するのに、この街は多くの視座を与えてくれるだろう。

ワシントンD.C.

アメリカの首都、ワシントンD.C.は、アメリカの200年以上の歴史と政治が交錯する都市である。世界の大国、アメリカの政治の中心地であるこの都市は、世界情勢の中心地といっても過言ではない。この地も、その中心地に見られる数多くの桜の木からもわかるように、日本との文化交流が盛んであることで知られている。また様々な公共施設や博物館が充実しているこの土地は、今までの歴史をふまえた上で、今後の日米関係を再考していくために非常に重要な都市である。さらに、この都市には市民団体などが多く存在している。現場の声を聞き、かつ実際に体験することで、積極的な市民参加の方法を考えることができるだろう。

プリンストン

1777年1月3日の寒朝、窮地に追い込まれていたジョージ・ワシントン率いるアメリカ軍が、この地プリンストンでイギリス軍に初めて勝利を収めた。このため、プリンストンはアメリカ独立への道を切り開いた土地として有名である。また、この街はアイビーリーグ発祥の地としても名高い。多くの知識人を輩出してきた、由緒あるプリンストン大学に滞在することにより、参加者はアメリカにおける学問の気風に触れることができるだろう。また地理的にも、アメリカ経済だけでなく世界経済の中心地と呼ばれるニューヨーク、そしてアメリカ誕生の地として有名なフィラデルフィアに近いことから、プリンストンは第56回日米学生会議のテーマに沿う活動を、広範囲で行える土地であるといえよう。

会議の過程

第55回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側は主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC, Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。参加者決定後、討論に備えるレポートの作成、講演会や勉強会、合宿などを事前に行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各40名、合計80名の学生が約1ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議中の主な活動として、討論が中心となる分科会や各種のフィールドトリップ、様々な社会活動、そして本会議終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。分科会では参加者が8つの分野に分かれ、第56回日米学生会議のテーマである「今、再考の時—日米関係と私たちの使命」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論のみにとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に社会との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会へ向けて発信する。

本会議終了後には、日本側参加者は日本にて報告会を開催するとともに、会議の内容を報告書にまとめ、第56回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議において中心となる分科会は、日米双方の参加者約10名からなり、本会議の期間を通じて議論を重ねる。第56回日米学生会議では以下、8つの分科会が設けられる。

教育	Examining Contemporary Problems in Public Education
グローバル経済システム	Global Economic Systems
アイデンティティと社会活動	Identity and Social Activism
国際政治と日米	International Politics
メディア倫理	Media and Communications
南北問題	North-South Issues
社会と科学技術	Scientific and Medical Practices
社会問題と制度	Social Issues and Legislation

スペシャルトピック

論題がすでに固定された分科会とは異なり、様々な論題を参加者が自由に設定し、自由な意見交換、議論、交流を行う。参加者の新たな視点の獲得や発想を促すと同時に、本会議をより一層充実させることを目指す。様々なトピックが予想されるが、これまでの会議で扱われたものとしては、「若者文化」、「宗教」、「言語」、「スポーツ」、「消費者文化」、「東アジアの安全保障」などが挙げられる。

フォーラム

会議の最終開催地プリンストンで行われる。第56回日米学生会議における分科会の成果を社会に提示し、現代社会が抱える問題を一般の人々と共有することで、社会の前進に貢献することを目標とする。

ジョイントラウンドテーブル

各分科会から一人ずつ参加者が集まりグループを作る。そこでは、お互いの分科会における進行状況の把握と、各分科会の視点から考える本会議のテーマについての意見交換を行う。各自の新たな視点の獲得と同時に、その視点を再び自分の分科会に取り入れ、分科会の議論をより充実させていくことを目的とする。さらに、最後のジョイントラウンドテーブルにおいて、そこでなされた討論をもとに、本会議のテーマに関する具体的な提案を出すことを目指したい。

第８章

日米学生会議にご協力いただいた方々

協力者

賛助者・団体・企業

第55回日米学生会議　協力者

敬称略、順不同

第55回日米学生会議主催・後援

会議全般

主催：財団法人　国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター
　　財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会

沖縄サイト

後援：沖縄県、糸満市
　　NPO法人　国際親善・交流サポートセンター
　　財団法人　沖縄県国際交流・人材育成財団

福井サイト

後援：福井県

京都サイト

後援：京都市、京都市教育委員会

会議全般

財団法人　国際教育振興会

理事長	山室勇臣
常務理事・事務局長	鈴木堯
総務広報部　部長	稲田脩
総務広報部	玉城美穂子

国際教育振興会賛助会

名誉会長	高円宮妃殿下
事務局長	伊部正信
事務局	山崎花里

The Japan-America Student Conference, Inc.

理事長	Jack Shellenberger
専務理事	Gretchen Donaldson

外務省	
顧問	栗山尚一
文化交流部　人物交流課長	森下敬一郎
文化交流部　外務事務官	西池万葉
文部科学省	
大臣官房　国際課　課長	村田直樹
大臣官房　国際課　人物交流係長	黒田清彦
米国大使館　広報・文化交流部　文化プログラム室	松元美紀子
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会	
専務理事	吉澤誠司
専務理事　事務局長	松崎浩
事務局兼　事業開発部長	梅沢直臣
所長	吉田公寿
GHRD 推進室　課長	田代美智子
財団法人　世界平和研究所　理事長	大河原良雄
東京三菱銀行　相談役	行天豊雄
三菱商事　株式会社　会長	槙原稔
NPO 法人　日本予防外交センター　会長	明石康
日米文化センター　日本代表	伊部正信
国際交流基金日米センター	
所長	紿田英哉
事業第二課　課長	佐藤宏美
事業第二課	平岩あかね
事業第二課	高野千恵子
日米学生会議 OB 会	
会長	山室勇臣
幹事長	中瀬正一
社団法人　日米協会	
副会長	緒方四十郎
専務理事	久野明子
日本電気株式会社　コーポレートコミュニケーション部	
社会貢献部長	鈴木均
社会貢献部　フィランソロピーエキスパート	山辺清和
社会貢献部担当	櫻内郁子
京王観光　株式会社　東京中央支店　セールスリーダー	大平浩一
株式会社　実業公報社　常務取締役	古屋繁
株式会社　千修	横井靖典

事前活動

全般

NPO法人　国際親善・交流サポートセンター　事務局長	園鉄彦
沖縄タイムス社	
編集局　社会部　記者	謝花直美
編集局　社会部　記者	伊集竜太郎
株式会社　国会ニュース社　総務部	勝田康生
ジャーナリスト	吉村玲好
日本テレビ放送網　株式会社	
報道局　外報部長	元田成
報道局　外報部	大滝公成
報道局　「NNNニュースプラス1」	沼田明
毎日新聞　キャンパる編集部スタッフ	瀬長あすか
琉球新報社	
広告局　企画開発部	下地寧
編集局　社会部　記者	宇江喜達也
埼玉大学　新聞委員会	鈴木達之
東京新報　編集部	古市尚基
京都大学新聞社　部長	中川聡子
朝日新聞社	

講演会・勉強会講師

株式会社　コーチ・エィ　取締役副社長	鈴木義幸
東京大学　大学院　総合文化研究科　修士2年	福田潤一
奈良女子大学　教授	澤井勝
Visionary Strategies Institute　社長	Larry Rosenburg
福島大学　教授	清水修二
防衛大学校	
学校長	西原正
教授	源田孝
教授	山内敏秀
教授	財津耕一郎
放送大学　助教授	高橋和夫

本会議活動

東京サイト

NPO 法人　アサザ基金	
代表理事	飯島博
理事	川口明
事務局	三森典彰
環境省　廃棄物・リサイクル対策部	
循環型社会推進室　室長補佐	染野憲治
企画課　法令係	飯野暁
諏訪の森法律事務所	中川重徳
内閣官房副長官（当時）	安倍晋三
ナスインターナショナル　代表取締役	那須勲
日本 NPO センター　常任理事	山岡義典
橋本龍太郎事務所	藤村健
明食サービス株式会社　社長	大高巽
目黒区長	薬師寺克一
目黒区議会　議員	伊藤悠
Asian People's Friendship Society　(A.P.F.S.)	山口智之
オリックス　株式会社	
社長室　広報グループ　課長代理	谷合賢司
社長室　広報グループ	中根幸子
総務部　人事課	大坪陽介
東京ジャーミー・トルコ文化センター	セリム・ユジュル・ギュレチ
ソデックス　株式会社　カフェテリアふじ　ホールマネージャー	山崎國昭
東京都立日比谷高等学校	
慈眼寺の皆様	
内閣府産業再生機構	
日本コカ・コーラ　株式会社	
日経サイエンス	
米国大使館の皆様	

沖縄サイト

沖縄県	
知事	稲嶺恵一
副知事	比嘉茂政
県議会議長	伊良皆高吉
総務部　知事公室　基地対策室　副参事	石川實
総務部　知事公室　基地対策室　主幹	金城弘昌

総務部　知事公室　秘書課　主事	玉城勝也
文化環境部長	屋嘉部長市
文化環境部　国際交流課長	知念英信
文化環境部　国際交流課　副参事兼課長補佐	比屋根正治
糸満市役所	
市長	山里朝盛
助役	長嶺輝一
市議会議長	大城正行
教育委員会　教育長	金城政安
教育委員会　総務課　主幹兼係長	神谷良昌
収納対策室　主幹兼管理係長	宮城正一
総務企画部　参事兼秘書広報・男女参画課長	大城英孝
総務企画部　秘書広報・男女参画課　主幹兼係長	玉城眞宏
総務企画部　秘書広報・男女参画課　国際交流員	Ra Mason
総務企画部　秘書広報・男女参画課	大城隆尚
農水産商工部　商工水産課長	比嘉譲
農水産商工部　商工水産課　主幹兼係長	玉城雅夫
在沖縄米国総領事館	
広報・文化部　主席領事	Patricia M. Stigliani
広報・文化部　領事	Bruce R. Nelson
広報・文化担当補佐官	高安藤
広報・文化担当補佐官	具志寿子
嘉手納基地	
広報渉外部　渉外部長	普久原尚子
第18航空団米国空軍中佐　広報局長	Kevin Krejcarek
糸満市立光洋小学校　校長	糸満旦男
沖縄公論社　主幹	山口芳弘
沖縄国際大学	
国際交流センター	大城健太郎
法学部　教授	佐藤学
沖縄タイムス社　編集局　社会部　記者	屋良朝博
沖縄平和祈念堂　管理事務所　次長	比嘉正詔
いとまんコミュニティエフエム放送　番組担当ディレクター	高英子
結　株式会社	中里隆
財団法人　沖縄観光コンベンションビューロー	
コンベンション振興部　主任	城間由佳
財団法人　沖縄県国際交流・人材育成財団	
理事長	津嘉山朝祥

人材育成課　課長	前田真顕
ホテル　スポーツロッジ糸満	
支配人	藤田学
	佐久川貢
有限会社　サンライズ学院　主任講師	城間康之
琉球大学	
医学部　医局長	杉本耕一
法文学部　助教授	野入直美
NPO 法人　国際親善・交流サポートセンター	
理事長	池田光男
理事長	宮平進
事務局長	園鉄彦
「日米沖縄学生会議 2003」にご協力いただいた大学の皆様	沖縄キリスト教短期大学
	沖縄国際大学
	沖縄大学
	名桜大学
	琉球大学
「日米沖縄学生会議 2003」の広報にご協力いただいた学生の皆様	赤嶺達也
	新城エリナ
	高倉智子
オリオンビール　株式会社	
糸満市高齢者健康づくりセンター	
NBC サムシングフォー西崎	

<u>福井サイト</u>

上中町	
産業課　主査	岡本隆司
産業課　主事	中村和幸
教育委員会　事務局	玉井克幸
上中町国際交流協会　事務局長	下島芳和
小浜市国際交流協会	宮川なを子
福井県	
原子力安全対策課	山本晃弘
県民生活部　原子力安全対策課　安全対策グループ	島田秀志
国際政策課	永田僚子
前国際政策課	坂井太
財団法人　福井県国際交流協会	岸田恵
関西電力　株式会社	
大飯発電所　所長	肥田善雄

大飯発電所　次長	中西繁孝
原子力事業本部　原子力企画グループマネージャー	水野岳史
福井事務所　課長	藤江昭利
福井事務所　副所長	西森哲也
若狭支社安全管理本部コミュニケーショングループリーダー	浜野勝
京都大学　原子炉実験所　助手	小出裕章
福井大学　学長	児嶋眞平
福井新聞社　小浜支社　記者	幸田智美
JA 福井県中央会　農業対策部　営農生活課	
小浜市勤労福祉会館	
かみなか農楽舎の皆様	

京都サイト

立命館大学

総長	長田豊臣
教務課　課長	浅野昭人
教務課	村上亨
衣笠学生センター	川元理美
国際関係学部事務室	河上正昌
情報システム課　課長	宗重信也
教育文化事業課　課長	友藤信明
衣笠セミナーハウス	

京都市教育委員会

教育長	門川大作
高校教育係	石田素子
指導部	永田和弘
「京都地元高校生交流企画」にご協力いただいた高等学校の皆様	京都市立西京高等学校
	京都市立堀川高等学校
	京都市立紫野高等学校
朝日新聞　京都支局	今村尚徳
京都大学　助教授	曳野孝
京都新聞　編集局　社会報道部	円城得之
月桂冠大倉記念館　名誉館長	栗山一秀
伝統建築保存家	安井清
日本放送協会　京都放送局　放送部	藤原淳登
新風館関係者の皆様	
コリアタウンの皆様	
第 19 回日韓学生フォーラムの皆様	

その他全般

天野順一
Allen Miner
安里周悟
岩崎洋一郎
大高巽
小関道幸
小林規威
倉岡大樹
木ノ上高章
信田智人
須崎真二
鈴木協一
芹沢ユリア
竹本秀人
田勢奈央
田中裕将
田端利夫
辻喜久子
Naila Bayo Marico Mckenzie
中山智夫
降旗健人
宝槻徹
松井泰三
宮城征彦
八城政基
山崎秀之
山田勝
山本東生
吉原健吾

第 53 回日米学生会議実行委員会
第 54 回日米学生会議実行委員会／参加者一同

第55回日米学生会議 賛助者・団体・企業

敬称略、順不同

CGP The Japan Foundation Center for Global Partnership 独立行政法人　国際交流基金日米センター

財団法人　石橋財団
財団法人　沖縄観光コンベンションビューロー
財団法人　鹿島平和研究所
財団法人　国際教育財団
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会
財団法人　東京国際交流財団
財団法人　日商岩井国際交流財団
財団法人　三菱銀行国際財団
財団法人　平和中島財団
財団法人　吉田茂国際基金
財団法人　りゅうぎん国際化振興財団

社団法人　信託協会
社団法人　東京倶楽部
社団法人　日米協会
社団法人　日本歯科医師会
社団法人　日本自動車工業会

味の素　株式会社
株式会社　イトーヨーカ堂
オムロン　株式会社
株式会社　オリエンタルランド
キッコーマン　株式会社
シダックス　株式会社
新日本製鐵　株式会社
住友不動産　株式会社
積水ハウス　株式会社
セコム　株式会社
ソニー　株式会社
大成建設　株式会社
株式会社　竹中工務店
堤清二
株式会社　電通
東京海上火災保険　株式会社
株式会社　東京三菱銀行
東京電力　株式会社
トヨタ自動車　株式会社
日本アイ・ビー・エム　株式会社
野村證券　株式会社
ぴあ　株式会社
株式会社　日立製作所
富士ゼロックス　株式会社
富士通　株式会社
本田技研工業　株式会社
松下電器産業　株式会社
株式会社　三井住友銀行

三井物産　株式会社
三井不動産　株式会社
三菱地所　株式会社
三菱重工　株式会社
三菱商事　株式会社

エクソンモービル　有限会社
大阪日米協会
オリオンビール　株式会社
神戸日米協会
株式会社　コーチ・エィ
株式会社　サイバーエージェント
塩野義製薬　株式会社
株式会社　新生銀行

安里周吾
井上敏之
岩崎洋一郎
上田輝彦
大高巽
古賀仁実
木ノ上高貴
小林長
仙波聡

三菱信託銀行　株式会社
宮沢喜一
明治生命保険　相互会社
メルシャン　株式会社
安田生命保険　相互会社

住友スリーエム　株式会社
武田薬品工業　株式会社
デュポン　株式会社
中辻産業　株式会社
日本イーライリリー　株式会社
山元学校
CEL 英語ソリューションズ
WIP ジャパン　株式会社

田坂明
故田端利夫
辻喜久子
中瀬正一
野原克也
福島良雄
降旗健人
山田勝
山本東生

編集後記

第55回日米学生会議本会議が終了してそれほどの時を経ないままに、その体験を文章化してまとめるという困難な作業を、皆の協力によって何とか成し遂げ、ここに報告書という形で1冊にまとめることができたことを大変嬉しく思います。

この報告書には第55回日米学生会議の日本側参加者全員が執筆に参加しています。また福井県在住のホストファミリーをはじめとして、日米沖縄学生会議2003の沖縄側参加者、第19回日韓学生フォーラム参加者、京都サイトでの高校生交流企画に参加した高校生を含む、本会議を通じて日米学生会議と関わった多くの方々からも寄稿をいただいています。この場を借りて改めて御礼申し上げます。また、長期に及ぶ編集作業に携わった参加者有志と日本側実行委員会のメンバーの協力にも心より感謝しています。

今回の報告書では、上記にもふれたように、なるべく多くの参加者や関係者の方々の感想、率直な声を載せる方針で進めてきました。事業報告としての客観的視点に立った文章、第55回日米学生会議での経験を自分自身の言葉で振り返る主観的視点に立った文章、これらの双方を盛り込むことで、第55回会議の健全な評価を試みています。また、文面だけでは伝わりにくい会議の雰囲気をお伝えするため、写真を多く掲載するようにも心がけましたので、併せてご覧いただければ、と思います。

この報告書の発刊をもって第55回会議の活動は正式に終了します。しかしこの報告書が第55回会議の公式な記録として後世に残されるように、参加者の心にも各自が第55回会議で得たものが残ることを願ってやみません。また、この報告書が一人でも多くの方が日米学生会議により深い関心を持つようになる契機を与えるものとなれば幸いです。

末尾になりましたが、第55回日米学生会議開催にあたっては、事前活動、本会議、事後活動の様々な場面で、多くの方々にご支援をいただきました。特に第55回会議は日本開催であったため、本会議の成功は、東京・沖縄・福井・京都の各地において第55回会議の趣旨にご賛同いただいた多数の方々のご協力に大きく負うております。ご支援、ご協力いただきました皆様に改めて心より御礼申し上げます。

西納由紀

2003年10月27日

第 55 回日米学生会議日本側実行委員@日米学生会議事務局

第 55 回日米学生会議日本側報告書

2003 年 10 月 27 日発行

編集

第 55 回日米学生会議日本側実行委員：江川響子・小林悦子・鹿谷幸史
高沢健史・乗竹亮治・西納由紀・堀拔功二

参加者報告書編集委員：阪野葵・野口直子・横田聡

編集責任者

西納由紀

発行

（財）国際教育振興会内　日米学生会議事務局

〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-21　Tel/Fax　03-3359-0563

印刷

（株）実業公報社

Japan-America Student Conference
Since 1934

■主　　催　　JFEL 財団法人 国際教育振興会

■企画運営　　第 55 回日米学生会議実行委員会